

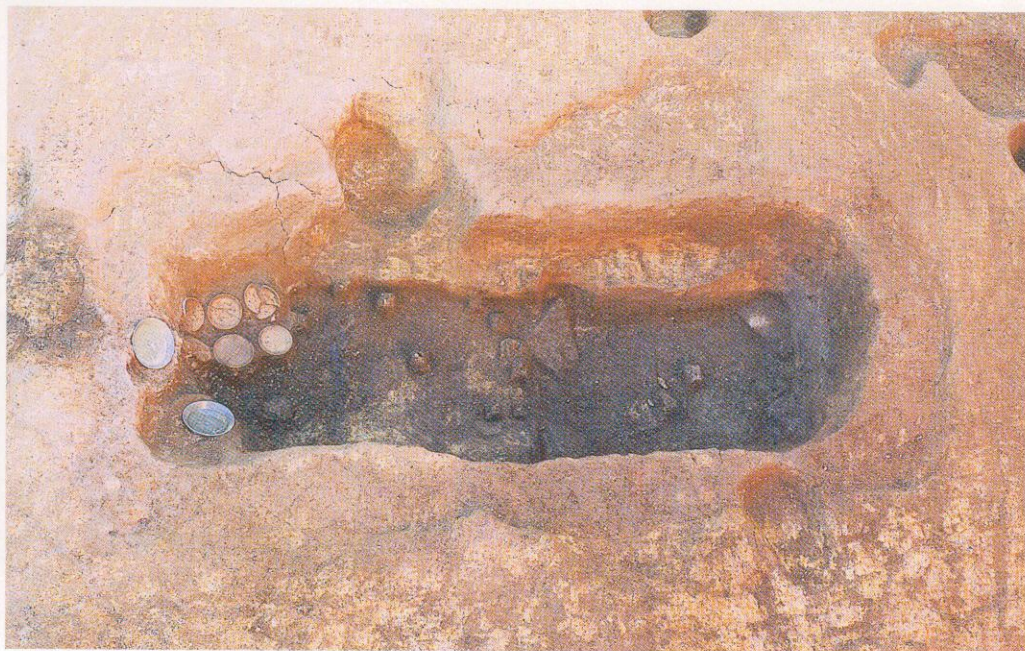
大宰府条坊跡XI

—第50次調査—



1999

太宰府市教育委員会



50ST320供献土器群検出状況（西から）



50ST320漆手箱・人骨等検出状況（南から）



50ST320漆手箱内出土湖州鏡



50ST320出土漆手箱内遺物出土状況



50ST320漆手箱内出土青白磁水注



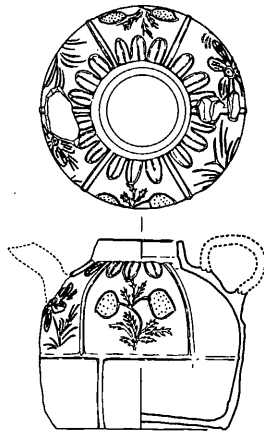
50ST320漆手箱吊金具（北）



50ST320漆手箱吊金具（南）

大宰府条坊跡XI

—第50次調査—



1999

太宰府市教育委員会

序

本書は昭和59年度に太宰府市教育委員会が行いました大宰府条坊跡第50次調査の記録であります。整理・報告までに14年もの歳月が流れてしまいましたが、この間太宰府市では観世音寺土地区画整理、佐野地区土地区画整理という大規模な事業をはじめ、公共施設の充実、道路の整備等多数の公共事業、さらには民間の共同住宅や宅地分譲等に伴う発掘調査を行ってまいりました。

その結果多くの歴史的事実を解明し、古代・中世の大宰府像が以前に比べるとかなり詳細に判明するようになりました。しかしその資料の公開は発掘調査の急激な増加によって対応が遅れ、今回の調査もようやく資料の公開に漕ぎ着けた次第です。未だ未公開の資料も多く、今後はその公開に向けて鋭意努力してまいり所存であります。

さて、今回の調査では漆手箱を伴った墳墓の遺構が注目されます。飾り気の少ない手箱ではありますが、埋葬された時点からその時間は停止し、箱の中に納められた様々な品物を具体的に知ることができました。これは伝世され、今日に伝えられた資料では決して分からない重要な事実と思われ、この手箱の歴史的価値を彷彿とさせるものであります。

手箱は現代の科学的手法による保存処理の手を経て、近い将来我々の前に再びその姿を現すであろうと思われませんが、それに至るにはまだ多くの時間が必要であります。今回はその出土の状況を中心に報告し、あらためて手箱の保存処理については報告したいと考えております。

本書が文化財の保存・保護に対して、また大宰府の歴史的理解のためにお役に立てるならば、望外の喜びであります。

最後になりましたが、現場作業、整理作業で御努力されました多くの方々、調査・整理及び手箱の保存処理に対して多くのご指導を賜りました諸先生方に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

太宰府市教育委員会

教育長 長野 治己

例言

1. 本書は、昭和59年度に太宰府市教育委員会が実施した、大宰府条坊跡第50次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した座標は、国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図版に示される方位は座標北（G.N.）をあらわす。
3. 本書に示す遺構番号の表記は以下の要領で説明される。



4. 遺構の実測図及び写真撮影は、山本信夫、狭川真一が行い、調査地全景はフォトおおつかに依頼した。
5. 出土遺物のうち陶磁器の選別、記録作業は山本（信）の指導のもと山本麻里子が行い、データベースへの入力相川寿美子、福井円が行った。
6. 遺物の実測図は山本（麻）、相川、福井、森田レイ子、山本（信）、狭川が行い、浄書は宮崎亮一、松隈里恵子、酒井三保子、相川、福井、狭川が行った。遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表 岡紀久夫）に委託したが、漆手箱の作業過程写真は山本（信）が撮影したほか、一部狭川が撮影したものもある。
7. 写真図版はCD化し、堀内カラー大阪現像所が作製した。
8. CD内に格納した動画は8mmフィルム原版をビデオ（VHS）化したのち、必要部分をデジタル化したものである。なお、動画は狭川が撮影したものから抜粋した。
9. 写真のデジタル化は、手箱発掘作業部分を（有）システム・レコに委託したほかは、堀内カラー大阪現像所が行った。
10. 墳墓から出土した漆手箱の保存処理については、東京国立文化財研究所に委託した。その他の資料については下川可容子が行った。
11. 本書の執筆はIV【2】(5)、IV【3】(5)、V(4)を山本（信）、他は狭川が行った。
12. 本書の編集は狭川が担当した。

目次

I、遺跡の位置と環境	1
II、調査経過と組織	4
III、調査・整理の方法	6
IV、調査の成果	
【1】層位など	10
【2】検出遺構	13
(1) 掘立柱建物	13
(2) 井戸	15
(3) 溝	20
(4) 土坑	21
(5) 墳墓	29
(6) その他の遺構	30
【3】出土遺物	36
(1) 掘立柱建物出土遺物	36
(2) 井戸出土遺物	39
(3) 溝出土遺物	85
(4) 土坑出土遺物	87
(5) 墳墓出土遺物	127
(6) その他の遺構出土遺物	135
V、総括	
(1) 遺構の変遷	179
(2) 各種土製品について	183
(3) 50ST320墳墓出土木棺の復原	190
(4) 50ST320の年代と漆手箱の歴史的意義	207
(5) おわりに	209

I、遺跡の位置と環境

太宰府市は福岡平野の南端近くに所在し、北は大城山（標高410m）、東は霊峰宝満山（標高829.6m）とその支脈、西から南西方向にかけては牛頸山、天拝山等に囲まれた東西約3km、南北約2kmの盆地状を呈する小規模平野に位置する。

この平野の北辺にある大城山の頂部には天智朝に築造された大野城跡があり、その西側裾部で平野が最も狭くなっている部分には水城跡がある。さらに南側の盆地を挟んだ対面には基肆城があり、盆地の周囲の山を含めて現在の太宰府市を取り囲むような構造になっている。

さて大城山の裾部には、遠の朝廷と詠われた大宰府政庁跡がある。周囲には蔵司跡、月山官衙群をはじめとする多くの官衙跡が取り巻き、東には学校院跡、さらに観世音寺と当時の官庁、官寺が並んでいる。これらの南側に広がる平野部には、大宰府条坊跡と呼ばれる古代都市遺跡が展開し、隣接する筑紫野市にまで及んでいる。

大宰府条坊跡は御笠川と鷲田川に挟まれた低位段丘上にその主要部分が展開し、縄文晩期から弥生前期にかけての遺構が人間の活動痕跡としての初現を示す。しかしその中心はやはり奈良時代から平安時代にあり、近年の調査・研究の成果によると、奈良時代には幅約36mの朱雀大路を中心に西側ではおよそ100m間隔で南北路が走っていることが判明している。また区画内の様相も分かりつつあり、東西幅100m弱の敷地をおよそ4等分する宅地割りが推定されるまでに至っている。

続く平安時代に至っても奈良時代の街区を一部は踏襲しつつ、東西方向の道路が細かく敷設されるようになる。これらは不整形ながら基盤目状を呈するもので、11世紀代を中心とする時期の所産と考えられ、『観世音寺文書』に登場する条坊呼称は、この段階の遺構を指していると考えられるのである。また都市の東端には安楽寺が建設され、さらに原山無量寺、有智山寺等の山岳寺院が造営されるのもこの時期と考えられている。

中世に入ると町並みの中心は観世音寺や安楽寺（現在の太宰府天満宮）に吸い寄せられるように東へ集中し、太宰府の都市景観は大きく変貌する。そこには手工業者を中心とした職人の息づかいを彷彿とさせる遺跡が展開し、律令体制から脱却しつつある民衆の活発な活動を窺い知ることができる。

近世には太宰府天満宮の門前町が宰府参りの人々によって活況を呈するようになるが、手工業者も多く残存し、「六座」と呼ばれる組織を形成するまでに成長する。町並みは天満宮を中心に盆地の東側に集中して営まれるようになるが、他の地区では農業経営を基盤とした集落に変貌し、現代の宅地化の波が押し寄せるまでは長閑な田園風景が広がっていたのである。

さて今回報告する第50次調査地点は、府の大寺と呼称された観世音寺の南前面、正確には観世音寺の西側に付設された戒壇院の南正面に位置する（Fig.1）。戒壇院は奈良東大寺、下野薬師寺とともに日本三戒壇の一つとして著名で、その創設は天平宝字元（761）年とされる。現

Fig. 1 調査地点位置図 (1/30,000)



在は曹洞宗の寺院で近世に復興されたものである。

今次報告地点の周辺における調査は、北側の県道拡幅時における調査（大宰府史跡第39次）、戒壇院南前面部分の計画調査（大宰府史跡第109次・111次・115次）、観世音寺土地区画整理事業に伴う調査（大宰府条坊跡第19次）、市立保健センター建設に関連する調査（大宰府条坊跡第149次調査）をはじめ複数箇所を揚げるができる（Fig.2）。このうち大宰府条坊跡第19次調査では中世の輸入陶磁器が大量に廃棄された土坑やそれよりもやや後出する区画溝が検出されるなど、観世音寺、戒壇院前面における古代から中世にかけての土地利用の様相が判明しつつある。



Fig.2 第50次調査周辺の調査状況（1/2,500）
（条は大宰府条坊跡の調査回数、数字のみは大宰府史跡の調査回数）

II、調査経過と組織

調査地は、太宰府市大字観世音寺字土井ノ内169-6、161-1（現在は太宰府市観世音寺一丁目8-43ほか）で、対象面積は両者併せて1,130㎡となる。

当該地の調査は、まず大字観世音寺字土井ノ内169-6において地権者木原スミ氏より専用住宅建設の話が持ち上がり（昭和58年度）、協議の結果、住宅建築の事前に発掘調査を行うことで合意を得た。また西側隣接地である同161-1（地権者佐田建祐氏）についても住宅建設の予定があるとのことを踏まえて、同時に発掘調査を行うことで合意を得たため、両者を併せて大宰府条坊跡第50次調査として実施することとなった。

現地での調査は、昭和59（1984）年10月8日から昭和60（1985）年2月7日まで実施し、山本信夫、狭川真一が担当した。調査面積は650㎡である。

また整理作業の中心は平成10（1998）年度を充て、遺物実測や写真撮影、本書の作成までを行ったが、墳墓遺構（50ST320）から出土した漆手箱については、内部の詳細な調査と保存処理作業を、平成5年度から同9年度まで東京国立文化財研究所に作業を委託して実施することとなった。手箱保存処理事業に関しては別に報告の機会を設ける予定であるため、詳細はそれに譲ることとする。

なお、調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

（昭和59／1984年度……調査）

調査主体	太宰府市教育委員会	
総括	教 育 長	陶山直次郎 藤 寿人（60年3月14日～）
庶務	社会教育課長	西山義則（～59年9月30日） 花田勝彦（59年10月1日～）
	文化財係長	黑板 力
	主 事	岡部大治
調査	技 師	山本信夫 狭川真一

（平成10／1998年度……整理）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主 事	今村江利子

調査	技術主査	狭川真一
	主任技師	城戸康利 山村信榮 中島恒次郎 井上信正
	技師	高橋 学 宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子 森田レイ子

調査及び整理にあたって次の方々から多くのご指導、ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。
 （順不同、敬称略、所属はすべて当時のものである）

（発掘調査）

藤井功・石松好雄・横田義章・横田賢次郎・森田勉・高橋章（九州歴史資料館）、磯村幸夫（福岡県教育委員会）、小西信二（太宰府天満宮文化研究所）

（漆手箱）

中野政樹（東京芸術大学）、長谷部楽爾・阿久井長則（出光美術館）、原田一敏・加藤寛・小松大秀（東京国立博物館）、西川杏太郎・宮本長二郎・中里壽克・青木繁夫・三輪嘉六・増田勝彦・尾立和則・平尾良光・川野邊沙（東京国立文化財研究所）、永嶋正春（国立歴史民俗博物館）、森田稔・山崎剛・斎藤孝正（文化庁美術工芸課）、西田宏子（根津美術館）、村田孝子（ポーラ文化研究所）、久保智康（京都国立博物館）、横田義章（九州歴史資料館）、池崎譲二・本田光子（福岡市教育委員会）、田口善国（重要無形文化財保持者）

（遺物整理）

手塚直樹（鎌倉考古学研究所）、大庭康時（福岡市教育委員会）、佐藤浩司（（財）北九州市教育文化事業団）、竹永幸代（東京芸術大学）、大坪聖子（鎌倉考古学研究所）、宮田聖子

III、調査・整理の方法

【1】調査

太宰府市における発掘調査の作業プロセスは、過去に詳細を記した（『佐野地区遺跡群I』太宰府市の文化財第14集 1989年 太宰府市教育委員会）ことがあり、ここでもその方法に準拠している。したがってここではその概略を記すに留める。

重機による表土除去後、測点の移動を行い調査区内に地区杭を配置する。測量基準点は国土調査法第II座標系によったもので、過去に九州歴史資料館が史跡地内に配置したものをを用いた。地区杭は3m方眼に配置され、南北方向は南からA・B・C…、東西方向は東から1・2・3…の順に名称を付し、各ブロックは東南隅の杭をもってその代表とした。

設定されたブロックを基準に東から調査を開始し、遺構検出→略図（1/100）作成→遺構掘り下げ→遺構仮番号設定→遺物取り上げの手順で進行させた。今次の調査では遺構の密度がきわめて高く、20名前後の作業員では1日に3ブロック前後しか進まないことも多かった。また、調査後半には後述する墳墓遺構（50ST320）が検出され、内部に漆手箱が見出されたことからその掘り下げには慎重を要すると判断されたため、遺構上に作業用のテントを建て、側面をシートで囲い込み、さらに雨水の流入を防ぐためテントの周囲には小形の土嚢を巡らせた。テント内は工事用ライトで照明し、遺構の掘削は技師山本が直接行い、作業員2名ほどをその補助とした。他の作業員と技師狭川はその間調査区全体の作業を行った。こうした慎重な遺構掘削はきわめて多くの成果をもたらしたことを付記しておきたい。

掘立柱建物と整地状遺構を除くすべての遺構の掘り下げが終了した段階で、鍍り方測量による遺構実測（1/20）を行った。その後、掘立柱建物の断ち割り、土層観察、整地状遺構の掘り下げを行い、さらにそれらの完掘状況を実測し、バルーンによる写真撮影を行って現地での作業を終了した。

調査後、本次調査については一部成果を公表したのがあり、それらを以下に示しておく。

山本信夫「手箱を持った死の旅路」『都府楼』創刊号 1986 （財）古都太宰府を守る会

狭川真一「大宰府成立期の遺構と遺物」『古文化談叢』第30号 1991 九州古文化研究会

『東京国立文化財研究所概要』1995 東京国立文化財研究所

『東京国立文化財研究所概要』1996 東京国立文化財研究所

【2】整理・報告書作成

遺物整理及び報告書の作成については、概略次のような作業工程で進行した。

遺物洗浄→乾燥→（仮収納）→選別→注記→実測→図版レイアウト→原稿作成→写真撮影→トレース→報告書レイアウト→積算→入札

今回は遺物の復原作業は原則として行わなかった。これは多くを復原するための時間が採れ

なかったこともその要因の一つであるが、すぐにすべてを展示公開する予定がないことに加えて、器形復原を行って土器を側面から撮影するだけという従来からの写真の撮り方への疑問が大きな要因と言える。以下遺物の撮影について述べておきたい。

遺物の写真撮影は従来モノクロのプロローサイズを基本として撮影し、復原可能な資料はできるだけ石膏で補足し、なおかつ彩色作業も入念に行ってきた。ところがこうした写真は報告書に使用した後は一部の資料を除いてほとんど活用されることなく眠り続けている（写真だけでなくせっかく復原した遺物も同じである）。また図録等の他の目的に使用する場合は、その目的に応じたレイアウトや角度で再撮影を行うことが多い。これは写真自体が目的に応じた撮影を強いられていることにあり、一度撮影したものを何度も繰り返し使用する頻度はきわめて低いし、他の目的に対してそのままの状態で使用できる確率はそれほど高いとは言えない。したがってそれぞれの目的に応じた撮影を行うことを目的とすることで、明確にその役割を分けることが必要であると考えた。したがって、ここでは報告書に掲載するという目的で遺物の撮影を行ったことになる。

報告書に掲載される遺物の写真は、従来その利用価値を強調されることはあまりなかった。その要因はいくつか考えられるところであり、例えば考古学では実測図に重点を置いた研究姿勢であることや、報告書の印刷技術及びカラー印刷の価格面による限界、あるいは報告書をコピーしてもほとんど利用できる状態にない等の問題が思いつく。考古学における実測図の重要性は今後も変わるところはないと思われるが、この実測図はそれを計測した人の主観が著しく反映されているものであり（その主観が重要な場合が多いが）、決して客観的に描かれているものとは言えない。また表面の調整や色調、胎土の状況は一部記号化することによって対応しようとする例もあるが、基本的にはトレースによって失われ、文字情報（報告文）がこれを補うというスタイルを採ってきた。今後もこれで十分だと判断するなら写真は、何のために報告書中に存在するのであろうか。やはり写真はそれ自体でもかなり多くの情報を有しているだけでなく、きわめて客観性が強く、それ故に主観的な実測図や文章を補完するものでなければならないと考える。そして（予算的側面を無視すれば）この3者が同等のレベルで報告されることが最も重要ではないかと思うのである。

では、報告書掲載を目的とした写真とはどういうものか。これは各人意見の分かれるところであろうが、少なくともそれは芸術作品ではなく、資料としての価値を十分に見出せることが必要であるという点では異論のないところと思う。

そこで今回は上記の観点に立ち、俯瞰撮影を主体にして、出来る限り遺物の内外面を捉えることとした。そしてCD化することによってカラー情報の提供をできるだけ安価に実現し、上記の目的に近づけることを試みた。しかしCDの容量的限界があり、あまりに高画質のものを提供するとCD自体が複数枚必要となり、それはコストの面でマイナスとなる。したがって今回も前回（『大宰府条坊跡X』）と同様にベース画像程度におさえることとした。

また原本となるフィルムは35mmカラーポジフィルムを使用した。35mmフィルム自体に限界があり、大判のフィルムに較べると情報量の点で劣るものであることは否定できない。しかしCD化することを前提にすると、コスト面で大きな差が生じてくることから今回は35mmフィルムとした。先述したように使用目的は報告書であり、通常の資料として活用する範囲内と考えるならば、おそらく十分な情報量を有しているものと思われる。

なお写真はすべてデジタル化していることから、データベースに入力して活用が可能であり、遺物のインデックスファイルとして画像を伴った資料管理、さらにはインターネットによる情報開示も可能となり、従来の写真では行えなかった作業を一度に付加するものとなったと言えよう。

現在こうした資料の情報開示方法については試行錯誤の途中であり、今回の理念や方法がベストであるとは思っていない。特に報告書に掲載される遺物写真の価値観や利用形態については、今後も十分に検討する必要があると思われるし、報告書全体のコスト面や制作費等の問題も多々残されている。ただ、中途半端で無意味な写真を掲載することが、最も予算の無駄遣いになることだけは間違いないところと信じたい。

・報告書内における遺物の分類と編年

太宰府市内で出土する土器・陶磁器の類は、すでに分類や編年の研究が積み重ねられており、本書においてもかなりの部分でそれを引用している。本来なら個別に記載すべきであるが、煩雑になるので、分類と編年について参考とした論考をここで一括して掲げておく。

土器・陶磁器

- ・横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館論集2』1976年 九州歴史資料館
- ・横田賢次郎、森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館論集4』1978年 九州歴史資料館
- ・森田勉「14～16世紀の白磁の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982年 日本貿易陶磁研究会
- ・山本信夫『大宰府条坊跡II』（太宰府市の文化財第7集）1983年 太宰府市教育委員会
- ・山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年」『貿易陶磁研究No.8』1988年 日本貿易陶磁研究会
- ・山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究IV』1988年 日本中世土器研究会

会

- ・山本信夫「統計上の土器」『九州上代文化論集』1990年

- ・山本信夫、山村信榮「中世食器の地域性-九州・南西諸島-」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集』1997年 国立歴史民俗博物館

民俗博物館

瓦

- ・石松好雄、高橋章「大宰府出土の瓦について（二）」『九州歴史資料館論集4』1978年 九州歴史資料館

Tab.1 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器の編年

↑出現 ↓増加 ↓減少

1994.
1998.補足

紀年銘	A.D.	大宰府土器型式	磁器区分	国産陶器型式(型式の上限) 灰軸 緑軸	標識磁器	準標識磁器	
⑥	800	V	(A古)	猿投 O-10 ・IG-78 (長門?)	白磁Ⅰ類 越州窯系青磁Ⅰ,Ⅱ類 長沙窯系青磁・黄軸 褐彩・褐軸	唐三彩・二彩 絞胎	
	825	VI A		(猿投 K-14?)			長門・洛北・(洛西)・(猿投 K-14?)
	850	VII	A	尾北 S-4 (猿投 K-90?)	洛西 猿投 K-90	青磁褐彩・褐軸 初期イスラム陶器	
①	900	VIII	(A新)	尾北 S-4			
	925	IX		虎溪山Ⅰ (尾北 O-53)	近江		
	950						
	1000	X		尾北 O-53		越州窯系青磁Ⅲ類 白磁Ⅰ類	
	1050	XI		東山 H-72 (丸石 2)			
②	1100	XII		丸石 2 百代寺 東山 H-105 尾北 S-1		白磁Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ,Ⅶ,Ⅷ,ⅧⅢ類 ⅢⅡ,Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ,Ⅶ類	初期龍泉窯系・同安窯系青磁Ⅰ類 耀州窯系青磁 初期高麗青磁Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ類 青白磁
	1150	XIII					
	1200	XIV			龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2~4,6, ⅢⅠ類	白磁碗Ⅶ,Ⅴ-4,ⅢⅢ類増加	
	1230	XV			同安窯系青磁碗Ⅰ~Ⅳ,ⅢⅠ類	白磁碗Ⅶ,ⅢⅢⅠ類	
③	1250	XVI			龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5 ab 類	白磁ⅢⅢⅡ-2類	
	1300	XVII			龍泉窯系青磁Ⅲ類 白磁Ⅰ類	龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5c 白磁Ⅰ類 黒軸陶器	
④	1330	XVIII					
	1350	XIX			龍泉窯系青磁Ⅳ類	白磁 B, C 類 安南鉄絵	
⑤	1450	XX					
⑦	1500						

紀年銘資料

- ①A.D.927 延長5年,大宰府74次 SD205A 溝
- ②A.D.1091 寛治5年,平安京左京4条1坊 SE8 井戸
- ③A.D.1224 貞応3年,大宰府33次 SD605 溝
- ④A.D.1304 嘉元2年,大宰府109,111次 SD3200 溝
- ⑤A.D.1330 元徳2年,大宰府45次 SX1200 池
- ⑥A.D.784 延暦3年,長岡京102次 SD10201 溝
- ⑦A.D.1459・1465 長祿3・寛正5年,福岡市井相田 CⅡ・SG16 池
- ⑧A.D.1501 文亀元年,大宰府70次 SD1805 溝
- ⑨A.D.1265 文永2年,博多62次 713土坑

文献

- ①九州歴史資料館『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』1982
- ②田辺昭三・吉川義彦『平安京跡発掘調査報告左京四条一坊』1975 平安京調査会
- ③九州歴史資料館『大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報』1975
- ④九州歴史資料館『大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報』1989
- ⑤九州歴史資料館『大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報』1978
- ⑥長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集』1988
- ⑦福岡市教育委員会『井相田 C 遺跡Ⅱ』『福岡市埋蔵文化財調査報告書179』1988
- ⑧九州歴史資料館『大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報』1982
- ⑨大庭康時『博多48』『福岡市埋蔵文化財調査報告書397』1995

IV、調査の成果

【1】層位など

調査地はすでに区画整理事業が終了していたことから、調査地の北側を通過する県道のレベルまで地上げがなされており、区画整理以前の地表までは1m余りの真砂土を除去する必要があった。その下位に旧表土があり遺構面との間には黒褐色土の包含層が堆積していた。この黒褐色土層は調査地のほぼ全域に存在していたが、東南隅部分だけはこの層の下位に黒灰色土が堆積していた。

地山は黄色粘土で構成され、調査地の範囲内で特に変化することはない。遺構は基本的にはこの地山に穿たれていたが、一部大きな遺構の上面ではその埋土上から切り込む遺構も見られた。また調査区中央付近では、50SX500とした整地的な遺構があり、多くの遺構はその堆積土

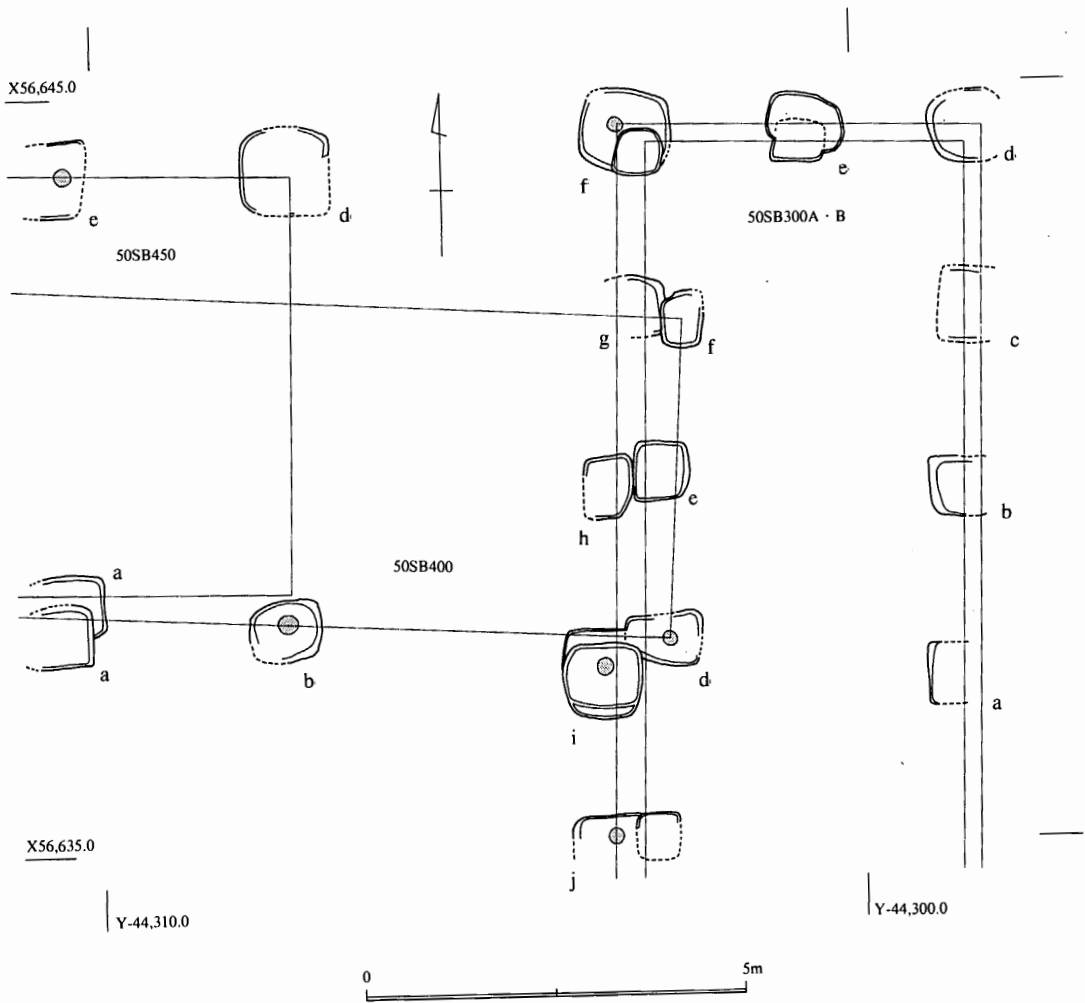


Fig.3 50SB300A・B・400・450実測図 (1/100)

上面から切り込んでいた。さらに調査区北西隅付近にも整地土が確認され、この付近の大半の遺構はこの整地上面から切り込んでいた。

【2】 検出遺構

(1) 掘立柱建物

50SB300A・B (Fig.3・5、CD-0026~0036) 南北4間(9.3m)以上、東西2間(4.8m)の南北棟建物で、一度の建て替えが確認できるが、遺構は50SB400・50SD255・50SK290等に切られており、さらに深さがきわめて浅いものもあり、確認できなかった柱掘り方も多い。Aは古い段階のもので、柱掘り方は略方形を呈し、残存状態の良い掘り方fで一辺1.1×1.2m、深さ約0.2mを測る。柱痕跡はf・i・jの掘り方で確認され、柱径0.15~0.2mに復原できる。fとjの柱痕

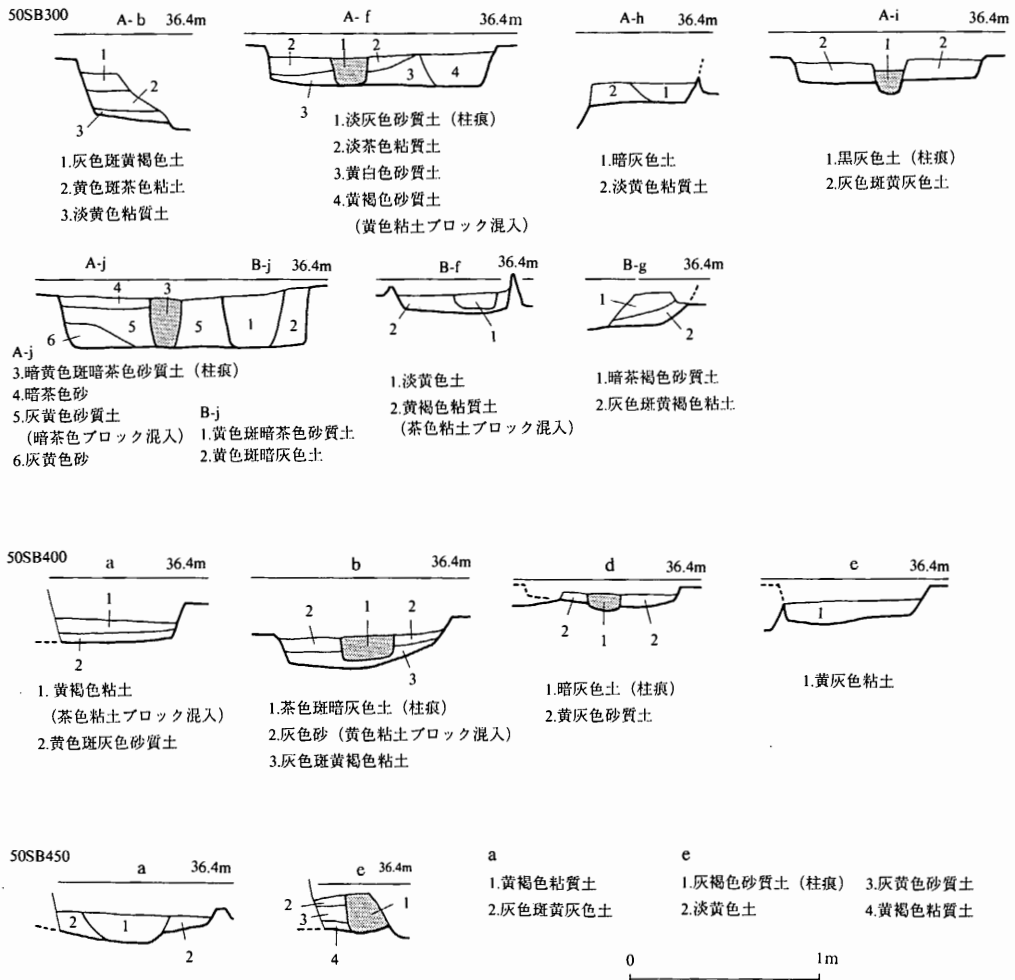


Fig.5 50SB300A・B・400・450柱掘り方土層観察図 (1/40) (すべて図の左が西)

跡から得られる建物の振れは、 $N-1^{\circ} 21' -E$ である。BはAに対してわずかに東側にずれた形で建設されるもので、柱掘り方の規模はAに比べて小さく、一辺0.65m程度を測るが形状は略方形を呈している。南北方向の柱間はAとほぼ同じと考えられるが、東西方向では掘り方e-f間がやや狭いことから、Bがやや小さい可能性もある。このように考えると建て替えに伴って東にずれるとするのではなく、主軸を同じくして規模を若干小さくしたものと捉えるべきであり、今回検出し得た東側柱列はBに伴うものである可能性も残される。なお、建物の振れはAとほぼ同じと推定される。

50SB400 (Fig.3・5、CD-0035～0039) 南北2間 (4.2m)、東西3間 (8.3m) 以上の東西棟建物である。50SB300A・B・450を切っているが、50SE270・50SK290等に切られているため、北側の柱列の大半を失っている。柱掘り方は略方形を呈するものが多く、一辺0.6～0.9m、深さ0.1～0.2mを測る。柱痕跡はb・dの掘り方で確認され、柱径0.2～0.3mに復原できる。この柱痕跡から得られる建物の振れは、 $N-93^{\circ} 04' -E$ である。

50SB450 (Fig.3・5、CD-0039・0040) 50SX445・50SK280・50SK301等に切られ、また西側の大半が調査区外にあるため全容は不明である。しかし、残存する柱掘り方から推定して南北2間 (5.4m)、東西1間 (3.0m) 以上の東西棟建物と考えられる。柱掘り方は略方形を呈していたものとみられ、ほぼ全形が知られる掘り方dでは一辺1.2×1.15m、深さ約0.2mを測る。柱痕跡は掘り方eで確認したが、50SX445に一部が切られており、柱径は0.25m以上というのが判明する程度である。建物の振れは具体的に判明しないが、残存状況から50SB300に近いものと思われる。

その他の建物 (Fig.6) 調査区の東半部では多数のピットが検出され、その中には底部に礎板として利用された石を残すものが多く含まれていた。また柱根を残すものも若干検出され、これらを主体的に連結させることにより建物が復原できるのではないかと考えた。建物は直交軸を有していることと、柱筋が通ることに主眼をおいて復原した結果、Fig.6に示すように複数の建物を推定することができた。しかし、これらは他のピットを加えることによって別の復原案を提出することも可能であるため、ここでは仮番号を付して以下に報告しておく。

(建物A) 南北3間 (6.3m)、東西1間 (2.5m) の南北棟で、柱穴は略円形を呈し、径0.3～0.5m、深さ0.2～0.3mを測る。8個の柱穴のうち5箇所礎板を検出した。南北方向の柱間はほぼ2.1m等間とみられる。主軸はおよそ $N-2^{\circ} 40' -E$ である。50SK060を切っている。

(建物B) 南北2間 (3.8m)、東西1間 (2.0m) の南北棟で、柱穴はほぼ円形を呈し、径0.3～0.4m、深さ0.3m内外を測る。西側中央の柱は不明であるが、残る5個の柱穴すべてに礎板を検出した。主軸は建物Aに近似する振れを有する。50SK060を切っている。

(建物C) 南北3間 (6.3m) 以上、東西1間 (1.6m) 以上の南北棟で、全貌は明らかではない。柱穴は略円形を呈し、径0.3～0.5m、深さ0.4m内外を測り、すべての柱穴で礎板を検出した。南北方向の柱間はほぼ2.1m等間とみられる。主軸はおよそ $N-2^{\circ} 10' -E$ である。

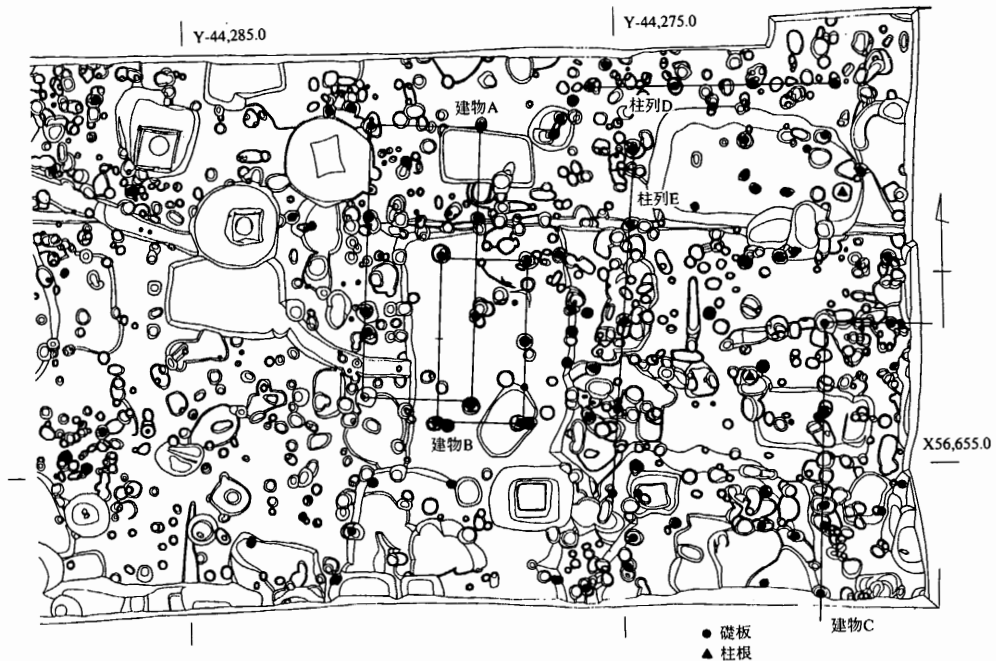


Fig.6 中世の建物と礎板・柱根残存ピット位置図 (1/175)

(柱列D) 東西方向の柱列で3間(5.7m)分を確認したが、北側に調査区境界が迫っており建物として北側に延びている可能性は捨てきれない。柱穴は略円形を呈し、径0.25~0.4m、深さ0.15~0.2m内外を測り、すべての柱穴で礎板もしくはその根石とみられるものを検出した。主軸はほぼN-90°-Eである。

(柱列E) 南北方向の柱列で4間(8.0m)分を確認した。柱穴は略円形を呈し、径0.3~0.4m、深さ0.2~0.4m内外を測り、すべての柱穴で礎板もしくはその根石とみられるものを検出した。主軸はおよそN-4°30'-Eである。

(2) 井戸

50SE080 (Fig.7, CD-0041) 検出面での掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ1.95m、幅1.50m、底部までの深さ2.15mを測る。杵材はまったく残存していなかったが、底部から約0.3mの位置に0.7×0.65mで方形のプランが確認され、周囲に茶褐色粘土が残存していることから、これを杵痕跡と捉え周囲の粘土を裏込土と考えた。50SK075検出段階ですでに略プランが検出されていたが、時間の経過に伴う沈下によって生じた埋没土のプランと思われる、ここでは50SK075よりも古い遺構と考えたい。なお上層出土遺物には50SK075の混入品が存在する可能性がある。

50SE120 掘り方は不整形円形を呈し、2.0×2.05mを測る。検出面から約0.2m掘り下げたところで杵の痕跡とみられる、0.85×0.8mで各辺の中央が内側に張り出した略方形のプランが確認された。それを掘り下げると、杵は大半が残存していたが、後述するようにあまりにも長すぎる板材を使用したことから土圧によって大きく湾曲し、掘り上げた直後に崩壊したため、調査

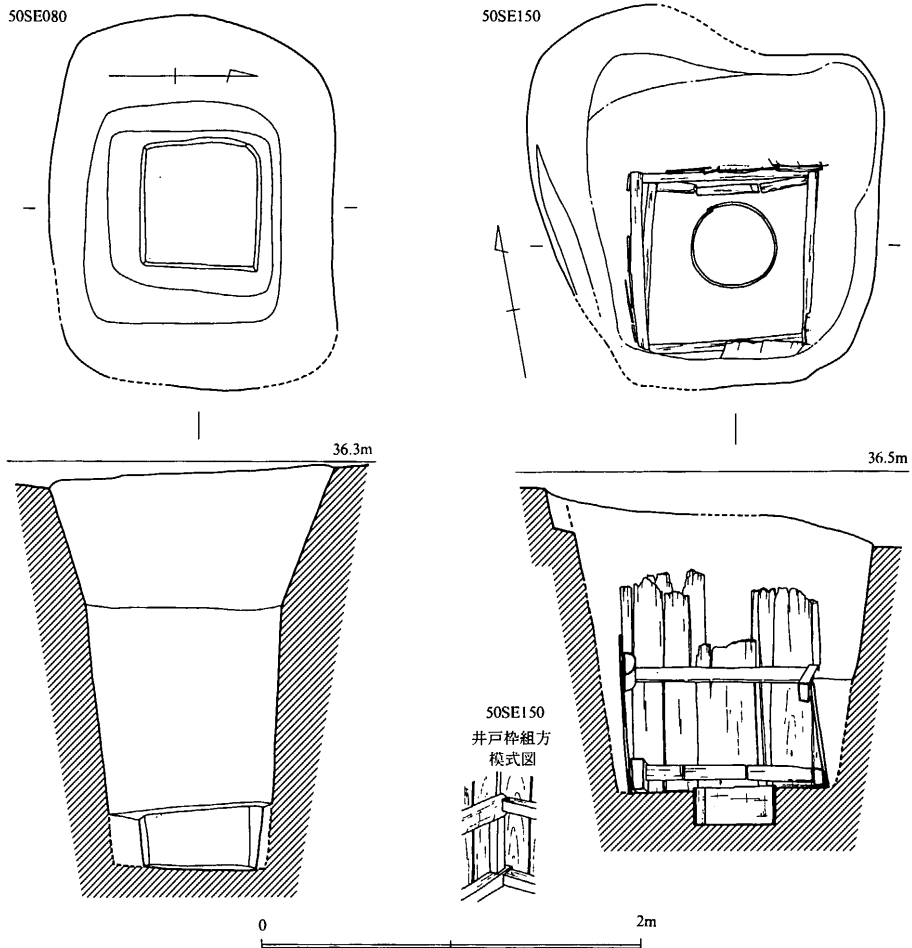


Fig.7 50SE080・150実測図 (1/40)

中のメモによって以下記述する。枠は幅約0.2m、長さ1.6m程度の一枚板を各辺に4~5枚並べて使用し、井戸底から0.8mと1.36mの2箇所にある横棧で固定される。枠内の四隅には丸太材が確認できたことから、これを支柱として横棧を固定したものとみられる。この状況から推定して板枠底までの深さは約2.0mとなる。なお、50SK130に切れ、50SX500を切っている。

50SE140 (Fig.8、CD-0042) 掘り方はほぼ円形を呈するもので、径2.05~2.1mを測る。検出面から下へ約0.5mの位置で方形の枠が検出された。方形枠は0.6×0.65mで深さは0.2mほどしか残存していない。この枠は幅0.2mほどの板材を立て各辺5~6枚で構成され、横棧で固定している。この枠以下は桶枠となり3段分まで確認したが崩落が著しく、3段目の上面を検出したところで作業を中止した。桶は2段目が最も残存状況が良く約半分が残存（完存の場合約20枚で構成されていたとみられる）し、長さ0.95mの板材を使用していた。1段目もほぼ同じ長さの材であり、このことから3段目も同様と推定すると、井戸の深さは検出面から3.4mほどになると思われる。なお、桶は径の狭い方を上位にし、2段目のものでは上位の径0.35m、下位の径

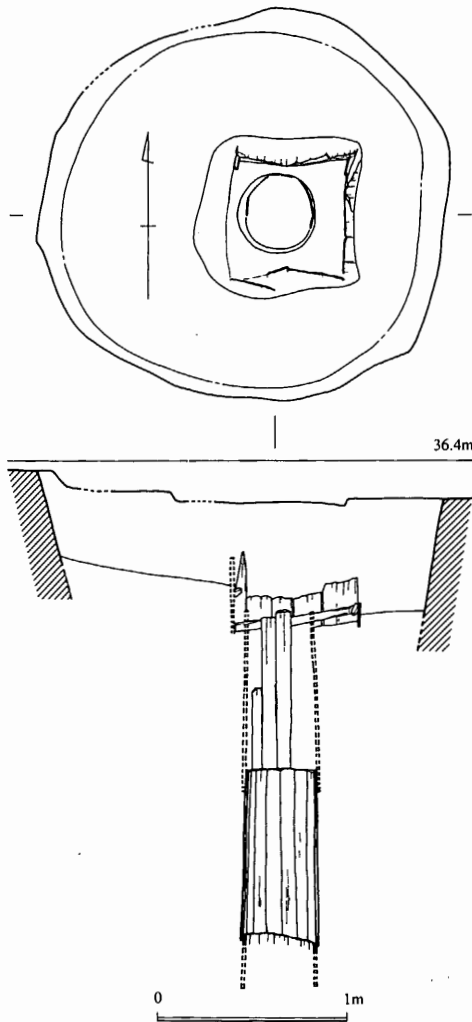


Fig.8 50SE140実測図 (1/40)

北側の一部は調査区外に延びている。掘り方の規模は東西2.1m、南北2.3m以上で、検出面から約0.3mのところまで径1.35~1.5mで略円形のプランが見え、これが杵の痕跡かと考えられたが、調査区境で壁の崩落が懸念されたため、底まで掘り進むことは断念した。50SK235に切られている。

50SE250 掘り方は略円形を呈していたとみられるが、調査区端にかかっており全容は不明である。検出した東西長2.75m、南北長1.7m以上で、掘り方中位以下は円形に近くなり推定径2.45mを測る。検出面から約0.65mほど掘り下げたが調査区壁が崩落する恐れが出てきたため途中で調査を断念した。

50SE270 (Fig.9, CD-0047~0050) 調査区南西隅で検出されたもので、掘り方は略隅丸方形を呈し、2.3×2.3m、深さ3.0mを測る。検出面から約1.5mのところまで方形杵を確認した。方形杵は一辺0.85mで、幅0.15m内外の縦板を6枚ほど立て並べ、横棧で固定するものである。縦

0.40mである。50SK125に切られている。

50SE150 (Fig.7, CD-0043~0046) 掘り方は北側で広がる隅丸台形状を呈するもので、東西2.05m、南北1.9m、深さ約1.75mを測る。検出面から下へ約0.5mの位置で、掘り方の南側に偏って方形の杵が検出された。方形杵は1.0×0.95mで、幅0.3m前後、長さ0.8~1.15m以上の縦板を各辺に3~4枚用い、さらにその背後にも1~4枚の板を置いており、残存状態の良好な北側では前後2列になっている。この縦板は上下2段の横棧によって固定される。下段の棧は縦板底部面とほぼ同一レベルに置かれ、上段の棧はそれより約0.6m上位にあり下段横棧の四隅に乗る支柱で支えられる。横棧は南北方向のものがやや長く0.95m内外を測り、厚さも0.1~0.17mと厚めの板を加工するのに対して、東西方向はそれに挟まれる形で存在しやや薄く細めである。上段の横棧には丸太を半裁したものも用いられている。横棧及び支柱はすべてほぞ組である。方形杵の底部には径0.45m、深さ0.2mの曲物が据えられている。曲物内から獣骨が出土した。

50SE245 掘り方は不整長円形で、遺構の

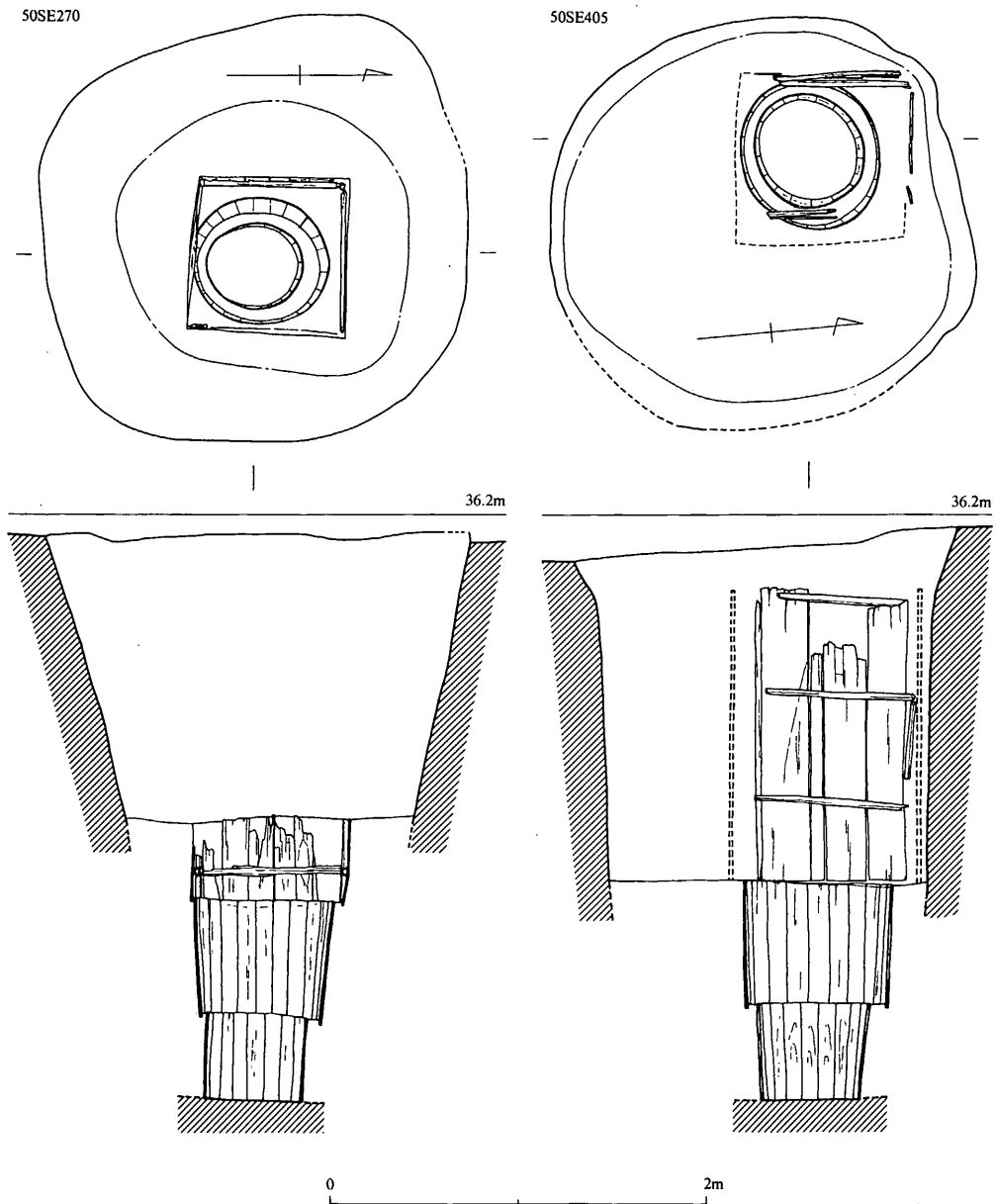


Fig.9 50SE270・405実測図 (1/40)

板は現状では約0.45mほどの高さしか残存していない。横棧は四隅の支柱に差し込まれていたと思われるが、腐食が著しく接合の方法は明らかではない。方形枠から下位は桶枠で2段重ねである。上段の桶は高さ0.65m、上位の径0.75m、下位の径0.65mを測り、22枚で構成される。下段の桶は高さ0.45m、径0.53mで17枚で構成される。50SB400の柱掘り方bを切っている。

50SE377 (CD-0051) 略円形の掘り方を有するもので、東西2.7m、南北2.9mを測る。井戸枠は桶を用いており、深さ約3mまで掘り下げたが、調査中に崩落し詳細は不明である。桶は確

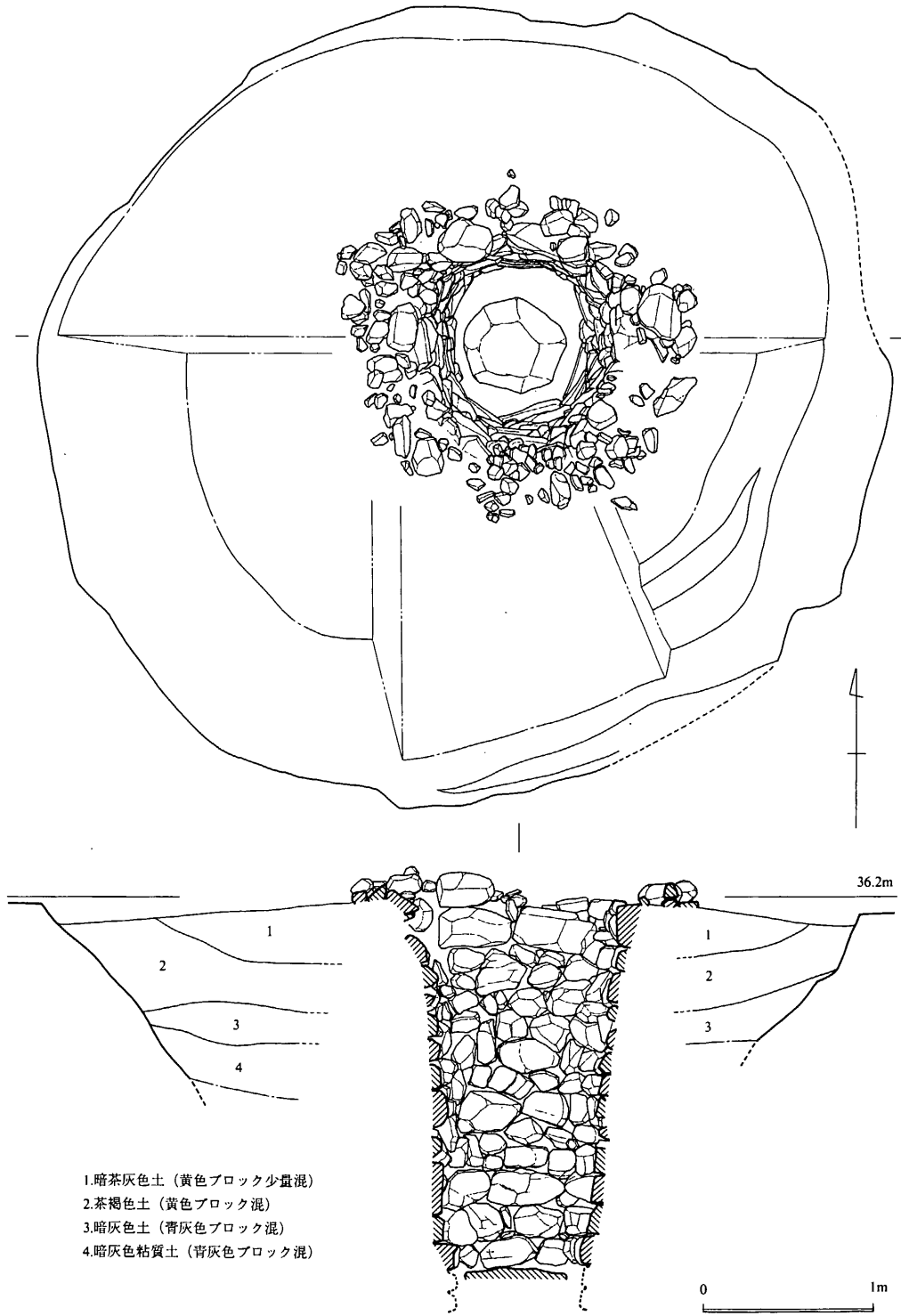


Fig.10 50SE380実測図・土層観察図 (1/40)

認した範囲でも全体が残存しておらず、約半分が確認できたに留まる。残存していた木材の状況がきわめて良好なことを踏まえると部分的に抜き取られた可能性が強い。またそのことによる崩落も早い段階から起きていたようで、検出面では複数の遺構が切り合うような状況で土層確認がなされたが、一部を除いてすべてこの井戸の最上位における埋土の違いであることが判明している (S-368・374・376)。

50SE380 (Fig.10, CD-0052~0054・0093) 石組の井戸である。掘り方は検出面で不整形を呈し、東西5.1m、南北4.8mと巨大であるが、45度近い傾斜で掘り込まれており、底部近くでは石組を据えられる程度に小さくなるものと思われる。石組の内径は検出面で1.15m程度、中位で0.8mを測り、下位に向かって小さくなっている。深さは2.3mまで確認できたが、内部に径0.6mの大石が転落しておりそれを引き上げることができなかつたため、これ以上の掘り下げは断念した。石組は長さ0.15~0.45m程度の栗石の平坦面を内側に揃えて構築されていた。裏込土は確認できた範囲で数層あり、いずれも石組に近い部分(中央近く)で厚さ0.25~0.3m程度となっていることから、石組構築作業における一つの単位ではないかと想定される。なお、裏込土は石組の周囲に限って小石を多く含んでいた。

50SE405 (Fig.9, CD-0055~0059) 掘り方は略円形を呈するもので2.1×2.25m、深さ3.05mを測る。検出面から0.3mほど掘り下げた地点で、掘り方の北西隅に偏って方形の杵痕跡が確認され、西側面で辛うじて当初の構造が把握できた。方形杵は一辺約0.95mで東側で幅0.5m近い縦板を用いていた他は、幅約0.25mの板材3枚以上を立て並べて構築していたようである。西側の板材は長さ1.55mを測り、上端がきれいに揃えられていることから当初の長さに近いものと考えられる。したがってこの上位にさらに板杵が置かれていたものと思われる。板材は幅4cm程度の角材あるいは丸材による横棧で固定され、横棧はおよそ0.55mの幅で3段分が残存していた。腐食が著しく端部が失われており、横棧自体の固定方法は明らかにはできなかった。方形杵の下位には桶が2段重ねで置かれ、上段の桶は上位径0.8m、下位径0.75m、高さ0.65mを測り21枚で構成され、下段の桶は上位径0.58m、下位径0.52m、高さ0.52mを測り17枚で構成される。調査中崩落が著しく、実測図は上下を合成したものであり、両者が揃った写真はない。

50SE410 (CD-0057・0060) 掘り方は隅丸方形を呈し、1.9×2.0m以上を測る。検出面から1mほど下げた段階で、掘り方の中央付近に径0.6m弱で円形の杵が確認された。杵は桶で構築されるがほとんどが崩壊しており、深さ1.5mあまりまで掘り下げたが詳細な観察はできなかった。

(3) 溝

50SD019 調査区北寄りで検出された細い東西溝で、東側は調査区外に延びている。検出段階から中央で途切れているが当初は一本のものであったとみられる。検出長は2箇所合わせて26.8m、幅は0.2~0.4m、深さ5~10cmを測る。時期を決定できる遺物に恵まれないが、切り合い関係では周囲のすべての遺構を切っていることと、浅くなって消滅してしまうが溝西側の端

部が、後述する50SD255の北端近くで終わっていることを思うと、近世以降に下る可能性が高い。N-91° 20′ -E。

50SD110 調査区中央部を北西から南東に向かって蛇行する溝で、両端は新規の遺構に切られ、中央部を井戸と土坑に切られているため全貌は明らかではない。検出長10.2m、幅0.4～0.6m、深さ0.1～0.3mを測る。50SX500を切る他はすべての遺構に切られている。

50SD255 調査区の関係で分断されているが、一連のものとして捉えると検出長25.1m、幅0.7～1.3m、深さ0.2～0.4mを測る。溝は一部に段差をなして窪む部分もあるが、概ね北から南に向かって流れていたようである。埋土は灰褐色で黄色粘土のブロックを多く含むものである。50SB300を切るほか、重複する大半の遺構より新しい。1981年度に調査した19SD010はこの南延長部と考えられる。N-7° -E。

(4) 土坑

50SK001 (Fig.11、CD-0061～0063) 調査区北東隅で検出した浅い略長円形の土坑で、東西4.95m、南北2.75m、深さ0.2～0.25mを測る。埋土は黒色土の単一層からなり、底部は概ね平坦で、床面に多数のピットが検出されたが、先行する遺構とみられ、この土坑に関するものとは思われない。またいくつかのピットが埋土上位から切り込んでいる。

50SK015 調査区東隅で検出された土坑で、半分以上は調査区外に延びているものと思われる。検出長約2.4m、幅1.65m以上、深さ0.15m内外を測る。土坑の北隅は弧状に窪んでおり、その部分は深さ約0.3mである。

50SK030 (Fig.11) 調査区東隅で検出された隅丸長方形を呈する土坑で、東西2.75m、南北1.55m、深さ約0.15mを測る。床面で多数のピットを検出したが、いずれも本土坑とは直接関係しないものと考えられる。

50SK045 不整形な土坑で、南側は調査区外にある。東西1.7m、南北1.0m以上、深さ0.3～0.4mを測る。50SK050を切っている。

50SK050 不整形な土坑で、南側は調査区外にあるだけでなく、東南隅を50SK045に切られており、全貌は不明である。検出東西長2.8m、南北1.7m以上、深さ0.1～0.13mを測る。50SX020を切っている。

50SK055 検出段階では一つの遺構と見なしていたが、東側に偏って深くなっており、各々別遺構の可能性が強い。遺物は上位のものにaを付し、東側で下位になるものをbとして取り上げた。本文中では上層、下層として報告した。上層部分は下層部分も含み込んだ大きさで、東西1.9m、幅1.0m、深さ0.3mを測る。下層部分は南北1.4m、東西0.8m、深さ0.4mを測る。遺構は両者とも50SK001に切られている。

50SK060 (CD-0064・0065) 隅丸長方形を呈する大型の土坑である。北東隅の埋土が黒灰色土(S-127)であるのに対して、本体の大半が茶褐色土で埋まっている。両者を別遺構と考えて調査したが、床面及び東・北辺が連続しており同一遺構と判断した。南側を50SK075に切

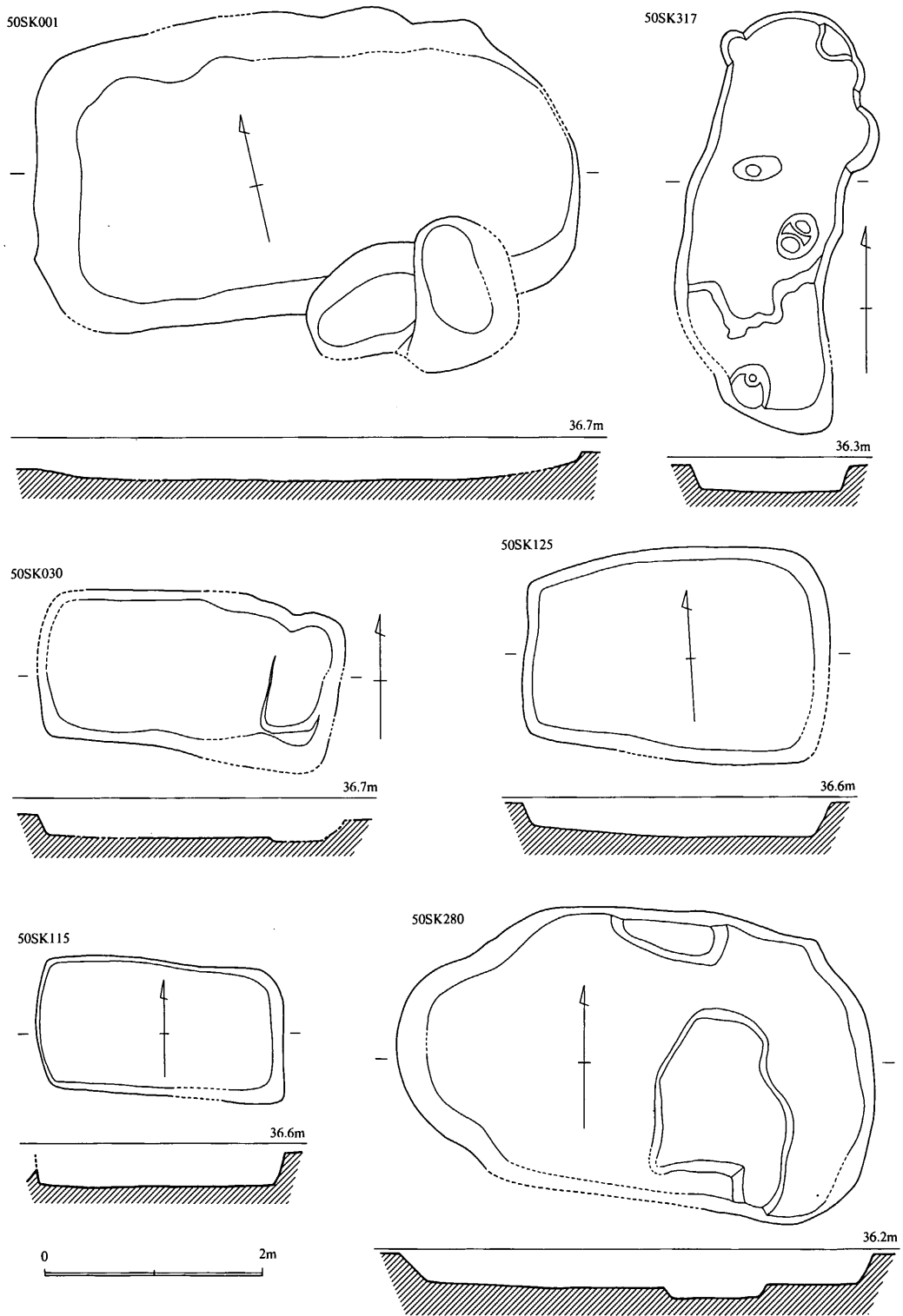


Fig.11 50SK001・030・115・125・280・317実測図 (1/60)

られているため当初の規模は明らかではないが、南北5.4m、東西4.0m、深さ0.1～0.15mを測る。床面及び埋土上位から多数のピットを検出したが、この遺構に伴うと判断できるものはなかった。なお埋土中から多量の焼壁の残骸が出土した。

50SK075 不定形土坑で南側は調査区外に延びている。また北側は50SK060に重なっている(切っている)。検出時の規模は東西5.8m、南北最大5.5m以上を測る。床面には凹凸があり、深さは0.1～0.2mを測り、埋土は黒灰色土で構成される。50SE080に切られるかのように検出されたが、ここで確認されたプランは時間経過に伴う沈下部分に堆積したものと判断され、井戸が古いと判断した。その他50SK095・105はこの遺構より新しい。

50SK088 50SK060の東側にある略円形を呈する土坑で、類似する土坑(S-87)に切られている。南北1.2m以上、東西1.2m、深さ0.1m内外を測る。床面から多数のピットが検出されているが、いずれもこの土坑に伴うものではない。

50SK095 50SK075を切る土坑で、南側は調査区外に延びている。隅丸長方形を呈していたとみられ、東西1.55m、南北0.6m以上、深さ0.23mを測る。

50SK105 50SK075を切る土坑で、50SK095の東側にあつて南側は調査区外に延びている。隅丸(長)方形を呈していたとみられ、東西0.97m、南北0.5m以上、深さ0.3mを測る。

50SK115 (Fig.11) 50SK060の北側にある略長方形の土坑で、東西2.25m、南北1.25m、深さ約0.3mを測る。

50SK123 50SX020を切る不定形土坑で、東西1.2m、南北1.0mを測る。土坑は2段になり、床面までの深さは0.3mを測る。底に径0.25m、深さ約0.1mのピットがあるが関連は分からない。

50SK125 (Fig.11) 略長方形を呈するもので、東西2.8m、南北2.0m、深さ0.2～0.3mを測る。50SD110・50SE140を切っている。

50SK130 調査区北辺にある土坑で、北側は調査区外にあつて全形は不明である。形状は不定形で、東西3.7m、南北1.5m以上を測る。床面では西側は一段深くなっており、この部分を下層として遺物取り上げを行った。下層部分は東西1.9m、南北0.9m以上、深さ0.2mである。部分的ながら50SE120を切っている。

50SK160 調査区南辺で検出された東西方向に長い土坑で、大半が調査区外にある。東西6.5m、南北0.8m以上で、床面には部分的に凹凸があり深さは0.5～0.7mを測る。東側にある浅い土坑(S-165)に切られ、50SK236を切っている。

50SK180 (Fig.12、CD-0066) 調査区中央付近にあつて形状は不整形ながら大きな土坑で、東西4.9m、南北4.0m、床面中央部が南北2.9m、東西1.8mの範囲で深くなっており、その部分の深さは0.15～0.2mを測る。床面から複数のピットを検出したが、土坑に伴うものとは考えられない。土坑状の窪み50SX220を切っている。

50SK210 (Fig.12、CD-0067) ややいびつな隅丸長方形のプランで、東西1.9m、南北2.2m、深さ約0.15mを測る。50SK236を切っている。

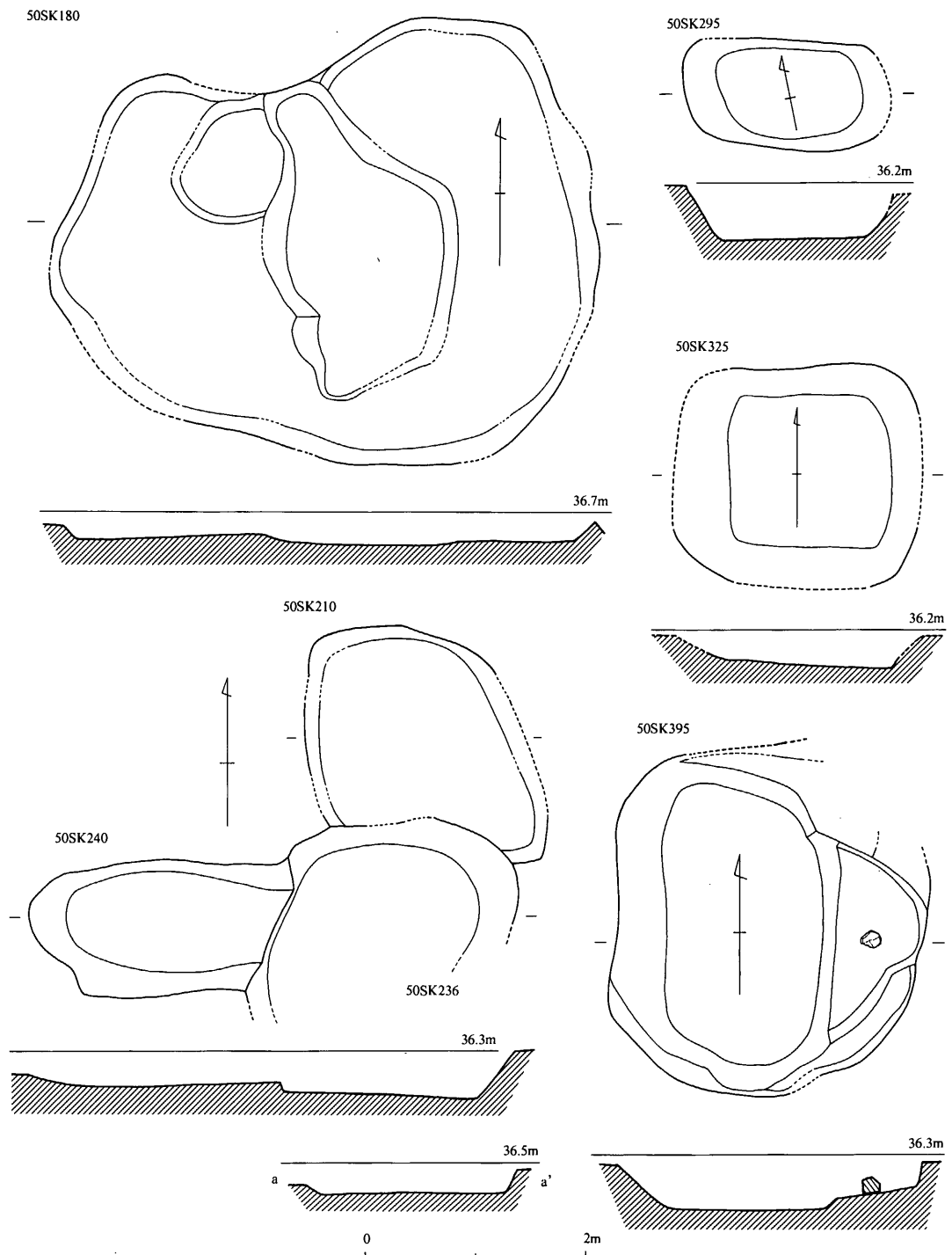


Fig.12 50SK180・210・236・240・295・325・395実測図 (1/60)

50SK235 調査区北辺にある土坑で、北側の大半は調査区外に延びている。東西2.3m、南北0.6m以上、深さ0.35~0.45mを測る。50SE245を切っている。

50SK236 (Fig.12) 不整形円形を呈する土坑で、南側は調査区外に延びている。東西2.25m、南北1.7m以上、深さ約0.5mを測る。

50SK240 (Fig.12) 東西方向の長円形土坑で、東西3.2m (検出時)、幅1.2m、深さ0.35mを測る。50SK236・50SX244を切っている。

50SK244 東西3.5m以上、南北2.2m以上を測る略円形の土坑で、床面中央付近が東西1.45m、南北1.6m以上にわたって窪んでいる。深さは床面まで約0.25mで、窪みの部分は床面から約0.1mを測る。50SK240に切られている。

50SK274 50SD255に切られる土坑で、不整形長円形を呈し、東西1.65m、南北1.6m、深さ0.3~0.35mを測る。

50SK280 (Fig.11) 調査区南西隅で検出した不整形楕円形の土坑で、東西4.3m、南北2.7mを測り、床面には凹凸があって深さ0.3~0.4mを測る。50SB450柱掘り方bを切っている。

50SK290 遺構の北西側に大きな攪乱があり、現在の形状は隅丸三角形とでも言えるような形状を呈するもので、東西1.7m、南北3.0mを測る。遺構の東側が若干深くなっており、深さは0.2~0.3mを測る。50SB300B柱掘り方gを切り、50SB300A柱掘り方gはこの遺構によって消滅したものと考えられる。

50SK295 (Fig.12) 東西方向の楕円形土坑で、東西1.85m、南北1.0m、深さ約0.5mを測る。50SB300A柱掘り方hを切る。

50SK301 50SK280に切られ、50SB450柱掘り方bに重複する (切る) 土坑で、東西1.9m、南北1.5m以上、深さ0.2m内外を測る。

50SK317 (Fig.11) 南北方向の長円形土坑でプランの随所に入出りがある。南北3.75m、東西1.4m余り、深さ0.2~0.25mで、床面には浅いピット状の窪みがあるほか、土坑の北側がやや深くなっている。

50SK325 (Fig.12) 隅丸方形を呈する土坑で、東西1.7m、南北2.0m、深さ約0.3mを測る。50SB300A柱掘り方cを切っている。

50SK330 (Fig.13) 検出面では

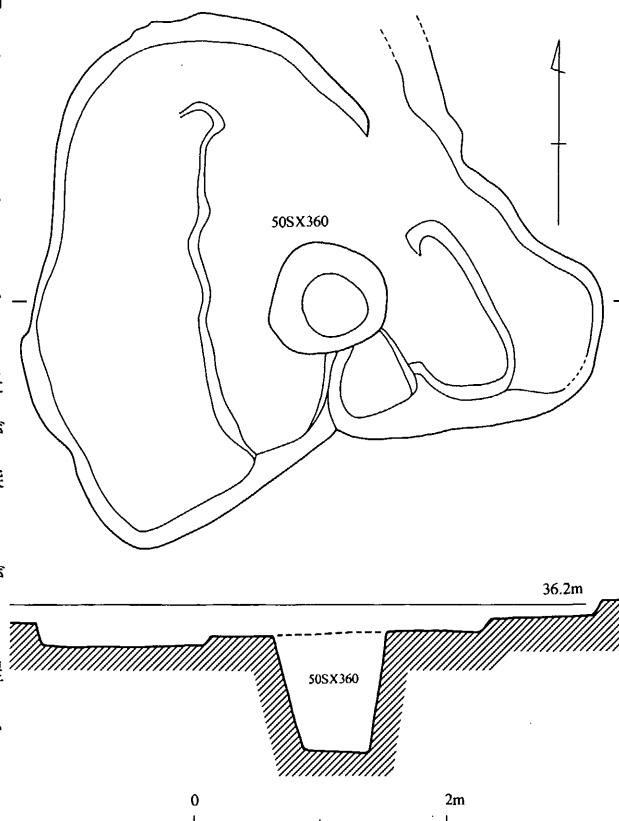


Fig.13 50SK330・50SX360実測図 (1/60)

南北6.5m、東西4.6mの不整形な浅い窪み状（埋土は黒色土）を呈しており、やや狭くなった北側のものを指してS-310としたが同じものと判断できる。土坑本体は不整形で東西4.6m、南北4.2mを測り、黒色土層としたものが最も新しく、これは一旦土坑が埋まった後に再度穿たれたと考えられるものであり、別遺構として捉えることも可能である。土坑の主体となる部分は東西約3.2m、南北4.2m、深さ0.25～0.35mを測る。この部分の埋土は大きく4層に分かれ、下位から淡灰色土層、淡黄色土層、暗茶色土層、暗褐色土層の順に堆積する。これらをすべて除去した段階で50SX360が検出された。なお、黒色土層の出土遺物は奈良時代のものが目立ち、下位の50SX360との関連もあり、遺物報告の項では古いものを提示しているが、他の層に近似した時期の遺物も含まれることを付記する。

50SK345 50SE120に切られる不定形な土坑で、東西1.1m、南北1.1m以上、深さ0.1mを測る。

50SK364 遺構の北西部分が調査区外にあるが、略円形を呈する土坑と考えられる。東西1.05m、南北0.9m、深さ約0.3mを測る。

50SK365 やや南北に長い略円形を呈する土坑で、南北1.25m、東西1.05m、深さ約0.3mを測る。

50SK370 南北2.1m、東西1.6m、深さ約0.2mを測る。50SE377に接するが切り合い関係はない。

50SK372 略隅丸方形を呈すると思われるが、北側が調査区外にあって全貌は分からない。東西2.3m、南北1.2m以上、深さ0.2mを測る。整地と考えられる50SX430より新しい。

50SK375 井戸50SE377に切られていると思われるが、埋土の沈下による土層の堆積が複雑で明確には検証できないままである。土坑は略長円形を呈するもので、東西1.3m以上、南北2.05m、深さ約0.2mを測る。

50SK390 不整円形を呈し、東西3.05m、南北2.8m、深さ0.15m程度で、中央付近が東西2.2m、南北1.8mの不整円形に窪んでおり、その部分の深さは約0.1mである。埋土中に藁灰が多量に混入していた。整地と考えられる50SX430より新しい。

50SK395 (Fig.12) 不整円形を呈する土坑で、東側に段がある。上面での規模は東西2.8m、南北3.1m、段の床面までの深さ0.3m、土坑の主体となる西側の窪みは南北方向の楕円形を呈し、南北2.85m、東西1.95m、検出面からの深さ0.45mを測る。埋土は大きく3層に分けられるが、最下層の黒色土層は部分的に存在する程度で、中位の淡茶色砂層は薄く、大半は上位に堆積する黄褐色土層である。この遺構の最上面には薄く茶褐色土層（S-392）が被っていた。50SE380に切られる。

50SK415 調査区北西隅で検出された土坑で、北及び西側が調査区外にあって全形は不明である。検出できた規模は、東西1.5m、南北1.2mで、深さは約0.5mを測る。整地と考えられる50SX430より新しい。

50SK421 整地とみられる50SX260を除去した段階で検出された土坑で、南北方向の楕円形

を呈し、南北2.8m、東西1.5m、深さ0.2mを測る。

(5) 墳墓

50ST320 (Fig.14、Pla.、CD-0094～0118・0501～0642) 調査区西南隅で検出された木棺墓で、副葬品として漆手箱や供献土器として龍泉窯系青磁皿、土師器小皿等が納められていた。以下に墓壙、木棺、遺物出土状態等に分けて記述する。

(墓壙)

墓壙は隅丸長方形を呈し、検出面で長さは2.26m、幅は多少の出入りがあるが0.95～1.03m、底部は長さ2.06m、幅0.77～0.8m、深さは検出面から0.51mを測る。

底面はほぼ平坦で、北端、中央、南端の3箇所にそれぞれ一対の石（長さ0.25～0.35m程度、厚さ5～10cm）があり、棺台としている。棺台は底面よりわずかに浮いた状態で検出されており、底面との間には淡黄灰色砂質土が一面にあって、墓壙掘削後、簡単に地均しを行って棺台を置き、木棺を安置したものと考えられる。各台石間には棺底材や人骨の一部が残るが、これらは淡黄灰色砂質土の上に堆積する暗青灰色砂質土（棺下に流入したとみられる土）上面に密着しており、断面図のように棺台上面より低いレベルに人骨、棺材片が検出された。さらに台石上にも棺底材が認められたことから、棺は壙底から浮いて安置されたことは明らかである。また棺側板と墓壙との間は3つの層からなる裏込土がある。

(木棺と遺体)

墓壙をわずかに下げた段階で木棺の痕跡が確認された。上面規模は長さ1.99m、幅0.66～0.68mであったが、底部近くで小口板及び側板痕跡が明瞭となり、出土した鉄釘の位置などからみて正確な木棺規模は、長さ1.94m、幅0.60～0.61mに復原できる。裏込土の内側には帯状の黒色粘土が確認され、これは小口板及び側板の腐植痕跡とみられ、棺底から2cm余りの立ち上がり確認できた。鉄釘は両小口部分に集中して出土したほか、中央部及び中央部と南北両小口部分の中間付近にまとまって出土し、総数106本を数える。原位置にきわめて近い位置を保つものがあり、また木質が遺存する資料も多く木棺の復原が可能である。これについては終章で検討を行う。

棺底部には、腐食が進み土にもどる寸前の人骨が検出され、細部については不明だが、頭位は北で、膝を「く」字状に折り曲げたことは分かる。9個程の歯を残すが顔面の方向は分からない。検出状態から遺体はやや東に傾けて埋葬したともみられるが、膝は折り曲げて立てていたものが、土圧によって東側に倒れた可能性を考えると、仰臥屈葬となる。

(遺物出土状態)

遺物は人骨の頭部直上から漆手箱1点、墓壙北端に集中して青磁皿2点、土師器小皿6点、南小口部上位と北小口下位に転落して土師器小皿各1点が確認された。いずれも棺上位にあったものが、棺蓋の崩落に伴って棺内に流入したものと考えられるが、漆手箱の上部に数cmの土砂がかみ、その上に供献土器群が出土していることから、漆手箱が先行して転落したものと思わ

れ、埋葬段階において、土器と手箱は上下の位置にあったと見ている。

木棺の北小口部分外側で土師器小皿1点が出土している、これは棺外墓壇埋め戻し前に入ったように見えるが、検討の結果、裏込土内のものではなく崩落土内にあるため、偶然にも北小口板崩落時に生じた壁面近くの隙間にすべり込んだと考える。つまりこの小皿も当初は棺上にあったと見ている。したがって北小口付近に置かれた土師器は小皿7点ということになる。

次に手箱は頭位にあり、棺内底部に枕のように置かれたような状況を呈していたが、箱内に人骨が落ち込んだ状況はなく、後の発掘作業により手箱の下に頭骨がつぶれていることがわかった。さらに人骨下に棺底の材の痕跡を確認した。なお、頭骨と手箱は直接接触しており、その間に蓋材らしき棺材の痕跡はなかった。つまり頭骨より上位に手箱は位置するが、手箱は棺蓋の上に置かれたのかという疑問点もある。手箱の底部は棺台の石に食い込み、さらに下がっている点から、ここでも棺下は空洞となっていたことが追認できる。

また、漆手箱内には故意に一部を破砕した青白磁水注1点、和紙に包まれていたと見られる六花湖州鏡1点、同安窯系青磁皿1点、筆軸?1本、炭化木片1点などが納められていた。

(6) その他の遺構

井戸状遺構

50SX186 (Fig.15) 検出面の形状は略円形で、径1.1mを測る。検出面から約0.4mの位置で土坑内の東側に偏って、0.58×0.5m、深さ約0.25mの隅丸長方形を呈する土坑状の窪みを確認した。この西側壁面には上位では縦方向、下位では横方向の木質がわずかに残存していた。出土遺物は乏しいが、奈良時代に帰属するものがほとんどであった。

50SX360 (Fig.13、CD-0068) 0.85×0.9mの略円形を呈し、深さは0.93m (50SX330の床面から計測) と深い。底部は円形で径0.5mを測る。井戸の可能性も考えられるが、他の井戸遺構に比べて底部の標高が高く (35.06m)、枠の痕跡も見いだせなかったためここで報告した。埋土中から奈良時代の資料が出土した。

柱掘り方状遺構

50SX305 (Fig.16、CD-0069) 50SB300柱掘り方iとjの間で検出されたもので、掘り方は略円形を呈し、0.55×0.6m、深さ0.1mを測る。掘り方の中央付近で底部から数cm浮いたところに無文磚と石が出土した。根石的なものとみられる。埋土は淡黄灰色砂質土の単一層である。

50SX437 (Fig.16、CD-0070) 50SE377の南西方向にある。掘り方は隅丸方形で、0.85×0.85m、深さ0.15mを測る。後述する50SX439と近接し、その心々距離は約2.4mである。

50SX439 (Fig.16、CD-0071) 不整長円形を呈していたと見られるが、西側が調査区外に延びており全容は不明である。南北1.1m、東西0.9m以上、深さ0.45mを測る。

50SX445 (Fig.16、CD-0040) 隅丸長方形を呈し、南半分がやや深くなる。南北1.05m、東

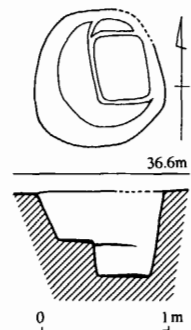


Fig.15 50SX186
実測図 (1/60)

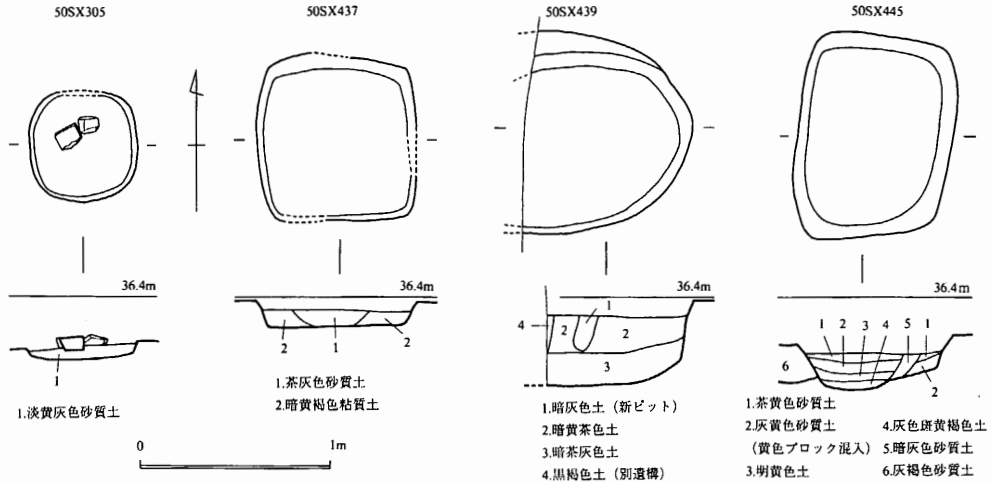


Fig.16 50SX305・437・439・445実測図 (1/40) (方位・スケールは共通)

西0.8m、深さ0.2~0.25mを測る。埋土は、深くなる部分が丁寧な水平堆積で他と異なっている。50SB450柱掘り方eを切っている。

祭祀遺構

50SX315 (Fig.17、CD-0072・0073) 平面形は略円形を呈し、0.35×0.31m、深さ0.25mを測るピットである。底部に木質がわずかに残存 (木目が観察出来る程度でごく薄く残存していたにすぎない) しており、5箇所 (1箇所の位置は特定できなかった) に銅銭が見出された。銅銭は木質より上位にあり、木質を木箱のようなものの残欠と見なすならば、箱内に銭が納められていたと考えられる。現状で銭の配置に特別な意味を見出せないが、南側2箇所のものはいずれも2枚が癒着して出土した。出土点数は合計7枚となる。他に顕著な出土遺物はなく、箱内の内容物も不明である。地鎮遺構的な性格を考えておきたい。

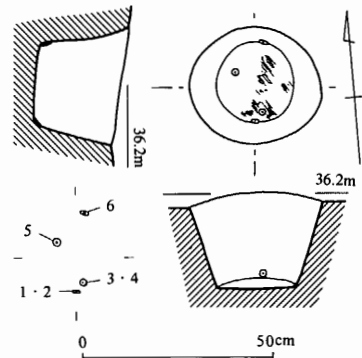


Fig.17 50SX315実測図・銅銭出土状況図 (1/20)

整地状遺構

50SX260 不定形な窪み状を呈するもので、東西3.2m、南北4.5m (いずれも最大値) で、深さは0.05~0.1m程度である。なおこれを除去した段階で50SK421が検出された。切り合う遺構との関係は、50SD019ではその前後関係は明確にし難く、50SD255が新しいと判断している。

50SX430 (Fig.18、CD-0074~0080・0092) 調査区の北西部分に広がる整地と考えられ、井戸等の大きな遺構で分断されているが、当初は同一のものと見て間違いない。北及び西方向へさらに延びるものと見られる。今回検出できた規模は、東西16.5m、南北10.2mが最大の広がりであり、厚さは0.1~0.15m程度である。なお部分的に深くなる場所を下層として検出した

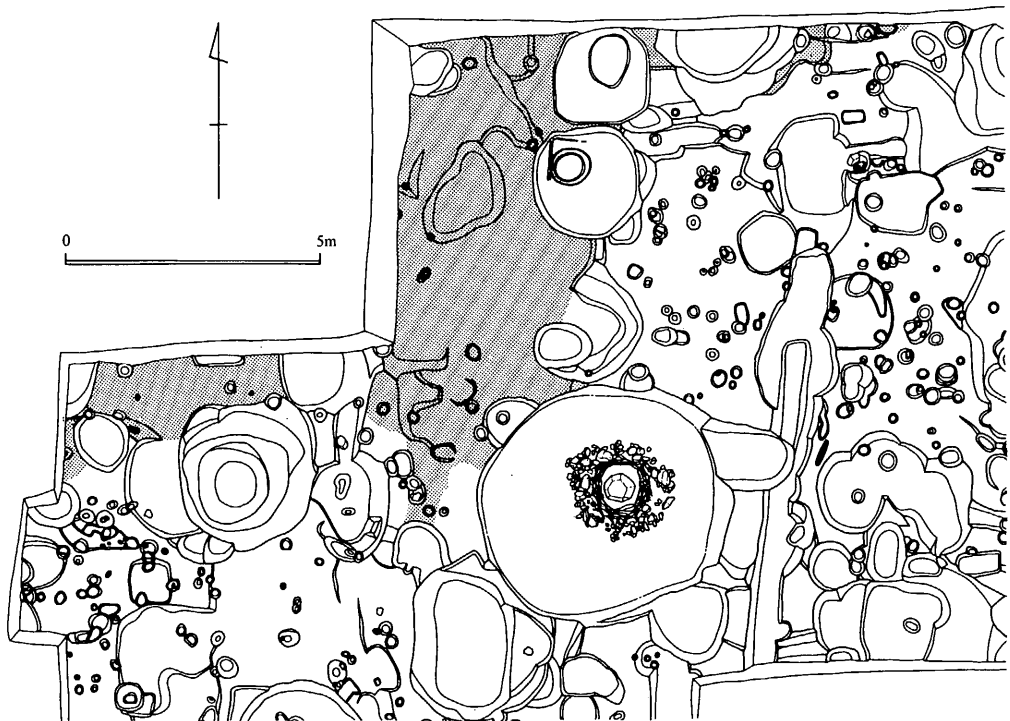


Fig.18 50SX430 (網目) 範囲図 (1/150)

ほかは、除去後に遺構は確認できなかった。

50SX500 (Fig.4、CD-0081～0084) 調査区中程で検出された、窪みを整地したと見られる遺構である。平面の形状は南北方向の溝状を呈し、長さは約13m分を確認したが南北両側ともに調査区外に延びており、当初の規模を知るには至らなかった。幅は他の遺構に切られていて当初の正確な規模は判明しないが、現状でも5.0～7.8mとかなり広い。床面は凹凸が著しく、各々別遺構と捉えて遺物の取り上げを行ったが、顕著な差はなく、ここではひとまとめにして報告した。埋土は黄茶色土が主体を成しており、深さによって人為的に上中下の各層に分層して遺物の取り上げを行った。また床面にみられた窪みからの遺物は最下層として扱うこととした。ただし中央西寄りの窪みについては、上位から黄褐色土、灰褐色土、暗灰色粘土の順に堆積しており、遺物もこれに従って取り上げを行った。遺構の深さは場所によって大きく異なるが、最も深い部分で検出面から0.45m程度であり、巨視的には溝状を呈するが水の流れたような形跡は確認できなかった。今回検出した遺構では最も古いものである。なお19SX075は埋没時期や埋土の状況などが近似しており、同一遺構の可能性を考えたい。

その他の遺構

50SX005 東西0.35m、南北0.4m、深さ約0.2mのピットである。底部近くでは2個のピットが切り合ったような形状を呈している。

50SX009 50SK001埋土上面から切り込むピット群である。

50SX020 調査区東南隅で検出された溜まり状遺構である。遺構の南側は調査区外に延びており、全容を知り得ないが、東西5.3m、南北3.7m以上、深さ0.15～0.2mを測る。黒灰色土を埋土とし、50SK045・050に切られる。

50SX024 50SX009と同様に50SK001埋土上面から切り込むピット群で、淡黒灰色土を埋土とする。

50SX025 長さ1.75m、幅0.2～0.3m、深さ0.25mを測る溝状を呈する遺構である。南端がピット状に窪んでいる。

50SX042 径0.25mを測る小ピットで、深さは0.4mである。50SX043に切られる。

50SX043 (Fig.19) 検出時点での長さは、東西0.65m、南北0.5mで、やや下位に下がったところで径約0.4mの略円形ピットとなる。下位のピット内には柱根が残存していた。深さは検出面から約0.4mである。

50SX054 南北0.7m、東西約0.4m、深さ0.55mを測る楕円形のピットである。

50SX058 東西1.1m、南北0.6m以上、深さ0.1～0.25mを測る土坑状を呈する遺構であるが、南側は調査区外に延びており全容は明らかでない。底部から複数のピットを検出したが、これに伴うものとは考えられない。

50SX063 (Fig.19) 径0.3m、深さ約0.3mのピットで、50SX020埋土上面から切り込んでいる。ピットの底部近くに柱根が残存していた。

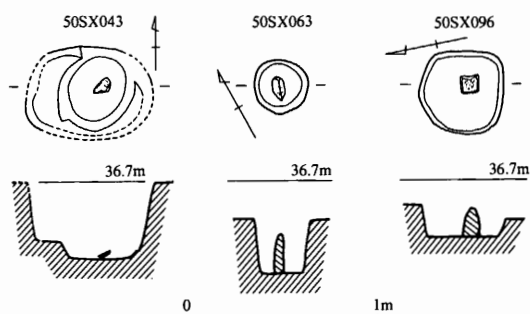


Fig.19 50SX043・063・096実測図 (1/40)

50SX065 径約0.2m、深さ約0.2mのピットである。

50SX096 (Fig.19) 径約0.4mの略円形を呈するピットで、深さは0.1m以上を測る。ピットの中央やや南寄りに柱根が残存していた。50SK001と前後関係が存在したと思われるが、残念ながらさらに上位から穿たれた遺構 (S-18) によって確認できない。

50SX106 径約0.3m、深さ0.3m程度の円形を呈するピットで、内部から木質を検出したが柱かどうかは判断できない。

50SX114 検出時のプランは東西方向の楕円形で、東西2.05m、南北0.9m、深さ0.1m内外を測る。

50SX128 径0.25m、深さ0.4mのピットである。50SD019・50SK060に切られる。

50SX129 東西、南北ともに1.2m程度のごく浅い溜まり状遺構である。埋土を除去すると下層から多数のピットが検出されたが、本遺構とは無関係と考えられる。

50SX132 50SX186の上面及びその周辺に検出されたピット群である。

- 50SX134 径約0.25m、深さ0.3mのピットである。
- 50SX141 東西0.6m、南北0.6m以上、深さ約0.2mを測るピットで、北側の一部が調査区外にある。
- 50SX142 50SX500埋土上面から切り込むピット群である。
- 50SX152 東西0.3m、南北0.2m、深さ0.35mのピットで、底部の東側に寄って長さ0.15m程度の石がある。礎板もしくは根固め石と思われる。50SK075埋土上面から穿たれる。
- 50SX154 50SE120の南東部にあるピット群である。
- 50SX156 50SK060の西側に展開するピット群である。
- 50SX170 径0.2m、深さ0.2m程度のピットである。
- 50SX175 50SK095と160に挟まれた位置にある小土坑状の遺構で、南側の多くが調査区外にある。東西1.2m、南北0.35m以上、深さ0.65mを測る。
- 50SX187 東西0.7m、南北0.3m、深さ0.2m程度のピットである。
- 50SX190 50SK210に切られる円形の大型ピットで、径1.05m、深さ0.6～0.65mを測る。底部に長さ0.15m程度の石が2個検出されている。柱の根石もしくは礎板の可能性はある。
- 50SX195 径0.25～0.35m、深さ約0.2mを測るピットである。
- 50SX196 50SK130上面及びその周辺で検出されたピット群である。
- 50SX202 不整形な溜まり状遺構で検出時の長さは2.3m以上、深さは0.1m程度と浅い。
- 50SX204 東西0.4m、南北0.4m、深さ0.25mで、東側に張り出したような形状を呈するピットである。
- 50SX207 50SE140埋土上面で検出されたピット群中のひとつで、長さ0.4m、幅0.15mを測る長円形を呈するピットである。
- 50SX214 東西1.2m、南北1.0m、深さ0.1m内外の不整楕円形を呈するピットである。遺物は奈良時代のものが中心だが、50SX500上面に存在しており、そこからの混じり込みの可能性が高い。
- 50SX220 不定形な溜まり状遺構で、50SK180に切られている。検出段階の規模は南北3.6m、東西3.5mで、床面は若干の凹凸があり、深さは0.15～0.25mである。埋土を除去した段階で多数のピットを検出したが、関連するものとは考えていない。50SD019に切られ、50SE245を切っている。
- 50SX221 50SX220の東側で、50SE150との間に展開するピット群である。
- 50SX222 50SX221ピット群中にあり、東西0.25m、南北0.35m、深さ0.25mを測る楕円形のピットである。
- 50SX230 50SX220の西側に近接して存在する溜まり状の遺構である。検出段階のプランは東南隅が窪む隅丸略長形状を呈しており、東西3.9m、南北3.3mを測る。床面には起伏があり深さは数cm程度である。床面からピットや土坑状の遺構が検出されたが関連はないものと考え

られる。50SD019に切られ、50SE245を切っている。

50SX237 50SK180の西南部分にあるピット群である。

50SX241 50SK180の南で、50SK210との間にあるピット群である。

50SX247 大半が調査区外にあるため全体の規模や形状は不明である。検出した規模は、東西5.5m、南北0.5m以上、深さ0.25m程度である。50SD255南北溝を切っており、今次検出遺構群中では最の新しい部類に属する。

50SX251 50SK274の東にあるピットで、検出段階では東西0.7m、南北0.75mの不整三角形状を呈するピットと思われたが、少し掘り下げると2つのピットが検出された。ピットはいずれも径0.4m内外で、深さは0.25mである。

50SX261 50SX220埋土除去後に検出されたピット群である。

50SX289 東西0.5m、南北0.6mのピットで、ごく浅いものである。

50SX293 50SK295を切る楕円形を呈する溜まり状遺構である。検出段階の規模は、南北1.7m、東西1.2mで、深さは0.1m程度である。

50SX294 50SK295の東側に接して存在した溜まり状遺構で、この埋土を除去した段階で50SK295の明確なプランが検出できたことから、50SK295の上面に被るように存在していたと思われる。また同時に50SB300A-h・400eのプランも確認できた。なお本遺構の深さは7cm程度である。

50SX314 50SK325の南に接するピットで、前後関係は不明瞭である。径0.7m、深さ0.1mを測る。

50SX316 (CD-0085・0086) 不定形な溜まり状遺構で、50SK325に切られるため本来の形状は知り得ない。南北2.2m、東西1.5m程度の範囲にあり、深さは0.1～0.25mを測る。

50SX323 50SE380の南側に展開するピット群である。

50SX327 50SK330の上面で検出された南北2.6m、東西1.6mの浅いピットである。

50SX334 東西1.0m以上、南北0.85m、深さ0.1m程度のピットで、西側は調査区外にある。

50SX335 東西2.0m程度、南北2.2m、深さ0.1m前後の溜まり状遺構で、50SK330上面の埋土がこれに接するように存在する。埋土除去後に若干のピットが検出された。

50SX337 50ST320掘り方埋土上面から掘り込まれた小ピットで、径0.3mを測る。

50SX347 50SK060の北側半分程度が3.5×3.5m程度に不整形に窪む部分があり、ここに遺構番号を与えた。50SK060下層として捉えられる可能性も残される。

50SX348 ほぼ円形を呈する大型ピットで、径0.72m、深さ0.6mを測る。底部に長さ0.15m程度の石が1個存在する。近接する50SX190とはその規模、形状が近似するだけでなく底部の標高がほぼ同じであり、関連する遺構とみられる。因みに両者の底で検出された石の中心間の距離は2.75mを測る。なお、この延長上や周辺に類似する遺構は未検出である。

50SX357 50SE150北辺にあって、これより新しいとみられるピットである。径約0.2m内外

で底部に礎板を置くが、礎板には無文磚を用いる。

50SX382 50SE380の西側にあるピットで、南北0.5m、東西0.35m、深さ約5cmを測る。

50SX384 50SX335埋土を除去した段階で検出されたピットで、径0.25~0.3m、深さ0.1mを測る。

50SX401 1.0×0.7mでごく浅いピットである。50SX430整地の上面から切り込む。

50SX402 1.0×0.5m以上でごく浅いピットで、遺構の西半分は調査区外にある。50SX430整地の上面から切り込む。

50SX407 0.8×0.4mで長円形を呈するピットである。50SX408を切っている。

50SX408 0.6×0.7m以上のピットで、50SX407に切られる。

50SX414 50SX401に切られるごく浅いピットで、0.8×0.9m以上を測る。

50SX419 50SE250埋土上位から切り込む小ピット群である。

50SX427 50SX230の北側にある窪み状遺構で、1.3×0.3m以上で大半が調査区外にある。

【3】出土遺物

〔1〕掘立柱建物出土遺物

A：土器・陶磁器

50SB300A・B出土土器 (Fig.20、CD-1001・1002)

土師器

椀 (1) 外面はヘラケズリの後ミガキc、内面は細かく丁寧なミガキcを施す。内外面ともに赤褐色を呈している。柱掘り方i出土。

甕 (2) 大きく外反する口縁部を有する。

柱掘り方g出土。

50SB400出土土器 (Fig.20、CD-1003~1006)

須恵器

蓋 (3) 口縁部を少し折り曲げ、端部を三角形に作る。天井部はヘラ切りの後ヨコナデを施す。高坏の可能性もある。柱掘り方b出土。

坏c (4・5) 4はやや高めの高台を有し、底部と体部の境目は明瞭に作られる。内外面ともに残存する範囲内はヨコナデである。柱掘り方a出土。5は高台径13.0cmを測る。高台周辺はヨコナデ、見込みはナデである。柱掘り方b出土。

皿a (6) 口径19.0cm、器高2.5cm、底径16.0cmを測る。体部はヨコナデ、外面の底部は

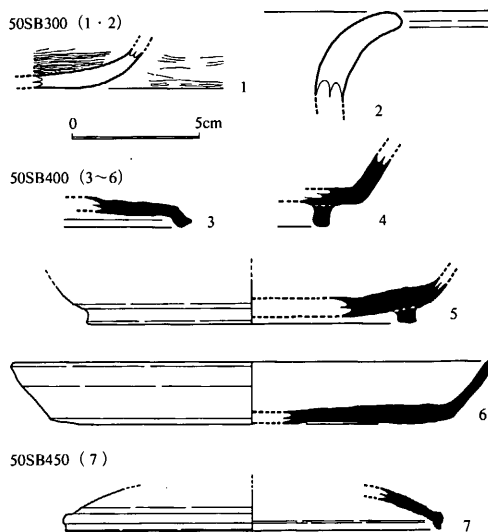


Fig.20 50SB300・400・450
出土土器実測図 (1/3)

ヘラ切り後ナデ、内面は不定方向の工具を用いたナデできわめて平滑に調整される。柱掘り方b出土。

50SB450出土土器 (Fig.20、CD-1005・1006)

須恵器

蓋3 (7) 口径15.0cm。端部は明瞭な三角形を呈し、天井部はわずかに回転ヘラケズリの痕跡が観察される。柱掘り方e出土。

建物A出土土器 (Fig.21、CD-1007～1010)

土師器

小皿a (1・2) 口径7.4・9.0cm、器高1.3・1.2cm、底径4.9・7.8cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕が残る。

坏a (3・4) 口径13.6・14.0cm、器高2.8・3.0cm、底径9.8・10.0cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕が残る。

鉢 (5) 手捏ねによるもので、口径13.3cm程度に復原される。内面には薄く伸ばした粘土紐状のものを重ねた痕跡がみえ、外面にはわずかに指圧痕が残る。内面は明白茶色を呈している。

1は柱穴a、2～4は柱穴c・d、5は柱穴f出土。

建物B出土土器 (Fig.21、CD-1011・1012)

土師器

小皿a (6～9) 口径8.4～8.6cm、器高1.0～1.3cm、底径6.6～7.4cmを測る。底部は糸切りされる。

龍泉窯系青磁

椀 (10) 口縁部をわずかに外反するもので、内面には櫛描きによる施文、外面にはヘラ彫りによる施文があるが、小片のため文様構成はわからない。釉は暗黄緑色に発色する透明釉で、光沢があるが全面に細かな貫入が認められる。胎土は淡灰色でやや肌理が粗く、気泡が多く認められる。上田分類のB類とみられる。

6・7・9は柱穴e、8は柱穴d、10は柱穴aから出土した。

建物C出土土器 (Fig.21、CD-1013～1020)

土師器

小皿a (11・12) 口径8.2・8.8cm、器高1.2・1.0cm、底径5.9・8.0cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (13・14) 口径14.2・16.6cm、器高2.9・2.4cm、底径10.5・13.1cmを測る。底部は糸切りされる。

龍泉窯系青磁

椀 (15) 外面に蓮弁文を配するものでI-5-b類。釉は淡灰緑色に発色し、光沢がある。口縁

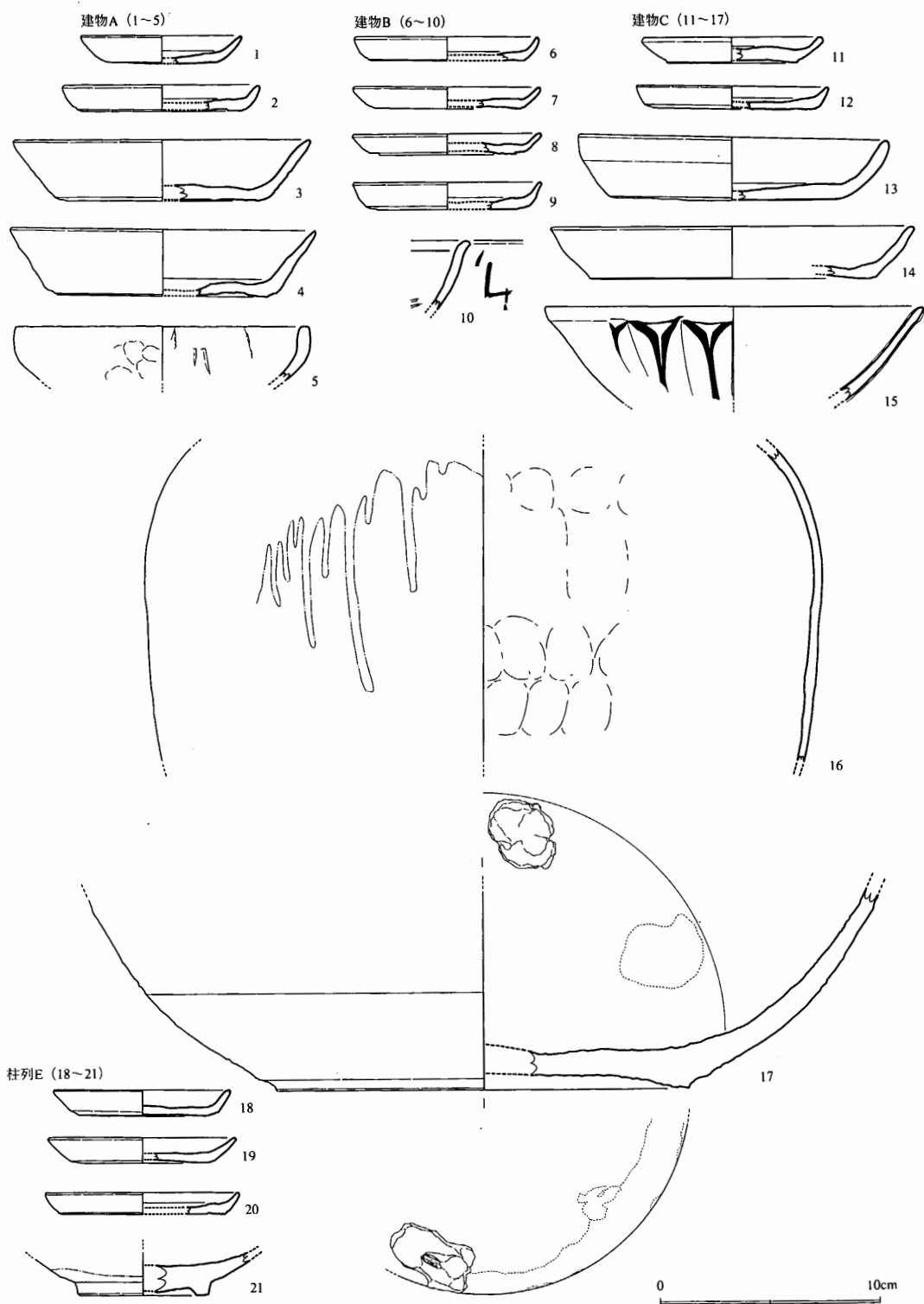


Fig.21 建物A・B・C・柱列E出土土器実測図 (1/3)

部に施釉前の小さな窪みがあるが、輪花とは判断できない。

陶器

六耳壺 (16) IV類。外面にかかる釉は淡黄緑色で鈍い光沢があり、細かな貫入が認められる。肩部には暗緑色の釉を垂下させる。内面は無釉で指圧痕（当て具痕か）がわずかに観察されるが、最終調整はヨコナデである。胎土は明灰褐色を呈し、白色粒子及び暗褐色粒を多く含んでいる。隣接する第19次調査19SK004出土六耳壺（『大宰府条坊跡III』 Fig.24-107～9）のいずれかと同一個体と思われる。

鉢 (17) 見込みに土塊状の目跡及びそれが剥離した痕跡が見られ、底部外面にも同様のものが付着する。無釉で内外面とも紫灰色を呈し、内面はヨコナデ、外面は回転ヘラケズリである。胎土は暗灰褐色で1～2mm大の砂粒を多量に含む粗いものである。I-1類。

11・14・15は柱穴a、12・13は柱穴b、16・17は柱穴cから出土した。なお、柱穴cからは第19次調査19SK004出土陶器甕（『大宰府条坊跡III』 Fig.25-110）と同一個体と思われる破片も出土している。

柱列E出土土器 (Fig.21、CD-1021～1024)

土師器

小皿a (18～20) 口径8.0～8.8cm、器高1.0～1.2cm、底径5.8～7.7cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

椀 (21) 釉は明白緑色を呈し、光沢があり細かな貫入が入る。見込みには長さ2mm程度で暗白色の小さな付着物があり、目跡と考えられる。体部外面下半は露胎で回転ヘラケズリされたことが分かる。VI類とみられる。

18・19は柱穴b、20・21は柱穴dから出土した。

B：瓦製品 (Fig.22)

瓦玉 (1) 平瓦の破損したものの側面を研磨し平面形状を円形にしたもので、径2.7cm、高さ1.8cmを測る。柱列Eの柱穴bから出土した。

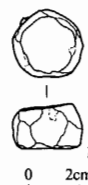


Fig.22 柱列E出土
瓦玉実測図 (1/3)

[2] 井戸出土遺物

A：土器・陶磁器

50SE080上層出土土器 (Fig.23、CD-1025～1036)

土師器

小皿a (1～5) 口径8.8～9.8cm、器高1.0～1.5cm、底径6.9～7.5cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (6・7) 口径14.6・15.4cm、器高2.9・3.0cm、底径9.1・10.2cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

瓦器

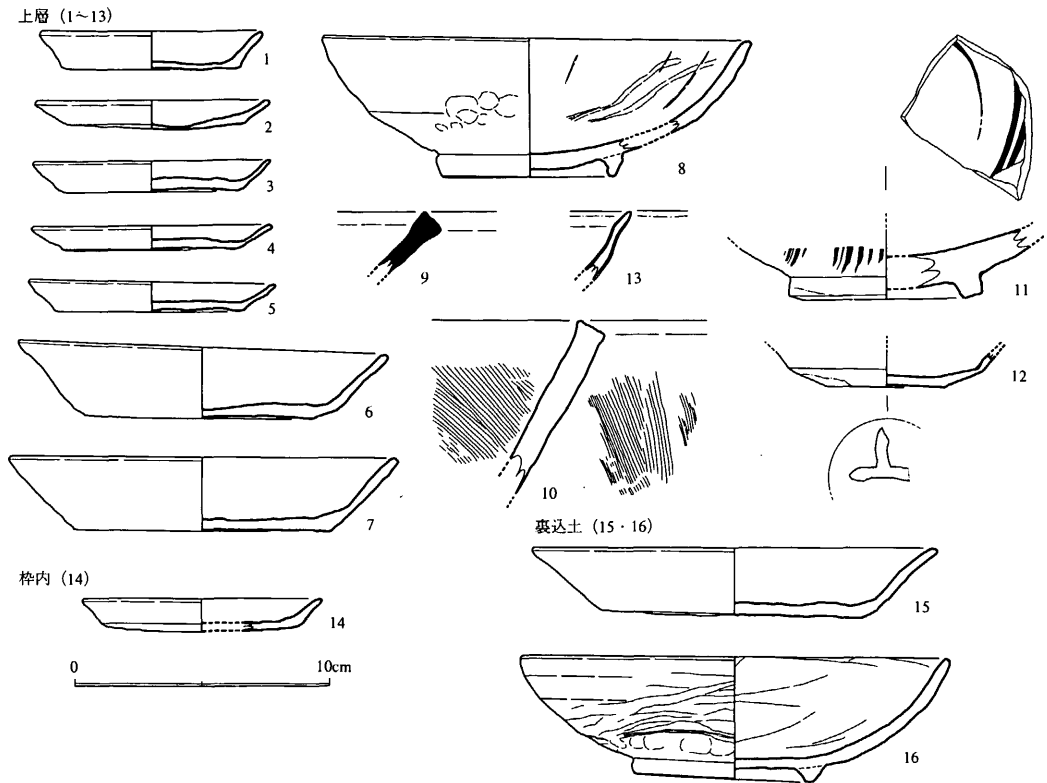


Fig.23 50SE080出土土器実測図 (1/3)

碗c (8) 口径17.0cm、器高5.5cm、高台径6.9cmを測る。内面はミガキbの後ミガキc、外面の体部中程に指圧痕が認められる。

須恵質土器

鉢 (9) 硬質に焼成され、暗灰色を呈している。胎土中に白色粒子を若干含んでいる。

土師質土器

鉢 (10) 焼成良好で、明茶色を呈している。外面は細かな縦方向のハケ目、内面は斜め方向のハケ目であるが、ハケの原体は異なる。口縁部付近はヨコナデ。胎土中に白色砂粒を若干含んでいる。

同安窯系青磁

碗 (11) 高台径7.7cmを測る大型の碗である。釉は内外面ともに暗黄茶色に発色する透明感のあるもので、細かな貫入が認められ、高台畳付け以下には施されない。外面には縦方向の櫛描き文、内面にはべラによる文様が施される。畳付け外周の一部に目跡とみられる白色の付着物がある。胎土は小さな気泡が目立ち粗い。

皿 (12) 底径4.6cmで、外面底部には施釉されない。釉は透明感のある淡緑灰色で光沢がある。露胎部分に「十」の墨書がある。I-1-a類。

黒釉陶器

椀 (13) 明茶色に発色する釉は鈍い光沢を放ち、厚めにつけられる。胎土は暗灰色で黒色、白色の砂粒を含み、小さな気泡が見える。

50SE080 椀内出土土器 (Fig.23)

土師器

小皿a (14) 口径9.5cm、器高1.3cm、底径8.0cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。断面部分を含めて黒灰色を呈している。

50SE080 裏込土出土土器 (Fig.23、CD-1037~1039)

土師器

坏a (15) 口径16.0cm、器高2.7cm、底径10.2cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

瓦器

椀c (16) 口径17.0cm、器高4.7cm、高台径7.1cmを測る。内面はミガキb、外面は体部中程に指圧痕があり、最終調整は粗いミガキcである。また体部外面中程に粘土紐接合痕とみられる痕跡がある。いぶし不良により淡黄灰色を呈する。

50SE120 上層出土土器 (Fig.24、CD-1040~1045)

土師器

小皿a (1・2) 1は口径8.0cm、器高1.6cm、底径5.2cmを測り、底部は糸切りされる。2は口径9.0cm、器高0.9cm、底径7.6cmを測り、底部はヘラ切りされる。

須恵器

壺 (3) やや外方に踏ん張った形状の高台径は10.1cm。内面には漆がほぼ全面に付着している。遺物の示す時期はこの遺構よりかなり古いため、混入品と判断される。

須恵質土器

片口鉢 (4) 暗灰色で硬質に焼成される。片口部分がわずかに残存している。東播系。

白磁

椀 (5) 見込みの釉を輪状に掻き取るもので、その部分の外周に沿って乳白色で帯状の目跡が付着し、さらに明乳白色の付着物が巡る。同様の付着物は高台畳付け部分にも認められる。内面には櫛描き文がある。釉はやや緑味を帯びた暗白色に発色し、光沢がある。VIII-2もしくは3類。

50SE120 埋土出土土器 (Fig.24、CD-1046・1047)

土師器

小皿a (6・7) 口径9.6・9.8cm、器高1.1・1.4cm、底径7.1・6.8cmを測り、底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

壺 (8) 口縁端部径11.4cm、口径9.9cmを測る。口縁端部は折り曲げによって成形される。

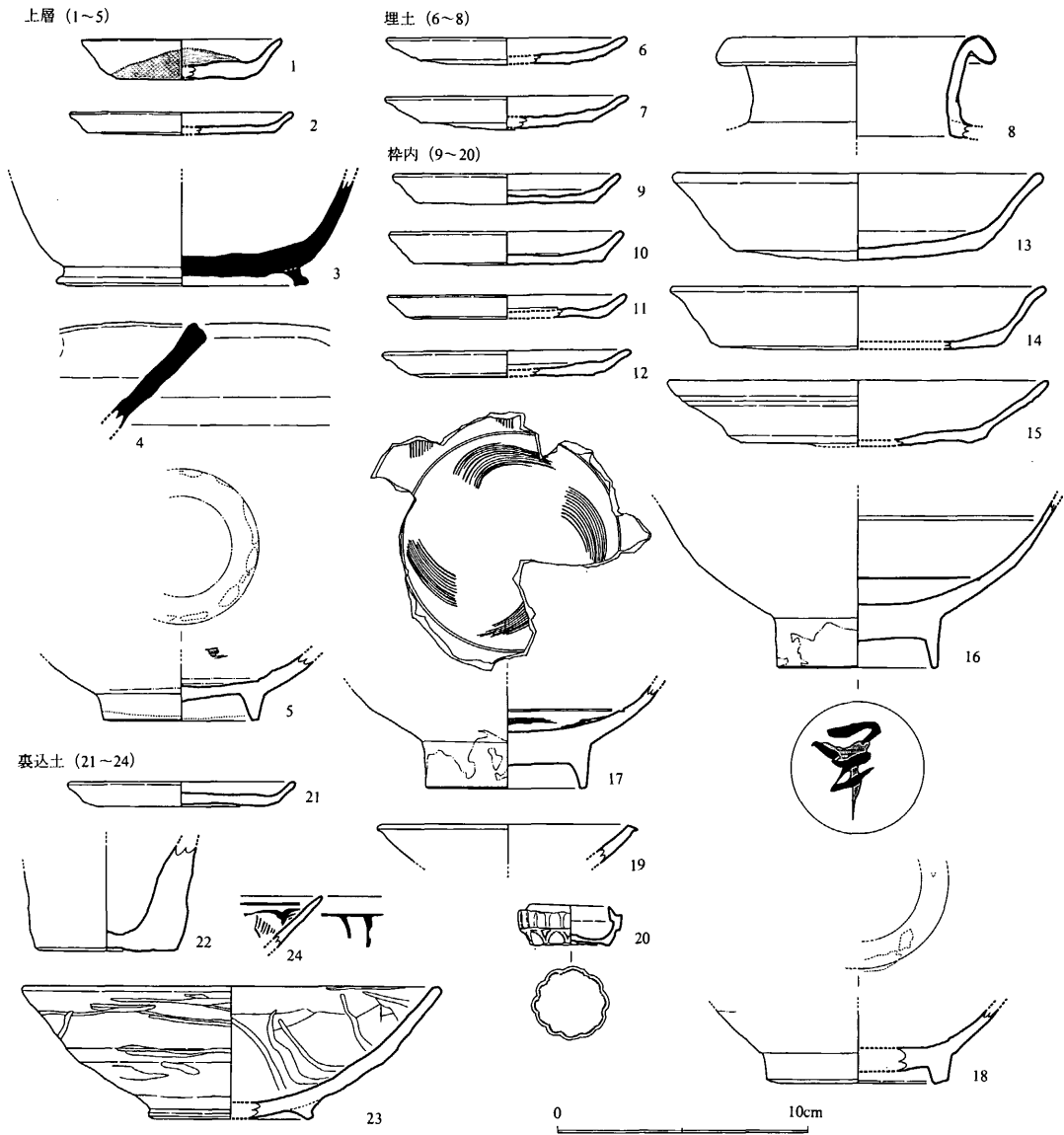


Fig.24 50SE120出土土器実測図 (1/3)

釉は明緑灰色に発色する透明感のあるもので、口縁端部付近は厚めにかかる。III類。

50SE120枡内出土土器 (Fig.24、CD-1048~1058)

土師器

小皿a (9~12) 口径9.2~10.0cm、器高1.0~1.3cm、底径7.0~8.0cmを測る。底部は9~11が糸切り、12はヘラ切りで、いずれも板状圧痕が残る。

坏a (13~15) 口径14.8~15.2cm、器高2.5~3.5cm、底径9.6~11.0cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

椀 (16~18) 16は高台径6.4cm。内面の口縁部下位と見込み周囲に沈線が巡る。釉は明緑

灰色に発色し、光沢がある。底部外面に墨書がある。V類。17は内面に櫛による施文がある。釉は濁白色に発色し、光沢があるが気泡が目立ち、細かな貫入が観察される。高台付近の露胎部分は黒色に変色している。高台径6.4cmで、V類。18は見込みの釉を輪状に掻き取るもので、その部分の外周に沿って乳白色で帯状の目跡が付着し、さらに露胎部分は暗褐色に変色している。外面の露胎部分は煤が付着したように黒色に変色している。釉はやや緑味を帯びた暗白色に発色し、光沢がある。VIII-2もしくは3類。

皿 (19) 口径10.0cm。釉は黄白色に発色し光沢があるが、全面に貫入が観察される。IV-2類。

青白磁

合子 (20) 身部分の完形品。型作りによるもので、内面と外面の体部に施釉される釉は、明青白色で光沢がある。底部は11弁の花弁状を呈し、体部では同数の蓮弁となる。受け部には施釉されない。

50SE120裏込土出土土器 (Fig.24、CD-1059~1065)

土師器

小皿a (21) 口径9.2cm、器高1.0cm、底径6.6cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

小壺 (22) 底径5.7cmを測るもので、底部はヘラ切りされている。体部は内外面ともにヨコナデである。軟質で、明白茶色を呈する。

瓦器

碗c (23) 口径16.8cm、器高5.3cm、高台径6.5cmを測る。底部は糸切りされた後押し出され、高台が貼り付けられる。内面はミガキbの後ミガキc、外面はヨコナデの後ミガキcを施す。

青白磁

碗 (24) 外面にはヘラによる施文、内面にはヘラと櫛による施文がある。釉は淡青白色に発色し、光沢がある。外面には貫入が見られる。

50SE140埋土出土土器 (Fig.25、CD-1066~1071)

土師器

小皿a (1) 口径8.4cm、器高0.8cm、底径7.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (2・3) 口径15.5・16.6cm、器高2.6・2.7cm、底径12.6・12.0cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

瓦器

碗c (4) 口径17.0cm。内面はヨコナデの後ミガキbを行い、さらに粗いながらミガキcを施す。外面はヨコナデの後きわめて粗雑なミガキcを施す。

白磁

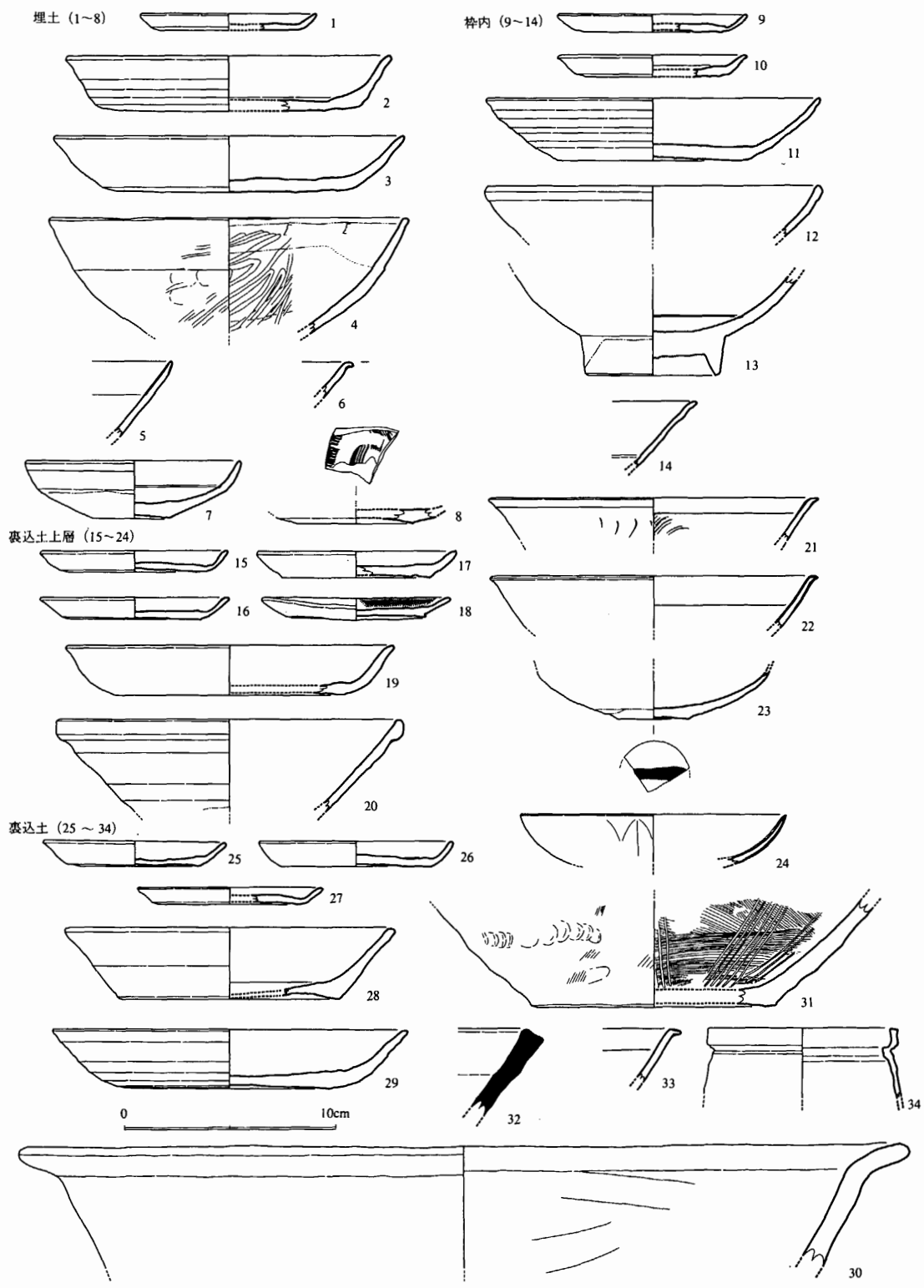


Fig.25 50SE140出土土器実測図 (1/3)

椀（5・6） 5は体部の上位に沈線がある。V-1類もしくはVIII-3類。6は口縁端部を外方へ小さく折り曲げるもので、V-3類。

皿（7） 口径10.2cm、器高2.8cm、底径3.6cm。釉は淡灰緑色に発色し、やや鈍い光沢がある。体部中程以下には施釉されず、その一部分には炭化物の付着がみられる。VIII-1-a類。

同安窯系青磁

皿（8） 底径5.5cmで、見込みに櫛による施文がある。釉は残存資料の範囲内では内面に施され、淡青色に発色する。外面は露胎で回転ヘラケズリされ、暗褐色を呈している。I-1-b類。

50SE140枳内出土土器（Fig.25、CD-1072～1075）

土師器

小皿a（9・10） 9は口径9.0cm、器高0.8cm、底径7.2cmで、底部は糸切りされる。10は口径9.0cm、器高1.0cm、底径7.2cmで、底部はヘラ切りされる。

坏a（11） 口径15.8cm、器高3.0cm、底径9.0cmで、底部は糸切りされる。豊前系か。

白磁

椀（12・13） 12は口径15.6cmで、口縁部を小さな玉縁に作る。釉は淡黄白色に発色し、光沢がある。II-1類もしくは2類。13は高台径6.3cmで、見込みに沈線状の段がある。釉は淡白緑灰色に発色し、光沢がある。V類。

緑釉陶器

椀（14） 口縁部をつまみ出すように外反させるもので、残存部の全面に施釉される。釉は淡緑色に発色し、きわめて薄くかかる。胎土は暗灰色で細かく、白色微粒子を若干含んでいる。須恵質に焼成され、硬質である。洛西産。

50SE140裏込土上層出土土器（Fig.25、CD-1076～1079）

土師器

小皿a（15～18） 口径8.9～9.4cm、器高1.0～1.3cm、底径6.6～7.2cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。18の口縁部には煤が付着している。

坏a（19） 口径15.6cm、器高2.4cm、底径10.9cmを測る。底部は糸切りとみられ、板状圧痕が観察される。

白磁

椀（20～22） 20は口径16.4cmで、IV類。21は口径15.6cmで、外面には細いヘラによる施文、内面には櫛状の施文がある。V-2-c類。22は口径15.6cmで、体部内面上位に沈線が巡る。V-4類。

皿（23） 底径3.3cm。釉は明白緑色に発色するが、内面の大半で粒状に白濁している。外面体部下半は露胎で、底部には「一」とみられる墨書がある。VI-1-a類。

龍泉窯系青磁

坏（24） 口径12.6cm。釉が厚く不明瞭ながら外面にはヘラによる蓮弁文が施される。釉は不透明な淡緑色に発色するが光沢はある。III-5-b類。なお本資料は調査中の混入品と考えられ

る。

50SE140裏込土出土土器 (Fig.25、CD-1080～1087)

土師器

小皿a (25～27) 25は口径8.7cm、器高1.2cm、底径6.3cmで、底部はヘラ切りされる。26・27は口径9.2・8.8cm、器高1.2・0.8cm、底径7.1・6.5cmを測り、底部は糸切りされる。

坏a (28・29) 口径15.6・16.8cm、器高3.4・2.8cm、底径10.3・9.9cmを測り、底部は糸切りされる。

土師質土器

鍋 (30) 口径42.0cmに復原される。口縁部はヨコナデ、体部外面は縦方向のナデ、体部内面は工具を用いたナデとみられる。外面の全面に煤が付着している。

瓦質土器

播り鉢 (31) 底径11.6cmを測る。体部外面は指圧によって成形され、部分的にハケ目が見える。底部近くではヨコナデされる。内面は横及び斜め方向のハケ目で調整した後、6本一単位とする櫛で播り目をつける。底部はナデである。やや軟質に焼成される。混入品か。

須恵質土器

鉢 (32) 暗灰色で硬質に焼成される。胎土は1～2mmの砂粒を多く含み粗めである。

白磁

椀 (33) 口縁端部を外方につまむように折り曲げるもので、体部内面上位に沈線が巡る。V-4類もしくはVIII類。

陶器

水注 (34) 小片であるが、複合口縁状を呈するもので、口径8.9cmを測る水注と判断される。無釉で表面は青灰色、暗褐色を呈し、胎土は青灰色を呈し、白色及び赤茶色の砂粒を多く含むものである。X類。

50SE150上層出土土器 (Fig.26、CD-1088～1097)

土師器

小皿a (1～6) 口径9.0～9.8cm、器高1.0～1.5、底径6.4～8.2cmを測る。底部はヘラ切りされる。

白磁

椀 (7・8) 7は口径15.7cm、器高5.8cm、高台径7.0cmで、見込みに沈線があるが一周しない。IV-1-a類。8は高台径6.5cmで、見込みに沈線状の小さな段がある。V類。

皿 (10・11) 10は口径9.4cmで、見込みの釉を掻き取っている。外面下半部にも施釉されない。III-1類。11は底径4.7cmで、見込みに小さな段があり、外面底部には施釉されない。釉は透明感があり、黄色味を帯びた明白緑色に発色する。V類。

同安窰系青磁

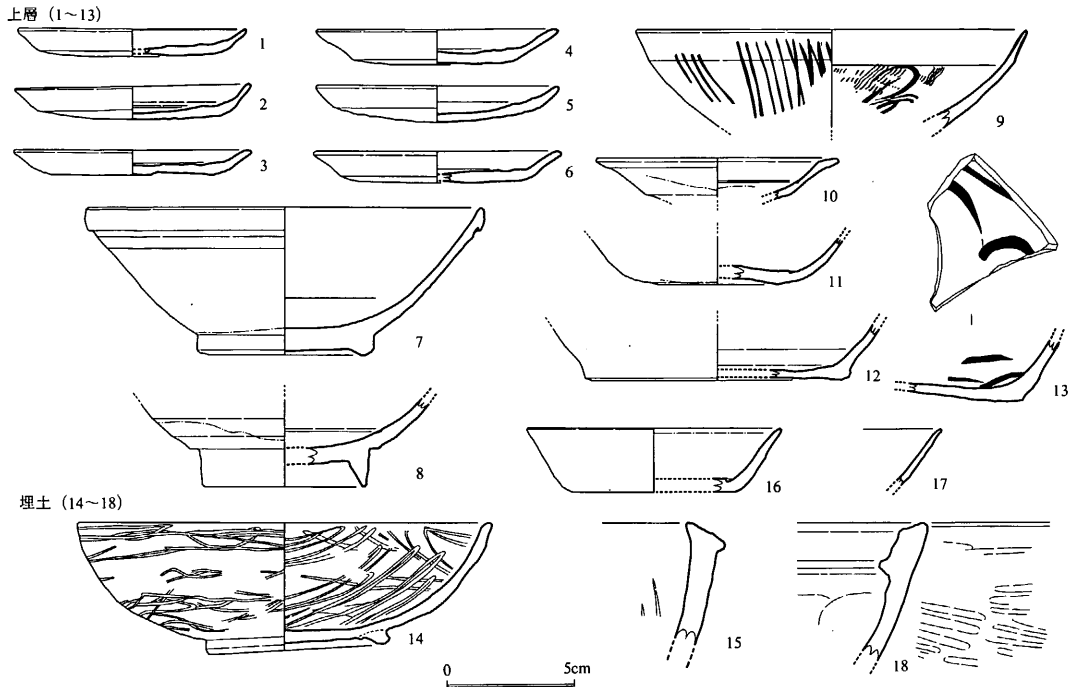


Fig.26 50SE150出土土器実測図1 (1/3)

碗 (9) 口径15.4cm。外面には粗い縦方向の櫛目、内面はヘラと櫛による施文がある。釉は明緑灰色に発色し透明度は鈍く、細かな貫入が全面にみられる。I-1-c類。

陶器

鉢 (12) 底径10.4cmで、内面に施釉される。釉は緑茶色に発色するが白濁する部分も多く、斑が目立つ。外面は露胎で明灰色を呈し、胎土中にはやや大粒の黒褐色粒子を含んでいる。

盤 (13) 内面に施釉され、鉄絵がある。釉は淡緑茶色に発色し、鉄絵は明茶色を呈しているが、薄くかかるため胎土の凹凸が反映されて白色斑が点在しているように見える。外面は無釉で明灰茶色を呈し、胎土は明灰色で白色及び黒褐色の粒子を多量に含んでいる。b類。

50SE150埋土出土土器 (Fig.26、CD-1098~1104)

瓦器

碗c (14) 口径16.4cm、器高5.1cm、高台径7.3cmを測る。内面はヨコナデの後ミガキbが施され、さらに粗いながらミガキcを施す。外面はヨコナデの後ミガキcであり、いぶしによって銀化している。

白磁

皿 (16) 口径10.0cm、器高2.7cm、底径6.4cmで、口縁端部の釉を拭き取る他は全面に施釉される。IX-1-b類。

青白磁

碗 (17) 明白色に発色する釉は、薄くかかり透明感がある。

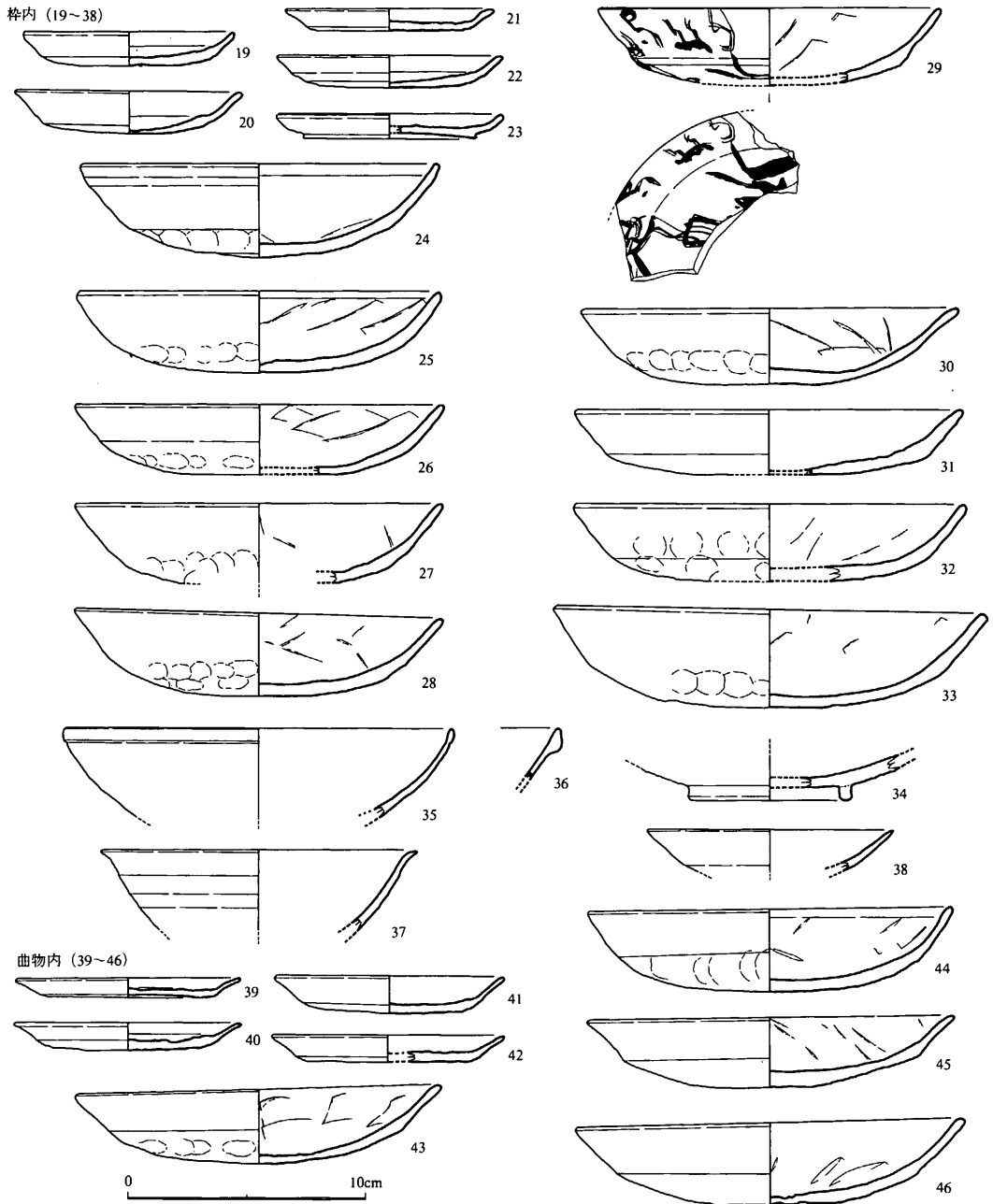


Fig.27 50SE150出土土器実測図2 (1/3)

陶器

鉢 (15・18) 15はやや内傾する口縁部を有すると思われる。残存部はすべてヨコナデで調整され、暗茶色を呈する。胎土は灰色及び灰褐色で、黒褐色粒及び白色微粒子を含んでいる。内面に播り目と思われる縦方向の櫛目の痕跡がある。国産か。18は中国産でI-1-a類。外面は叩きの後ナデとみられ、内面は当て具痕が観察される。口縁部付近はヨコナデである。胎土は暗褐色で白色砂粒が多量に含まれている。

50SE150粹内出土土器 (Fig.27、CD-1105～1122)

土師器

小皿a (19～23) 19～22は口径9.0～9.6cm、器高1.0～1.9cm、底径6.8～7.4cmで、底部はヘラ切りされる。23は口径9.6cm、器高1.1cm、底径7.3cmで、底部はヘラ切りされる。

丸底坏a (24～33) 口径15.1～18.4cm、器高3.0～4.1cmで、底部はヘラ切り後押し出され、内面はミガキbが施される。29の内面は油煙が付着したように黒く変色しており、外面には筆下ろしを行ったかのような意味不明の墨書がある。

瓦器

碗c (34) 高台径7.0cm。内外面ともにミガキcが施され、外面では銀化している。

白磁

碗 (35～37) 35は口径16.5cm。釉は明灰緑色気味に発色し、一部点状に白濁する部分がある。II-1類もしくは2類。36はIV類。37は口径13.4cmに復原され、やや小型である。V-2類。

皿 (38) 口径10.4cm。灰色味を帯びた光沢のある釉で、厚くかかる部分には貫入が認められる。VI-1-b類。

50SE150曲物内出土土器 (Fig.27、CD-1123～1128)

土師器

小皿a (39～42) 口径9.5～9.8cm、器高0.8～1.6cm、底径7.2～7.8cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底坏a (43～46) 口径15.4～16.4cm、器高3.0～3.5cmを測る。底部はすべてヘラ切りされた後押し出される。内面はミガキbで調整される。

50SE245出土土器 (Fig.28、CD-1129～1144)

土師器

小皿a (1～4) 口径9.4～10.1cm、器高1.1～1.4cm、底径7.2～7.8cmを測る。底部はすべてヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

小皿a2 (5・6) 口径10.0・10.8cm、器高1.0cm、底径7.5・8.5cmを測る。いずれも底部はヘラ切りされる。6の口縁部は上方に軽くつまみ出される。

大碗 (7) 高台のみの破片で別の器種になる可能性もある。高台径11.7cm。

丸底坏a (8) 口径13.4cm、器高3.2cmを測る。内面はミガキbが施される。

碗c (9) 高台径6.3cm。風化により調整は不明。

器台 (10) 脚部の資料で径3.6～3.9cm、脚部の長さ約12.5cmを測る。中央に径1.0cmの穿孔がある。脚本体は棒に粘土を巻き付け、回転させながら掌で握り締めて成形したようで、指圧の痕跡が随所にみられる。

鉢 (11) 口径27.2cm。口縁端部を上方に小さくつまみ出す。体部の調整はヨコナデである。

黒色土器

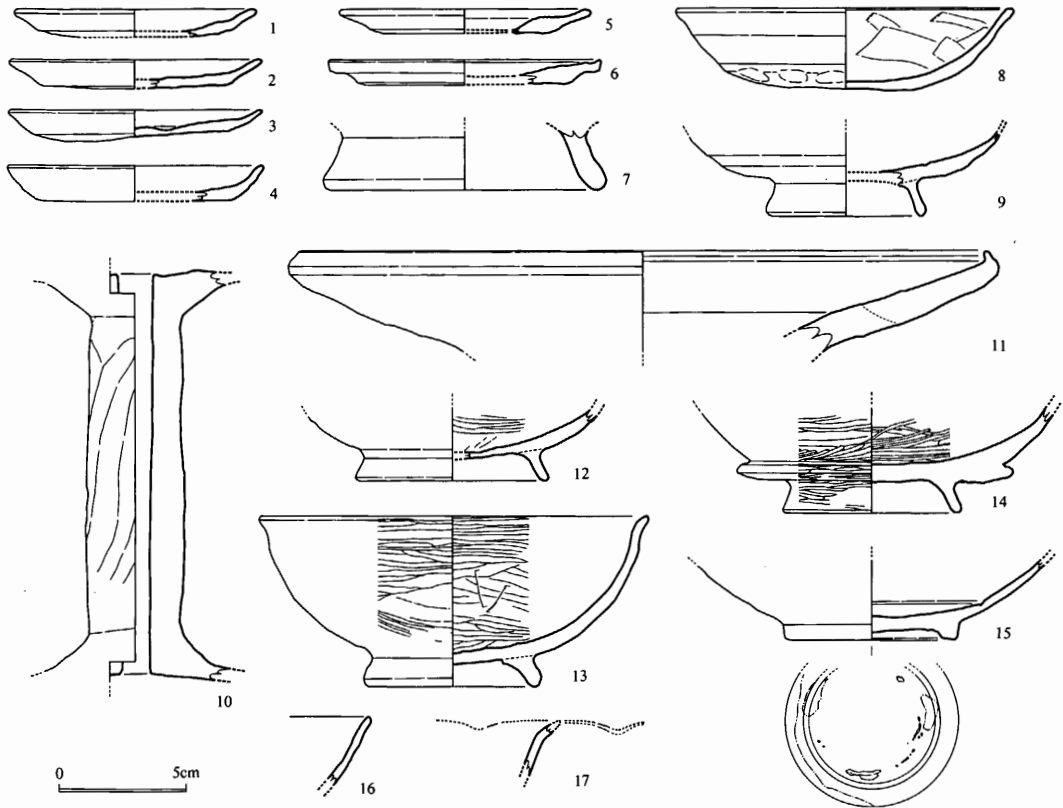


Fig.28 50SE245出土土器実測図 (1/3)

碗c (12・13) 12は高台径7.7cm。内面はミガキcの後燻される。A類。13は口径15.4cm、器高6.8cm、高台径7.0cmを測る。外面底部を除いてミガキcが緻密に施されるが、内面はその前段階にミガキbを施している。内外面ともに燻され、黒灰色を呈している。B類。

托付碗 (14) 高台径7.0cm、托部径10.8cm。内外面ともに細かなミガキcを施すが、内面のみ燻す。A類。

白磁

碗 (15) 低く削り出された高台の径は6.7cmを測り、畳付け以下には施釉されない。釉はわずかに青味を帯びた透明なもので、光沢がある。高台内側に径4.3cmほどの変色部分があり、その周囲に白濁色、黒灰色の目跡が付着する。XI類。

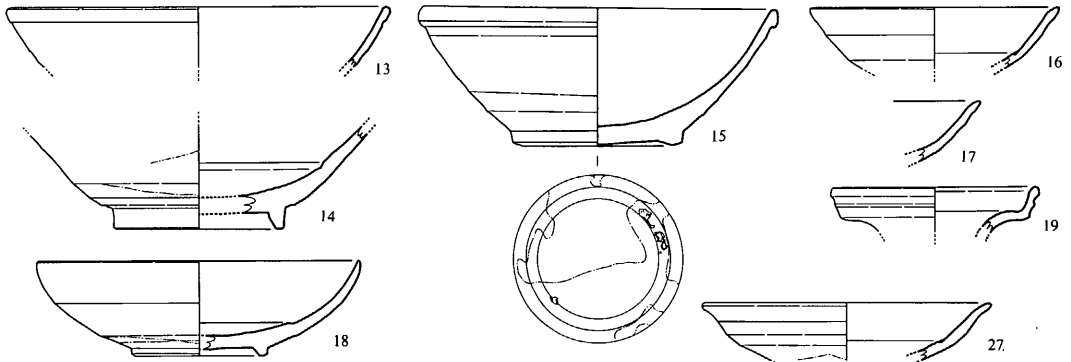
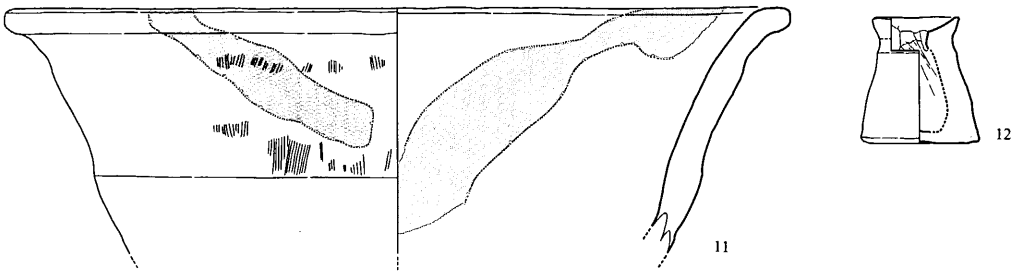
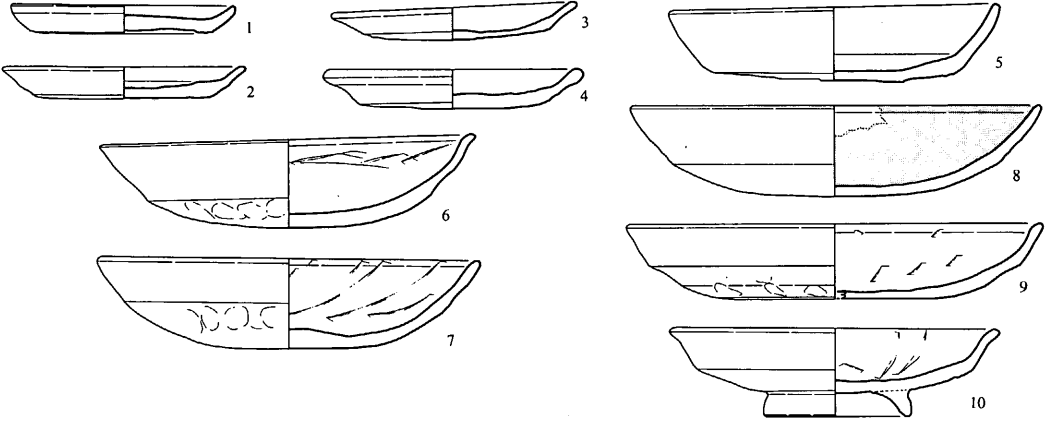
越州窯系青磁

碗 (16・17) 16は淡茶灰色に発色する釉で、胎土は明茶灰色を呈し肌理は細かい。I類もしくはIII類とみられる。17は口縁部を花卉状に作るものとみられ、釉は淡灰緑色に発色し、鈍い光沢がある。胎土は暗灰色で黒褐色の粒子を多量に含んでいる。皿あるいは坏の可能性もある。II類。

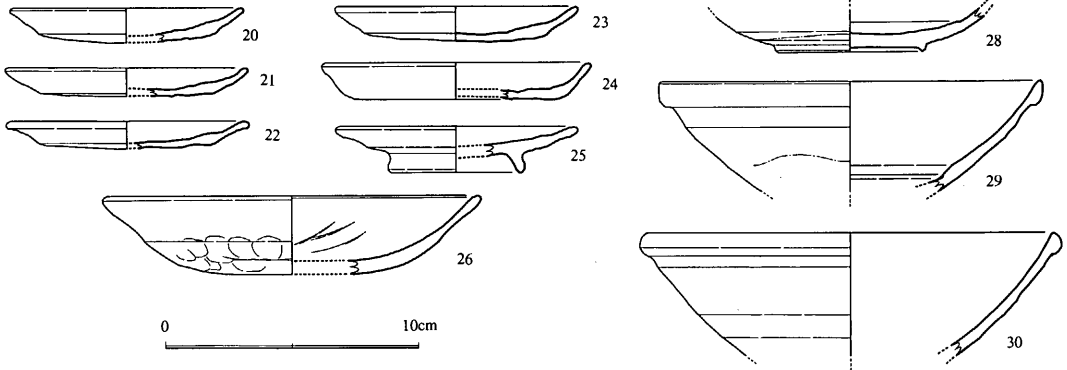
50SE250埋土出土土器 (Fig.29、CD-1145~1168)

土師器

埋土 (1~19)



表込土 (20~30)



0 10cm

Fig.29 50SE250出土土器実測図 (1/3)

小皿a (1~4) 1は口径8.9cm、器高1.2cm、底径6.9cmを測り、底部は糸切りされる。2~4は口径9.6~10.3cm、器高1.3cm、底径7.2~7.6cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

中環a (5) 口径13.1cm、器高2.9cm、底径9.5cmを測る。底部は糸切りされる。

丸底坏a (6~9) 口径14.9~16.4cm、器高3.0~3.6cmを測る。内面はミガキbで調整される。8の内面は炭化物の付着で黒く変色する部分がある。

中丸底坏c (10) 口径13.0cm、器高3.9cm、高台径5.6cmを測る。内面はミガキbで調整される。

鉢 (11) 口径31.0cm。体部は粗いヨコナデを施すが、外面の一部にはわずかに縦方向のハケ目状の調整がみられる。内外両面の一部に炭化物の付着で黒く変色する部分がある。

小壺 (12) 口径3.4cm、器高5.0cm、底径4.7cmを測るもので、体部はヨコナデで仕上げられる。底部にはわずかに板状圧痕が見える。

白磁

椀 (13~15) 13は口径15.2cmのII類。14は高台径6.8cmで見込みに緩い段がある。釉は外面下半にはかからず、化粧土も同様であるが釉よりも広い範囲にかかっている。釉は明灰緑色に発色し光沢があるが、細かな貫入が認められる。II-3類もしくは4類。15は口径13.9cm、器高5.5cm、高台径6.7cmを測る。釉は薄い緑味を帯びた透明なもので、高台外面までかかる。高台の内側には暗黄茶色の目跡が付着している。見込みに段はない。IV-1-a類。

皿 (16~18) 16は口径9.8cm。見込みに小さな段がある。II-1-a類。17は青味を帯びた透明感のある釉で、光沢がある。VII類。18は口径12.8cm、器高3.7cm、高台径5.4cmを測る。釉はやや青味を帯びた透明感のあるもので、高台周辺部を除いて全面にかかる。施釉前にはほぼ釉と同じ範囲に化粧土をかける。胎土は暗白色で、小さな気泡が多く認められる。VII類。

高麗青磁

瓶 (19) 複合口縁状を呈し、口径8.1cmを測る。暗緑茶色に発色する釉は透明感があり、光沢もある。胎土は暗褐灰色で、白色粒子を多く含んでいる。

50SE250裏込土出土土器 (Fig.29、CD-1169~1176)

土師器

小皿a (20~24) 口径9.2~10.6cm、器高1.0~1.5cm、底径6.8~8.0cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

小皿c (25) 口径9.6cm、器高1.8cm、高台径5.4cmを測る。

丸底坏a (26) 口径15.0cm、器高3.1cm。外面には底部押し出しに伴う指圧が明瞭に残り、内面はミガキbが施される。

白磁

椀 (29・30) 口径15.1・16.0cm。29は見込みに緩い段を設けており、IV-b類。30も底部が不明で大分類のみに留まる。IV類。

皿 (27・28) 27は口径11.4cmで、見込みに小さな段がある。II-1-a類。28は小さく削り出された高台の径は5.9cmで、見込みに小さな段がある。釉は淡白緑色に発色し鈍い光沢があり、細かな貫入が認められる。釉は高台外面までかかるが、化粧土はそれよりやや狭い範囲にかかる。VII-2-a類。

50SE270埋土上層出土土器 (Fig.30、CD-1177～1192)

土師器

小皿a (1～7) 口径8.4～9.6cm、器高0.9～1.5cm、底径6.1～7.9cmを測る。底部はすべて糸切りされる。

坏a (9～11) 口径15.2～15.6cm、器高2.5～2.9cm、底径10.6～10.9cmを測る。底部はすべて糸切りされる。

瓦器

椀c (12) 口径15.6cm、器高5.5cm、底径6.8cmを測る。内面はヨコナデの後ミガキb、外面はヨコナデで終わる。ミガキcが両面とも観察されない。

小皿a (8) 口径9.0cm、器高1.1cm、底径7.6cm。底部には指圧痕が認められる。

土師質土器

鍋 (13・14) 13の外面は黒灰色を呈し、胎土中に砂粒が多量に含まれている。内外面ともにナデで仕上げられるが、口縁部付近はヨコナデである。14は外面の口縁部と体部の境目に指圧痕が残るもので、他の部位はヨコナデである。

須恵質土器

片口鉢 (15) 軟質に焼成され、口縁部外面と内面は暗灰色を呈している。東播系か。

龍泉窯系青磁

椀 (16) 高台径6.0cm。釉は淡緑色に発色し光沢がある。内面にヘラの片切彫りによる施文がある。高台の外面内側には径3.1cmの変色部分があり、その周囲には黄茶色の目跡が付着している。I-2-a類。

坏 (17) 口径13.0cm。釉は厚めにかかり、明緑白色に発色し光沢がある。胎土は明灰色であるが、釉との境目は暗白色を呈している。III-1類。本資料は調査中の混入品として捉えたい。

青磁

椀 (a) 見込み部分に段があり、外面には縦方向の櫛目、内面は櫛による施文がある。釉は淡緑色で透明感があり、光沢がある。龍泉窯系もしくは同安窯系青磁椀0類。

陶器

鉢 (18) 口径21.8cm。釉は外面では暗茶色に発色し、内面では白濁している。いずれも光沢はない。胎土は明茶色を呈し細かなもので、白色粒及び褐色粒を若干含んでいる。

50SE270埋土中層出土土器 (Fig.30、CD-1193～1198)

土師器

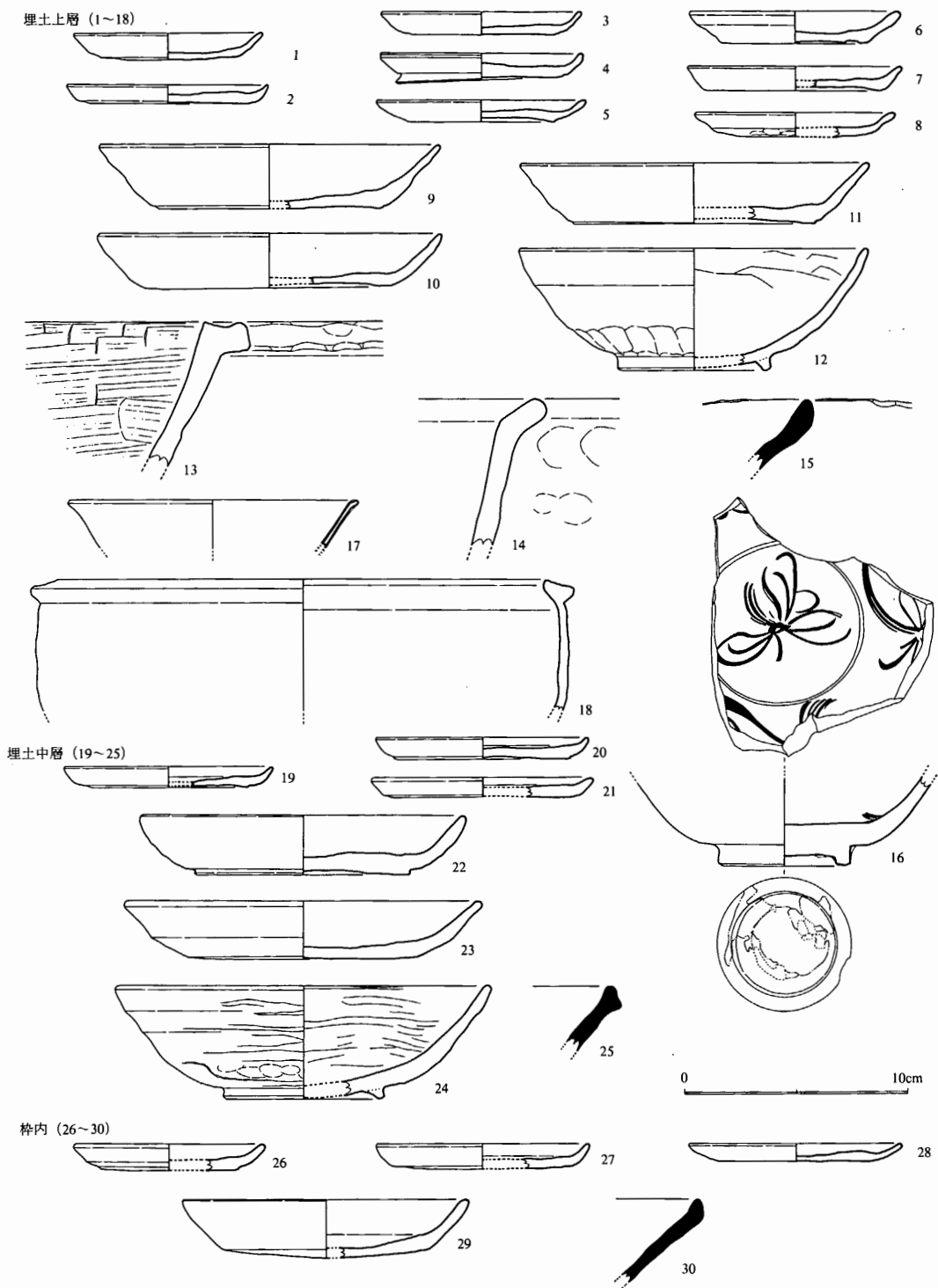


Fig.30 50SE270出土土器実測図 (1/3)

小皿a (19~21) 口径9.4~10.0cm、器高0.9~1.0cm、底径7.1~8.9cmを測る。底部はすべて糸切りされる。

坏a (22・23) 口径14.5・16.0cm、器高2.7・2.5cm、底径9.6・10.3cmを測る。両者とも底部は糸切りされる。

瓦器

碗c (24) 口径16.8cm、器高5.1cm、高台径7.2cm。内外面ともに粗いミガキcが施される。

須恵質土器

鉢 (25) 口縁部付近は暗灰色、他は淡灰色を呈し、硬質に焼成される。東播系。

50SE270枠内出土土器 (Fig.30、CD-1199・1200)

土師器

小皿a (26~28) 口径8.6~9.6cm、器高0.8~1.2cm、底径6.2~7.9cm。底部は糸切りされる。

坏a (29) 口径12.8cm、器高2.6cm、底径9.2cm。底部は糸切りされる。

須恵質土器

鉢 (30) 口縁部付近は暗灰色、他は明灰色を呈し、硬質に焼成される。東播系。

50SE377最上層出土土器 (Fig.31、CD-1201~1214)

土師器

小皿a (1・2) 口径8.8・9.2cm、器高1.1・0.9cm、底径7.3cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (3・4) 口径13.3・13.8cm、器高3.0・2.5cm、底径9.0・9.6cmを測る。底部は糸切りされる。

土師質土器

鉢 (5) 外面はナデの後一部にミガキcに類似する調整がある。また粘土紐の継ぎ目も観察できる。内面はナデである。

須恵質土器

片口鉢 (6) 口径19.0cm、器高5.2cm、底径7.7cmを測る。底部は糸切りされ、体部はヨコナデ、見込み付近はナデである。暗灰色を呈し、硬質に焼成される。

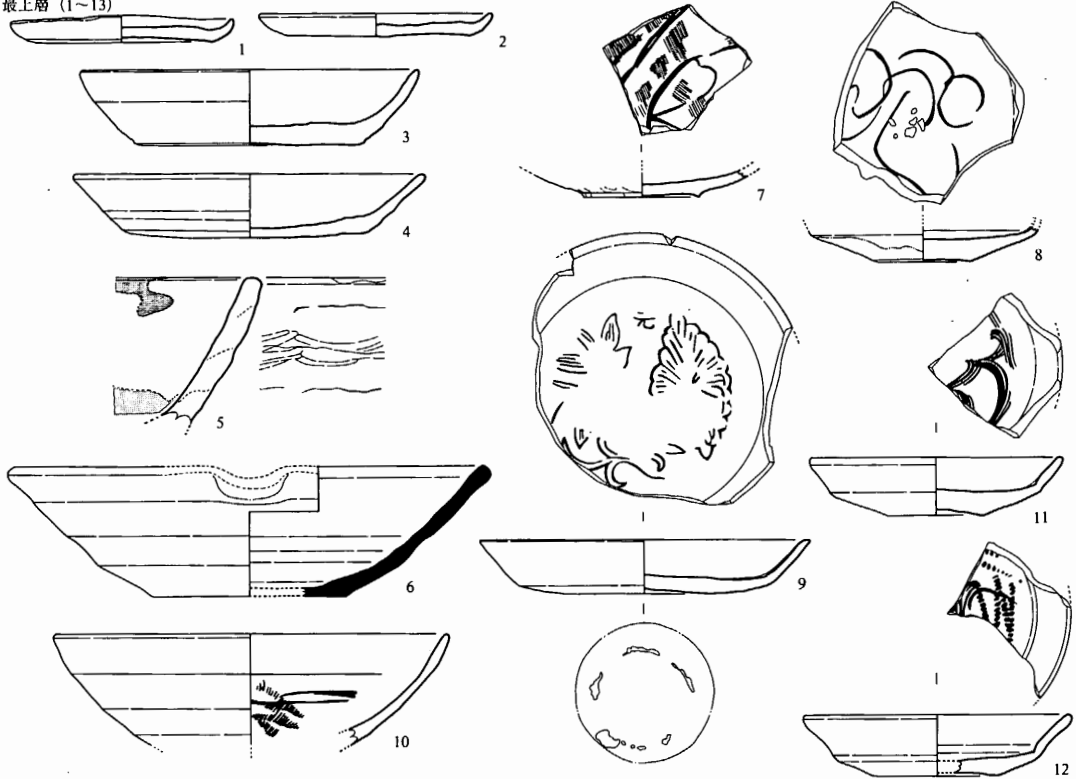
白磁

皿 (7・9) 7は高台径4.5cm。釉はわずかに緑味を帯びた透明度の高いもので、底部外面にはかからない。内面には櫛とヘラによる文様がある。VII-1-c類。9は口径13.0cm、器高2.2cm、底径5.5cmを測る。釉は暗白緑色に発色する透明度の高いもので、やや厚めにかけて貫入が目立つ。外面底部は釉を掻き取り、径3.6cmの変色部分がありその周囲は表面剥離をおこしている。見込みにスタンプによる文様がある。VIII-2-b類。

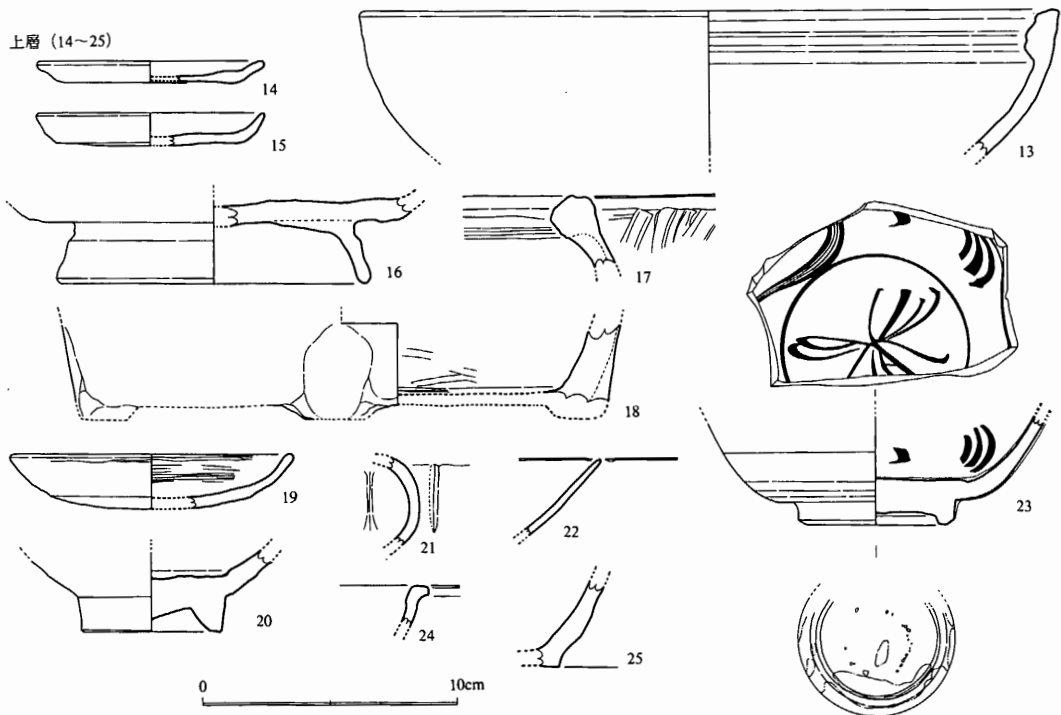
龍泉窯系青磁

皿 (8・11) 8は底径3.6cmで、釉は暗緑色に発色し、外面の体部下位から底部にはかからない。見込みにヘラによる施文がある。I-1-b類。11は口径10.0cm、器高2.3cm、底径4.0cmを測る。釉は淡緑色に発色し、やや厚めにかかるが透明度は高く、貫入が部分的に認められる。見込みに櫛による施文があり、底部外面の釉は掻き取っている。I-2-b類。

最上層 (1~13)



上層 (14~25)



0 10cm

Fig.31 50SE377最上層・上層出土土器実測図 (1/3)

同安窯系青磁

椀 (10) 口径15.6cm。釉は淡緑灰色で透明度が高く、口縁部内面の一部に貫入がみられる。内面にヘラと櫛による施文がある。I-1-a類。

皿 (12) 口径10.6cm、器高2.4cm、底径4.7cmを測る。釉は淡灰緑色に発色し、透明度は低い。見込みにヘラと櫛による施文があり、外面底部の釉は拭き取られている。I-2-b類。

陶器

鉢 (13) 口径27.6cm。無釉で内面は暗茶灰色、外面は灰褐色を呈している。胎土は暗茶灰色で白色及び黄茶色の砂粒を多量に含んでいる。I-1-c類。

50SE377上層出土土器 (Fig.31、CD-1215~1226)

土師器

小皿a (14・15) 口径9.0cm、器高0.9・1.3cm、底径6.8・7.3cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

大坏c (16) 高台径12.3cm。外面に煤状のものが付着している。

土師質土器

鉢 (17・18) 17は内傾する口縁部を有するものと思われる。外面は粗いハケ目、内面はナデとみられる。胎土中に多量の砂粒を含んでいる。18は脚を有するもので、内面はナデの後、ミガキcのような調整がある。

瓦器

小皿a (19) 口径11.2cm、器高2.2cm。底部は糸切りされ、押し出し気味の丸底を呈する。外面はヨコナデ、内面はミガキcとみられる。

白磁

小壺 (21) 胴部の破片で、ヘラ押しによる縦線によって分割される。二次的に火熱を受けているため、表面は淡灰色を呈し小さな気泡で埋まる。当初の釉は透明度の高いものであったと思われる。II類。

同安窯系青磁

椀 (20) 高台径5.6cm。残存部の外面は露胎で明茶白色を呈し、内面は淡黄茶色に発色する透明度の高い釉が施される。

龍泉窯系青磁

椀 (23) 高台径6.1cm。体部内面及び見込みにヘラ及び櫛による施文がある。高台内側は露胎で、径2.8cm前後の変色部分があり、その周囲には砂粒が付着している。I-2類。

青白磁

椀 (22) 釉は明緑青白色に発色し、透明度は高い。

陶器

鉢 (24) 釉は暗茶緑色に発色し、透明度は低く鈍い光沢がある。胎土は明茶色で、白色砂

粒が混在している。他の器種である可能性も残される。

盤(25) 外面は無釉で明灰茶色を呈し、内面は施釉され淡緑白色を呈している。釉は不透明で、鈍い光沢がある。I類とみられる。

50SE377埋土出土土器 (Fig.32、CD-1227~1247)

土師器

小皿a(26~29) 口径8.6~9.4cm、器高0.9~1.3cm、底径6.4~7.3cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a(30・31) 口径14.6・16.6cm、器高3.0・2.6cm、底径9.0・12.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

瓦器

椀c(32) 高台径6.0cm。内外面ともにミガキcで仕上げられる。

土師質土器

鍋(33) 体部外面は縦方向のハケ目、内面は口縁部近くが斜め方向、他は横方向のハケ目で仕上げる。外面に煤が付着している。

須恵質土器

片口鉢(34) 暗灰色、暗灰褐色を呈し、硬質に焼成される。東播系。

瓦質土器

甕(35) 頸部から肩部にかけての資料で、外面には叩き痕が明瞭に残り、内面は横方向のナデである。表面は黒灰色を呈し、胎土は暗灰白色で白色の砂粒を多めに含んでいる。

白磁

椀(36・37) 36は口径15.6cmを測り、見込みに沈線状の段がある。IV類。37は高台径7.4cmを測り、見込みの釉を輪状に掻き取っている。また高台の内外面下位に細かな砂粒が帯状に付着している。VIII-2もしくは3類。

同安窯系青磁

椀(38~40) 38は口径15.8cmで、外面に縦方向の櫛による文様、内面にヘラと櫛による施文がある。緑白色で透明度の高い釉は、体部外面下位にはかからない。I-1-b類。39は高台径4.3cmで、体部外面に縦方向の櫛目による施文がある。釉は黄緑色で透明度の高いもので、体部外面下位にはかからない。高台内側に「陳三」の墨書がある。I-1-b類。40は高台径5.6cm。内外面ともに無文で、外面体部下半を除いて明緑白色に発色する透明な釉をかける。高台内側に墨書がある。II類。

龍泉窯系青磁

椀(41・42) 41は高台径5.9cmで、見込みにヘラによる施文がある。高台内側には明茶灰色の焼台が付着している。I-2~4類。42は高台径6.1cm。見込みに施文はなく、体部にはヘラによる文様が確認できる。I-2~3類。

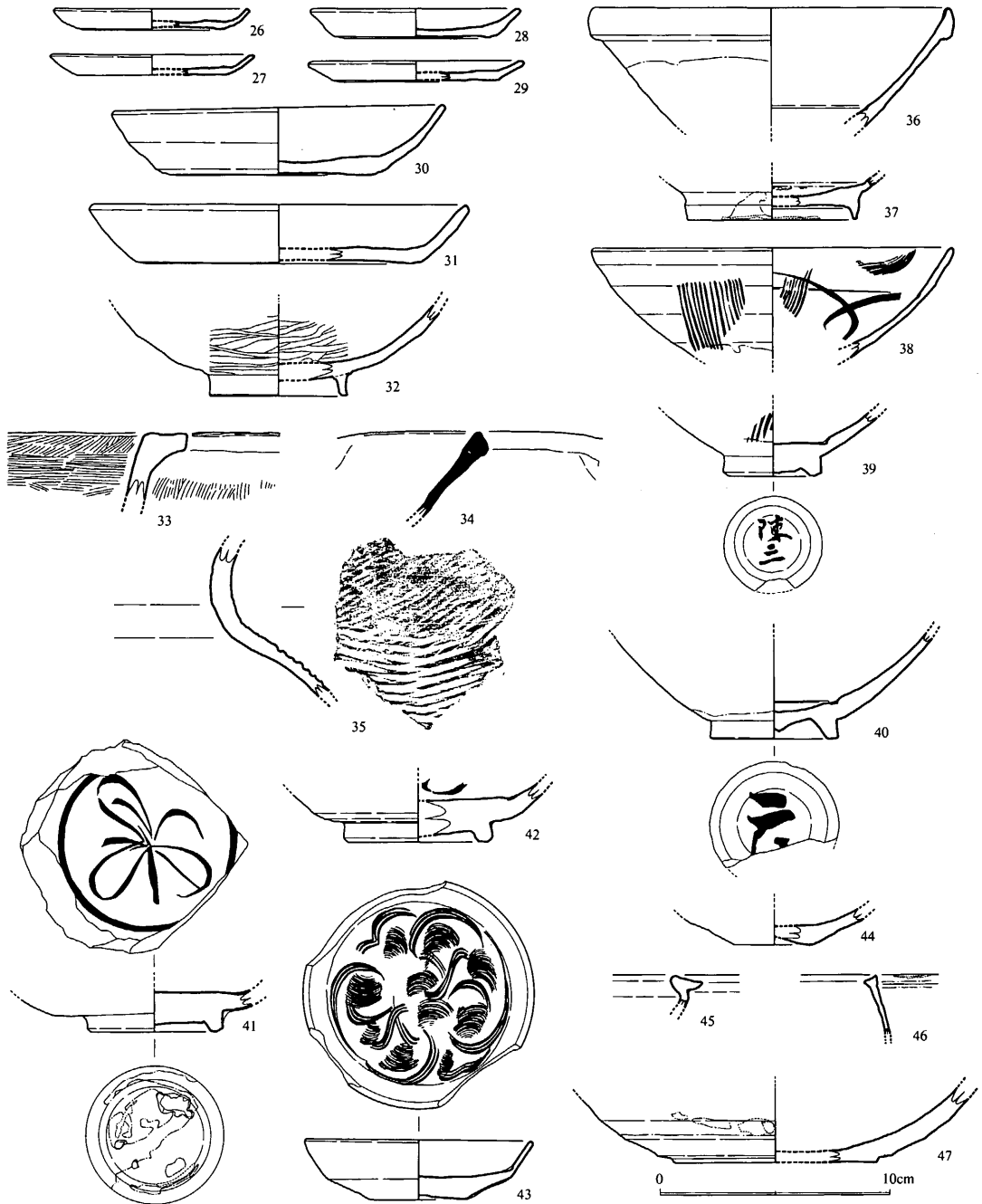


Fig.32 50SE377埋土出土土器実測図 (1/3)

皿 (43) 口径10.0cm、器高2.6cm、底径4.0cm。釉は明緑白色に発色する透明度の高いもので、外面底部にはかからない。見込みにはヘラと櫛による施文がある。I-2-c類。

陶器

小皿 (44) 底径3.4cm。釉は外面で暗褐色、内面で暗緑茶色に発色し、いずれも不透明で鈍い光沢がある。胎土は赤褐色を呈し、褐色及び白色の微粒子を若干含んでいる。

鉢 (45~47) 45は淡緑茶色に発色する釉を施す。VI-1類。46は暗黒褐色の不透明な釉を施すが、口縁の平坦部分のみ拭き取っている。胎土は灰白色で白色、黒色の砂粒を若干含み、きわめて硬質に焼成される。他の器種の可能性もある。47は底径8.8cmで、釉は外面で暗緑黄色、内面で暗褐色に発色し、いずれも不透明で鈍い光沢がある。体部外面下半から底部は施釉されず、暗褐色の生地が露出している。胎土は暗灰色、明茶色等部位によって色調は異なるが、白色の微粒子をかなり多く含んでいる。体部外面に灰白色で帯状の目跡とみられる付着物がある。

50SE380石組内埋土出土土器 (Fig.33・34、CD-1248~1267)

土師器

小皿a (1) 口径8.3cm、器高1.0cm、底径6.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕を残す。

小皿b (2) 底径3.8cmで、底部は糸切りされる。

坏a (3) 口径12.4cm、器高2.5cm、底径7.4cmを測る。底部は糸切りされる。

土師質土器

播り鉢 (5・6) 5は底径14.6cm。外面はナデで仕上げられ、煤状のものが付着している。内面は体部中程以上が斜め方向のナデ、下位で横方向のナデを施し、6本を単位とする櫛で播り目をつける。砂粒を多く含む胎土で、やや軟質に焼成される。6の口縁部はわずかに撥形を呈する。口縁部周辺はヨコナデ、体部内面はハケ目の後5本を単位とする櫛で播り目を付ける。

鍋 (7) 口径37.0cm。口縁部と体部の境目は内面にわずかに稜が付く程度で、直線的な器形である。口縁部付近はヨコナデ、外面は指圧痕が残存し、内面はハケ目である。外面に煤が付着している。

瓦質土器

播り鉢 (9) 片口鉢で、内面に櫛による播り目がわずかに観察される。

火鉢・釜 (8・10~12) 8は口縁端部径33.0cm。体部上位に連続する雷文のスタンプを押捺する。胎土中に砂粒を多く含んでいる。10は直線的に立ち上がる口縁部を有するもので、その外面に斜格子風のスタンプを連続して押捺する。内面はハケ目である。11は体部上位部分と思われる資料で、2条の突帯に挟まれた空間に菊花文を連続して押捺する。内面の下位にハケ目がみられる。12は体部上位部分と思われる資料で、2条の低い突帯に挟まれた空間に2条の対角線を交差させた文様を連続して押捺するため、一見二重斜格子状に見える。

須恵質土器

鉢 (13・14) 13は口縁部外側を玉縁状に作り、端部を内側へわずかにつまみ出す。14は口縁部外側を玉縁状に作るが、その形成は端部を折り曲げて行うもので、内側はその重ね目が溝状になっている。いずれも東播系か。

白磁

坏 (15) 円盤状を呈する高台の径は4.1cmで、外面は型によるものとみられ、粘土を押し

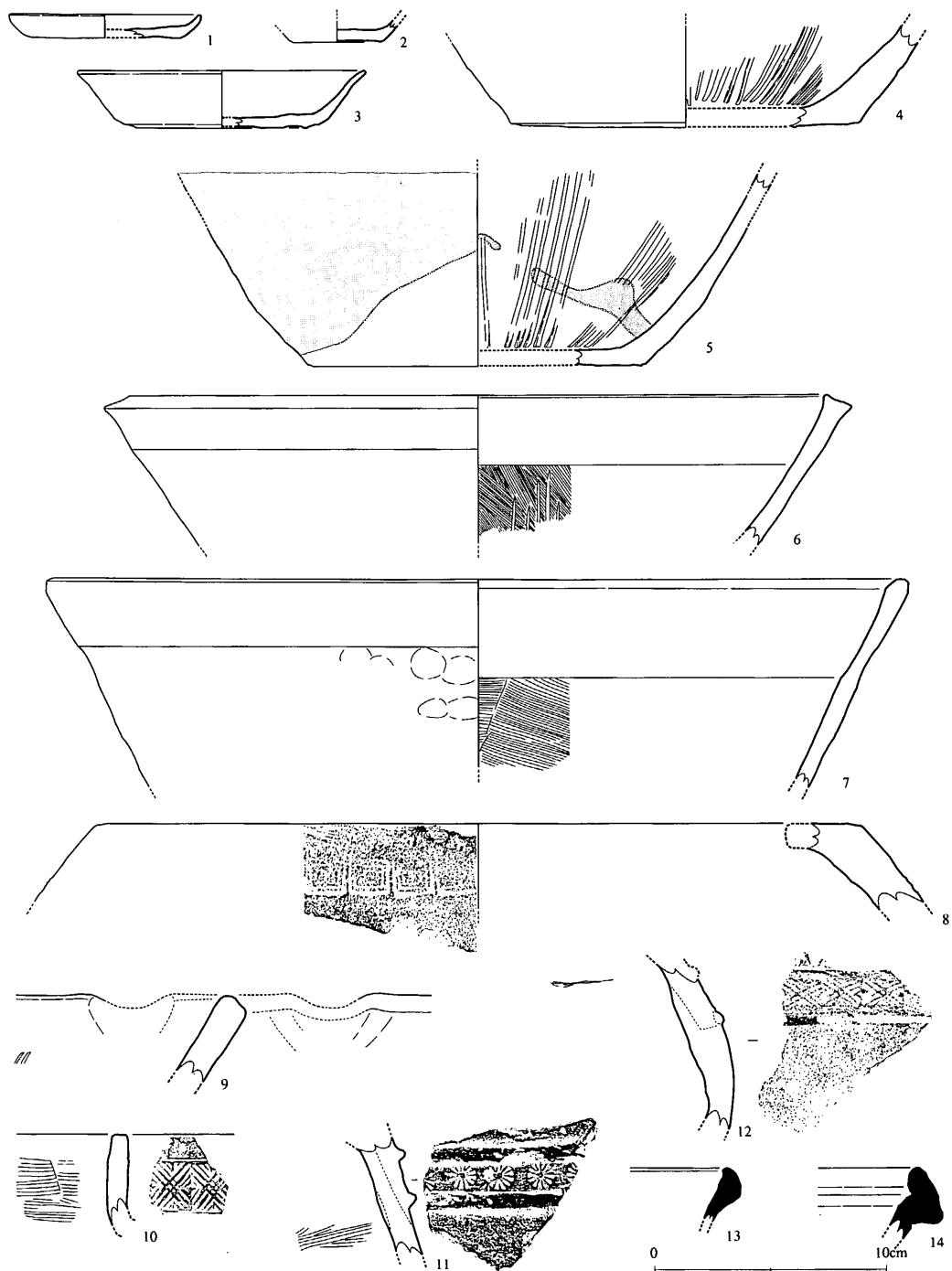


Fig.33 50SE380石組内埋土出土土器実測図1 (1/3)

込んだ時の小さな亀裂が、高台端部にみられる。釉は乳白色に発色し、光沢があるもので、貫入が目立つ。外面底部にはかからない。見込みに目跡とみられる表面が剥離する部分が3箇所認められる。森田氏分類のD群で、徳化タイプとみられる。

皿 (16) 底径5.5cmで、底部外面にも施釉される。IX-1類。

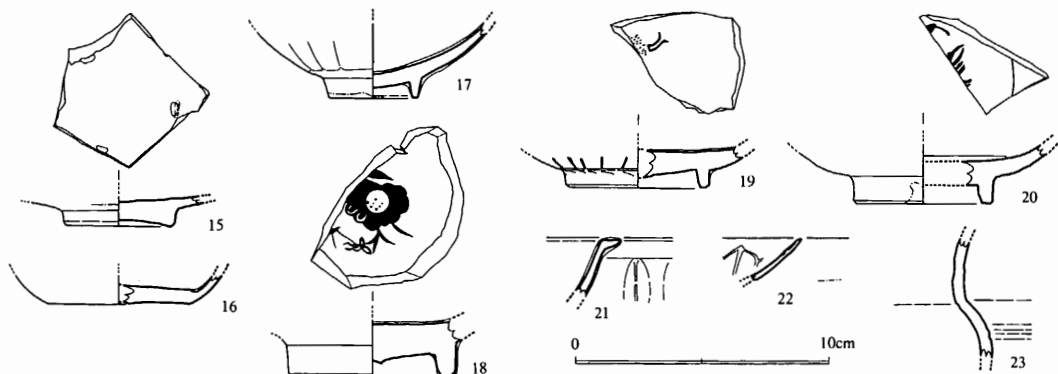


Fig.34 50SE380石組内埋土出土土器実測図2 (1/3)

龍泉窯系青磁

碗 (17~20) 17は高台径3.5cmで、高台端部は施釉されず、暗茶色を呈している。釉は淡緑色に発色し光沢があるが、透明度が低いうえに厚くかかるため、体部外面に蓮弁状の施文を施すが、確認しにくい状態である。III-2類。18は太めの高台の径は6.5cm。釉は厚めにかけて、淡緑色に発色し光沢がある。高台内側の釉は輪状に幅広く掻き取られており、中央に点状の釉が残存する。見込みには花文とみられるスタンプの押捺があるが、浅いため判別しにくい。明代に属する。19は高台径5.7cmを測るもので、体部外面は蓮弁文、見込みにはスタンプによる施文があるが、文様の種類は不明。釉は高台内側以外に施され、淡緑色に発色する。IV類。20は高台径5.5cm。釉は暗緑色に発色し透明感のあるもので、高台内側にはかからない。見込みにスタンプの押捺があるが、文様は不明である。IV-イ類。

坏 (21) 口縁を外側に折り曲げるもので、体部外面には蓮弁文が巡る。釉はきわめて厚くかけられ、淡緑色に発色するが透明度は低く、貫入も多く認められる。III-2-b類。

青白磁

皿 (22) 青味を帯びた透明感のある釉で、内面には突線による葉文がある。文様は型によるとみられる。

陶器

播り鉢 (4) 内面は灰黒色、外面は褐灰色で、硬質に焼成される。体部はヨコナデされ、内面に5本を単位とする太めの櫛で播り目を付ける。国産品とみられる。

花盆 (23) 肩部に2状の沈線を巡らせる。表面は不透明で暗褐色に発色する釉がうすくかけられる。胎土は淡灰色、明茶色を呈し、褐色の砂粒を含んでいる。

50SE380裏込土出土土器 (Fig.35、CD-1268~1286)

土師器

小皿a (24・25) 口径10.1・7.5cm、器高1.0・1.5cm、底径8.9・5.5cmを測る。底部は糸切りされる。

小皿b (26) 口径6.6cm、器高1.5cm、底径4.2cmで、底部は糸切りされる。

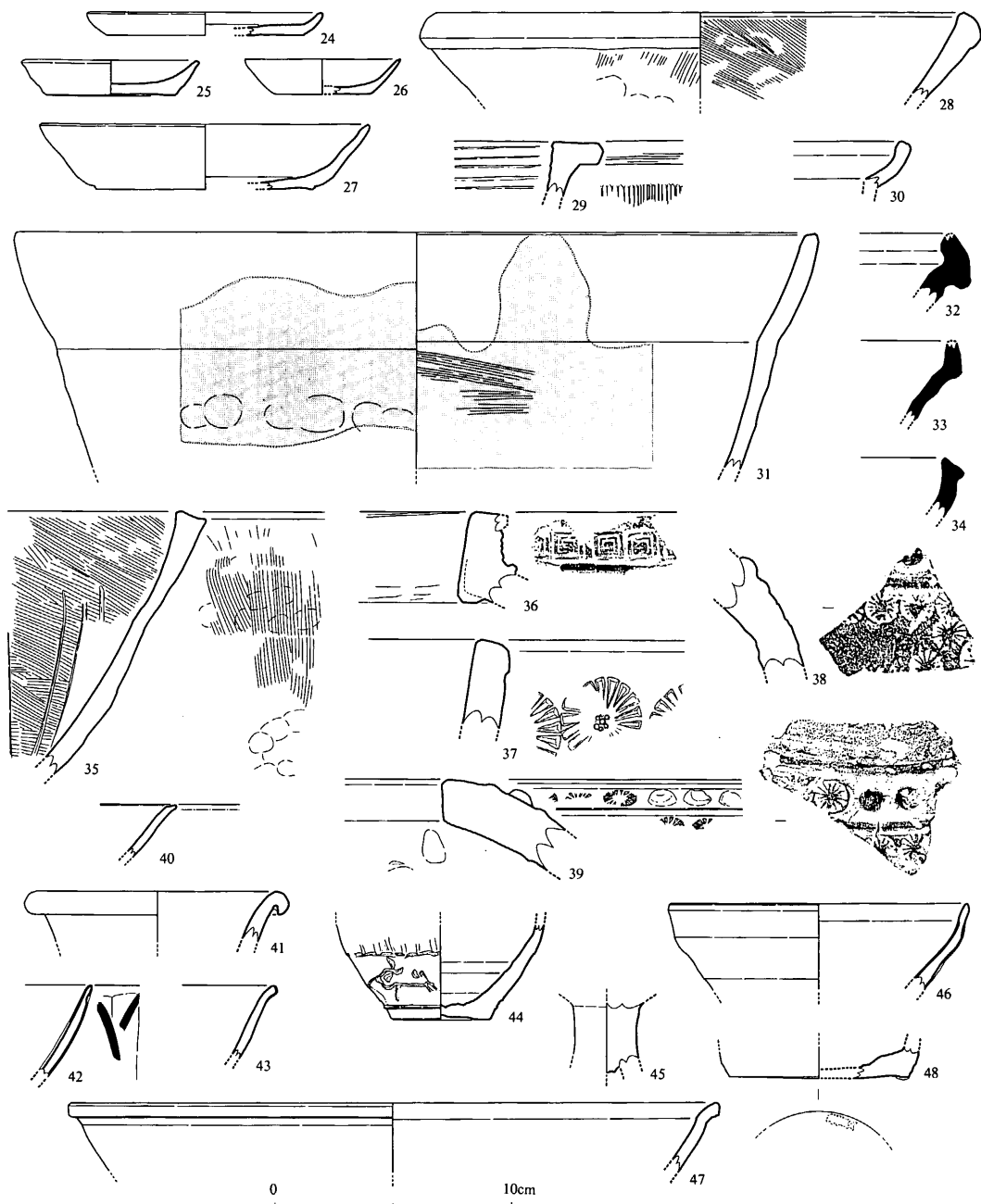


Fig.35 50SE380裏込土出土土器実測図 (1/3)

坏a (27) 口径14.0cm、器高2.8cm、底径9.4cmで、底部は糸切りされる。

土師質土器

鉢 (28) 口径22.3cm。口縁部を玉縁状に作る。内面は斜め方向の細かなハケ目、外面もわずかにハケ目が観察される。焼成は軟質だが、須恵質気味。

鍋 (29~31) 29は外面をハケ目、内面を幅広のハケ目で調整する。30は内湾する口縁部を

有するもので、内外面ともに煤が付着し黒色を呈している。31は口径33.9cmで、口縁部と体部の境目がわずかに屈曲する。内外面ともに煤の付着がある。

須恵質土器

鉢（32～34） 32・33は東播系とみられるもので、34は小さな玉縁状の口縁部を有し、体部は大きく内湾するとみられる。やや軟質に焼成され、灰白色を呈している。

瓦質土器

播り鉢（35） 口縁部はわずかに撥形を呈し、体部上位でわずかに屈曲する。口縁部周辺はヨコナデ、体部内面はハケ目の後3本（以上）を単位とする櫛で播り目を付ける。外面は縦方向のハケ目である。暗灰茶色を呈している。

火鉢・風炉（36～39） 36は短く垂直に立ち上がる口縁部の外側に、雷文を連続して押捺する。内面はヨコナデである。37はまっすぐに立ち上がる口縁部の外側に、径3.5cmと大きめの菊花文を連続して押捺する。38は体部上位の破片とみられ、上部に珠文帯、その下に突帯、さらにその下位に径1.4cmの小さな菊花文を押捺する。39は内傾する口縁端部を残存している。口縁部外面の上位から径0.8cm程度のきわめて小さな菊花文帯、そして2条の突帯があり、それに挟まれる空間に径1.2cm余りの珠文列と径1.4cmの菊花文列を配する。さらに突帯の下位には同じ菊花文帯がある。外面は施文の後、ヘラミガキを行い、一部その行為によって文様の消滅する部分がある。上記した38と同じ施文と思われる。

白磁

椀（40） 口縁端部の釉を拭き取るもので、IX類。

壺（41） 口径10.0cm。口縁部を折り曲げるもので、釉は暗緑白色に発色し、透明感があって光沢がある。III類。

龍泉窯系青磁

椀（42・43） 42は外面に蓮弁文を配するもので、釉は明緑灰色に発色するもので、きわめて厚めにかかる。III-2類。43は口縁部をわずかに外方へ折り曲げるもので、釉は淡緑灰色に発色し、透明感はなく鈍い光沢がある。IV類。

瓶（44） 底径4.2cm。外型を用いた成形で、文様も型に彫り込まれたものである。釉は内面及び外面の体部下位以上にかけられ、淡灰緑色に発色する。透明感があり光沢もあるが、内外面ともに貫入が多く入っている。胎土は灰茶色味をわずかに帯びた白色を呈し、精良ながら小さな気泡が目立つ。IV類とみているが青白磁の可能性もある。

馬上坏（45） 径2.6～3.0cmの円筒状部分の資料で、釉は透明度の高い淡緑色を呈するものである。IV類か。

陶器

椀（46） 黒釉陶器で、口径12.6cmを測る。釉は口縁部付近で淡茶色、他は黒褐色に発色し、不透明なものである。胎土は明白黄色で、小さな気泡が目立つ。

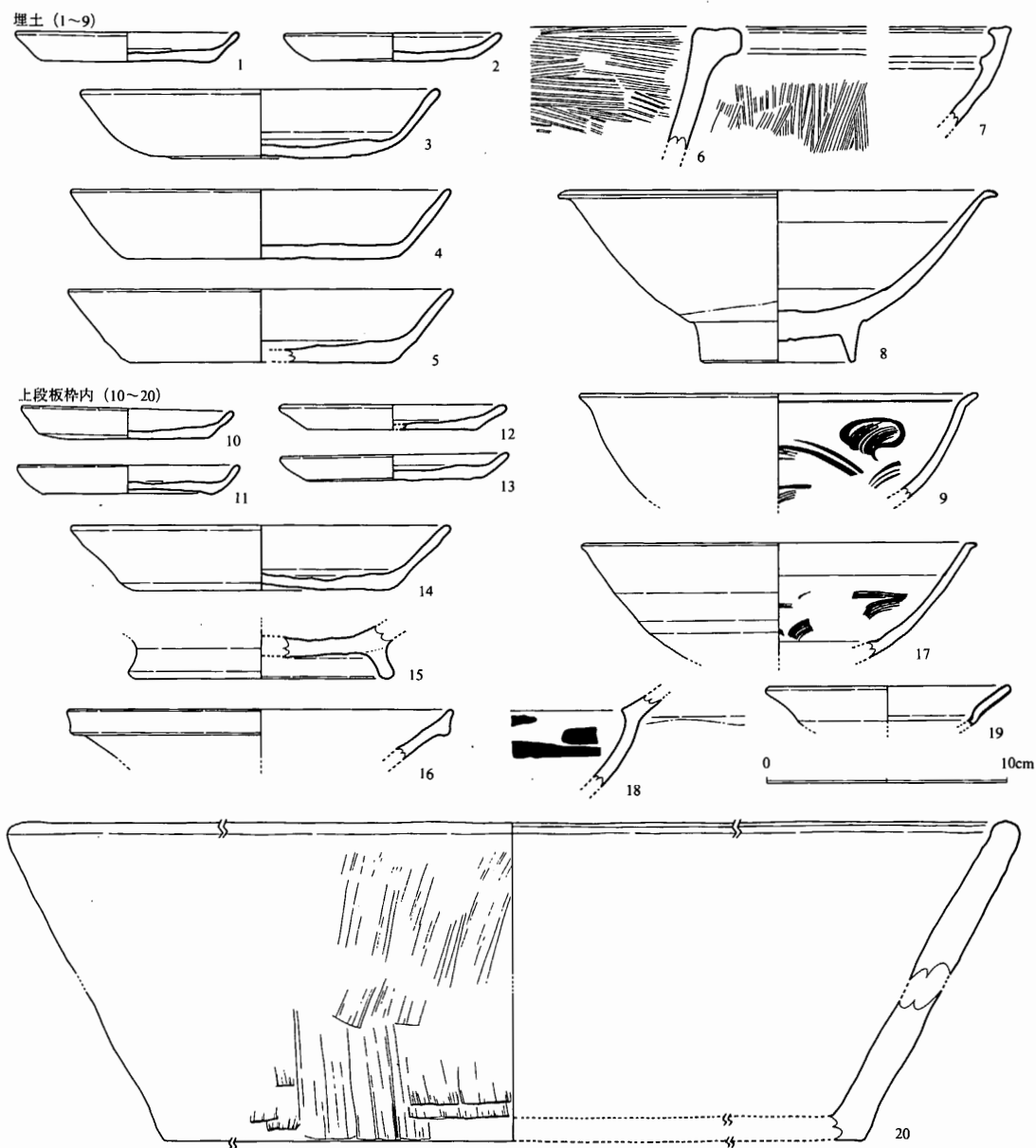


Fig.36 50SE405出土土器実測図1 (1/3)

盤 (47) 口径27.5cm。ヨコナデで仕上げられ、明灰色に発色する釉が薄くかかる。瀬戸産とみられる。

壺 (48) 釉は外面底部以外にかけられ、暗茶褐色を呈し不透明なもので、光沢もない。内面ではほとんどの部分で白濁化している。外面底部の周囲に白色砂粒を多量に含む目跡が残っている。胎土は暗茶褐色で小さな砂粒が多く含まれている。

50SE405埋土出土土器 (Fig.36、CD-1287~1294)

土師器

小皿a (1・2) 口径9.3・9.1cm、器高1.3・1.2cm、底径7.0cmを測る。底部は糸切りで、板

状圧痕が残る。

坏a (3~5) 口径15.0~16.0cm、器高2.9~3.1cm、底径8.2~11.5cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

土師質土器

鍋 (6) 体部外面は縦方向の粗いハケ目、内面は横方向のハケ目である。外面全体と口縁上部までは黒色を呈している。

白磁

椀 (8) 口径18.2cm、器高7.2cm、底径6.4cmを測る。内面上位に沈線が巡り、見込みの外周には沈線状の小さな段がある。V-4-a類。

龍泉窯系青磁

椀 (9) 口径16.4cm。口縁部を強めに外反させる。内面にヘラと櫛による施文がある。釉は緑茶色に発色する透明度の高いもので、光沢がある。I-3類。

陶器

鉢 (7) 無釉で、表面は暗灰茶色を呈している。胎土は暗灰色で、1mm程度の砂粒が多量に混入している。I-1-b類。

50SE405上段板枠内出土土器 (Fig.36、CD-1295~1304)

土師器

小皿a (10~13) 口径8.8~9.5cm、器高1.1~1.2cm、底径7.0~7.5cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (14) 口径15.8cm、器高2.7cm、底径10.8cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

大椀c (15) 高台部分の破片で、高台径11.0cm。

土師質土器

鉢 (20) 口径45.0cm、器高13.3cm程度、底径32.2cmを測る。口縁部から内面はヨコナデ、外面は縦方向の工具を用いたナデで調整される。胎土は2~3mm程度の砂粒を多量に含み、若干の赤色粒も含んでいる。

白磁

椀 (17) 口径16.4cm。内面に櫛による施文があり、見込みの外周に沈線状の小さな段がある。V-4-b類。

同安窯系青磁

皿 (19) 口径10.2cm。I類。

灰釉陶器

壺 (16) 口径16.0cmに復原されるが小片である。釉はきわめて薄くかかり、明灰色に発色するが、内面では暗灰色、白色の斑がある。

陶器

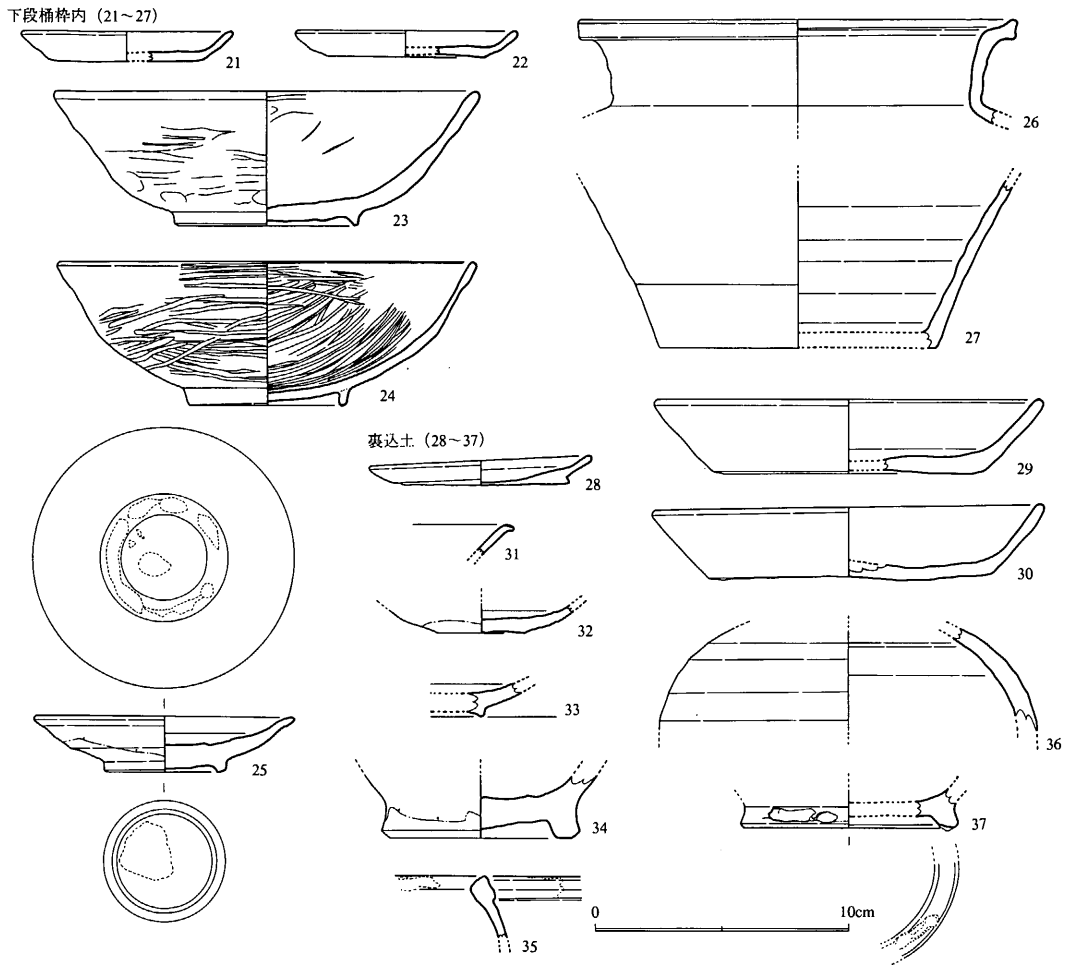


Fig.37 50SE405出土土器実測図2 (1/3)

盤 (18) 外面の口縁部と内面に施される釉は灰黄色に発色し、内面には茶黒色、暗黄茶色の鉄絵が描かれる。胎土は灰茶色で、白色、赤茶色、黒色の小粒子を多量に含んでいる。1-1-b類。

50SE405下段桶枠内出土土器 (Fig.37、CD-1305~1312)

土師器

小皿a (21・22) 口径8.4・8.8cm、器高1.2・1.0cm、底径6.0・6.2cmを測る。底部は糸切りされる。

瓦器

碗c (23・24) 口径16.8・16.6cm、器高5.3・5.7cm、高台径7.2・6.2cmを測る。23は内面に煤が多量に付着しており、調整は観察できない。24は内面がヨコナデの後ミガキbを行い、最終調整としてミガキcを施す。外面はヨコナデの後ミガキcである。

白磁

皿 (25) 口径10.3cm、器高2.2cm、高台径4.8cmを測る。釉は濁った淡白灰色に発色し、外

面底部にはかからず、見込みは輪状に掻き取られる。釉の掻き取られた部分には楕円形で白色に変色する部分があり、目跡とみられる。III-1類。

高麗系無釉陶器

壺 (26) 口径17.4cm。表面は暗紫灰色、胎土は暗褐灰色で微量の砂粒を含んでいる。きわめて硬質に焼成される。

陶器

壺 (27) 底径11.0cm。体部上位にわずかに釉がかかっていることが分かる。釉は黄茶色で、光沢はなく透明度も低い。内面と外面の体部下半は露胎で、明灰茶色、淡灰色を呈している。胎土は灰茶色で暗褐色の粒子を多量に含んでいる。

50SE405裏込土出土土器 (Fig.37、CD-1313~1318)

土師器

小皿a (28) 口径8.9cm、器高1.0cm、底径6.6cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (29・30) 口径15.4・15.5cm、器高3.0・2.8cm、底径10.3・11.2cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

碗 (31) 口縁端部をわずかに外方へつまみ出す。V-4類かVIII類。

皿 (32・33) 32は底径3.4cm。釉は白濁化したもので、外面体部下半にはかからない。V類もしくはVI類。33は黄色気味で透明度の高い釉を施すもので、残存部の全面に施釉され、細かな貫入が観察される。VII-2類。

壺 (34) 高台径7.8cm。高台部分以外は施釉され、灰色味を帯びた釉である。III-1類。

陶器

鉢 (35) 淡茶色に発色し鈍い光沢がある釉で、内面では白濁化している。胎土は灰茶色で暗茶色、白色粒子を多く含んでいる。III類。

灰釉陶器

碗 (37) 高台径8.6cm。釉は明緑灰色に発色するもので、高台以下は施釉されない。高台外面には白茶色、畳付けには暗灰色の陶土が付着しており、目跡と思われる。

壺 (36) 外面に淡緑白色で鈍い光沢のある釉を施す。内面は露胎で、明灰茶色を呈している。胎土は灰色で白色砂粒を若干含んでいる。

50SE410上層出土土器 (Fig.38、CD-1319~1328)

土師器

小皿a (1~3) 口径7.8~9.0cm、器高0.7~0.9cm、底径6.4~7.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (4・5) 口径13.0・14.2cm、器高2.4・2.7cm、底径8.3・8.6cmを測る。底部は糸切りさ

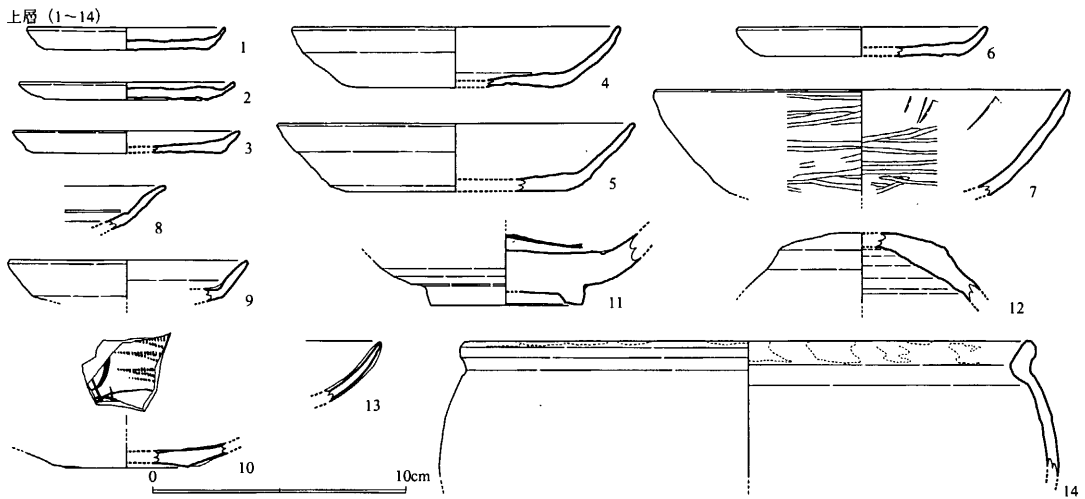


Fig.38 50SE410出土土器実測図1 (1/3)

れる。

瓦器

小皿a (6) 口径10.0cm、器高1.2cm、底径8.0cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕が残り、全体に燻される以外は土師器の同器種とほとんど変わらない。

椀 (7) 口径16.4cm。外面はヨコナデの後ミガキc、内面はヨコナデの後ミガキbを行い、さらにミガキcで仕上げる。

白磁

皿 (8) 灰色味を帯びた釉で、透明度は低い。III-1類。

同安窯系青磁

皿 (9・10) 9は口径9.4cm。淡緑白色に発色し、透明度の高い釉で、内外面ともに貫入が多く認められる。I類。10は底径4.8cm。底部の釉は搔き取られ、見込みにはヘラと櫛による施文がある。I-2-b類。

龍泉窯系青磁

椀 (11) 高台径6.0cm。体部にヘラによる施文が確認できる。I-2類もしくは3類。

小椀 (13) きわめて厚くかかる釉は暗緑灰色に発色し、貫入が多くみられる。III-1類。

陶器

蓋 (12) 暗褐色で不透明な釉が施され、胎土は黒灰色を呈し砂粒を多く含んでいる。

鉢 (14) 口径22.8cm。外面では暗茶色、内面では暗褐色に発色する釉は、不透明で光沢はほとんどない。口縁端部から内側にかけて、灰白色で細かな粒子の目跡が連続して残っている。胎土は明茶黄色で、黒色、暗褐色、白色の粒子が混在している。III-1類。

50SE410埋土出土土器 (Fig.39・40、CD-1329～1354)

土師器

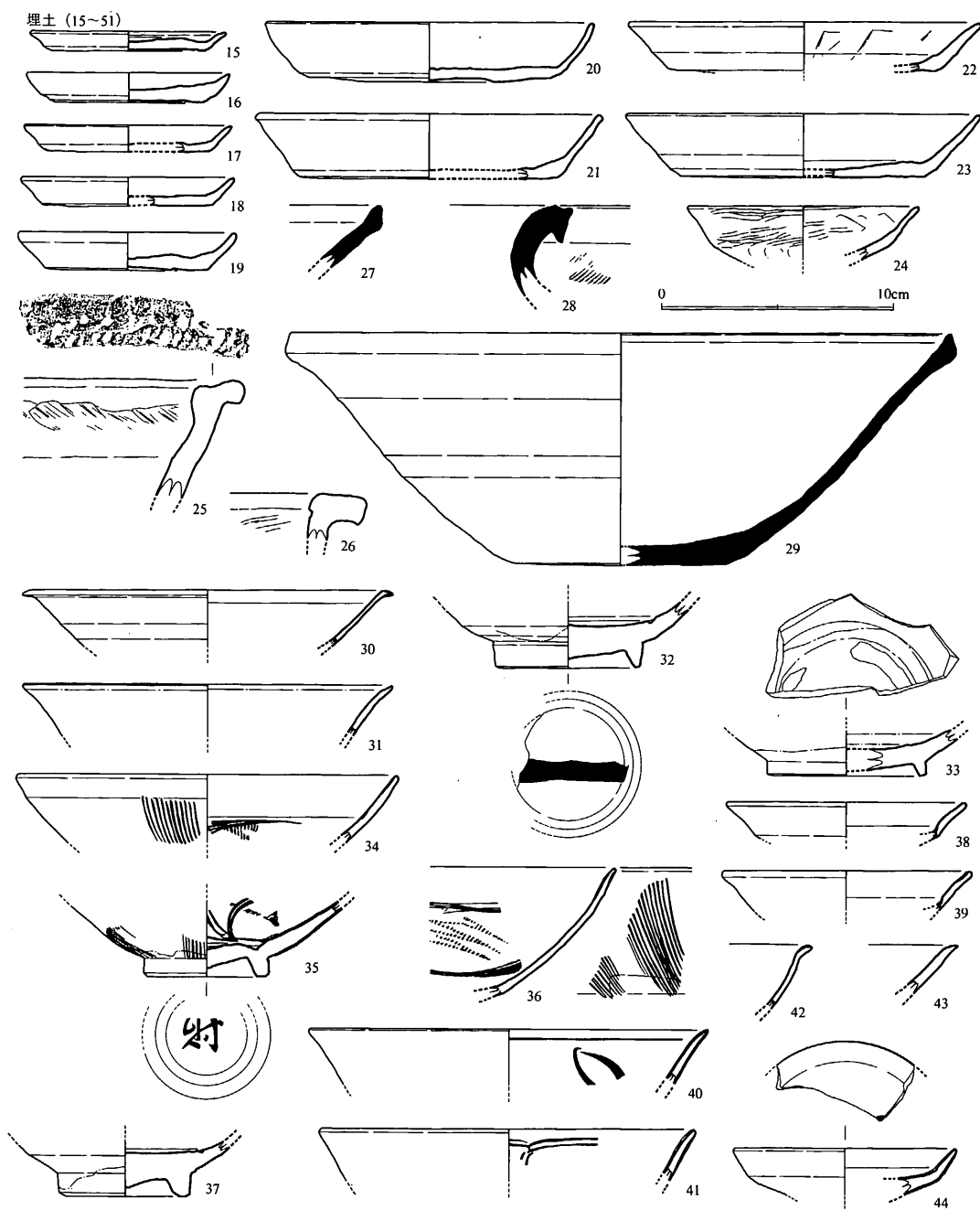


Fig.39 50SE410出土土器実測図2 (1/3)

小皿a (15~19) 口径8.5~9.5cm、器高0.9~1.7cm、底径6.6~7.1cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (20・21・23) 口径14.2~15.3cm、器高2.6~2.8cm、底径10.4~11.2cmを測る。底部は糸切りされる。

丸底坏a (22) 口径15.2cmを測る。底部は糸切りとみられ、押し出しが行われた形跡は乏

しい。内面はミガキbで調整される。

瓦器

小椀 (24) 口径10.0cm。内外面ともにミガキcが施されるが、内面はそれに先行してミガキbが施される。

土師質土器

鍋 (25・26) いずれも内面は工具を用いたナデとみられる。25の口縁上面には刺突痕がある。

須恵質土器

鉢 (27・29) 29は口径28.2cm、器高10.1cm、底径9.1cmを測る。底部は糸切りされ、体部はヨコナデで仕上げる。体部内面中程以下は使用による磨耗で平滑化している。暗灰色で硬質に焼成され、胎土中には白色の砂粒が若干含まれている。両者とも東播系。

甕 (28) 暗灰色を呈し、きわめて硬質に焼成されている。東播系。

白磁

椀 (30～33) 30は口径16.0cmで、V-4類もしくはVIII類。31は口径16.0cmで口縁端部の釉を拭き取っている。IX類。32は高台径6.3cmで、見込みには沈線状の段が巡る。また高台内側には「一」の墨書がある。V類。33は高台径6.9cm。暗濁白色で透明度の低い釉が施される。釉は高台周辺にはかからず、見込み部分も輪状に掻き取っている。輪状に掻き取られた部分の内周に沿って白色粒子状の付着物がある。VIII類。

同安窯系青磁

椀 (34～37) 34は口径16.6cmで、外面に縦方向の櫛目、内面にはヘラと櫛による施文があり、釉は透明感があって淡黄茶色に発色する。I-1-b類。35は高台径5.4cmを測り、高台周辺には施釉されない。外面に縦方向の櫛目、内面にはヘラと櫛による施文がある。高台内側に「将」と思われる墨書があるがきわめて薄く判読は難しい。I-1-b類。36は外面に縦方向の櫛目、内面にはヘラと櫛による施文があり、体部外面下半には施釉されない。I-1-b類。37は高台径5.6cmで、釉は明緑白色気味で、鈍い光沢があり、高台付近には施釉されない。II類またはIII類。

皿 (38・39) 口径10.4・10.8cm。いずれもI類である。

龍泉窯系青磁

椀 (40～42) 40・41は口径17.2・16.2cmで、両者とも内面にヘラによる施文がある。40はI-2類。41はI-4類。42は淡緑灰色に発色する釉で、光沢はあるが透明度はやや低い。体部外面下半には施釉されない。IV類。

坏 (43) 淡緑灰色に発色する釉で、光沢があり透明感のあるものである。I類。

皿 (44) 口径9.6cm。淡緑灰色で透明感のある釉を施す。見込みにヘラによると思われる文様の一部分がわずかに観察できる。I-3類。

陶器

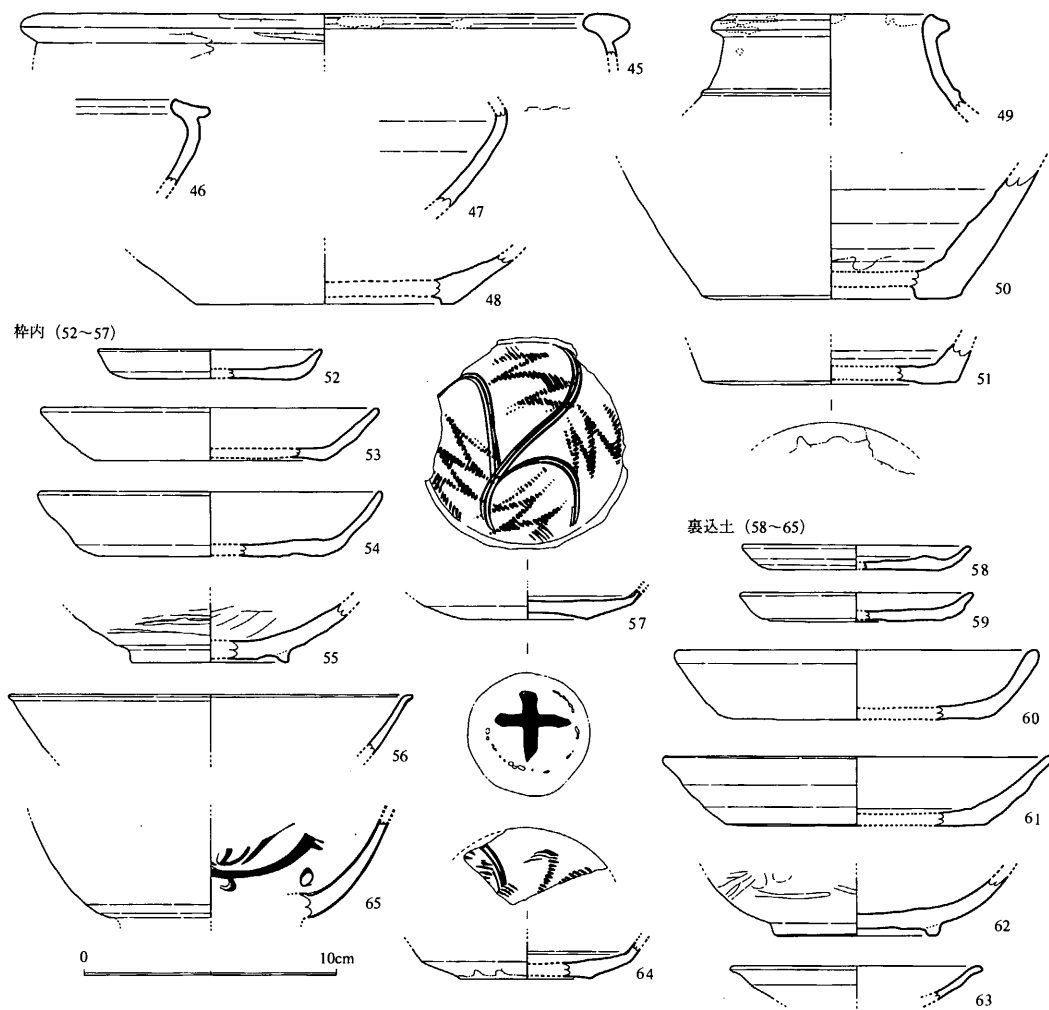


Fig.40 50SE410出土土器実測図3 (1/3)

鉢 (45~48) 45は口径24.0cm。釉は薄いところで茶褐色、厚くかかる部分では暗褐色を呈している。胎土は暗茶褐色で混入物は少ない。口縁部内側に楕円形の付着物があり、目跡とみられる。IV-1類。46は明黄茶色の不透明な釉で、光沢はない。胎土は茶白色で、白色や暗褐色の粒子を若干含んでいる。VI類。47は灰緑色で鈍い光沢のある釉で、透明度は高くない。釉は外面の肩部上位以上にはかからないが、小片のため詳細は不明である。胎土は淡灰色、淡茶灰色で黄白色粒子を若干含んでいる。48は底径10.0cm。外面の底部周辺は明黄茶色、上位では白濁化した暗茶色、内面では明黄茶色に発色する釉がかかるが、外面で光沢があるのに対して、内面ではまったく光沢を有さない。胎土は46に酷似し、同一個体の可能性も残される。VI類。

四耳壺 (49) 口径8.0cm。釉は光沢のない部分で暗褐色、外面肩部で光沢を残す部分は淡黄茶色に発色する。胎土は明灰色で白色及び黒色の粒子を若干含む。口縁部上面から内側にかけて濁灰白色の砂粒の付着があり、目跡とみられる。V類。

壺 (50・51) 50は底径10.4cmで、畳付け以下は施釉されない。釉は淡黄緑灰色に発色し、

透明度はほとんどなく光沢もない。大半の部分で白濁化している。胎土は明灰色で砂粒を若干含み、気泡が目立つ。51は底部の資料で他の器種の可能性もある。底径10.1cm。釉は内面で暗茶色、外面でやや緑味を帯びた暗茶色に発色し、いずれも鈍い光沢がある。胎土は暗灰色を呈し、若干の砂粒を含んでいる。底部周囲に白灰色の付着物があり、目跡とみられる。

50SE410 枠内出土土器 (Fig.40、CD-1355~1358)

土師器

小皿a (52) 口径8.9cm、器高1.2cm、底径6.5cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (53・54) 口径13.4・13.6cm、器高2.1・2.6cm、底径9.1・9.0cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

瓦器

椀c (55) 高台径6.2cm。内面はミガキbの後ミガキcとみられ、外面はミガキcを最終調整とする。

白磁

椀 (56) 口径16.0cm。口縁端部を外方へわずかにつまみ出す。V-4類もしくはVIII類。

同安窯系青磁

皿 (57) 底径4.8cm。明灰緑色に発色する透明度の高い釉で、光沢があり貫入が多く見られる。外面底部の釉は掻き取られる。見込みにはヘラと櫛による施文があり、底部の露胎部分には径3.3cmで円形になる目跡がある。また「十」の墨書もみられる。I-2-b類。

50SE410 裏込土出土土器 (Fig.40、CD-1359~1364)

土師器

小皿a (58・59) 口径9.0・9.2cm、器高1.0・1.2cm、底径6.5・7.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (60・61) 口径14.4・15.4cm、器高2.8cm、底径10.1・10.3cmを測る。底部は糸切りされる。

瓦器

椀c (62) 高台径6.5cm。内面はミガキb、外面はミガキcを最終調整とするが、高台周辺には及ばない。

白磁

皿 (63) 口径10.0cm。釉は明灰緑色に発色し、透明度が高く光沢もある。II類またはIII類。

同安窯系青磁

皿 (64) 底径5.2cm。底部の釉は掻き取られる。見込みには櫛による施文がある。I-2-b類。

龍泉窯系青磁

椀 (65) 内面にヘラによる施文がある。I-2類。

B：木製品 (Fig.41~43、CD-1365~1387)

扇(1~5) すべて50SE150枠内から出土したもので、一様に中程で折損しており、5は上部が失われている。長さ32.0~33.0cm、最大幅1.3cm内外、最小幅0.65cm前後、厚さ0.2~0.35cmを測る大きなもので、下位に径0.7cm前後で円形の穿孔がある。形状は下半部の片側にわずかな膨らみを持たせ、上位に至るに従って徐々に幅を減少させ、上端部に至って再び外方向へ開き、先端部はほぼまっすぐに立ち上がる。調整は各側面が削りで、1の上端部は片方が尖るように強く削り落としている。また1と5の下端部から約17.5cm辺りまでの片面(図の面)には漆が塗布されており、黒茶色を呈し光沢がある。畳んだ時の最外面の体裁を意識して、紙の貼付られない部分に漆を塗布したものと考えられる。2~4の上端部はわずかに斜めに切り落とされている。上端部の形状と下端部の膨らむ方向、漆の塗布状況から考えると、1と5が最も外側にあるもので、法量を見る限り一対のものと思なされる。それに挟まれる骨の一部が2~4と思われる、穿孔位置や規模も揃っている。何らかの要因で中央からへし折り、井戸へ投棄したものであろう。

筥(6~8) 6は長さ20.1cm、最大幅1.7cm、厚さ0.7cmを測る。ケズリによって両側面を薄目に仕上げる。先端は徐々に薄く作られるが、基部の先端は簡易なケズリ調整で終わっている。ただ基部の先端から深さ約3.3cmの切り込みが入れられている。柄部を含めて図の左半分範囲に部分的ながら漆が付着している。50SE120枠内出土。7は先端部分を失い、主に柄の部分が残存する。現存長12.5cm、最大幅2.0cm、最大厚0.9cmを測る。柄の背側になると思われる部分に、漆が付着している。50SE120枠内出土。8は中程から先端までをケズリによって成形し、先端を鋭く尖らせるとともに片面に刃部を作り出す。ほぼ完存するもので、長さ20.3cm、幅1.3cm、柄の部分の厚さ0.4cmを測る。先端部を中心に漆の付着が観察される。50SE410埋土出土。

加工板片(9・10) 9は厚さ0.5cm程度の板材で、図の右側面は加工面と判断したが、対面は破断面であると思われる。他の面も風化が進行し、本来の形状は明らかでない。左側の縁近くに径0.3cmの穿孔がある。50SE120枠内出土。10は図の左側面に切り込みを入れ、下半も削り込みを入れる板材である。他の面は失われており、原形は不明である。下半の削り残された先端部が磨耗していることや、それに沿う側面がわずかに湾曲するように面取りされていること等から、厨子のような小型の建築物に用いられた扉の可能性もある。50SE150枠内出土。

箸(11~16) 13・16は先端を失うが、他はほぼ完存している。長さは19.3~24.5cmで、全面を縦方向のケズリによって成形し仕上げるため、断面形状は多面形を呈している。太さは0.3~0.7cm程度である。12・13・16は50SE120枠内、他の3点は50SE150枠内出土。

留櫛状製品(17) 頭部を方形に作り、上端は斜めに切り込む。先端は尖らせるが、胴部の中程はわずかに膨らみ気味に作る。長さ11.3cm、厚さ0.45cm。50SE150枠内出土。

蓋(18) 半円形を呈する厚さ0.5cmの板材で、円弧の終端部分には段があり、わずかに外方へ飛び出している。また直線部分の側面の2箇所に深さ1.5cm程度の穿孔があり、内部に木釘

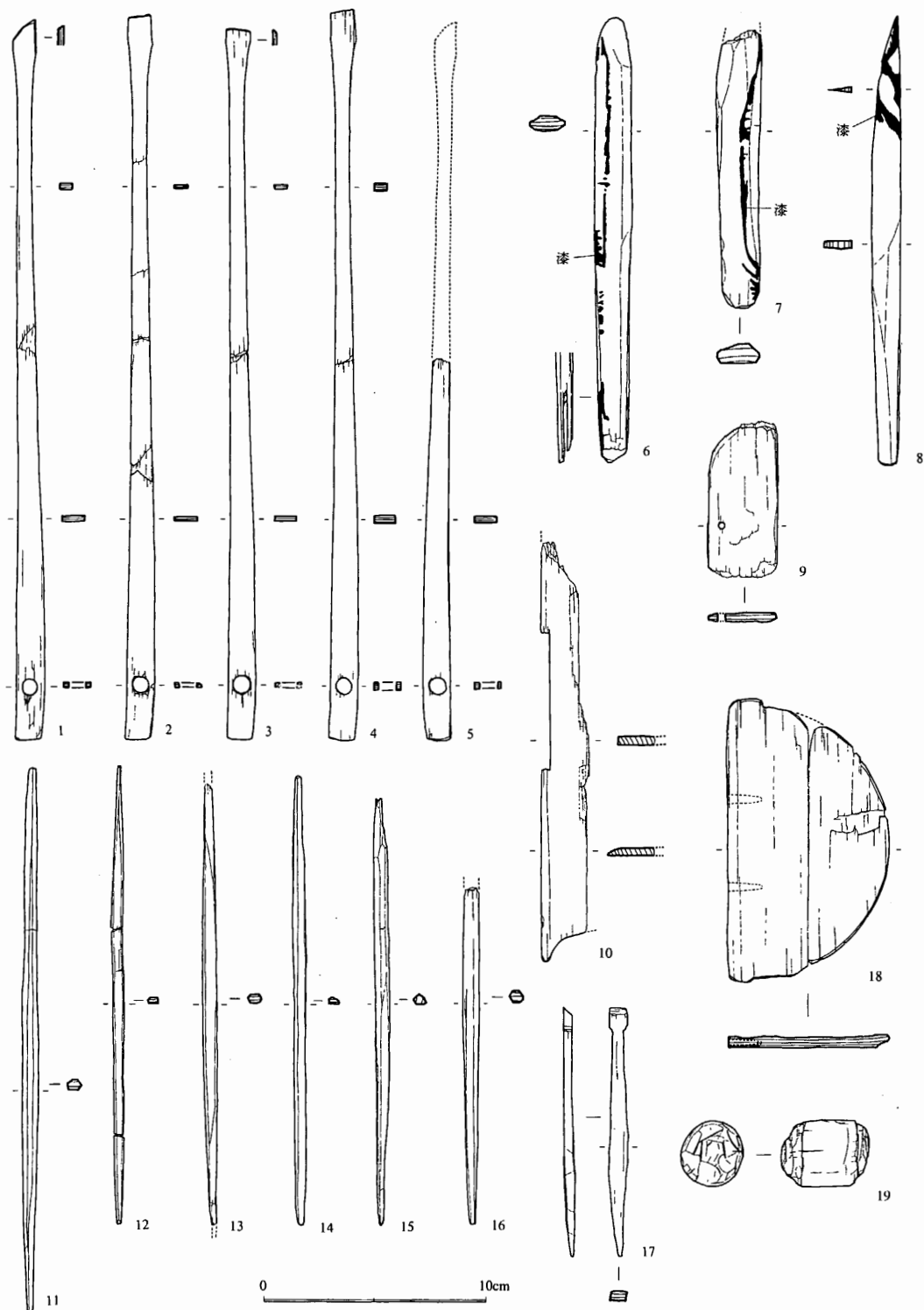


Fig.41 井戸出土木製品実測図1 (1/3)

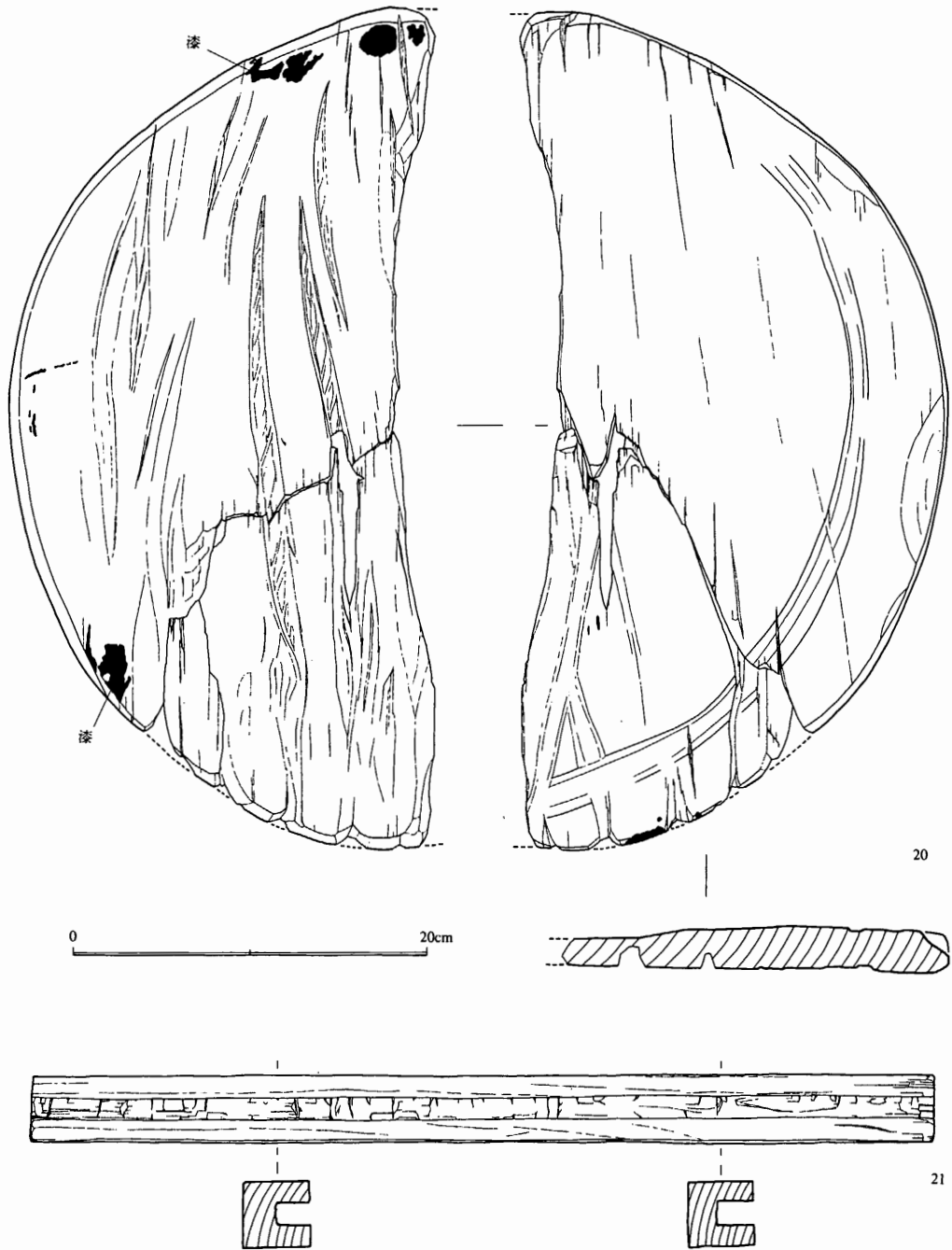


Fig.42 井戸出土木製品実測図2 (1/4)

と思われる木片が残る。円弧をなす部分の側縁は丁寧に面取りされている。蓋として報告したが、他の製品の可能性も十分に有り得る。50SE380石組内埋土出土。

毬杖玉 (19) 径3.0cm内外、長さ3.9cmを測る。両端部分は細かな削り込みによって成形され、わずかに丸味を持たせている。他の部分は樹皮を除去したままの状態と思われる。

50SE150枠内出土。

大蓋 (20) 約半分を失うものと思われる、当初は円盤状を呈していたものと思われる。現存する長さ47.6cm、現存幅24.2cm、厚さ2.5cmを測り、内面と思われる部分に幅1~2cmで円弧状の浅い溝が彫り込まれている。外面と思われる部分は劣化が進み大きな亀裂がみられるが、部分的に漆が残存している。漆は一部赤褐色を呈する部分もあるが、大半は黒茶色を呈している。側縁部分はケズリによって調整されるとみられるが、かなり風化し丸味を帯びる。内面の外周近くの1箇所を長さ9.4cm、幅2cmの略台形状に窪ませている。50SE405桶枠内出土。

角材 (21) 長さ51.0cm、幅3.8cm、厚さ3.9cmを測る角材で、一面に幅1.2cm前後、深さ約2cmの溝が彫り込まれ、断面形状は「コ」字形を呈している。溝部分の底部及び側面には彫り込んだ際の工具痕跡が明瞭に残る。井戸枠材の可能性はあるが、具体的な部位は特定できない。50SE150枠内出土。

横槌 (22) 全長31.0cm、柄の長さ12.4cmで、当初は径6.5cm余りの円形を呈していたと思われるが、使用に伴って大きく磨耗し、現状は幅3.4cmの楕円形状を呈している。資料は一材から作り出され、柄の削り出し部分を中心に、調整痕が観察できる。柄の一部及び使用面を中心に漆が付着している。50SE245出土。

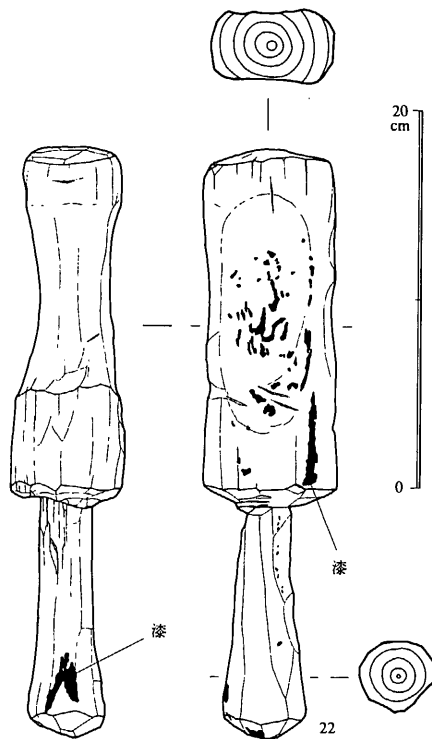


Fig.43 井戸出土木製品実測図3 (1/4)

C：金属製品 (Fig.44・45、CD-1388~1395)

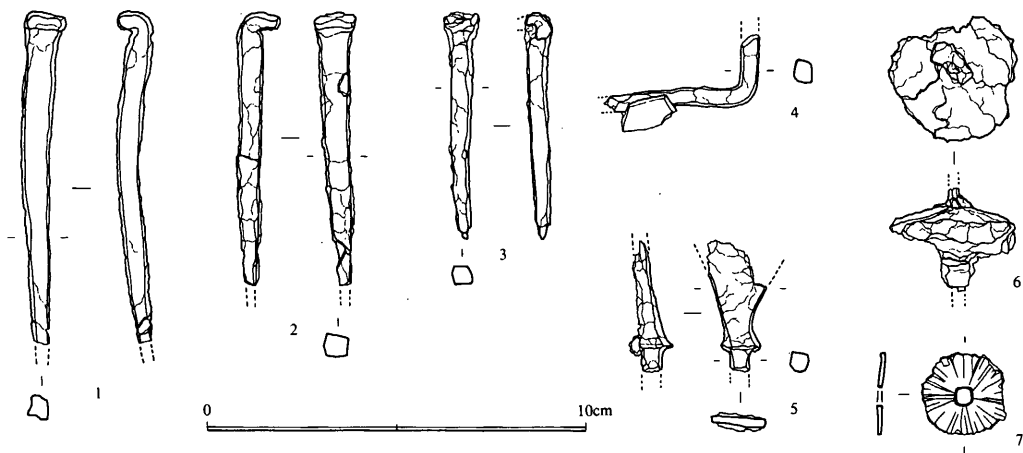


Fig.44 井戸出土金属製品実測図 (1/2)

釘 (1~4) すべて鉄製である。1は先端を失うもので、現存長8.8cm。頭部はあまり薄くなるまでは叩かず、厚めのまま折り曲げている。50SE140埋土出土。2は先端を失うもので、現存長7.2cm。頭部は本体の1/3程度になるまで叩いた後、折り曲げている。50SE150埋土出土。3はほぼ完存する資料で、長さ6.0cm。頭部は平たく叩いて折り曲げる。50SE410埋土出土。4は先端部、頭部とも失うもので、釘の途中でほぼ直角に折り曲げている。一部に土器片が錆によって付着している。50SE150埋土出土。

鎌 (5) 先端部、基部ともに失われるが、外方に大きく開くタイプと思われる。鉄製で、50SE377埋土出土。

紡錘車 (6) 錆によって肥厚しているようであるが、径3.5cm程度に復原できる。中央に芯の一部が残存している。鉄製で、50SE270埋土出土。

飾金具 (7) 菊花文を配する厚さ1mm程度の金具で、中央に一辺0.4cmでほぼ方形の穿孔がある。金具の周囲は腐食により形状を留めないが、花卉の先端が並び円形を呈していたものと考えられる。銅製で、50SE377埋土出土。

銭 (8・9) いずれも銅銭で、8は「開元通寶」で50SE080上層出土。9は「大観通寶」で、50SE380裏込土出土。



Fig.45 井戸出土
銅銭拓影 (1/2)

椀形滓 (a・b) aは長さ7.2cm、幅5.3cm、厚さ2.0cm、bは長さ7.6cm、幅5.9cm、厚さ2.5cm前後を測る。両者とも暗茶褐色を呈し、部分的に明茶色を呈する部分がある。随所に気泡がある。湾曲する側はざらつくが面を形成しており、この対面は溶解物によって凹凸がはげしい。50SE380石組内埋土出土。

D：土製品 (Fig.46~49, CD-1396~1420)

鞆羽口 (6) 径約8cmに復原できるもので、炉に装着した部分と推定され先端部に溶解した付着物が残る。羽口の残存部分は炉壁に覆われていたところと思われる。羽口の表面は明茶色を呈し、胎土は明茶灰色で大粒の砂粒を多量に含む粗いものである。端部に付着する溶解物は炉内側にあたる部分が黒灰色、外面が暗茶灰色で砂粒を多量に含んでいることから、火熱により溶解した炉壁部分が付着し固化したものと思われる。50SE380裏込土出土。

方柱状土製品 (1~5) 1は最大幅6.2cm、厚さ4.4cmの断面形状が隅丸方形を呈するもので、両端を欠失するが残存長9.4cmを測る。表面は二次的にかなり強い火熱を受けており、隅部は劣化しており、他の部分も縦方向の擦痕状の痕跡を見いだせるが不明瞭である。表面の色調は淡白灰色を呈し、断面は明茶白色である。胎土は大粒の砂粒を多量に含む粗いものである。50SE080上層出土。2は1面を欠損する。断面形状がやや横長の方形と考えられるもので、1と同様に二次的にかなり強い火熱を受けている。表面には縦方向の擦痕状の痕跡があるが不明瞭である。表面の色調は淡白灰色を呈し、断面は明茶白色である。胎土は大粒の砂粒を多量に含む粗いものである。50SE140埋土出土。3は現存長15.5cm、最大幅7.9cm、厚さ3.3cmで断面形状が

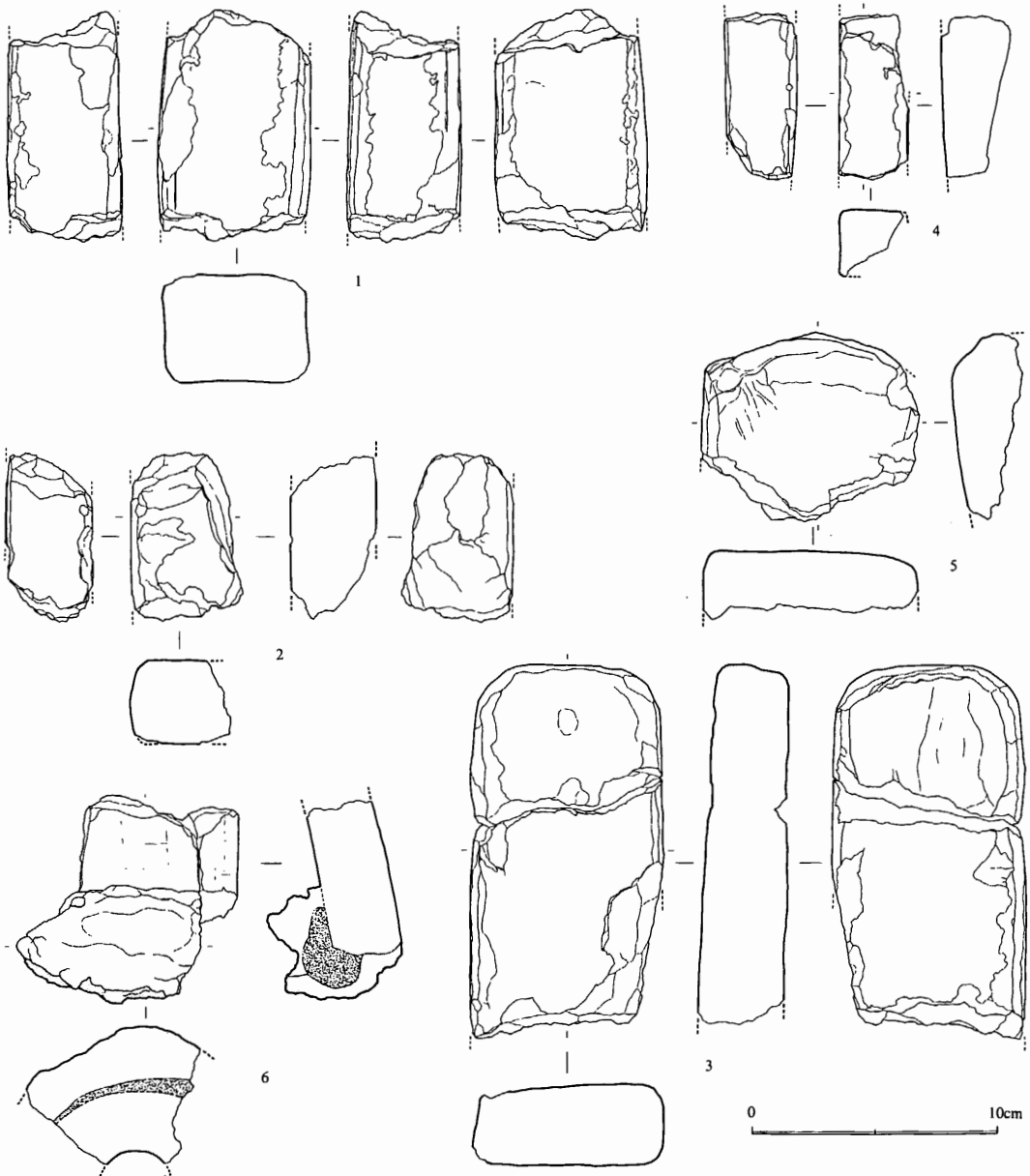


Fig.46 井戸出土生産関連遺物実測図1 (1/3)

長方形を呈するものである。表面や胎土の状況は1・2に酷似しており、同じ用途に用いられたものと考えられる。端部の整形は簡素な指圧痕やナデがみられるが、全体には未調整に近く、粘土塊を板の上に押し当てたような状況で終わっている。なお断面部分の観察では薄く延ばした粘土板を二つに折り曲げて重ねた程度の成形とみられる。50SE410埋土出土。4は幅2.9cmで現存長6.7cmを測る。調整は縦方向の擦痕がみられる程度で、簡易なナデで終わっているようである。表面には二次的な火熱を受けた形跡があって、他と同様の用途が考えられる。しかし胎土は精良で白色の粒子が少量混入する程度であり、土師質ながらきわめて硬質に焼成される

など他と異なる点も多い。表面及び胎土とも明茶褐色を呈している。50SE410埋土出土。5は幅8.8cmを測るもので、端部付近は指圧によって整形されるが、他の面は未調整らしく、粘土塊を板の上に押し当てたような状況で終わっている。胎土は砂粒を多量に含む粗いもので、表面の色調は明茶灰色、明灰白色を呈している。50SE410埋土出土。

円形台状土製品 (7) 平面形状はほぼ円形で、中央が山形に突出し、その周囲は環状の溝状を成している。当初は円筒形の台が存在していたようだが欠失しており、本来の形状は明らかではない。調整は側面が指圧及び粗雑なナデ、頂部は強いナデが施される。二次的な火熱を受けており、表面の剥離が目立つ。頂部の色調は暗茶灰色、側面は明灰白色を呈し、胎土は明茶白色で1~5mm程度の砂粒を多量に含んでいるが、表面に近いほど顕著である。50SE080上層出土。

土器片加工品 (8~10) 8は片面が平滑なナデ、その対面が渦巻き状の段差が付くもので、故意にこの部分を残して加工したようである。須恵器大蓋の摘みが剥離した部分を利用し、加工したものと思われる。50SE380石組内からの出土であるが、原体は奈良時代のものとみられる。9は白磁碗V類の底部を加工したもので、高台の一部に若干の打ち欠きがあるほか、高台と体部の境目は顕著に調整される。50SE150枠内出土。10は龍泉窯系青磁碗1-2~4類の底部を加工したもので、加工痕は底部と体部の境目に顕著で高台部分は一部が研磨される程度である。50SE377上層出土。

円筒状土製品 (11・12) 11は径2.5cm、現存高1.5cmを測るが、筒

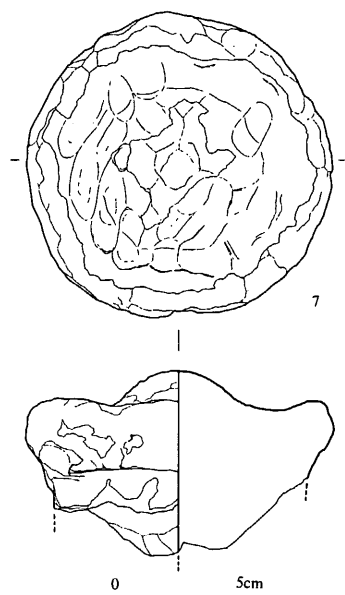


Fig.47 井戸出土生産関連遺物実測図2 (1/3)

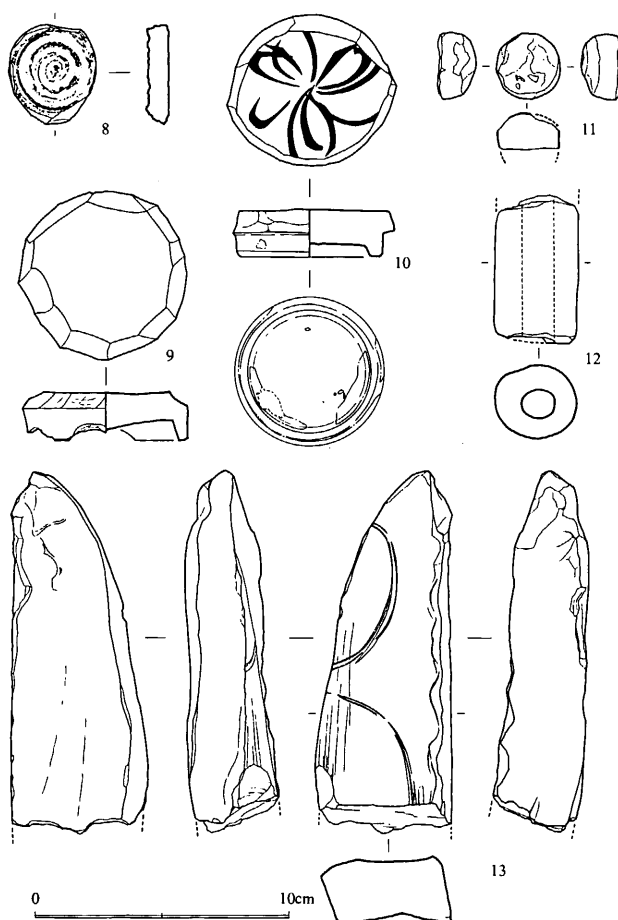
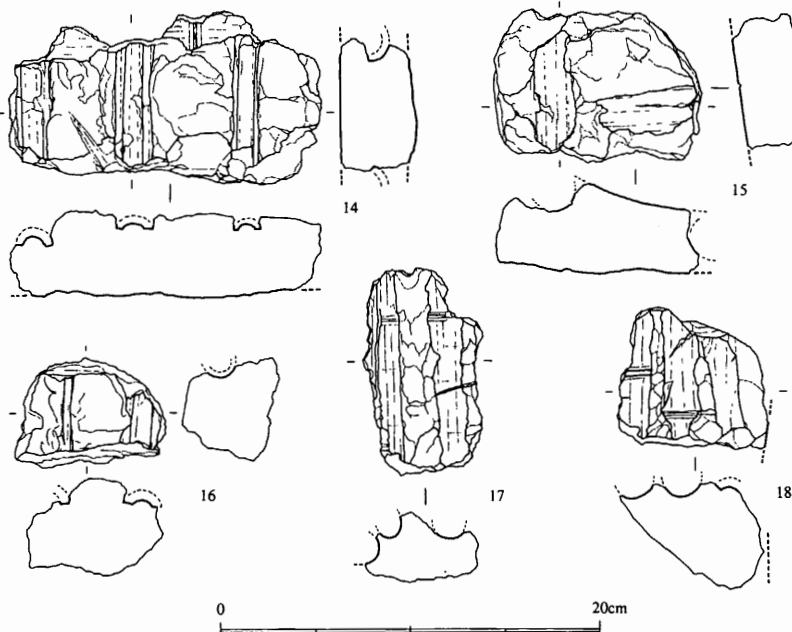


Fig.48 井戸出土土製品実測図 (1/3)

状製品の端部と理解した。表面は風化しており、調整は明らかでない。胎土は白色の小粒を若干含んでいる。50SE377最上層出土。12は径3.3cm、長さ5.9cm以上を測るもので、中央に径1.1cmの貫通する孔がある。端部（図の下端）は平坦に仕上げられ、他の面も不明瞭ながら簡易なナデで仕上げられたものと思われる。孔部分は芯棒を引き抜いたような形跡があり、棒に粘土を巻き付けて作ったものと思われる。土師質ながらきわめて硬質に焼成され、胎土は白色の粒子を微量含む程度の精良なものである。50SE410埋土出土。

方錐状土製品 (13) 竈の鏢の端部を思わせるような形状を呈しているが、本体から剥落したような形跡はない。現存長14.3cm、最大幅5.4cm、最大厚3.3cmを測り、表面の一部に半円弧文をヘラ先様のもの施す。残存する各面は強めのナデで調整され、文様のある側面に指圧よるとみられる波形圧痕がみられる。土師質で硬質に焼成され、胎土は白色砂粒を若干含む程度の精良なものである。50SE380石組内出土。

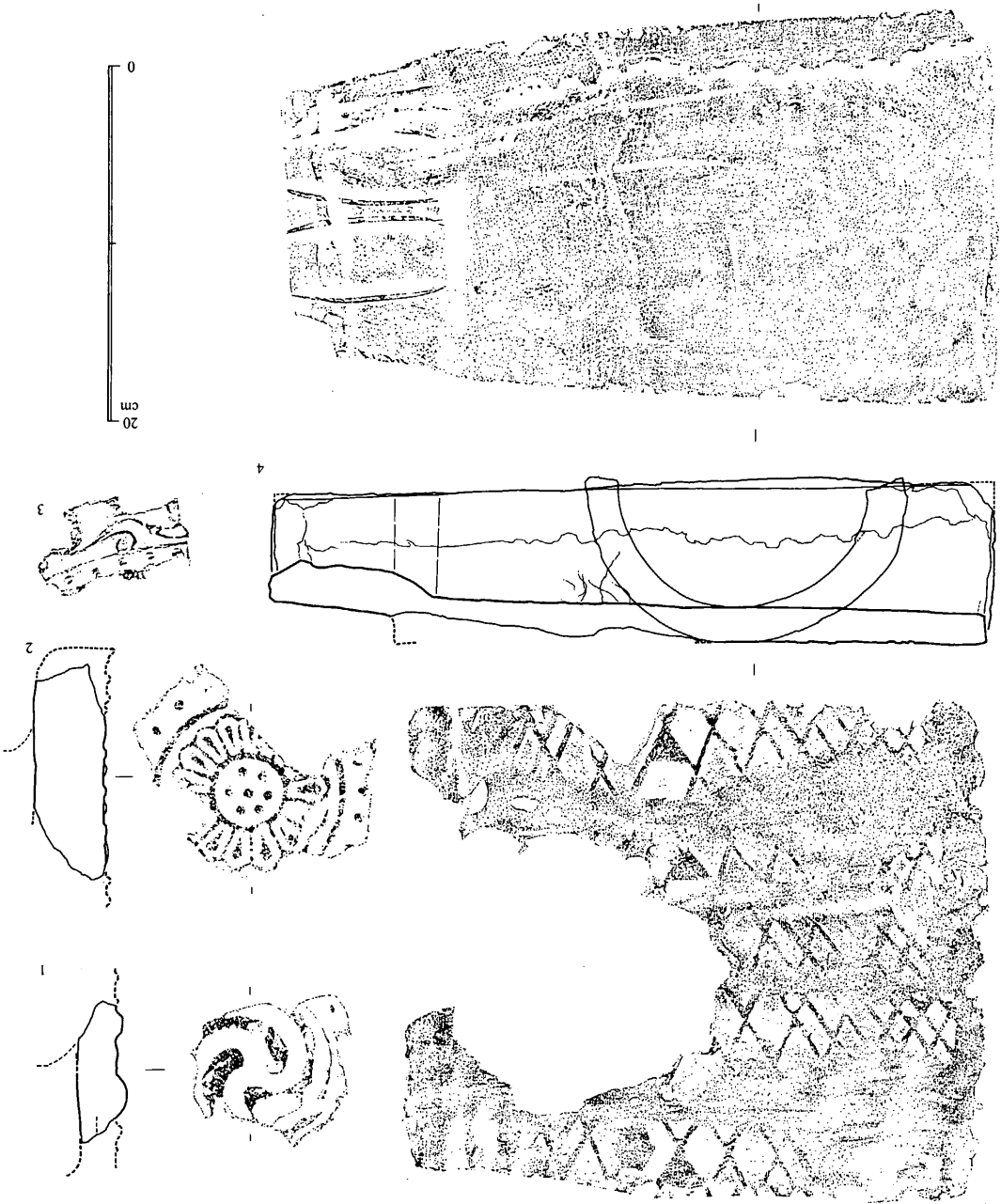
土壁 (14~18) すべて木舞の痕跡を残す。14は半裁された竹を組み合わせたことが明瞭に分かるもので、縦方向に3本、横方向に2本の痕跡がみられ、横方向のものには節の痕跡も残る。縦方向のものは径1.5~2.0cm、横方向のものは径2.0cmに復原できる。竹は縦方向のものを横方向の竹で挟み込むように組み立てていたものとみられる。縦方向の竹は5~6cm間隔で並び、横方向のものは上下が約4cm、両者間の幅は約2.5cmである。壁の表面（図では裏面）は粗雑なナデで仕上げられる。残存する厚さは最大で5.5cmを測るが、縦方向の竹が仮に壁の中心にあるとすると、厚さは8cm前後になるものと思われる。胎土は2mm前後の砂粒を多量に含むとともに、すき混じりの粗いものである。15は横方向の竹1本、縦方向の竹2本の痕跡を残す。縦方向



の竹のうち1本は半裁されていることが分かるが、他は明らかでない。壁の表面も残存しており（図の裏面）、粗雑なナデで終わる。14と同様に縦方向の竹を中心とすると厚さは約8cmとなる。なお、図の左側面にも面が若干残存している。

Fig.49 50SE377最上層出土土壁実測図 (1/4)

Fig.50 井戸出土瓦実測図及び拓影 (1/4)



粘土が押し当てられたままの状態です。特に調整された形跡がなく、柱部分に該当するのではないかとと思われる。胎土は2mm前後の砂粒を多量に含むとともに、すざ混じりの粗いものである。16は縦方向の竹2本、横方向の竹2本の痕跡が残存する。縦方向のものは半裁されているが、横方向のものは明らかでない。縦方向の竹から壁面と思われる部分までの厚さは約4cmである。胎土は2mm前後の砂粒を多量に含むとともに、すざ混じりの粗いものである。なお壁面とみられる部分は黒灰色に変色している。17は縦方向の竹3本の痕跡がきわめて密着した状態で残存

しているもので、うち1本は明らかに半裁されているが他はよくわからない。3本ともに節の痕跡が観察される。胎土は2mm前後の砂粒を多量に含むとともに、すさ混じりの粗いものである。18は縦方向の竹3本の痕跡がきわめて密着した状態で残存しているものであるが、半裁していたかどうかはわからない。うち2本に節の痕跡が観察される。図の右側面にわずかながら平坦面が観察され、柱に接していた部分の可能性を考えたい。胎土は2mm前後の砂粒を多量に含むとともに、すさ混じりの粗いものである。14~18はすべて50SE377最上層から出土した。

E：瓦類 (Fig.50~52、CD-1421~1427)

軒丸瓦 (1・2) 1は巴文で尾は約半周して終わり、隣の巴には接しない。外区には珠文帯があるが、内外区を分けるものはない。土師質に焼成され、大粒の砂粒を多量に含んでいる。50SE380石組内出土。2は弁が剣頭文状を呈するもので、単弁十六葉に復原される。中房内には1+6の蓮子が配される。外区には珠文帯が巡り、内外区の境は突圈線で区切る。50SE150枠内出土の小片に黒褐色土層出土資料が接合した。

軒平瓦 (3) 内区には左から右に流れる偏行唐草文をあしらい、上外区には珠文帯を配す

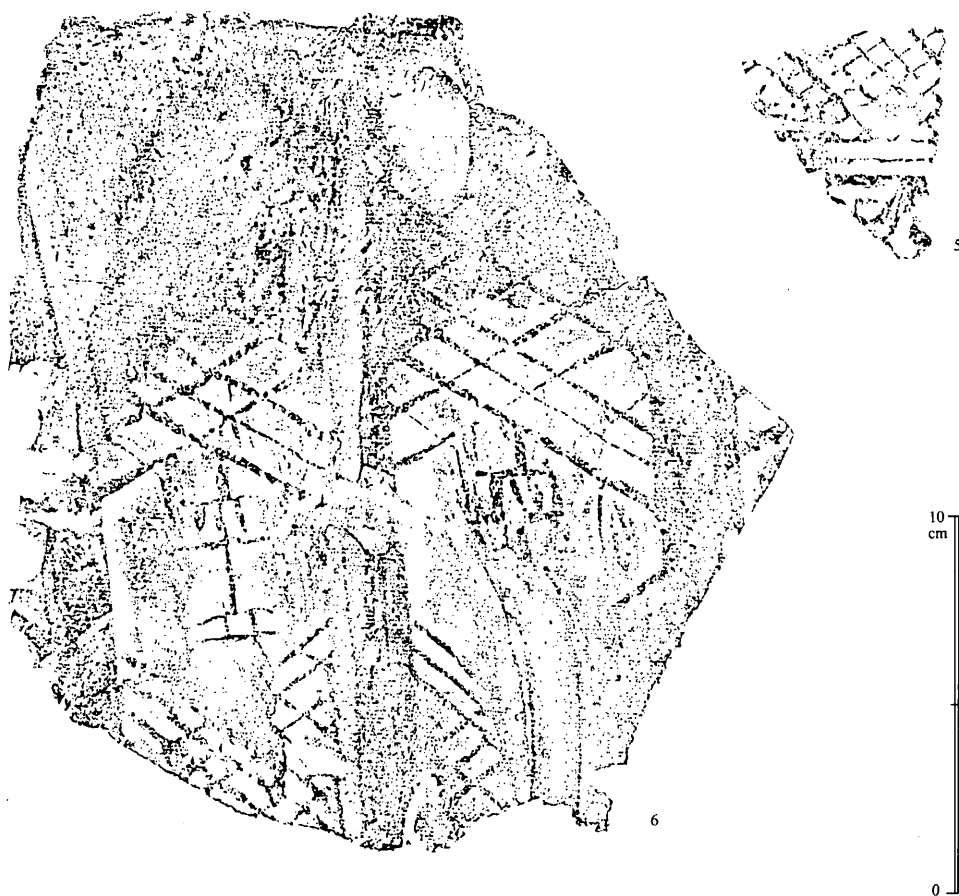


Fig.51 井戸出土文字瓦拓影 (1/2)

る。下外区は不明。平瓦の取り付け位置は瓦当中位辺りにあり、上下に粘土を補足して製作する。50SE150枠内出土。

丸瓦 (4) ほぼ完存する資料のため報告した。凸面は大きな斜格子叩きであるが、縦方向の擦り消しで全容は分からない。玉縁は凸面に粘土を補足して作るタイプで、継ぎ足された粘土が明瞭に分かる。凹面は粘土板の重ね目のほか、中位に布の継ぎ足しがあり、広端部側は目が細かく、狭端部側はきわめて粗いものを用いている。粘土円筒の切り離しは広端部側から狭端部側に向かって行われ、器肉の約半分まで切り込んだのち割っているため、外側は自然の破面となっている。50SE405桶枠内出土。

文字瓦 (5・6) 5は二重の沈線で構成される方形枠に囲まれた「平井瓦屋」と記すもので、周囲は細かめの格子目である。I-1類。50SE405埋土出土。6は「平井」でI-8-b類。叩き板の幅が最大で6.9cmであったことが知られる。50SE245出土。

瓦玉 (7~11) 平瓦の破損したものの側面を研磨あるいは打ち欠きによって平面形状を略円形にしたもので、径2.0~3.5cm、厚さ1.9~2.4cmを測るが、平瓦が原体のためその厚さを越えることはなく、2.0cm程度

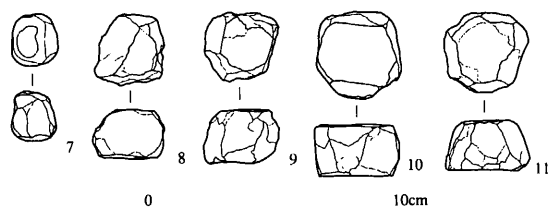


Fig.52 井戸出土瓦玉実測図 (1/3)

ものが主体である。7は50SE140枠内、8は50SE150枠内、9・10は50SE377埋土出土。11は50SE410上層出土。

F：石製品 (Fig.53、CD-1428~1442)

鍋 (1~5) すべて滑石製の鍋である。1は口径28.1cmに復原できるもので、外面及び内面の下半は黒色に変色している。調整は横方向に擦痕の残るケズリで、体部との破断面は平滑に加工している。二次的な利用を目的としながらも、途中で中断したものであろう。50SE410埋土出土。2は口径29.8cmに復原できるが、口縁端部に二次的な加工による凹凸が観察されることから、本来の形状を伝えていない可能性もある。調整は内外面ともにケズリで、内面では横方向の擦痕が顕著である。外面の一部が黒灰色に変色している。50SE410裏込土出土。3は口径16.1cmに復原できるが、煤の付着状況から口縁端部は二次的に丸く加工されていることがわかる。外面には煤の付着が顕著である。50SE270埋土。4は小型で縦方向の耳が付く鍋で、口径7.9cmを測る。内外面ともにケズリ調整が施され、外面は黒灰色に変色している。50SE120上層出土。5は底部分の資料で体部下位、底部と体部の境目、底部に各1箇所穿孔があり、3箇所とも貫通している。ただ境目のものを除く他の孔には鉄が残存しており、釘等の金具を通して何らかの用途に再利用していたようである。他の部位に二次的な加工は認められないが、体部外面と底部が黒色に変色するだけでなく、下半部の破断面も同様に黒色に変色しており、上位の破断面(新規の破損部か)が黒色に変色していないことを考えると、これも二次利用の痕跡と認識できるものと思われる。50SE377埋土出土。

硯 (6・7)
 6は暗褐色を呈する片岩系の石材を使用したもので、ほとんどが剥離、欠損している。使用面の一部に墨痕が残存している。50SE380裏込土出土。
 7は砂岩を利用したもので、両側縁が残存しており、幅9.4cmであることはわかるが、他は剥離、欠損しているため不明である。使用面は弧状をなす稜によって海部と山

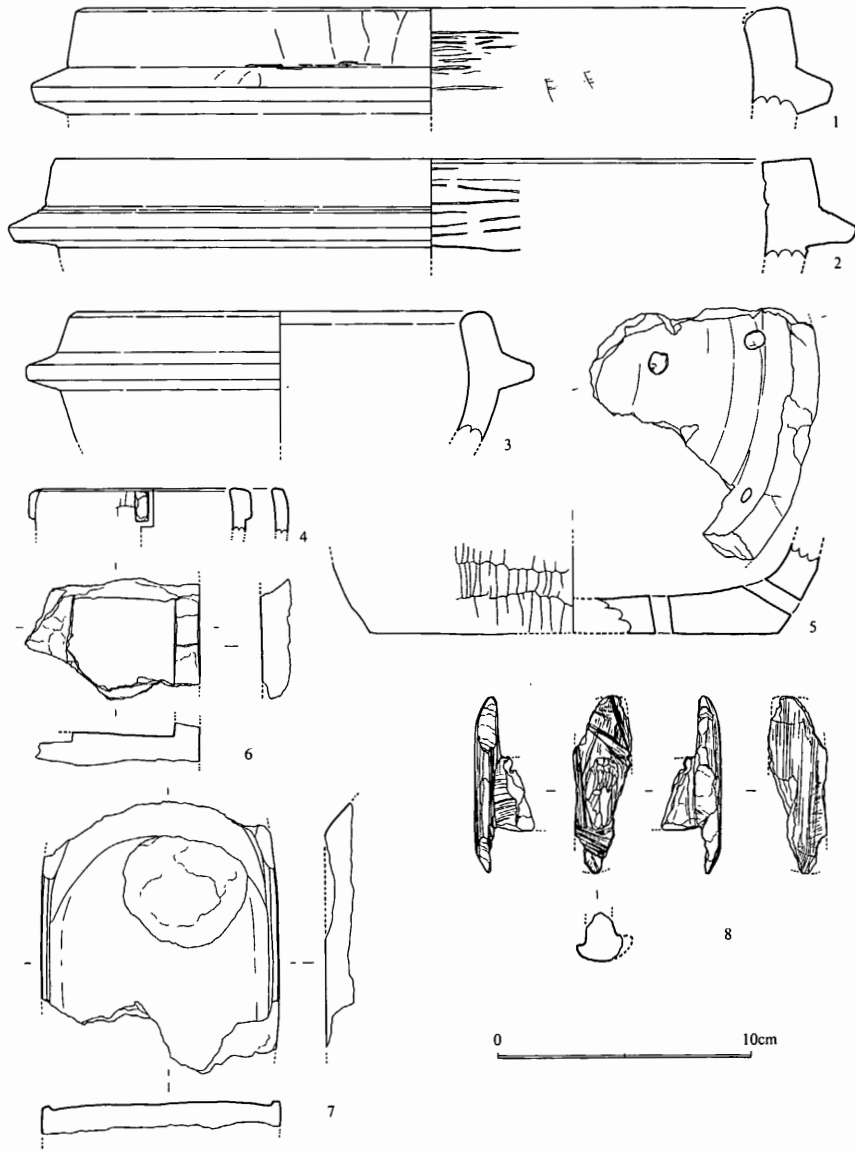


Fig.53 井戸出土石製品実測図 (1/3)

部を明確に分けている。使用面の大半に墨痕が染み込むように残存している。50SE377最上層出土。

蓋状製品 (8) やや縦長の製品で、摘みが削り出されているため、ここで蓋状製品と呼んでいるものと同類の使用目的が考えられるが、これはさらに加工が加えられた可能性も残る。摘み部分は先端を欠失しているが、その破断面に簡易な加工がある。また盤部分の両端はかなり薄く成形されるが、両側縁はやや厚めである。50SE377上層出土。

[3] 溝出土遺物

A : 土器・陶磁器

50SD110出土土器 (Fig.54、CD-1443・1444)

越州窯系青磁

椀 (1) 底径8.1cm。釉は淡灰緑色の透明なもので光沢があり、全体に細かな貫入が認められる。見込みの周囲と底部の外周に長さ0.5~1.0cmで略楕円形の目跡が連続して並んでいる。I-5類 (旧II-3類)

緑釉陶器

皿 (2) 濃緑色に発色する釉で、透明度は低い。硬質に焼成され、胎土は暗灰色で、白色の砂粒を含んでいる。近江系。

B：金属製品 (Fig.55、CD-1392)

銭 (1) 銅銭で「聖宋元寶」である。50SD110出土。

C：瓦類 (Fig.56・57、CD-1445・1446)

軒丸瓦 (1) 巴文を配するもので、外区とは圏線で画され、外区には珠文帯が巡る。焼成はあまく土師質で、明白茶色を呈している。50SD255出土。

瓦玉 (2~4) 平瓦の破損したものの側面を研磨あるいは打ち欠きによって平面形状を略円形にしたもので、径2.0~3.5cm、厚さ2.0~2.5cmを測る。2は50SD110、3・4は50SD255出土。

D：石製品 (Fig.58、CD-1447・1448)

砥石 (1・2) 1は上下端部を失うが残る4面はいずれも使用面である。砂岩製とみられ、淡灰茶色を呈している。2は使用面として残るのは1面のみで

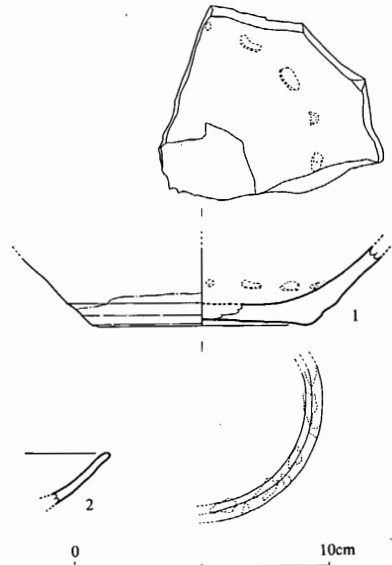


Fig.54 50SD110出土土器実測図 (1/3)



Fig.55 溝出土銅銭拓影 (1/2)



Fig.56 溝出土瓦拓影 (1/4)

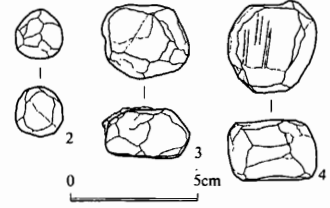


Fig.57 溝出土瓦玉実測図 (1/3)

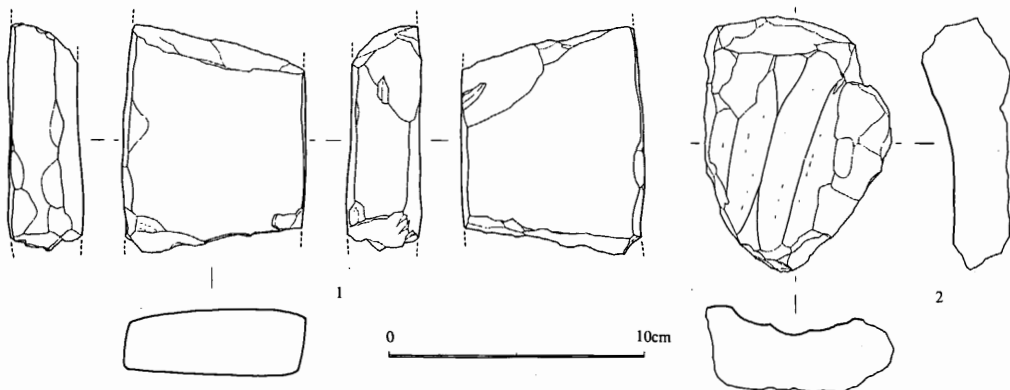


Fig.58 50SD110出土石製品実測図 (1/3)

あるが、その使用面は3条の溝状を呈している。各溝は幅1.3cm前後で、深さ1～3mm程度、断面形状は盆状に湾曲している。周囲の多くを破損しているが裏面はほぼ残っており、使用面の形状から推定すると当初の大きさに近いものと思われる。1・2とも50SD110出土。

[4] 土坑

A：土器・陶磁器

50SK001直上出土土器 (Fig.59、CD-1449～1454)

土師器

小皿a (1～4) 口径7.8～9.5cm、器高1.0～1.3cm、底径6.2～8.3cmを測る。底部は糸切りされる。

小皿b (5) 口径7.6cm、器高2.4cm、底径5.4cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (6・7) 口径13.0・14.0cm、器高2.4・2.6cm、底径8.7・10.6cmを測る。底部は糸切りされる。

龍泉窯系青磁

碗 (8) 口径16.3cm。外面に蓮弁文を配するが、蓮弁はまず弁間を窪ませて稜を残し、その先端部にヘラで弁端を描き加えるものである。釉はかなり厚めに施されるもので、明緑白色に発色し光沢があり、大きな貫入がみられる。III-2類。

50SK001出土土器 (Fig.59、CD-1455～1458)

土師器

小皿a (9～12) 口径8.0～9.6cm、器高1.0～1.3cm、底径6.4～8.2cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (13～15) 口径12.0～13.7cm、器高2.3～2.5cm、底径7.6～9.8cmを測る。底部は糸切りされる。

50SK015出土土器 (Fig.59、CD-1459～1464)

土師器

小皿a (16・17) 口径8.5・10.0cm、器高1.2・1.3cm、底径5.9・7.6cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

小皿b (18) 口径7.4cm、器高1.6cm、底径5.4cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (19) 口径11.8cm、器高2.4cm、底径8.0cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

須恵質土器

甕 (20) 底部付近の資料で、内面はハケ目、体部外面は指圧の後ナデを行い、底部はヘラケズリされる。明灰色を呈し、硬質に焼成される。

同安窯系青磁

皿 (21) 口径10.0cm、器高2.1cm、底径4.4cmを測る。釉は明黄緑色に発色するもので、透

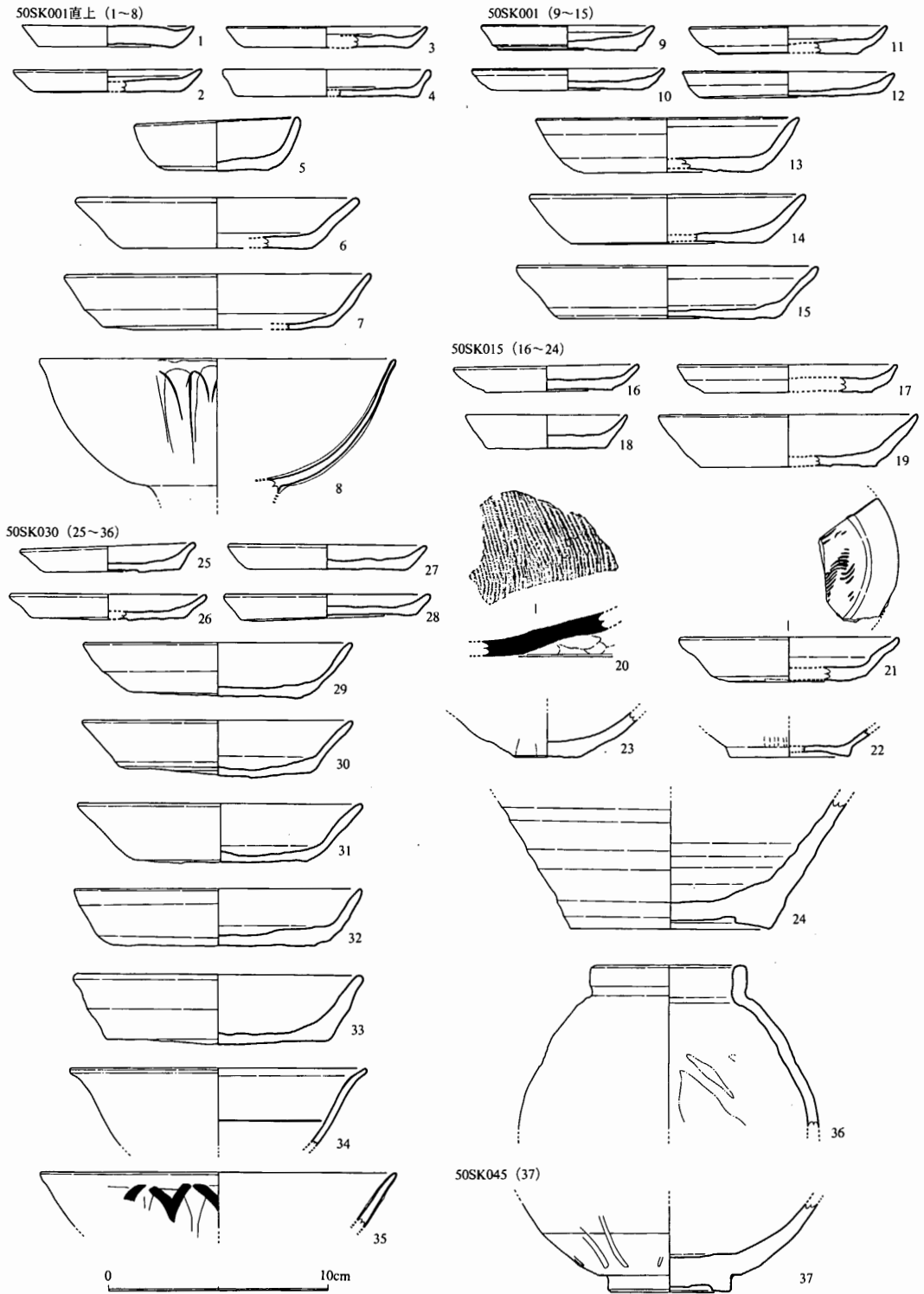


Fig.59 50SK001・015・030・045出土土器実測図 (1/3)

明度が高く、光沢もある。外面底部は釉を掻き取っている。見込みに櫛による施文がある。I-2-b類。

青白磁

合子 (22) 高台径5.4cm。外型によって成形され、外面は露胎で、明茶白色、明茶褐色を呈している。内面にかかる釉は明青白色に発色し、透明度は低い。外面体部に縦方向の施文があるが、文様構成はわからない。

陶器

小皿 (23) 底径3.3cmで、底部はヘラ切りされる。暗茶色で光沢がなく、不透明な釉を施す。胎土は明茶色で、白色の微粒子と褐色の粒子を若干含んでいる。

水注 (24) 四耳壺の可能性もある。底径9.1cm。底部は回転ヘラケズリによって輪状高台風に削り出す。釉は全面に施され、暗茶色に発色するが、不透明で鈍い光沢がある。胎土中に白色の砂粒を多く含んでいる。水注VIII類もしくは四耳壺VI類かVII類。

50SK030出土土器 (Fig.59、CD-1465~1472)

土師器

小皿a (25~28) 口径8.0~9.4cm、器高1.1~1.2cm、底径6.2~9.4cmを測る。底部は糸切りされるが、27は付着物が多く判別しにくい。

坏a (29~33) 口径12.3~13.2cm、器高2.4~3.2cm、底径7.8~10.2cmを測る。底部は糸切りされ、33以外には板状圧痕が認められる。

白磁

椀 (34) 口径13.6cmで、口縁端部の釉を拭き取っている。体部中程に細沈線が巡っている。IX類。

龍泉窯系青磁

椀 (35) 口径16.2cmで、外面には蓮弁文を配している。I-5-b類。

陶器

壺 (36) 口径7.0cm。残存部の全面に施釉され、暗茶色に発色し、不透明で光沢はほとんどない。胎土は淡茶色を呈し、白色及び茶褐色の粒子が多量に含まれている。IV類。

50SK045出土土器 (Fig.59、CD-1473・1474)

龍泉窯系青磁

椀 (37) 高台径5.6cm。外面にはヘラで輪郭をとり、鏝のない蓮弁を配する。I-5-a類。見込みにスタンプの押捺があるが文様構成はわからない。

50SK050出土土器 (Fig.60、CD-1475~1478)

須恵質土器

片口鉢 (1) わずかに片口の部分を残存する資料で、淡灰色を呈し硬質に焼成される。東播系。

甕 (2) 口径24.2cm。体部外面は並行叩き、内面は工具を用いたナデとみられる。明灰色で硬質に焼成され、胎土には白色砂粒を多く含んでいる。亀山産もしくは樺万杖産とみられる。

龍泉窯系青磁

椀 (3) 高台径5.7cm。釉は不透明で白濁化している。I類。

陶器

甕 (4) 大甕の口縁部で、体部の内外面に施釉され、口縁部は露胎である。釉は淡黄緑色に発色し、透明度はかなり低い。内面には同心円状の当て具痕跡が残っている。II類。

50SK055上層出土土器 (Fig.60、CD-1479・1480)

土師器

坏a (5) 口径14.6cmで、体部は大きく開いている。

同安窯系青磁

皿 (6) 釉は明緑白色に発色し、透明度の高いもので光沢がある。内面にヘラによる施文がある。I-b類。

陶器

鉢 (7) 無釉で外面上半は淡灰黄色、内面はやや黄色味を帯びた暗茶色を呈している。胎土中に砂粒を多量に含んでいる。I-1-b類。

50SK055下層出土土器 (Fig.60、CD-1481・1482)

龍泉窯系青磁

椀 (9) 見込みにヘラと櫛による施文、体部内面に櫛による施文の一部が残存している。I-2~4類とみられる。

陶器

四耳壺 (8) 淡緑灰色に発色する釉で、口縁部の内傾する面に暗白色の砂粒が付着しており、目跡と考えられる。VI類か。

50SK060直上出土土器 (Fig.60、CD-1483~1492)

土師器

小皿a (10~12) 口径8.8~9.3cm、器高0.9~1.1cm、底径7.1~7.2cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (13~15) 口径12.0~15.0cm、器高2.0~3.2cm、底径7.5~11.1cmを測る。底部は糸切りされる。

同安窯系青磁

皿 (16) 口径10.0cm、器高1.8cm、底径4.1cmを測る。体部上位以下は露胎で、暗茶灰色を呈している。釉は明緑灰色に発色し、透明感があり光沢もある。I-1-a類。

龍泉窯系青磁

椀 (17) 外面に鎬蓮弁を配する。釉は緑黄色に発色し、光沢がある。I-5-b類。

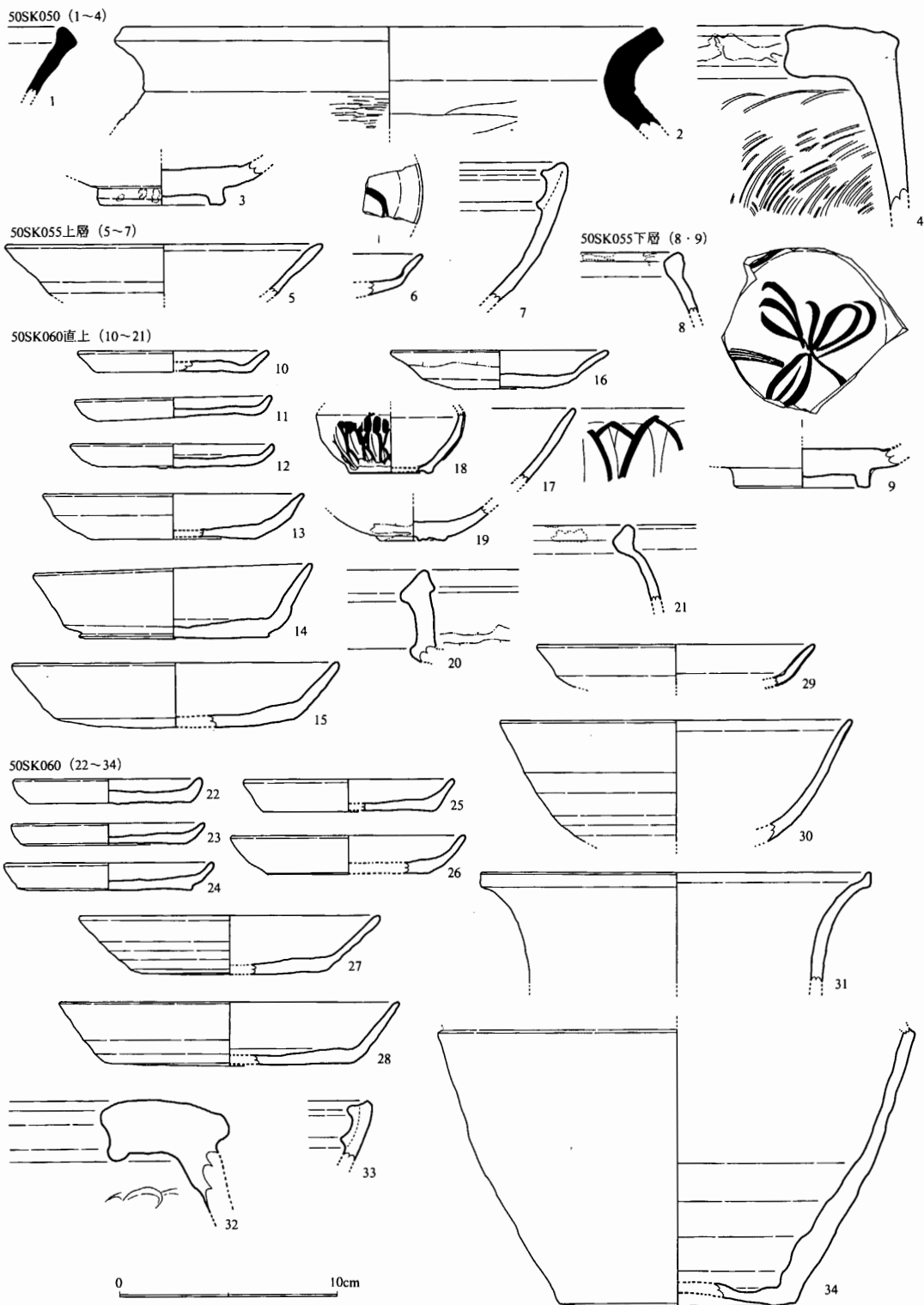


Fig.60 50SK050・055・060出土土器実測図 (1/3)

青白磁

小壺 (18) 文様を彫り込んだ外型による成形で、高台部周辺には施釉しない。高台径3.8cmで、釉は明青白色に発色する透明なものである。外面の文様は蓮弁文である。

陶器

小皿 (19) 底径3.0cmでヘラ切りされる。暗褐色で不透明な釉がかかり、光沢もない。胎土は暗茶灰色で暗褐色の粒子が目立つ。

耳壺 (20) 口縁部の破片で、淡茶色で不透明な釉を施す。胎土は明灰色で大粒の黒色粒子を多量に含み、白色砂粒も含まれる。XII類。

鉢 (21) 口縁部の内傾する部分に暗白茶色の砂粒が付着しており、目跡とみられる。釉は暗茶褐色で不透明なものである。III類。

50SK060出土土器 (Fig.60、CD-1493~1502)

土師器

小皿a (22~26) 口径8.7~10.8cm、器高1.0~1.8cm、底径7.3~8.0cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (27・28) 口径13.8・15.6cm、器高2.7・2.9cm、底径8.0・11.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

龍泉窯系青磁

椀 (30) 口径16.2cm。内外面とも無文である。I-1類。

皿 (29) 口径12.8cm。I-1類。

灰釉陶器

壺 (31) 口径17.9cm。内面に緑味を帯びた透明度の高い釉が施され、外面では飛散したような状況でわずかに観察される程度である。胎土は明灰色で、硬質に焼成される。

陶器

甕 (32) 釉は暗緑茶色に発色するもので、体部の全面と口縁部では縞状にかけられる。露胎部分は暗灰茶色で、胎土中には白色の砂粒を多量に含むほか、茶色砂粒が若干含まれている。II類。

鉢 (33) 無釉で外面は淡黄茶色、内面は暗茶色を呈している。胎土中に白色砂粒を多量に含み、黄茶色粒子も若干見受けられる。I-1-b類。

四耳壺 (34) 底径10.8cm。無釉で外面は明茶色、内面は淡灰茶色を呈する。胎土は淡灰色で、白色の砂粒が目立つが黒色の粒子も若干含まれる。体部はヨコナデで仕上げられ、底部はナデとみられる。四耳壺もしくは双耳壺XI類。

50SK075出土土器 (Fig.61、CD-1503~1521)

土師器

小皿a (1~7) 口径7.6~9.8cm、器高0.9~1.5cm、底径5.5~7.8cmを測る。底部は糸切りさ

れ、1・4以外には板状圧痕がみられる。

坏a (8~10) 口径13.0~13.3cm、器高2.2~3.0cm、底径8.6~9.9cmを測る。底部は糸切りされる。

土師質土器

鍋 (11) 口縁部と体部の境目にはかかるい屈曲がある。内面はハケ目、外面には指圧痕がみられる。

瓦質土器

鉢 (13) 暗灰色を呈し、内面は横方向のナデとみられ、外面には指圧痕が残っている。

火鉢 (12・14) 12は内湾する口縁部を有し、外面には菊花文のスタンプを押捺する。内面には指圧痕がみえる。明茶白色で土師質。14は外面にミガキcを施す。

須恵質土器

鉢 (15・16) 15は東播系。16は口縁端部内側を強いヨコナデによって窪ませるもので、胎土中には大粒の白色砂粒を含んでいる。十瓶窯系か。

龍泉窯系青磁

椀 (17~19) 17は口径17.0cmで、外面に鎬蓮弁を配する。I-5-b類。18は口径11.6cm。緑茶色で透明感のある釉をかけるが、貫入が多く外面では細かな凹凸が目立つ。胎土は陶器質で、明茶白色を呈し、微粒子を若干含んでいる。上田分類E類。19は口径15.6cmで、釉は淡緑色に発色し、光沢がある。IV類。

瓶 (20) 胴部中程の資料で、内面の最大径のある部位よりやや上位に粘土のつなぎ目とみられる段があり、外面には上半部に蓮華文、下半部にラマ式蓮弁を並べる。釉は内外面ともに施され、厚めで淡緑色に発色するが透明度は低く、文様も不明瞭になっている。IV類か。

高麗青磁

椀 (21) 釉は暗緑灰色に発色し、細かな貫入が認められる。内外面ともに象嵌による文様があり、文様部分は暗白黄色を呈している。

白磁

皿 (22・23) 22は口径10.0cm。型作りされるもので、底部に釉はかからず、口縁端部では釉を掻き取っている。釉はやや黄灰色気味の透明なもので、光沢があり貫入が多い。胎土は白色で、細かな気泡が目立つ。23は口径7.8cm、器高2.7cm、高台径3.4cmを測る。光沢のあるやや青味を帯びた透明な釉で、貫入が目立つ。釉は高台周辺にはかからない。森田分類D群。

灯臺 (24) 口径9.4cm。釉は緑味を帯びた透明度の低いもので、内面では光沢を保つが、外面は白濁化して光沢はない。口縁部付近のみ掻き取られており、その露胎となった部分には漆とみられる付着物がある。IX類。

壺 (25) 折り曲げられた口縁端部の径は11.6cm。釉は明緑灰色に発色し、光沢がある。

李朝陶器

小椀 (26) 口径9.9cm、器高3.6cm、高台径4.4cmを測る。淡灰色で不透明な釉は全面に施され、鈍い光沢を放つ。見込みと畳付けに各々4箇所が目跡が残る。口縁部内側は釉が溜まり肥厚しており、一部に漆とみられる付着物がある。胎土は淡灰色で、大粒の砂粒を微量含んでいる。

陶器

小皿 (27) 口径9.8cm。釉は暗茶色に発色するが、表面はざらつく。外面の口縁部直下に別の個体の一部とみられる付着物があり、重ね焼きが行われていたことを窺わせる。

壺 (28・29) 28は常滑産で、無釉。表面は暗褐色を呈している。胎土中には白色及び黒褐色の砂粒が多量に含まれる。29は瀬戸の鉄釉の壺と思われる。胴部にヘラによる施文のあるもので、釉は暗茶色で文様部分はさらに暗い発色になる。釉は内面にはかからない。胎土は淡灰茶色で精良なものである。

50SK088出土土器 (Fig.61、CD-1522・1523)

土師器

小皿a (30) 口径9.4cm、器高1.2cm、底径7.3cmを測る。底部の切り離しは不明。

龍泉窯系青磁

坏 (31) 口径9.4cm、器高3.5cm、底径4.8cmを測る。淡緑白色に発色する釉は厚めにかかっているが、高台先端部分は掻き取られている。III-1類。

50SK095出土土器 (Fig.61、CD-1524・1525)

土師器

小皿a (32・33) 口径7.5・8.1cm、器高1.4・1.3cm、底径5.9・6.0cmを測る。底部は糸切りされる。

50SK105出土土器 (Fig.61、CD-1526・1527)

土師器

小皿a (34・35) 口径8.2・9.0cm、器高0.9・1.1cm、底径7.0・6.3cmを測る。底部は糸切りされる。

龍泉窯系青磁

椀 (36) 外面に鎬蓮弁を配する。I-5-b類だが、口縁端部に輪花がある。

50SK115出土土器 (Fig.61、CD-1528～1531)

土師器

小皿a (37) 口径7.2cm、器高1.2cm、底径5.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (38・39) 口径12.4・13.0cm、器高2.5・2.8cm、底径8.4・7.9cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

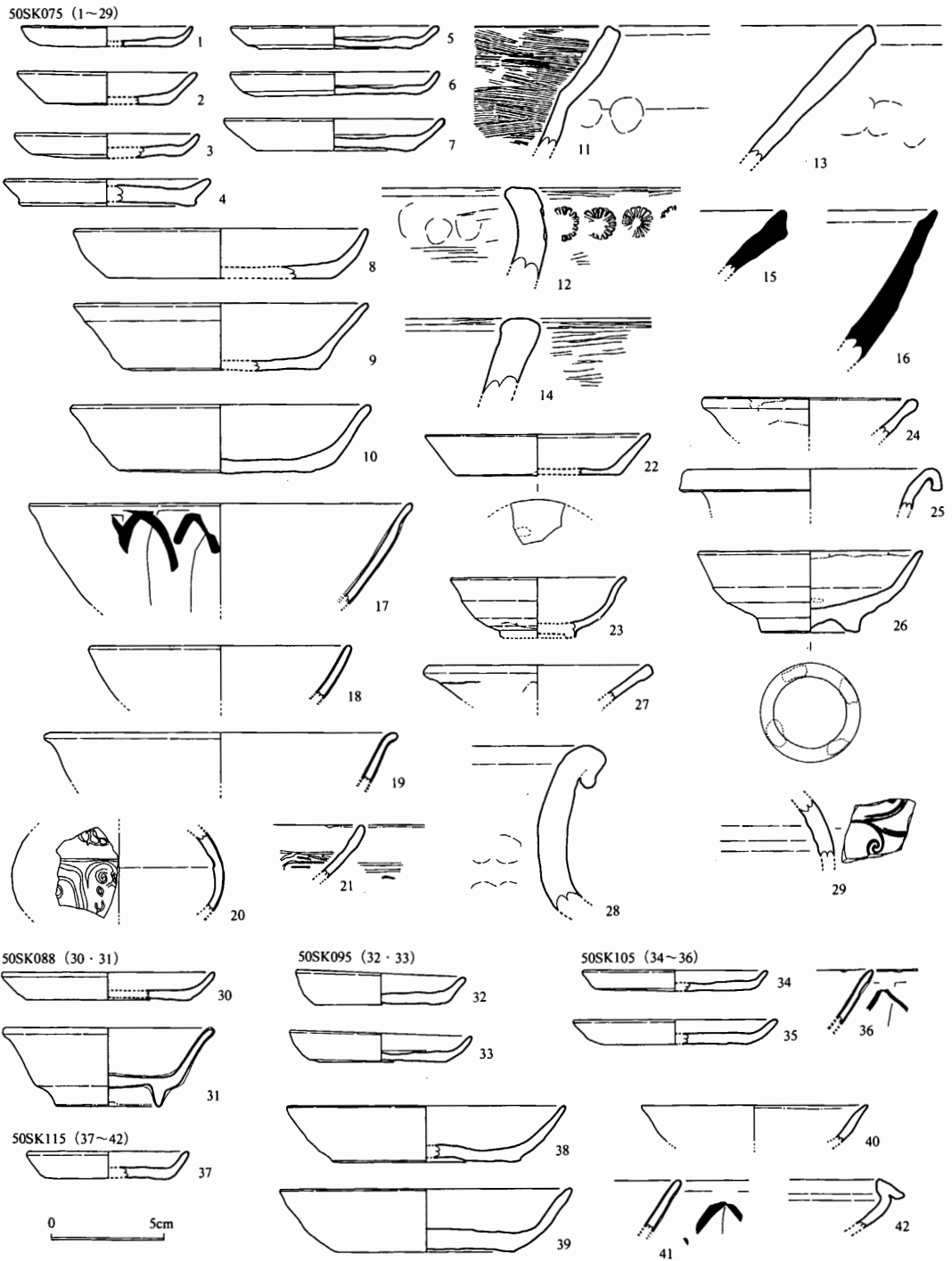


Fig.61 50SK075・088・095・105・115出土土器実測図 (1/3)

皿 (40) 口径10.0cm。口縁端部の釉を掻き取っている。IX-3類。

龍泉窯系青磁

椀 (41) 外面に鎬蓮弁を配するものである。I-5-b類。

陶器

鉢 (42) 釉は淡緑茶色に発色する透明なもので、光沢がある。VI類。

50SK125出土土器 (Fig.62、CD-1532~1537)

土師器

小皿a (1~3) 口径8.0~9.2cm、器高1.0~1.2cm、底径6.2~7.4cm。底部は糸切りされる。

小皿b (4) 口径6.8cm、器高1.5cm、底径4.5cm。底部は糸切りされる。

坏a (5) 口径13.6cm、器高2.8cm、底径8.6cmを測る。底部は糸切りされる。

白磁

皿 (6・7) 6は口径8.2cm、器高1.5cm、底径5.0cmを測る。底部の釉はきわめて薄くかかり、口縁部も釉を掻き取っている。口縁部の露胎部分は黒灰色の付着物(漆か)がほぼ全面に巡っている。IX-1-a類。7は口径9.0cm、器高1.7cm、底径6.8cmを測る。釉は黄色味を帯びた透明なもので光沢がある。体部下半から底部にはかからず、口縁端部は掻き取っている。外面の底部と体部の境目には小さな亀裂が目立ち、型による成形とみられる。50SK075からも同類が出土している。

龍泉窯系青磁

盤 (8) 口径19.9cm。釉は明茶白色に発色し、光沢がある。内面に櫛による施文がある。胎土はやや軟質の陶器質で、淡黄茶色を呈し細かな気泡がある。IV類。

青白磁

皿 (9) 口径10.0cm。青味を帯びた釉を施すが、口縁部は掻き取っている。内面には型による雷文がある。露胎部の一部に黒茶色の付着物(漆か)がある。

陶器

小皿 (10) 口径9.4cm。釉は淡褐色で不透明であり、光沢もない。胎土は明茶色で白色の粒子を若干含んでいる。

盤 (11) 釉は淡灰緑色に発色するもので、鈍い光沢がある。口縁部の内傾する部分にはかからない。その露胎となる部分には茶褐色の変色部位があり、口縁端部には暗白茶色の砂粒が帯状に付着しており、目跡と思われる。I-2類。

鉢 (12) 鉢としたが器種は特定困難である。釉はやや緑味を帯びた灰色に発色するもので、鈍い光沢がある。瀬戸産とみられる。

50SK130上層出土土器 (Fig.62、CD-1538・1539)

白磁

皿 (13) 口径10.0cm。口縁端部の釉は掻き取られ、その部分に黒色の付着物(漆?)がある。IX-1-a類。

龍泉窯系青磁

碗 (14) 外面に鎬蓮弁を配するもので、I-5-b類。

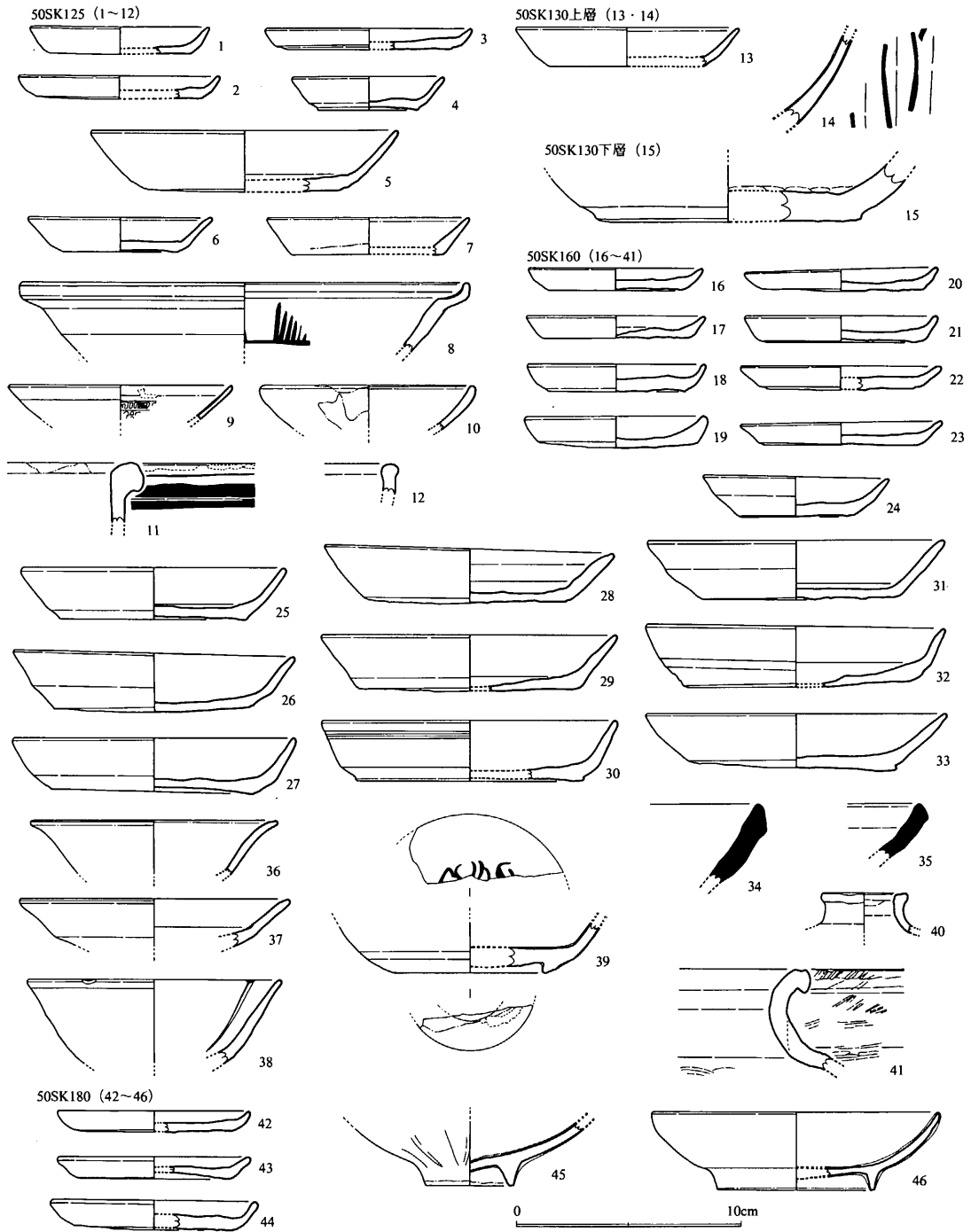


Fig.62 50SK125・130・160・180出土土器実測図 (1/3)

50SK130下層出土土器 (Fig.62、CD-1538・1539)

土師質土器

鉢 (15) 表面は風化して調整の観察は難しいが、内面の底部と体部の境目には指圧痕が連続して観察される。

50SK160出土土器 (Fig.62、CD-1540~1553)

土師器

小皿a (16~23) 口径7.8~9.0cm、器高1.0~1.4cm、底径6.0~7.2cmを測る。底部は糸切りされ、23以外にはすべて板状圧痕がある。また19の口縁部には煤が付着している。

小皿b (24) 口径8.2cm、器高1.3cm、底径5.2cmで、底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (25~33) 口径11.8~13.4cm、器高2.3~2.7cm、底径8.3~10.8cmを測る。底部は糸切りされ、36以外にはすべて板状圧痕がある。

須恵質土器

鉢 (34・35) いずれも硬質に焼成される。34は東播系。

瓦質土器

甕 (41) 体部から頸部にかけての外面は叩き痕があり、頸部以上はヨコナデで消える。体部内面には当て具の痕跡があるが不明瞭。表面は黒灰色、胎土は茶灰色で白色粒子が若干混在するもので、やや軟質。

白磁

皿 (36) 口径11.0cm。外反する口縁の端部は釉を拭き取っている。IX-1-d類。

龍泉窯系青磁

小椀 (38) 口径11.2cm。口縁端部に輪花があり、その直下の内面には縦方向の隆線がある。I-3類。

坏 (37・39) 37は口径12.0cm。見込みの外周に小さな段がある。釉は淡緑色で透明度の低いものである。IV類。39は底径6.7cm。やや厚めにかかる釉は淡黄緑色に発色し光沢があるが、細かな気泡が認められる。釉は底部中央付近を除いて全面に施され、見込みにはスタンプによるとみられる文様がある。IV類。

陶器

壺 (40) 口径3.8cm。濁った黄緑色で発色がわるく、不透明で光沢はない。胎土は明茶色で、白色の微粒子や黒褐色粒子を若干含んでいる。

50SK180出土土器 (Fig.62、CD-1554~1557)

土師器

小皿a (42~44) 口径8.6~9.2cm、器高0.9~1.3cm、底径6.9~7.2cmを測る。底部は糸切りされる。

龍泉窯系青磁

椀 (45) 高台径3.9cm。釉は淡緑色に発色し、透明度は低い光沢はある。高台先端は釉を掻き取っている。体部外面には蓮弁文を配するが不明瞭である。III-2類。

坏 (46) 口径12.8cm、器高3.5cm、高台径7.0cmを測る。釉は淡緑灰色に発色し、光沢はあるが貫入が目立つ。高台先端は釉を掻き取るが、他の部位はきわめて厚くかかる。III-5-a類。

50SK210出土土器 (Fig.63、CD-1558～1563)

土師器

小皿a (1～4) 口径7.6～8.2cm、器高1.2～1.3cm、底径5.2～6.5cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

小皿b (5) 口径7.6cm、器高1.5cm、底径5.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (6～9) 口径11.8～14.4cm、器高2.6～3.4cm、底径7.8～9.8cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残るものもある。

瓦器

碗c (10) 高台径5.1cm。内面はミガキbとみられ、きわめて平滑に処理される。外面はヨコナデが観察されるのみである。

瓦質土器

片口鉢 (11) 口縁の一部は明茶黄色、他は黒灰色を呈している。

陶器

壺 (12) 高台径12.4cm。外面は暗茶褐色、内面は暗茶灰色に発色する釉で、底部にはかからず露胎である。胎土は明灰色を基調とし、黒灰色の粒子が多数確認され、小さな気泡も認められる。底部のみ焼成不良でやや軟質。他は硬質。

50SK235出土土器 (Fig.63、CD-1564・1565)

白磁

碗 (13) 口径15.2cm。IV類。

50SK236上面出土土器 (Fig.63、CD-1566～1571)

土師器

小皿a (14・15) 口径8.3・9.0cm、器高1.0・1.3cm、底径6.2・7.3cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (16～21) 口径12.7～14.7cm、器高2.3～2.8cm、底径9.0～10.6cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

土師質土器

火鉢 (22) 外面に菊花文を押捺する。

青白磁

皿 (23) 見込みに細い櫛状の隆線文がある。

50SK236出土土器 (Fig.63、CD-1572～1577)

土師器

小皿a (24～28) 口径8.1～9.0cm、器高1.0～1.4cm、底径6.8～7.4cmを測る。底部は糸切りされ、ほとんどに板状圧痕が残る。

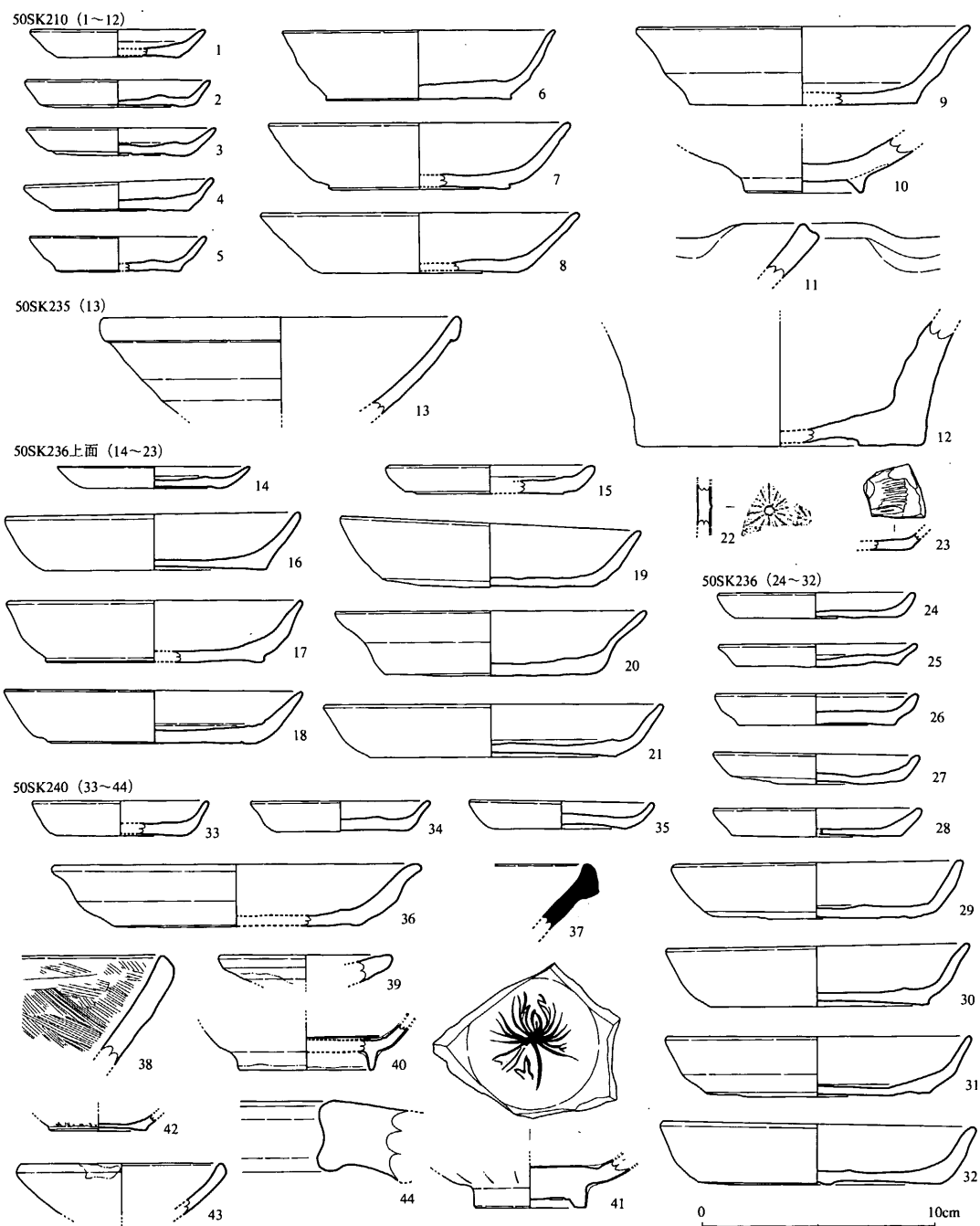


Fig.63 50SK210・235・236・240出土土器実測図(1/3)

坏a (29~32) 口径12.5~13.6cm、器高2.5~2.7cm、底径9.4~10.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

50SK240出土土器 (Fig.63、CD-1578~1585)

土師器

小皿a (33~35) 口径7.6~8.0cm、器高1.2~1.5cm、底径5.4~5.6cmを測る。底部は糸切り

され、ほとんどに板状圧痕が残る。

坏a (36) 口径15.9cm、器高2.7cm、底径10.7cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

須恵質土器

鉢 (37) 東播系。

瓦質土器

鉢 (38) 内面は細かなハケ目を施す。

白磁

39は口径7.6cmで、外面下半には施釉されない。釉は淡灰緑色に発色し、光沢がある。胎土は黄茶色、淡灰茶色を呈する。器種不明。

龍泉窯系青磁

坏 (40) 高台径5.8cmで、内面の体部と底部の境目に沈線状の段を巡らす。釉は淡緑色に発色し、透明度はやや低い。高台端部の釉は掻き取られる。III-2～5-a類。

椀 (41) は外面に蓮弁文を配し、見込みに草花文のスタンプを押捺するもので、I-5-c類。

青白磁

合子 (42) 底径4.2cmで外型によって成形される。外面は露胎、内面はやや黄色味を帯びた釉がかかる。

陶器

小皿 (43) 口径9.0cm。口縁の一部に露胎部分があるが、他は暗茶色で不透明な釉がかけられる。胎土は明灰色で、白色の粒子を含むものである。

甕 (44) 釉は暗緑色で不透明なもので、ほとんど光沢はない。胎土は暗赤茶色で、砂粒を多量に含んでいる。II類。

50SK244出土土器 (Fig.64、CD-1586～1591)

土師器

小皿a (1～3) 口径8.2～9.0cm、器高1.0～1.1cm、底径6.4～7.3cmで、底部は糸切りされる。

瓦質土器

鉢 (9) 口径31.9cm。表面は風化し剥落が目立つが、内面はハケ目、外面もわずかにハケ目の痕跡を見出す。

白磁

壺 (4) 口縁部最大径11.2cm。灰緑色気味で透明感のある釉で、貫入が目立つ。

青白磁

皿 (5) 青味を帯びた透明感のある釉を内外面ともにかける。文様は型によるもので、見込みに双魚文、藻文等を配する。

燭台 (6) 釉は光沢のある水色で透明度の高いものであるが、細かい気泡がありそれが黒点状に見える。内面は露胎である。大宰府条坊跡第19次調査19SD001下層出土品の一部である。

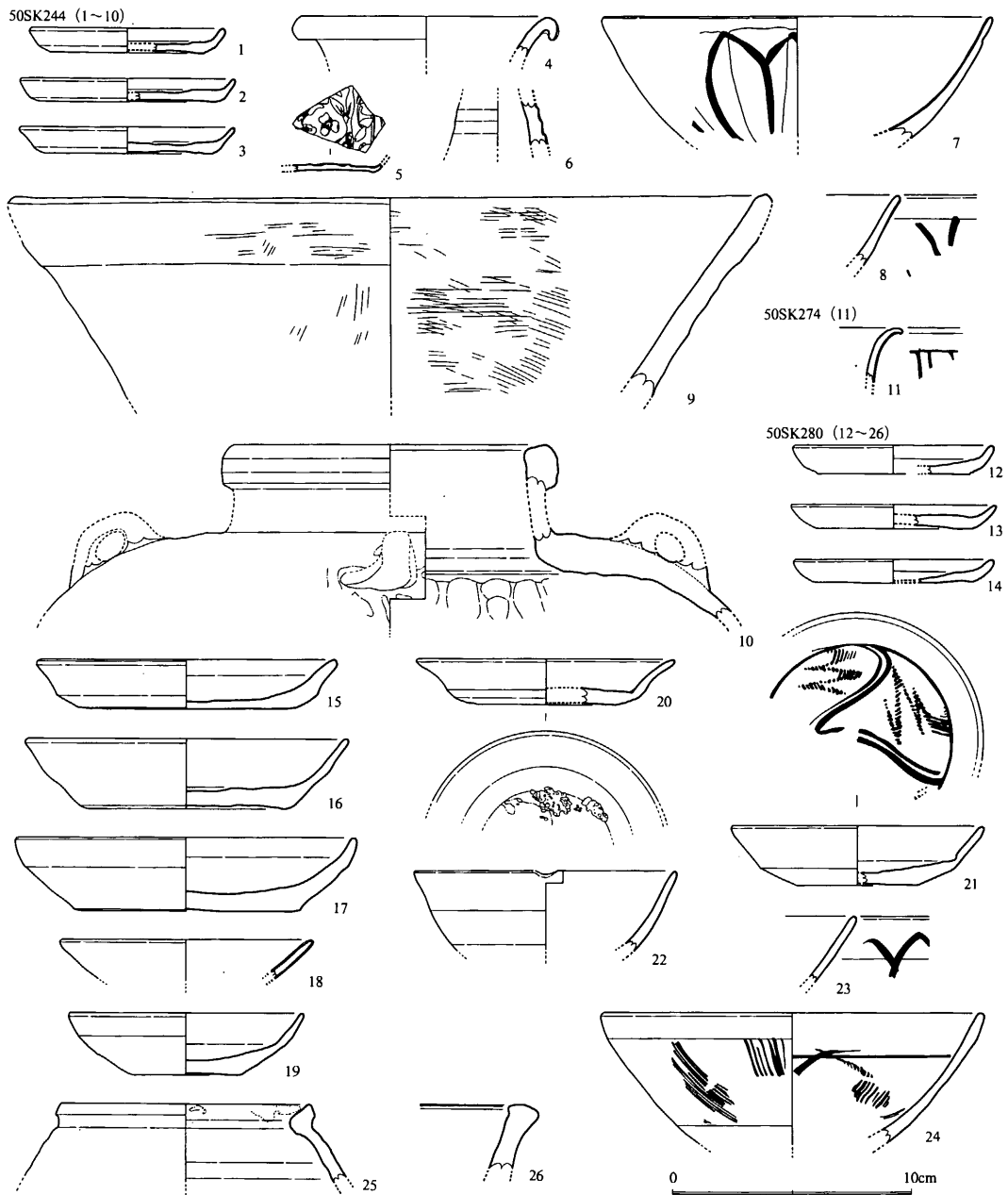


Fig.64 50SK244・274・280出土土器実測図 (1/3)

龍泉窯系青磁

碗 (7・8) 7は口径16.2cm。外面に鏤蓮弁文を配するもので、I-5-b類。8は外面にヘラによる施文がある。おそらく蓮弁文と思われるが全容は知り得ない。釉は淡緑色に発色するもので、貫入が多く、光沢はあるが透明度はやや低い。胎土は明灰色、明茶白色で、陶質気味。IV類。

陶器

四耳壺 (10) 3片を図上で接合している。復原される口径は13.0cmで、肩部に縦方向の耳

が付く。釉は内面では口縁部から肩部の一部、外面では全体にかかり、暗茶色で不透明なもので鈍い光沢がある。胎土は淡灰茶色で、白色、黒灰色等の砂粒を多く含んでいる。XII類。

50SK274出土土器 (Fig.64、CD-1592・1593)

青磁

椀 (11) 外面にヘラによる縦方向の施文がある。釉は淡緑灰色に発色し、透明度の高いものでやや厚めにかかる。龍泉窯系もしくは同安窯系青磁0類とみられる。

50SK280出土土器 (Fig.64、CD-1594～1605)

土師器

小皿a (12～14) 口径8.4～8.6cm、器高1.0～1.2cm、底径6.4～6.6cmを測る。13の切り離しは不明、他は糸切りである。

坏a (15～17) 口径12.5～14.2cm、器高2.1～3.1cm、底径9.0～9.4cmを測る。すべて糸切りとみられるが、16の底部は粘土の凹凸が激しく、判断しにくい。

白磁

皿 (18～20) 18は口径10.6cmで、VIII-1類。19は口径9.8cm、器高2.6cm、底径4.4cm。外面底部の釉は掻き取られる。VIII-1-a類。20は口径10.8cm。全面に施釉されるが底部は疎らで、口縁部の釉は掻き取られる。その露胎部分は黒灰色に変色し、暗褐色の付着物がある。釉は表面の気泡が破裂したようで、随所にクレター状の凹みがある。底部に砂粒の付着する部分がある。IX-1-d類。

同安窯系青磁

椀 (24) 口径16.0cm。外面に縦方向の櫛目、内面はヘラと櫛による施文がある。I-1-b類。

皿 (21) 口径10.6cm、器高2.5cm、底径5.0cmを測る。見込みにはヘラと櫛による施文がある。釉は淡黄緑色で発色がややわるく、光沢はあまりない。I-2-b類。

龍泉窯系青磁

小椀 (22) 口径11.0cm。口縁部に輪花がある。I-1-b類。

椀 (23) 外面にヘラによる蓮弁文がある。釉は黄緑色に発色する。I-5-a類。

陶器

壺 (25・26) 25は口径10.4cm。釉は暗緑色で光沢のないものであるが、ほとんどの部位で白濁化している。口縁部の内傾面に砂粒の付着があり、目跡と考えられる。26は暗緑色に発色する釉がかかり、鈍い光沢がある。胎土は淡茶灰色で、白色、暗茶色の粒子を多く含んでいる。同一個体と思われる破片が50SE250裏込土 (CD-1604-a)、50SX323 (CD-1604-b)、S-424 (CD-1604-c) から出土している。

50SK290出土土器 (Fig.65、CD-1606～1612)

土師器

小皿a (1・2) 口径8.4・8.7cm、器高1.2・1.4cm、底径5.9・6.8cmを測る。底部は糸切りさ

れる。

須恵質土器

鉢 (3) 口径27.2cm。表面は劣化し、クレーター状を呈している。

土師質土器

鍋 (4・5) 4は口縁端部が暗茶黒色に変色している。5は内面に粗いハケ状工具による調整がある。

白磁

皿 (6) VIII-2類。

龍泉窯系青磁

椀 (7) 口径15.8cm、器高5.6cm、底径5.7cmを測る。外面にヘラによる蓮弁文を配する。外面の底部、高台内側に径2.5cm程度の範囲で目跡と思われる釉及び器壁の剥離部分がある。I-5-a類。

50SK295出土土器 (Fig.65、CD-1613・1614)

白磁

椀 (9) 口縁端部の釉は掻き取られ、体部内面下位に細い沈線が巡る。IX類。

皿 (8) 口径9.6cm。VIII-1類。

同安窯系青磁

皿 (10) 口径9.9cm、器高2.0cm、底径4.6cmを測る。外面の体部中程から以下には施釉されない。I-1-a類。

50SK301出土土器 (Fig.65、CD-1615・1616)

土師器

小皿a (11・12) 口径8.6・9.5cm、器高0.9・1.0cm、底径6.9・8.4cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (13) 口径14.4cm、器高2.4cm、底径9.7cmを測る。底部は糸切りされる。

陶器

鉢 (14) 無釉で、胎土は赤茶色を呈し、やや大粒の砂粒が多量に含まれている。I-1-b類。

50SK317出土土器 (Fig.65、CD-1617～1622)

土師器

小皿a (15～17) 口径8.5～9.0cm、器高0.9～1.4cm、底径6.0～7.8cmを測る。17の底部の切り離しは不明、他は糸切りである。

坏a (18) 口径15.5cm、器高2.5cm、底径11.9cmを測る。底部は糸切りとみられる。

須恵質土器

鉢 (19) 底径10.2cm。底部は内外面ともに使用により磨耗し、平滑になっている。

龍泉窯系青磁

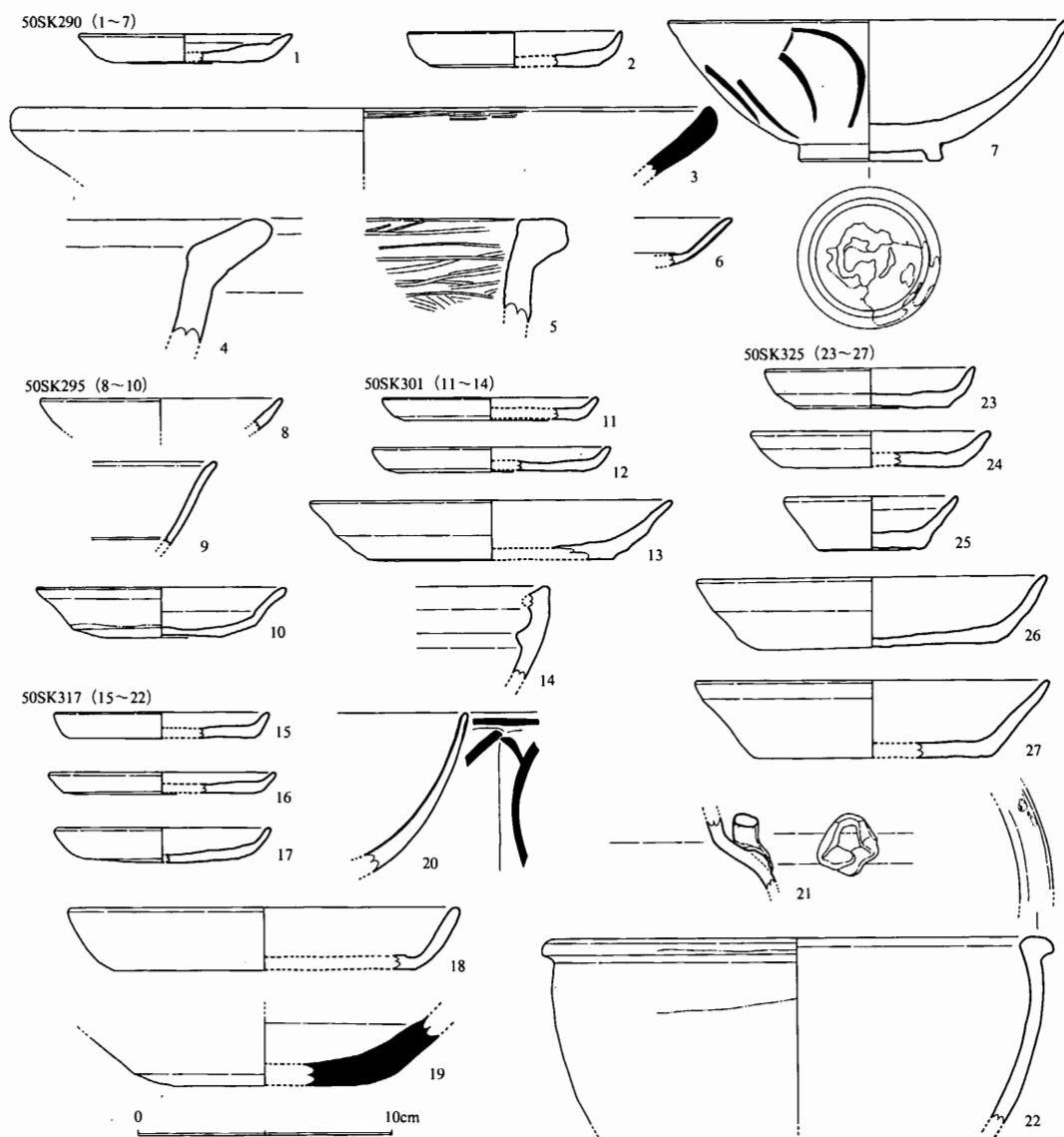


Fig.65 50SK290・295・301・317・325出土土器実測図 (1/3)

椀 (20) 外面に鎬蓮弁文を配する。I-5-b類。

陶器

水注 (21) 肩部の頸部に近い部分に粘土紐を輪にした耳が貼り付けられる。釉は暗茶色に発色する不透明なもので、鈍い光沢がある。胎土は暗褐色で、白色の微粒子を含んでいる。VI類。

小盤 (22) 口径20.1cm。釉は内面で明黄緑色、外面で明茶緑色に発色し光沢があり、細かな貫入が多く認められる。体部外面下半には施釉されず露胎である。胎土中に白色及び暗褐色の粒子が多く含まれる。II-1-a類。

50SK325出土土器 (Fig.65、CD-1623~1627)

土師器

小皿a (23・24) 口径8.3・9.5cm、器高1.6・1.4cm、底径6.1・7.0cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

小皿b (25) 口径6.9cm、器高2.2cm、底径4.2cmを測る。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

坏a (26・27) 口径13.8・14.0cm、器高2.8・3.1cm、底径9.5・9.3cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

50SK330上面出土土器 (Fig.66、CD-1628~1653)

土師器

小皿a (1~6) 1~3は口径8.8~9.7cm、器高1.0~1.6cm、底径6.8~7.3cmを測る。底部はヘラ切りされる。4~6は口径8.5~10.0cm、器高1.0~1.5cm、底径6.8~7.6cmを測る。底部は糸切りされる。

小皿c (7) 口径8.9cm、器高1.8cm、高台径6.0cmを測る。底部は糸切りされたのち高台を貼り付ける。

坏a (8~11) 8は底径6.0cmで、体部は大きく外方に開くもので、底部は糸切りされる。豊前系。9~11は口径15.0~16.9cm、器高2.2~2.9cm、底径10.9~12.7cmを測る。9の底部はヘラ切り、他は糸切りである。

丸底坏a (12・13) 口径15.9・15.5cm、器高3.2・3.8cmを測る。12の底部はヘラ切りされた後押し出され、13は糸切りの後押し出される。内面にはミガキbを施す。

瓦器

椀 (14) 口径17.0cm。底部は糸切りされた後押し出される。内面はミガキbの後粗いミガキc、外面はヨコナデの後ミガキcである。

須恵質土器

鉢 (15・17) 17は底径7.8cm。内面は使用による磨滅で平滑になる。外面底部はナデである。両者とも東播系。

土師質土器

脚 (16) 長さ12.5cm。縦方向の強いナデによって表面を調整する。裏面は大きな剥離痕があり、鍋や鉢等の体部に取り付けられていたことを窺わせる。

白磁

椀 (19) 高台径6.3cm。見込みを輪状に搔き取っており、その露胎となった部分には白色に薄い付着物が巡り、一部は砂粒も付着し目跡と考えられる。高台畳付け付近も同様な付着物がある。VIII-2もしくは3類。

青白磁

皿 (18) 小さな高台が削り出される。高台径6.3cm。釉は青味を帯びた透明なもので、貫入が目立つが光沢はある。体部外面下半にはかからない。白磁皿VII類か。

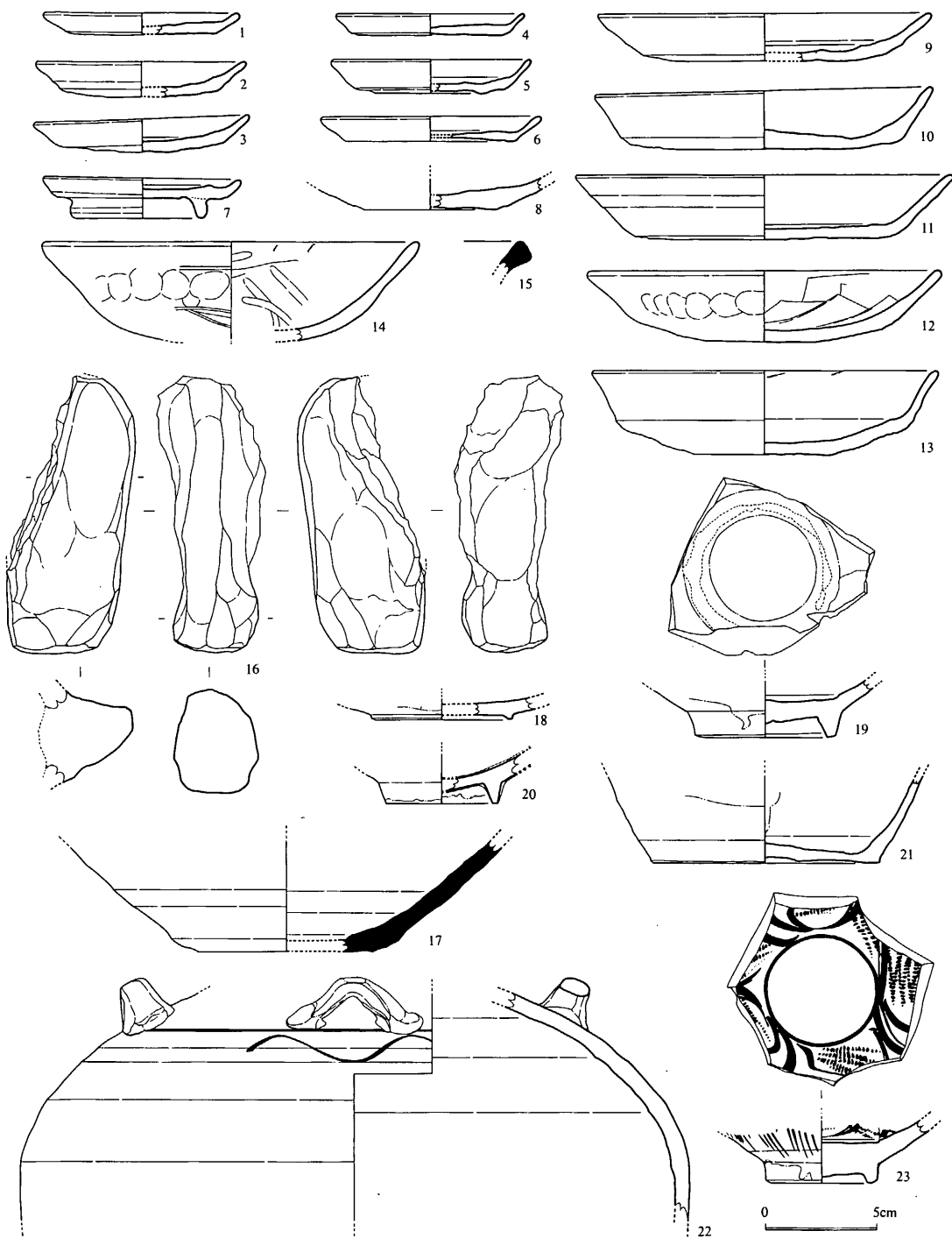


Fig.66 50SK330上面出土土器実測図 (1/3)

龍泉窯系青磁

椀 (20) 高台径5.0cm。釉は淡緑色で光沢があるもので、かなり厚くかけられる。高台端部は釉を掻き取っている。III類。

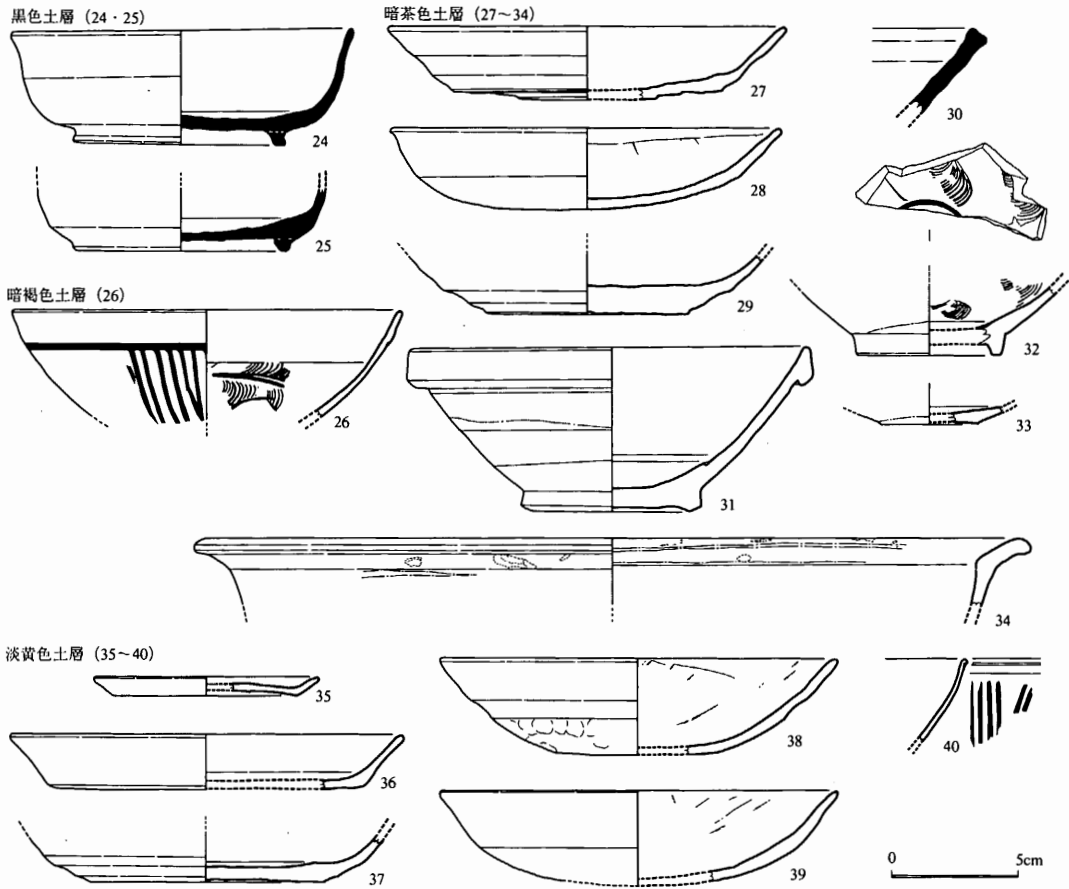


Fig.67 50SK330各層出土土器実測図 (1/3)

青磁

碗 (23) 高台径5.0cm。深緑色に発色する釉は透明度が高く、外面では強い光沢がある。外面は縦方向の櫛目、内面はヘラと櫛による施文があるが見込みにはない。釉が高台部分にはかからない。龍泉窯系もしくは同安窯系で0類。

陶器

耳壺 (21) 底径10.2cm。釉は淡緑茶色で鈍い光沢のあるもので、白濁化する部分が多い。体部外面中程以上にかかり、他の部分及び内面にはかからない。胎土は淡灰茶色で白色及び褐色の微粒子を若干含んでいる。耳付きの壺類の底部でIII類。

四耳壺 (22) 肩部から胴部にかけての資料で、粘土紐で横方向の耳を付ける。耳のすぐ下位には1条の波状文があり、体部を一周するものとみられる。釉は外面のみに認められ、暗緑色で透明度は低く、光沢も鈍い。胎土は淡灰茶色で白色の粒子を多く含み、黒色の粒子も若干含まれている。III類もしくはIV類。

50SK330黒色土層出土土器 (Fig.67, CD-1654~1657)

須恵器

坏c (24・25) 24は口径13.5cm、器高4.5cm、高台径8.5cm。25は高台径8.6cm。

50SK330暗褐色土層出土土器 (Fig.67、CD-1658・1659)

同安窯系青磁

椀 (26) 口径15.5cm。外面に幅広の櫛による縦方向の施文、内面はヘラと櫛による施文がある。釉は明茶黄色で透明度が高く、光沢がある。釉の厚い部分には貫入が目立つ。I-1-c類。

50SK330暗茶色土層出土土器 (Fig.67、CD-1660～1667)

土師器

坏a (27・29) 27は口径15.8cm、器高2.9cm、底径10.8cm。底部はヘラ切りされる。29は底径8.1cmを測り、底部は糸切りされる。豊前系。

丸底坏a (28) 口径15.5cm、器高3.3cm。底部はヘラ切りの後押し出される。内面は丁寧なミガキbである。

須恵質土器

鉢 (30) 硬質に焼成される。東播系。

白磁

椀 (31・32) 31は口径15.4cm、器高6.5cm、高台径7.1cm。見込みの周囲に沈線状の小さな段がある。IV-1-a類。32は高台径5.8cm。見込みは円形に窪んでおり、体部内面には櫛による施文がある。VII類。

皿 (33) 底径3.9cm。黄色味を帯びた透明感のある釉が施され、体部外面下半にはかからない。V類もしくはVI類。

陶器

盤 (34) 口径33.0cm。釉は縞状にかけられ、ほとんどが白濁化している。胎土は暗灰褐色を呈し、白色及び茶黄色の小砂粒が多量に含まれている。口縁部外側には断続的に暗茶褐色の砂粒塊が付着しており、目跡とみられる。I-1類。

50SK330淡黄色土層出土土器 (Fig.67、CD-1668～1671)

土師器

小皿a (35) 口径8.9cm、器高0.8cm、底径7.2cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (36・37) 口径15.6cm、器高2.2cm、底径12.5・9.3cmを測る。底部は糸切りされる。

丸底坏a (38・39) 口径15.8cm、器高3.8cmで、底部はヘラ切りされる。内面はミガキbが施される。

同安窯系青磁

椀 (40) 口縁端部はごく小さな玉縁状を呈し、外面には粗い櫛目が縦方向に施される。釉は暗緑色で光沢があるもので、透明度は高い。I-1-c類。

50SK345出土土器 (Fig.68、CD-1672～1675)

須恵器

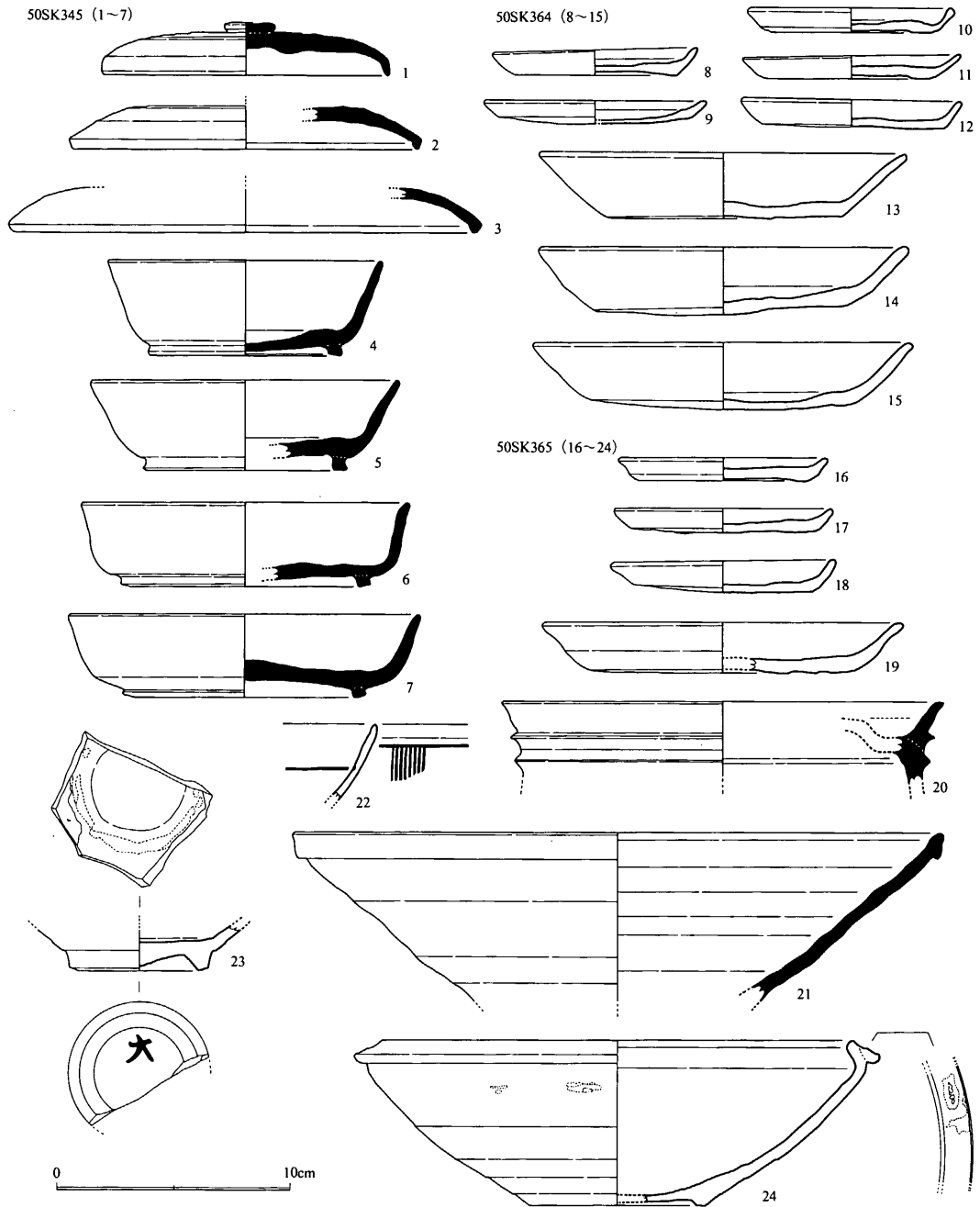


Fig.68 50SK345・364・365出土土器実測図(1/3)

蓋c2 (1) 口径12.4cm、器高2.3cm。天井部は回転ヘラケズリされ、釦状の摘みを取り付く。

蓋3 (2・3) 口径14.8・20.0cm。2の天井部は回転ヘラケズリされる。

坏c (4~7) 口径11.8~15.2cm、器高3.6~4.1cm、高台径8.4~10.8cmを測る。7の底部はヘラ切りのまま高台が貼り付けられる。

50SK364出土土器 (Fig.68、CD-1676~1683)

土師器

小皿a (8~12) 口径8.8~9.5cm、器高1.0~1.2cm、底径7.1~8.3cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (13~15) 口径15.7~16.3cm、器高2.9cm、底径10.2~11.3cmを測る。底部は糸切りされる。

50SK365出土土器 (Fig.68、CD-1684~1689)

土師器

小皿a (16~18) 口径9.0~9.7cm、器高1.0~1.3cm、底径7.3~8.1cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (19) 口径15.5cm、器高2.2cm、底径11.6cmを測る。底部は糸切りされる。

須恵器

円面硯 (20) 口径19.0cm。台部には透かしが存在した形跡は確認できるが、その形状や個数は不明である。

須恵質土器

鉢 (21) 口径28.0cm。暗灰色で硬質に焼成される。内面は大半がナデで仕上げられ、使用による磨耗も進んでいる。東播系。

白磁

椀 (23) 高台径6.0cm。見込みの釉を輪状に掻き取り、その部分に目跡が付着する。置付け周囲は薄い白茶色の付着物がある。外面には施釉されず、高台内側に「大」の墨書がある。VIII-2類もしくは3類。

同安窯系青磁

椀 (22) 淡灰緑色の透明な釉で、光沢がある。外面に縦方向の櫛目、内面は口縁部下位に沈線を巡らせ、それより以下に櫛による施文がある。I-1-b類。

陶器

鉢 (24) 口径20.1cm、器高7.2cm、底径7.5cmを測る。全面に施釉されるが、口縁部の一部に暗緑茶色の釉がみられる他は、黄緑色に濁り光沢も失われている。胎土は明茶色で白色及び暗褐色の粒子が多く含まれている。VI-2類。

50SK370出土土器 (Fig.69、CD-1690~1695)

土師器

小皿a (1) 口径9.4cm、器高1.0cm、底径8.3cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (2・3) 口径14.0・14.4cm、器高3.1・3.3cm、底径9.9・9.0cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

土師質土器

鍋 (4) 口縁部はヨコナデ、体部の内面は細かなハケ目で、外面には煤が多量に付着して

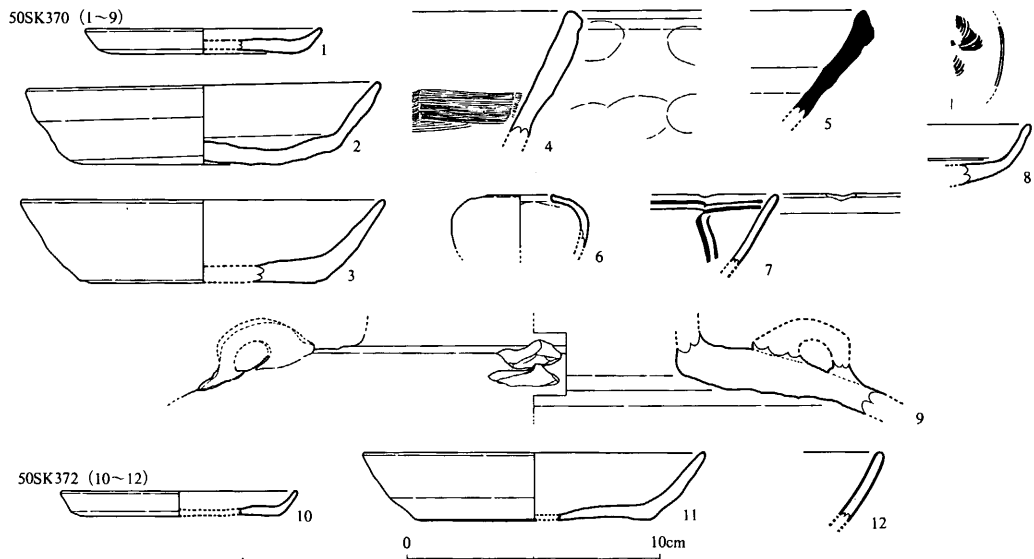


Fig.69 50SK370・372出土土器実測図 (1/3)

いる。

須恵質土器

鉢 (5) 暗灰色で硬質に焼成される。東播系。

白磁

小壺 (6) 無頸の壺で、口径2.6cm。釉は黄色味を帯びた透明度の低いもので、内面にはかからない。II類。

龍泉窯系青磁

椀 (7) 口縁部に輪花がある。I-4-b類。

皿 (8) やや青味を帯びた透明度の高い釉で、底部にはかからない。見込みに櫛による施文がある。I-3-b類。

陶器

四耳壺 (9) 肩部に縦方向の耳が付く。釉は暗茶色の不透明なもので、光沢はない。胎土は淡灰色で白色及び黒色の粒子を多く含んでいる。また小さな気泡も目立つ。XII類。

50SK372出土土器 (Fig.69、CD-1696・1697)

土師器

小皿a (10) 口径9.4cm、器高1.0cm、底径7.8cmを測る。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

坏a (11) 口径13.6cm、器高2.7cm、底径9.3cmを測る。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

龍泉窯系青磁

椀 (12) 淡緑色で透明度の低い釉が厚めにかけられる。I類もしくはIV類。

50SK375出土土器 (Fig.70、CD-1698~1715)

土師器

小皿a (1~3) 口径9.1~10.1cm、器高1.1~1.4cm、底径6.0~7.0cmで、1の底部はヘラ切り、
 他は糸切りである。

坏a (4・5) 口径14.5・15.6cm、器高2.7・3.1cm、底径9.9・11.6cmを測る。底部は糸切りさ
 れる。

瓦器

椀c (10・11) 口径15.4・16.2cm、器高5.0・5.8cm、高台径7.2・5.5cmを測る。内面はミガ
 キbの後ミガキc、外面はヨコナデの後ミガキcを施す。いずれも外面のミガキは疎らである。

土師質土器

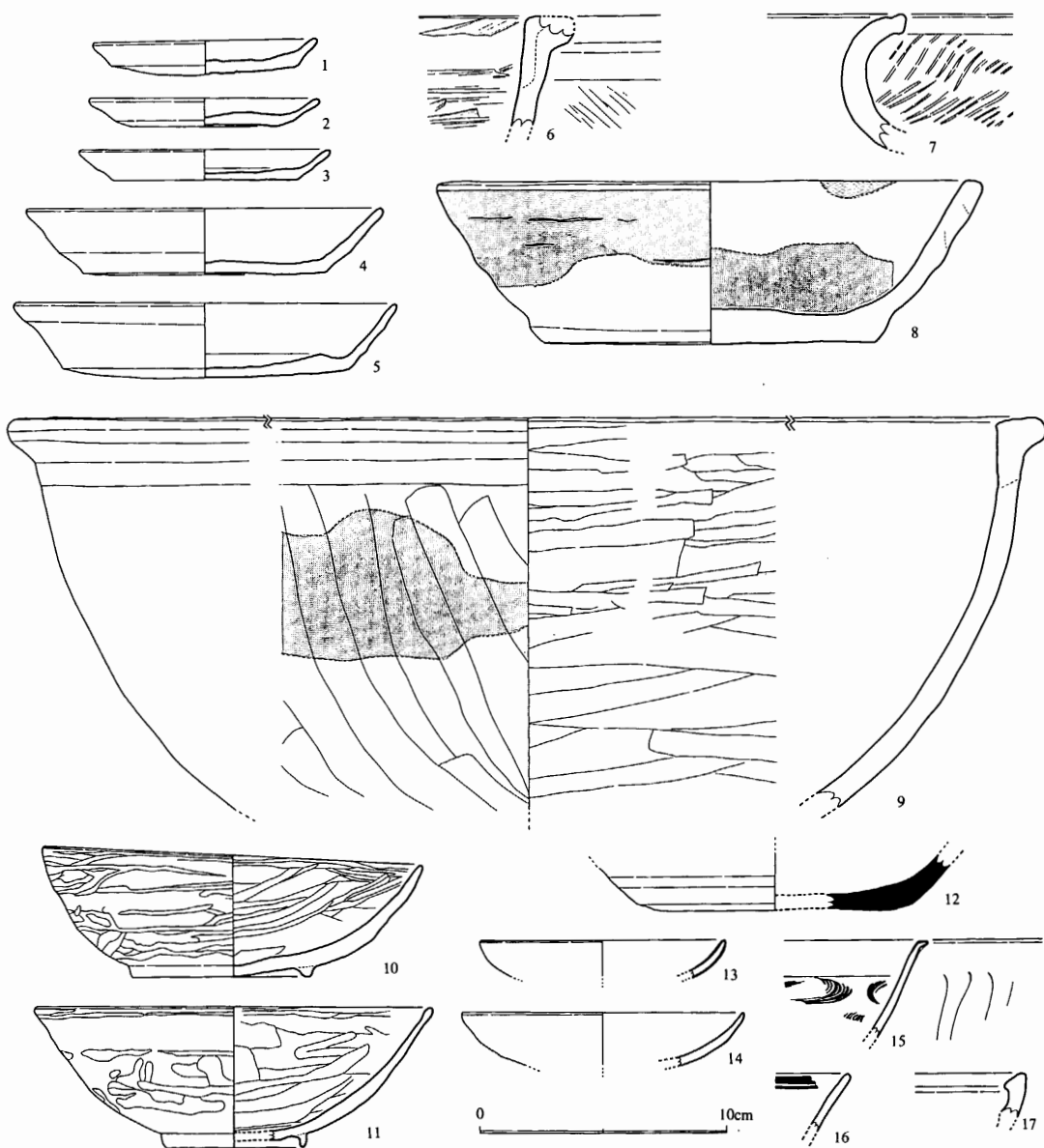


Fig.70 50SK375出土土器実測図 (1/3)

鍋 (6・9) 6の内面は粗いハケ状の工具でナデられる。9は口径47.6cm、器高16.0cm以上を測るもので、丸底になるものと思われる。外面は斜め方向に板状の工具でナデられたような痕跡があり、内面はそれよりも幅の狭いもので横方向にナデられる。体部外面には煤が付着している。

鉢 (8) 口径22.2cm、器高6.7cm、底径13.5cm。体部は横方向のナデ、外面の底部は靱殻痕が複数みられる。

瓦質土器

甕 (7) 黒灰色を呈し、胎土は灰茶色でやや軟質である。外面には叩き痕が確認される。東播系の還元不良品か。

須恵質土器

鉢 (12) 底径11.2cm。明灰色で、内面は使用による磨耗が著しい。

白磁

椀 (15) 口縁端部を外方に折り曲げるもので、体部外面に細いヘラ描きによる施文、内面には櫛による施文がある。V-4-c類。

皿 (13・14) 13は口径10.0cmでVIII-1類。14は口径11.5cmでVII類とみられる。

龍泉窯系青磁

椀 (16) 内面にヘラによる施文がある。I-4類。

陶器

鉢 (17) 無釉で灰赤茶色を呈している。胎土中には白色、暗茶色の砂粒が多く含まれている。I-1-b類。

50SK390出土土器 (Fig.71、CD-1716~1729)

土師器

小皿a (1~4) 口径8.6~9.2cm、器高0.7~1.0cm、底径6.4~7.7cmを測る。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

小皿b (5) 底径4.1cm。底部は糸切りされる。口縁部は打ち欠かれたような状態である。

小皿c (6) 口径9.8cm、器高2.0cm、高台径5.9cm。

坏a (7) 口径15.8cm、器高2.4cm、底径12.0cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏b (8) 口径15.0cm、器高2.7cm、底径9.0cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

土師質土器

鍋 (9) 外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目である。外面には煤が付着している。

須恵質土器

鉢 (10) 暗灰色で硬質に焼成される。東播系。

白磁

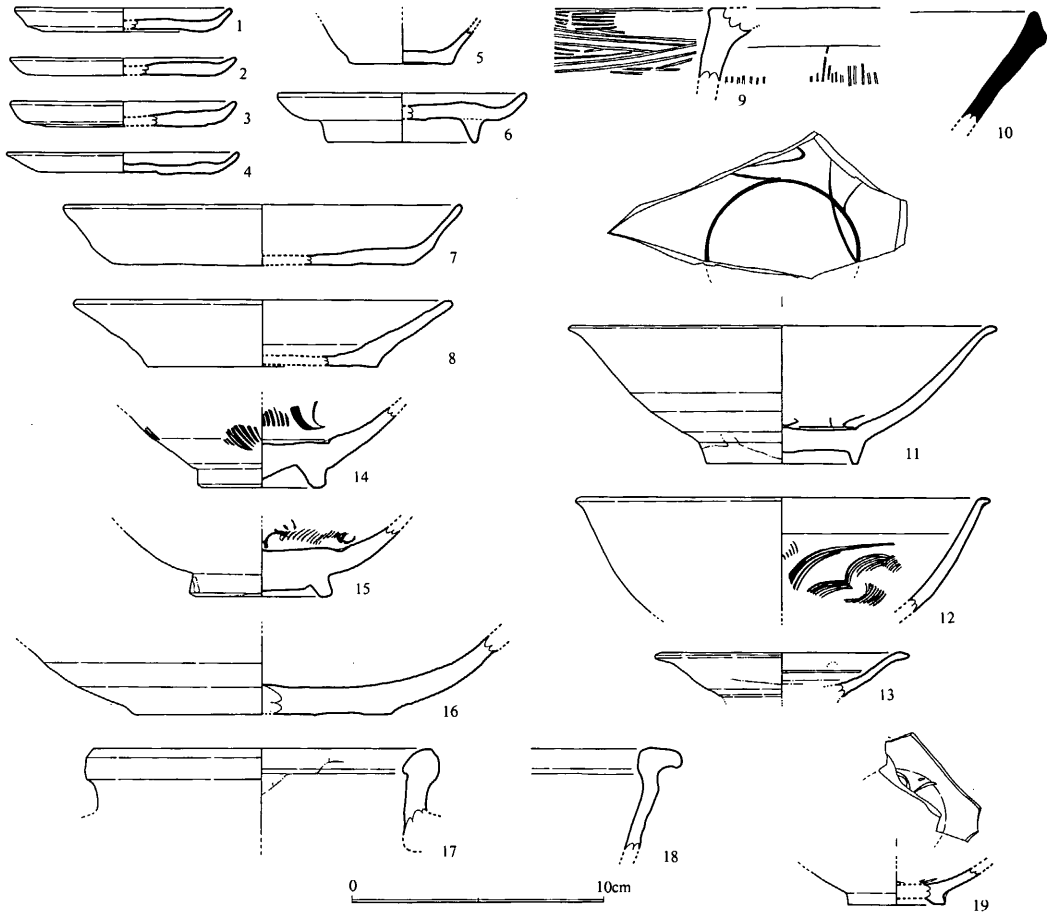


Fig.71 50SK390出土土器実測図 (1/3)

碗 (11・12) 11は口径16.8cm、器高5.5cm、高台径6.0cm。見込みに細いヘラによる施文がある。釉は淡灰色に発色し透明度は低く、光沢もやや鈍い。高台部分には施釉されない。VII類。12は口径16.3cm。口縁端部を外方につまみ出すもので、体部内面には櫛による施文がある。V-4-b類。

皿 (13) 口径10.0cm。見込みの釉は輪状に掻き取られ、その部分に目跡が残る。外面も体部下半には施釉されない。III-1類。

同安窯系青磁

碗 (14) 高台径5.0cm。残存部の外面は露胎で、釉は内面のみに認められる。外面は櫛、内面はヘラと櫛による施文がある。I-1-b類。

龍泉窯系青磁

碗 (15) 高台径5.6cm。内面にヘラと櫛による施文がある。I-3類。

青白磁

小碗 (19) 高台径3.8cm。青味を帯びた透明度のやや低い釉は、高台畳付け以下にはかからない。見込みに型によると思われる陽刻文があるが不鮮明である。

陶器

鉢 (16) 無釉で暗灰色ないしは暗灰茶色を呈している。胎土中には白色、明茶白色の砂粒を多量に含み、一部黒色のものも観察される。内面は使用による磨耗でかなり平滑になっている。I類。

盤 (18) 体部下半を除く全面に施釉されるが、体部内面の釉は灰緑色で透明度が低く鈍い光沢がある。口縁部の内側では淡黄色で不透明なものとなり、光沢はない。さらに外面は白濁化し灰白色で不透明なものである。胎土は白色、黒色及び暗茶色の粒子を多量に含み込んでいる。I-3類。

耳壺 (17) 口径13.2cm。暗茶色で不透明な釉は、内面にはかからない。胎土は明灰色で、白色及び黒色の砂粒を多く含むものである。XII類。

50SK395黄褐色土層出土土器 (Fig.72、CD-1730～1733)

土師器

小皿a (1・2) 口径9.2・9.6cm、器高0.9・1.3cm、底径6.6・5.9cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

小皿a2 (3) 口径10.0cm、器高0.8cm、底径7.5cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

小椀c (4) 口径11.0cm、器高3.9cm、高台径5.4cm。

白磁

椀 (5・6) 5は高台径7.7cm。見込みに小さな段がある。IV-1-a類。6はV-2類。

50SK395淡茶色砂層出土土器 (Fig.72、CD-1734・1735)

土師器

小皿a (7) 口径10.3cm、器高1.3cm、底径8.5cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

瓦器

小皿a (8) 口径9.2cm、器高1.8cm、底径8.1cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。燻しにより暗灰色、淡灰色を呈している。

白磁

椀 (9) IV類。

皿 (10) 底径3.1cm。外面体部下半には施釉されず、底部中程に砂粒の付着があり目跡とみられる。V類もしくはVI類。

50SK395黒色土層出土土器 (Fig.72、CD-1736～1739)

土師器

丸底坏a (11・12) 口径16.4・16.8cm、器高3.0・3.2cm。底部はヘラ切りされ、内面はミガキbを施す。

瓦器

椀 (13) 口径16.4cm。表面にはミガキcを施すが、燻しが不良で、色調は淡茶色を呈して

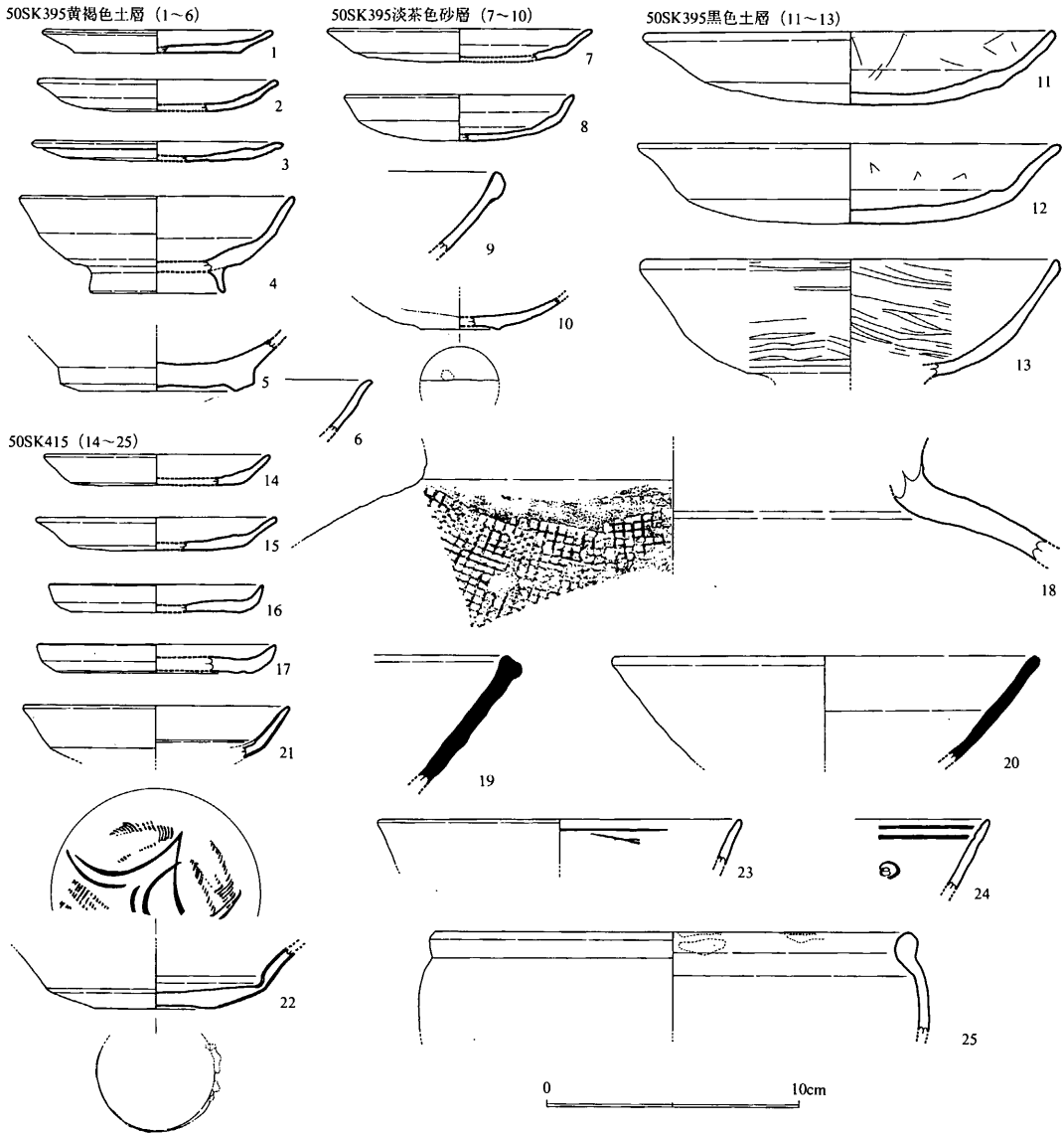


Fig.72 50SK395・415出土土器実測図 (1/3)

いる。ミガキcに先行するミガキbは確認できない。

50SK415出土土器 (Fig.72、CD-1740~1749)

土師器

小皿a (14~17) 14・15は口径9.0・9.6cm、器高1.2・1.3cm、底径6.8・7.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。16・17は口径8.5・9.5cm、器高1.1cm、底径6.8・8.0cmを測る。底部は糸切りされる。

瓦質土器

甕 (18) 頸部径19.1cm。外面は格子叩き目、内面はヨコナデである。還元不良により瓦質

となったようである。

須恵質土器

鉢 (19) 明灰色を呈し、硬質に焼成される。東播系。

椀 (20) 口径17.0cmで、鉢の可能性もある。暗灰色で硬質に焼成される。東播系。

同安窯系青磁

皿 (21・22) 21は口径10.6cm。I類。22は底径4.6cmで、釉は淡緑色に発色する部分とやや黄色味を帯びる部分があり斑になっている。見込みにヘラと櫛による施文があり、外面底部の釉は掻き取られる。I-2-b類。

龍泉窯系青磁

椀 (23・24) 23は口径14.5cmで、内面にヘラによる施文がある。I-2~3類。24は内面にヘラによる渦巻状の施文がある。I-4類。

陶器

鉢 (25) 口径18.8cm。外面の釉は淡茶灰色に発色し鈍い光沢があるが、内面では白濁化しており光沢もない。胎土は明黄茶色で、白色や暗茶色の粒子を若干含んでいる。口縁端部の内側にごく薄い砂粒の付着があり、目跡と思われる。III類。

B：金属製品 (Fig.73・74、CD-1750・1751)

釘 (1~3) すべて鉄製である。1は先端を失う。頭部は扁平に叩き伸ばした後折り曲げる。現存長7.0cm。50SK001直上から出土した。2は途中で折れ、且つ先端を失う。頭部は扁平に叩き伸ばした後折り曲げる。現存長8.2cmで、50SK030出土。3は頭部を失う。通常の釘よりも先端がやや太く作られ、別の用途も考える必要がある。幅は0.6×0.5cm、現存長4.8cmを測る。50SK180出土。

楔 (4・5) 両者とも鉄製である。4は基部の幅1.3cm、厚さ0.8cm、先端の幅0.9cmで、厚さ

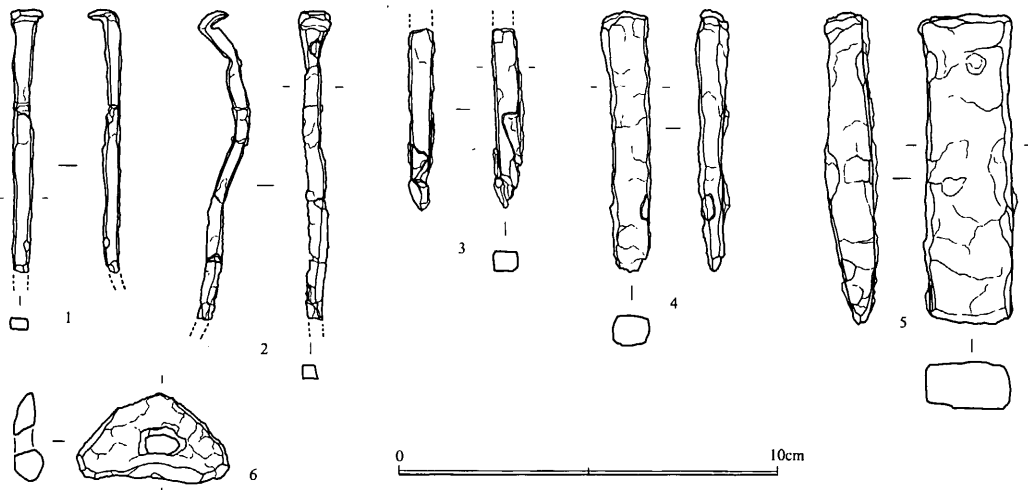


Fig.73 土坑出土鉄製品実測図 (1/2)

は基部から徐々に減少し先端は尖る。ほぼ完存するとみられ、長さは7.0cm。50SK030出土。5は基部の幅2.5cm、厚さ1.2cm、先端部の幅2.3cmで、刃部はわずかに弧を描く。厚さは基部から中程まではほぼ同じで、中位から減少して先端に至る。ほぼ完存する資料で、長さ8.2cm。50SK390出土。

穿孔金具 (6) 鉄製で平面形が三角形を呈し、ちょうど中程におそらく外形と同様の形状をしていたとみられる穿孔がある。用途は明らかでない。50SK015出土。

銭 (7~10) すべて銅銭である。7は「熙寧元寶」で50SK030出土。8は「開元通寶」とみられ、50SK030出土。9は「天禮通寶」で50SK210出土。10は「元豐通寶」で50SK364出土。



Fig.74 土坑出土銅銭拓影 (1/2)

C: 土製品 (Fig.75~78、CD-1752~1789)

円錐形土製品 (1) 下端部の径4.3cmを測るもので、表面に指圧痕と並行叩き様の痕跡が観察される。先端部は未調整ながらその周囲は、指によって摘みながら先を細くしたような圧痕が残っている。先端部は明茶色、他は明灰白色を呈し、土師質ながら硬質に焼成される。胎土は1~2mmの砂粒を多量に含む粗いものである。50SK390出土。

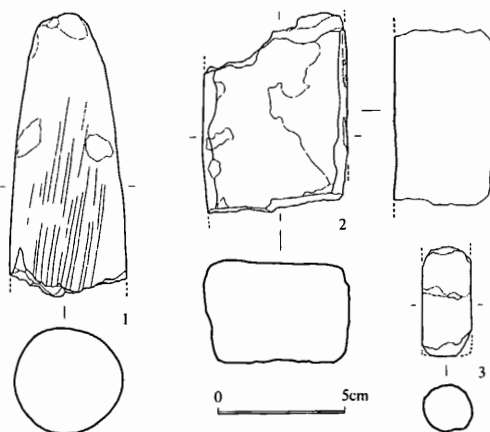


Fig.75 土坑出土生産関連遺物実測図 (1/3)

方柱状土製品 (2) 幅5.7cm、現存長7.9cm、厚さ3.9~4.1cmを測る。表面は二次的な火熱によって淡灰褐色、暗褐灰色を呈しており、著しく劣化し随所に剥落が目立つ。胎土は明茶褐色でやや大粒の砂粒を少量含む程度で、他地点出土の類似品に比べると精良である。土師質で硬質に焼成される。50SK060出土。

円柱状土製品 (3) 円筒状の端部は平坦で、片面のみ残存している。現存長4.4cm、径1.9cmを測る。表面は風化して調整は明らかでない。胎土は砂粒を多量に含む粗いものである。50SK060出土。

土器片加工品 (4~10) 4は白磁碗II類の底部を利用し、体部との境目の破断面を打ち欠いて加工したもので、高台の一部まで及んでいる。見込みには釉がほとんど観察されず、平滑な状態になっていることから、釉も故意にはぎ取った可能性も考えられる。50SK055下層出土。5は龍泉窯系青磁碗I類の底部を利用し、体部との境目の破断面を打ち欠いて加工したもので、高台の一部まで及んでいる。釉の残存状況は悪いが、4とは異なり当初から発色が悪く、光沢のない状態であったものとみられる。50SK075出土。6は見込み部分の釉を環状に掻き取った

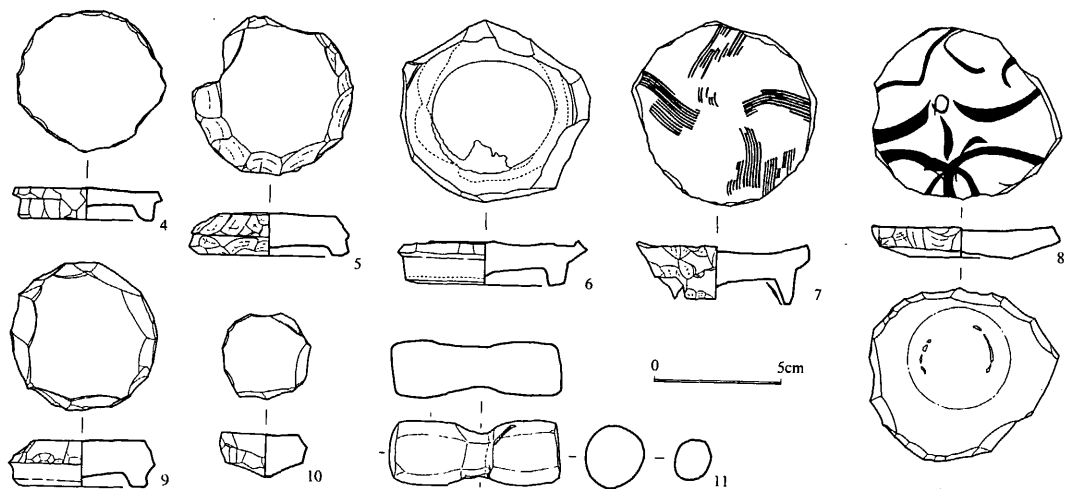


Fig.76 土坑出土土製品実測図 (1/3)

跡があり、白磁碗VIII類の底部を利用して加工したものであることがわかる。打ち欠きは体部との境目にみられるが部分的であり、未製品とも考えられる。50SK390出土。7は白磁碗V類の底部を加工したもので、体部との境目は丁寧に打ち欠いているが、高台では部分的である。見込みに櫛書き文様が観察される。50SK244出土。8は龍泉窯系青磁皿I-1-b類を加工したもので、破断面は比較的丁寧に打ち欠いているが、他の部分にはまったく手を付けていない。見込みにはヘラ彫りによる文様が観察され、底部外面の中央は露胎で、使用によって床との接地面は研磨されたように平滑になっている。50SK317出土。9は龍泉窯系青磁碗I類の底部を利用し、体部との境目の破断面を丁寧に打ち欠いて加工したもので、高台までは及んでいない。見込みに文様はない。50SK180出土。10は同安窯系青磁碗の底部を利用したもので、高台部分は全く残存せず、体部との境目は丁寧に打ち欠いている。50SK115出土。

杵状土製品 (11) 杵状を呈するもので、長さ6.7cm、最大径2.6cm、最小径1.4~1.7cmを測る。表面観察の限りでは二つの粘土円筒に粘土紐を巻き付けることで接合し、指圧によって絞り込むものと思われる。両端は平坦で、中央部以外に特に目立った調整痕はみられない。50SK390出土。

土壁 (12~23) 12は出土後不安定であったため、十分な泥落としをしないうまま表面処理を行っており、不明瞭な部分が多い。残存する木舞は縦方向に2本の半裁された竹、横方向に3本の竹が確認され、うち1本は確実に半裁されたものを用いている。縦方向の竹は心々が約4cm、横方向のものは縦方向の竹の外側にすべて存在し、心々が約2.5cm間隔で並ぶ。壁表面も残存し、縦方向の竹の中心から約3.5cmの位置にある。胎土はすきや1~2mmの砂粒を多量に含む粗いものである。色調は淡茶灰色を基調とするが、一部に黒灰色を呈する部分がある。13は縦方向の竹2本、横方向の竹2本の痕跡が残存し、いずれも半裁されている。縦方向の竹の心々間はおよそ4.5cm、横方向では約7cmである。さらに縦方向のものが横方向のものを挟んで対面にも

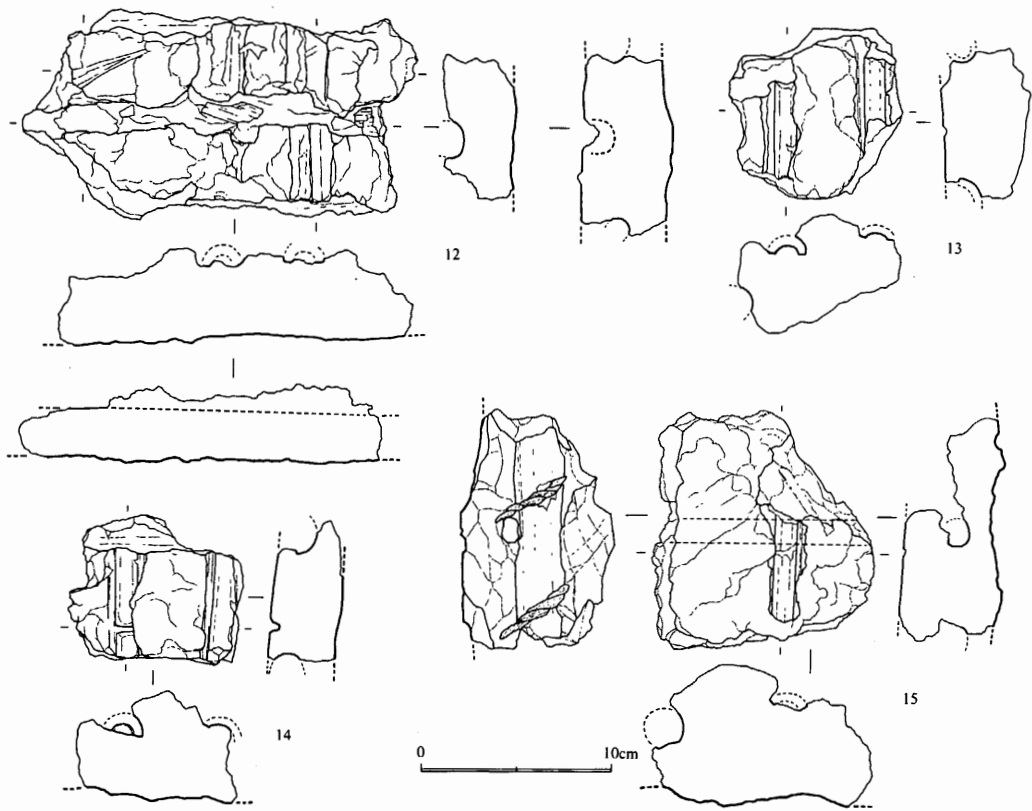


Fig.77 50SK060出土土壁実測図1 (1/4)

わずかに観察される。14は縦方向2本、横方向2本の竹の痕跡があり、判明する限り半裁されている。縦方向の1本には節の圧痕（内側）がみられ、半裁後節を抜いていないことが分かる。壁表面も一部が残存し、縦方向の強めのナデが残る。壁表面と縦方向の竹の距離は3~3.5cmを測る。15は壁表面部分はきわめて粗雑なナデの痕跡を残し、木舞は縦方向2本、横方向3本の竹の痕跡が残る。このうち横方向の1本は貫通して、縦方向の1本に接しており、しかも細い縄で螺旋状に縛っていた痕跡が観察できる。この縄痕のある竹は背の部分の痕跡がみられることや、螺旋状を成す縄の形跡から、半裁されていないものと思われる。現存する壁の厚さは7.6cmである。16はかなり大きな断片ながら木舞の痕跡はほとんどなく、3方に平坦面を残す資料である。木舞と思われるものは破断面中でわずかに1箇所認められ、しかも半裁された竹の先端部の圧痕と思われるものである。この木舞痕の在り方から本資料の上下位置は、図に示した方向と思われ、図の上面になる面は残存率は悪いが板状の圧痕が観察される。正面部分には木目は観察されないが顕著な調整痕もなく、平坦面に粘土を押しつけて成形したように見える。これらに対して図の下面にあたる部分は、やはり粘土を押し当てて成形しているながらも大粒の砂粒が目立ち、地面に接したことを窺わせるものである。17は他の資料とは異なり、木舞の竹が隙間なく並べられたものである。これらの竹は柱と思われる木材に接していたようで、隣り合う面には縦方向の木目状圧痕があり、表面は粘土が押し当てられたような状態で残存している。

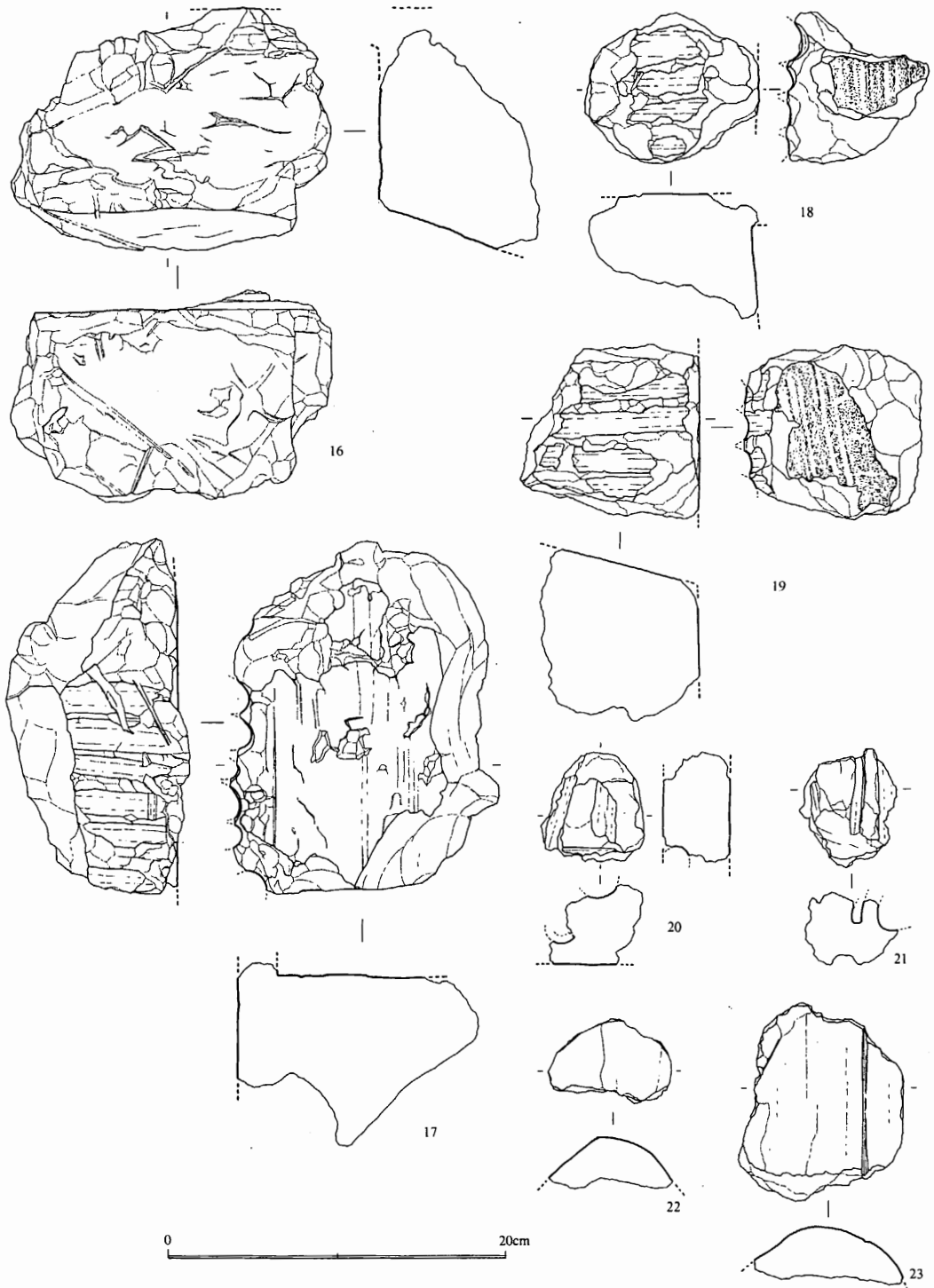


Fig.78 50SK060出土土壁実測図2 (1/4)

18・19は前記17と同様の痕跡を残すものである。20は縦横の木舞の痕跡を残すもので、壁面の一部も残存している。21は木舞と思われる竹の痕跡の背後に、深い溝状の圧痕が残るものであ

る。この痕跡が何によるものか不明であるが、木舞に竹ではない素材を用いていた部分もあることを想定しておく必要がある。22はわずかに湾曲する面とほぼ平坦な面が接する資料で、木舞の痕跡はない。しかし胎土が他の壁片に近似することから、各面は土壁の一部分を構成していたものと考えられる。両面とも簡易なナデの痕跡がある。壁のコーナー部分とすると、土壁が柱を包み込んでいたことになる。23も22と同様の断片である。図の下半が赤褐色、上半部が黒灰色を呈している。胎土は他の壁材に近似する。以上の土壁はすべて50SK060から出土したが、18・19を除いてその直上で検出されたものである。

D：瓦類 (Fig.79～81、CD-1790～1803)

軒丸瓦 (1～3) 1は複弁八葉蓮華文中房の境は凸圈線で表現し、内部に4つの蓮子を配する。外区は珠文帯で現状は9個が残存するが、均等に配置されているとすると18個に復原できる。周縁は幅の狭い平縁である。瓦当表面には小さな傷が多く、それらは連続して円弧状を成しているように見える。裏面は丁寧にナデられるが、部分的に指圧痕が残っている。須恵質に焼成され、灰白色を呈している。50SK160出土。2は老司II式である。破片の側面は二次的に打ち割ったようにも見えるが、著しく風化しているため判然としない。3は周縁に重圈文を配するもので、残念ながら瓦当文様部分は全く残存しない。須恵質に焼成され、暗灰色を呈する。胎土中には白色砂粒を多量に含んでいる。2・3とも50SK390出土。

軒平瓦 (4) 左から右に向かう唐草文だが、中心飾りが無い均整唐草文となるものである。上下の外区及び脇区は珠文帯である (本資料には下外区がない)。顎部は粘土板の貼付で外面には縄叩き目が残存している。平瓦凸面も縄叩きとみられる。凹面は瓦当端部まで布目が観察される。顎部から平瓦部にかけて赤色顔料の付着がある。須恵質に焼成され、暗灰色を呈している。50SK130上層出土。

文様塼 (5～7) 5は塼の一側面に文様を配置するもので、厚さ4.0～4.8cmを測る。文様は左から右に流れる唐草文で反転する唐草と唐草の間に珠文を配置する。上外区には凸線と凸三角文からなる鋸歯文帯を配する。下外区は不明。残存する資料の左寄りに縦線があり、そこから唐草文が派生することを踏まえると、本来この縦線が塼の左端になることを想定していたのかも知れない。土師質ながら硬質に焼成され、暗灰色、明茶色を呈している。胎土は3mm以下の白色砂粒を多量に含む粗めのものである。塼の裏面は指圧ののち横方向の強めのナデで仕上げられるが、その他の面には特別な調整痕は見えず、型抜きの可能性も考えられる。6・7はおそらく同範と考えられるもので、最大幅19.7・19.5cm、最大厚3.3・3.0cmを測るもので、表面に草花文のレリーフをあしらう。文様の周囲には波状文を配し、中央の草花文は下方から派生するようにデザインされたものと思われる。両個体の左側縁近くに縦方向の凸線があり、その外側にも文様があることから本来ここで切断するものであったと思われる。また範は複数の文様を連続させた板状のものであったことも窺わせる。側縁はナデ様の擦痕が観察され、裏面は指圧ののち粗い縦方向のケズリが行われる。土師質ながら硬質に焼成され、胎土中には1～

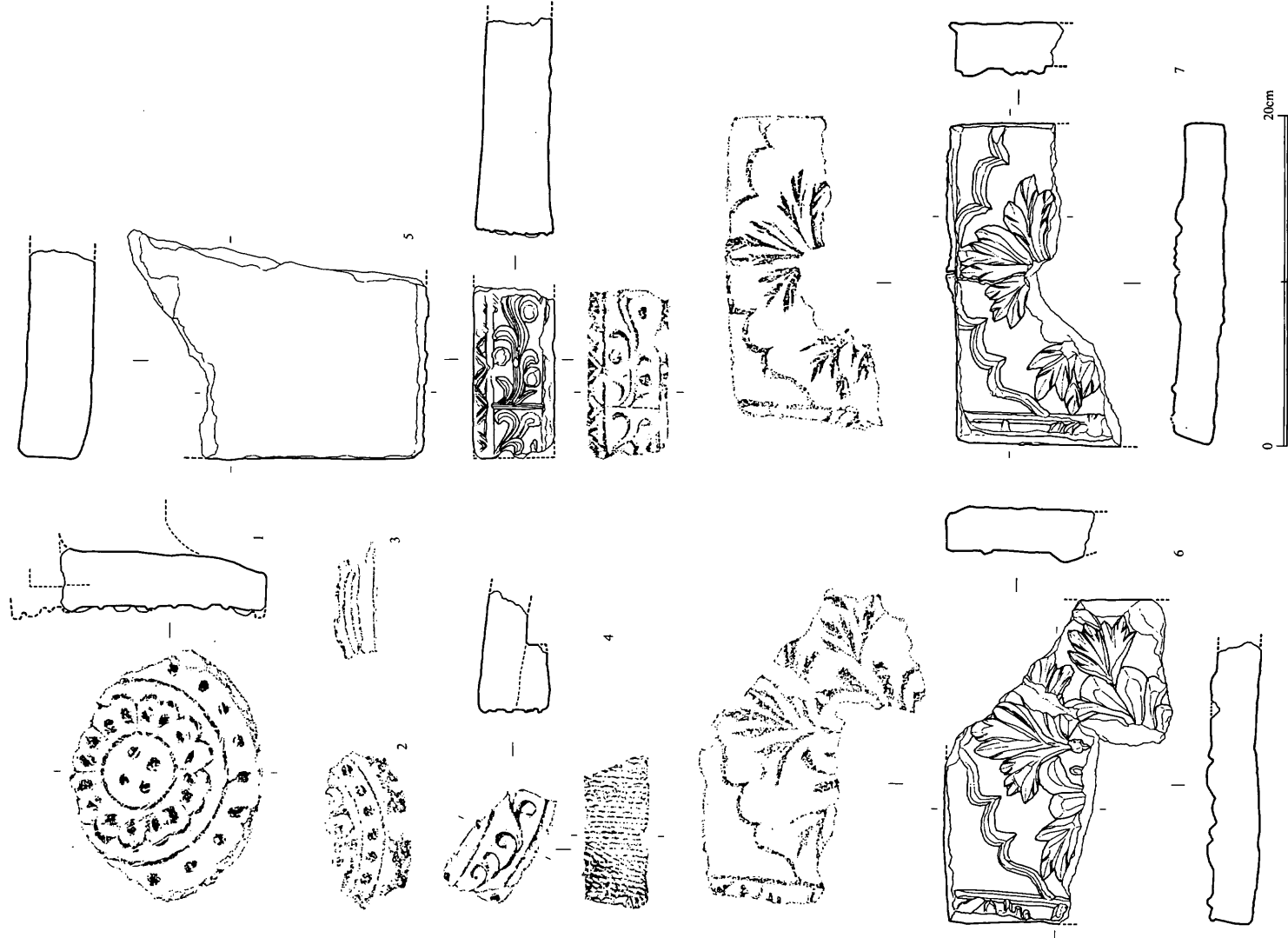


Fig.79 土坑出土瓦美測図及び拓影 (1/4)



Fig.80 土坑出土文字瓦拓影 (1/2)

2mm程度の白色砂粒が多量に含まれている。出土地点は文様磚と3点とも50SK390で、7のみ50SK370出土破片と接合した。また異なった文様のものが黒褐色土中から1点出土している。

文字瓦 (8~14) 8は二重の沈線で構成される方形枠に囲まれた「平井瓦屋」と記すもので、周囲は細かめの格子目である。I-1類。50SK330黒色土層出土。9は大きな書体で記載された「平井」で、周囲の斜格子目は通常と逆で凹線で表現される。I-6類。50SK375出土。10は斜格子目に「佐」と記したもので、II-1類。50SK390出土。11は左字の「佐」を記したもので、II-2類。50SK130上層出土。12は「賀茂」と記すものの断片でIII-7類と思われる。50SK330上面出土。13は横長の不整斜格子目に文字を記したもので、「小□瓦」と読まれているものである。中央の文字はカタカナの「ト」を左字にしたようなものである。50SK015出土。14は「八年」と記載されるもので、XVII類。50SK375出土。

瓦玉 (15~23) 平瓦の破損したものの側面を研磨あるいは打ち欠きによって平面形状を略

円形にしたもので、径1.9~4.2cm、厚さ1.6~2.6cmを測るが、平瓦が原体のためその厚さを越えることはなく、2.0cm前後のものが主体である。15・16は50SK015、17は50SE087、18・19は50SK229、20は50SK238、21は50SK317、22は50SK370、23は50SK421から出土した。

E：石製品 (Fig.82、CD-1804~1811)

鍋 (1) 滑石製の鍋である。口径21.0cmに復原できるもので、縦方向の耳が付くものである。外面のほぼ全面には煤が付着している。調整は外面が縦方向の細かな段痕を残す横方向のケズリで、内面は横方向にケズリを入れているがかなり平滑になっている。50SK295出土。

蓋状製品 (2) 多くの部分を失うが、当初は蓋状を呈する製品の摘み部分と思われ、側面に貫通する穿孔がある。摘み部分の側面は横方向のケズリ、蓋状の裏側にあたる部分もケズリであるが、きわめて平滑になっている。滑石製で、50SK123出土。

円盤状製品 (3) 滑石製で平面形状は不整形な円形を呈するもので、径2.7~3.0cmを測る。2箇所穿孔があるが、片方のみ貫通する。非貫通のものは断面形状が三角形で、深さ0.7cm、貫通する方は両側から穿たれ、下方から穿たれるものの径が大きい。各面はケズリにより仕上げられる。50SK160出土。

硯 (4・5) 4は滑石製で、当初の形状は下辺部を山形に作るものとみられる。現存長8.0cm、

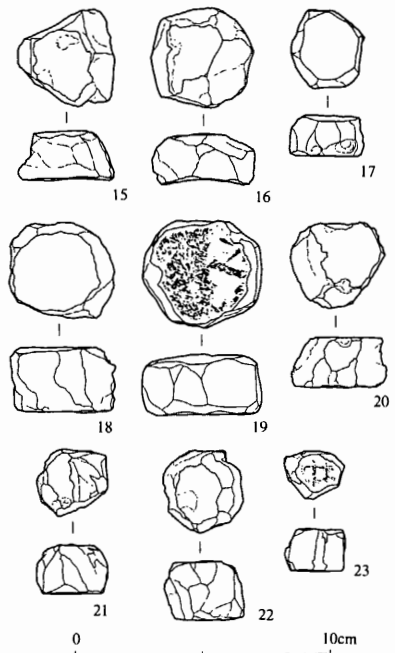


Fig.81 土坑出土瓦実測図 (1/3)

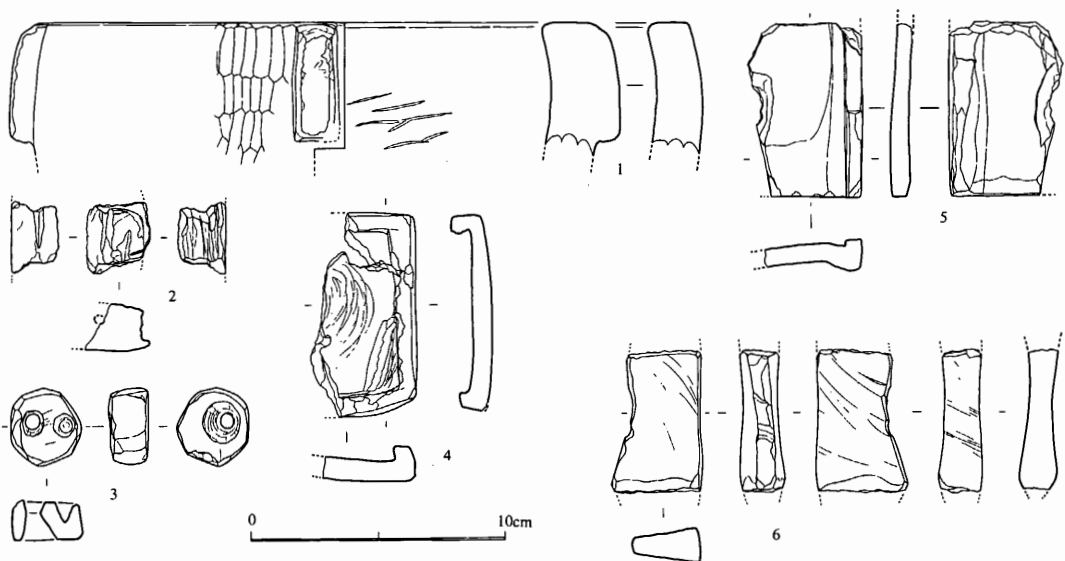


Fig.82 土坑出土石製品実測図 (1/3)

残存最大幅4.2cmを測る。内面は海部を深く山部を浅く彫り込むが、明確な区別はない。中央部に研磨痕があり、わずかに窪んでいることから、墨痕はないものの使用した可能性がある。表面はケズリによって調整されるが、底部がわずかに湾曲していることや煤が若干残存していることから、石鍋の加工品と考えられる。50SK180出土。5はかな

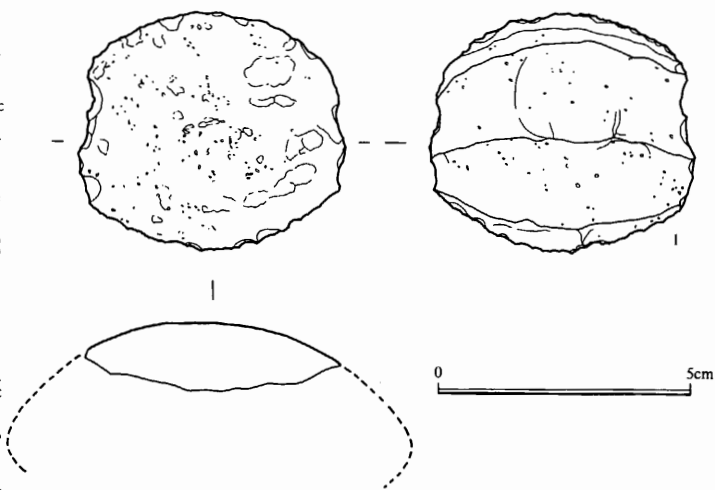


Fig.83 土坑出土石器実測図 (2/3)

り使い込まれた硯の断片で、裏面の側縁部分は段状にケズリ残して脚としている。末端部分が直線を成し、切断痕がみられることから、他の部位を再利用した残欠か、再利用を目的とした未加工品と思われる。泥岩製で、50SK030出土。

砥石 (6) やや肌理の粗い砂岩製で、図の下端は自然面ながら整っており、製品化する段階での切断面と思われるが、上端は破断面で後のものと考えられる。側面の片方は凹凸が著しいが、一定の研磨がなされており、使用時の形状を維持しているものと思われる。他の面はすべて使用面である。50SK375出土。

F：石器 (Fig.83、CD-1812・1813)

石斧 (1) 玄武岩製磨製石斧の剥片を二次的に加工したものである。石斧部分の残存面には槌打痕を認める。二次的な加工は剥片の端部を調整する程度である。50SK180出土。

〔5〕墳墓出土遺物

遺物出土状況 棺上では北・中央・南の3ヶ所に土器が出土し、おもに北側頭位上部に数は多い。

(棺上北) 土師器小皿a (2~6・8・9)、龍泉窯系青磁皿 (10・11)、漆手箱および内容品。

(棺中央) 土師器小皿a (7)。

(棺南東隅) 土師器小皿a (1)。

A：土器・陶磁器

50ST320出土土器 (Fig.84、CD-1814~1846)

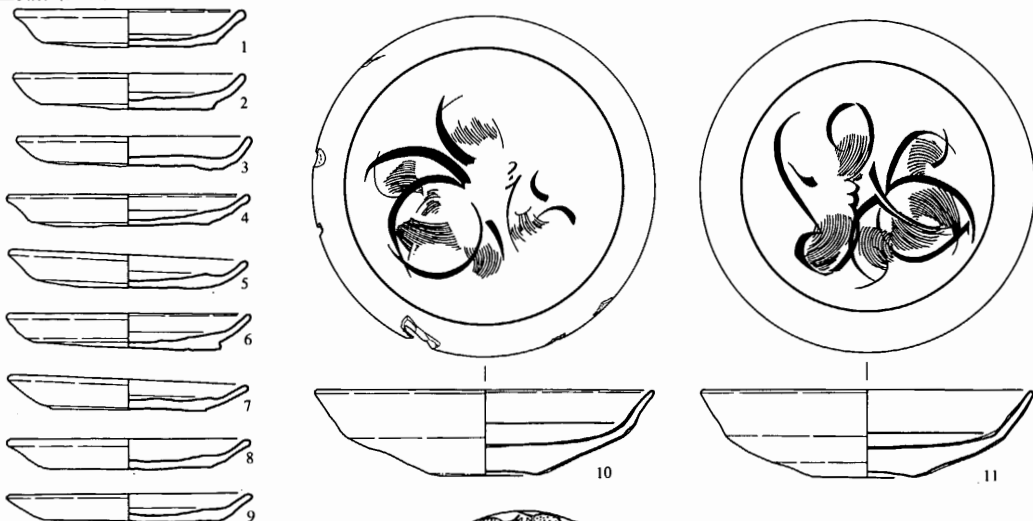
棺上出土土器 (1~11)

土器の出土位置については遺構図Fig.14に番号を記した。

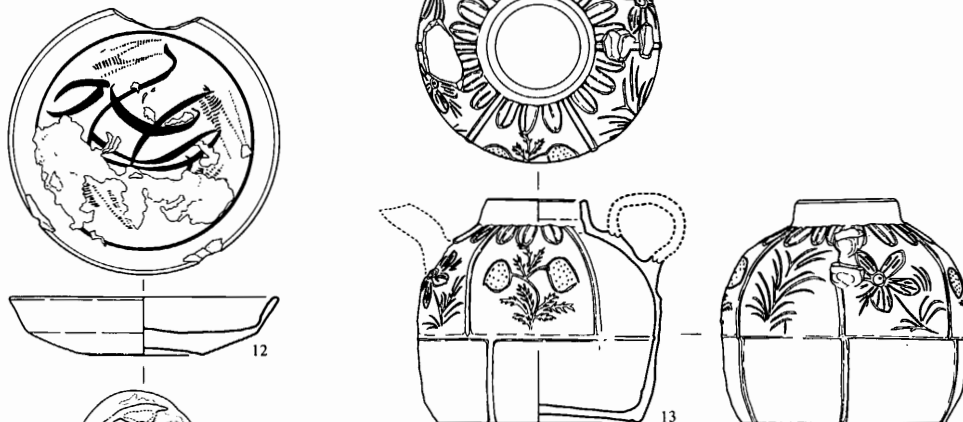
土師器

小皿a (1~9) すべて糸切り。口径8.85~9.7cm、器高1.1~1.4cm、底径6.4~7.05cm。9個体

棺上供献 (1~11)



漆手箱内 (12・13)



棺内埋土 (14~18)

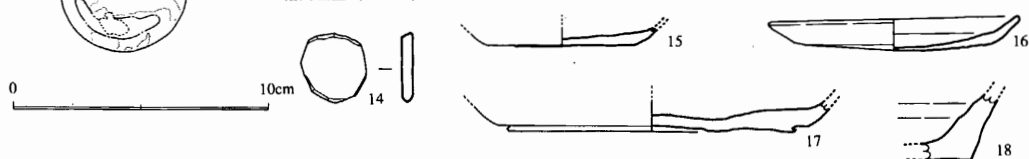


Fig.84 50ST320出土土器実測図 (1/3)

の平均値は径9.3cm、器高1.3cm、底径6.9cmである。2~6・8・9は棺上北出土。2は棺蓋の崩壊時に転倒し位置を移動したとみられるが、他は正位置を保つ。1は棺南東隅出土。棺上北の一群のレベルと等しく、これも棺腐朽後に転落したと考えてよい。倒位で出土した。7は棺中央に落下した状態を示す。

龍泉窯系青磁

皿 (10・11) 2点とも皿I-1-b類。底部外面は全面施釉後に釉を削り、無釉である。この種の皿としては大形で良品の類に属する。底部内面には片彫で花文輪郭を刻み、櫛目により花文

内を埋める。10の口縁は、一部発掘時に破損した。10の口径13.3cm、器高3.4cm、底径3.8cm。11の口径13.0cm、器高3.4cm、底径3.9cm。棺上北出土。

漆手箱内出土土器 (12・13)

同安窯系青磁

皿(12) I-2-b類。全面施釉後、底部外面の釉を削り取る類で、底部内面に片彫とジグザグの櫛点描文(雷文)を施す。底部外面には焼成時の焼台痕がある。口縁の一部を欠くが、これは故意に打ち欠いた可能性がある。接合する破片は手箱内及び墓壙内にもない。内面には蠟状の付着物があり何かに使用されたことがわかる。口径10.6cm、器高2.3cm、底径4.9cm。懸子内より倒位で出土。

青白磁

水注(13) この種の水注は蓋付きであるが、ここでは蓋が欠落している。水注は注口、把手を故意に打ち欠いていて、接合する破片は手箱内及び墓壙内にはないので、墓外において打ち欠いたものである事は明らかである。この点では12も同様である。器体は型造りで、

胴部中位ほどで上下別型で作ったものを合わせて一体とし、胴部上半に、3種の凸文様の草花文を各々前後対称位置にして6面に配している。直立した短い頸部下には凸蓮弁文を一周する。釉は胴部外面から頸部内面に施され、内面及び底部外面にはない。釉色は柔らかな水色で美しく、薄手で良質の類である。口径4.0cm、器高8.8cm、底径8.0cm。手箱身内部で斜めに傾いて出土。

本品と似た小形の合子形壺は、経塚や都市遺跡等の出土例もあるが、これよりも一段大きな本品の例は少ない。挿図Aは本品と極めて類似した香港馮平山博物館所蔵品の例である^(註1)。ただし草花文の配置関係や文様の一部は異なる。挿図Bは蓋の類例で口縁部にかえりを有し、上面の凸文様は胴部草花文の一つと類似する。大宰府南条坊5次調査出土^(註2)。

棺内埋土出土土器 (14~18)

埋土中には土師器の細片が多い。その中でとくに注意したのは、墓に伴う土器類の年代観よりも新期のものがあるかという点である。

土師器

小皿a (15・16) 15は糸切りで底径5.9cm。16は糸切りとみられ、口径9.8cm、器高1.3cm、



挿図A 青白磁水注：参考資料
(馮平山博物館所蔵)



挿図B 青白磁水注蓋：参考資料
(御笠川南条坊遺跡第5次調査)

底径7.3cm。

坏a (17) 糸切りで底径11.4cm。下限XV期。

土器片加工品 (14) 土師器片を円盤状に加工したもの。径2.6cm、厚さ0.5cm。

高麗陶器

壺・甕 (18) 無釉陶器底部小片で須恵器的焼成をなす。胎土は極めて緻密、良質で茶褐色を呈し、内外はヨコナデを密に行い叩き痕を消す。

B：漆器

漆手箱 (Fig.85・86、CD-0501～0642)

発掘の経過 箱は土圧で押しつぶされた状態で検出されたが、吊金具、覆輪の一部、青白磁水注が表面に見えていた。現場では箱の上面を検出するにとどめ、木枠と発砲ウレタンで固定し周囲の土ごと取りあげた。次に室内作業において反転し、箱の底部側から泥を落として底面を掘りだした。この時点で部分残存した木棺底板の上に人骨頭部があり、骨の上に手箱が乗っている事を確認した。この後、レントゲン写真撮影を大分県風土記の丘資料館で行ったところ、四周に覆輪、箱内部に六花湖州鏡が感知された。手箱の開封作業には慎重を期し、作業方法の模索で数年間そのままの状態が経過した。取りあげ後の漆膜は比較的良好な状態が続いたが、その理由としては(1)解体せず周囲の土で固定されていた事、(2)掘り出した直後には水をたっぷり浸したガーゼで覆い、3日に一度程度の率で水分を補給し、数年繰り返していくうちに1週間毎、1ヶ月毎と期間があき、長期的には全く水分を除いたまま固定した。(3)初期の段階のみにはホルマリンを使用したが、九州歴史資料館横田義章氏の指導により、漆変質の危惧もあるとの事で薬品使用を停止した。(4)比較のカビなどが生じなかったことなどがあげられる。しかし完全乾燥後、3年ほど経ると、漆膜の表面劣化が懸念される事態となり、その保存修復のために東京国立文化財研究所へ運び、中里壽克氏の指導を得ながら、今度は手箱の上面(蓋)から順に漆膜を取り上げていく作業を継続した。以下はこの作業において判明したことを記す。

漆手箱 蓋、懸子、身のセットからなる合口造型式の典型例である (Fig.86-B)。図は懸子上面段階を示す。ただし水注は身内のもので、懸子を突き破っている。箱は土圧で変形をうけ、木地も腐植する。側面は(扇子のように)多重に折れ曲がる。箱の分量については漆膜整理途中の現時点では正確に出し難い。漆膜の展開と、角隅部の位置の割り出し、欠損・変形した覆輪の長さの復原など計測すべき点が残る。これらについては今後の整理過程で決することとし、図上あるいは実物の部分計測から把握した略寸法について記しておく。

まず、Fig.86-B懸子の側面高は北側膜の一定残存部からみて約3cm程度である。身の深さは、側面の膜を展開していないので、懸子高さと同様に青白磁水注高さから仮に割り出してみる。水注を立てて収納したならば、水注高+懸子の深さが手箱身内面の最小深さ値となる。把手は先の馮平山博物館の例から見て、口縁部よりやや高い位置にあり、また蓋が伴うならば、水注高に1cm弱の高さを加算する必要がある。こうして最低でも身の深さは=水注高+(蓋または把手

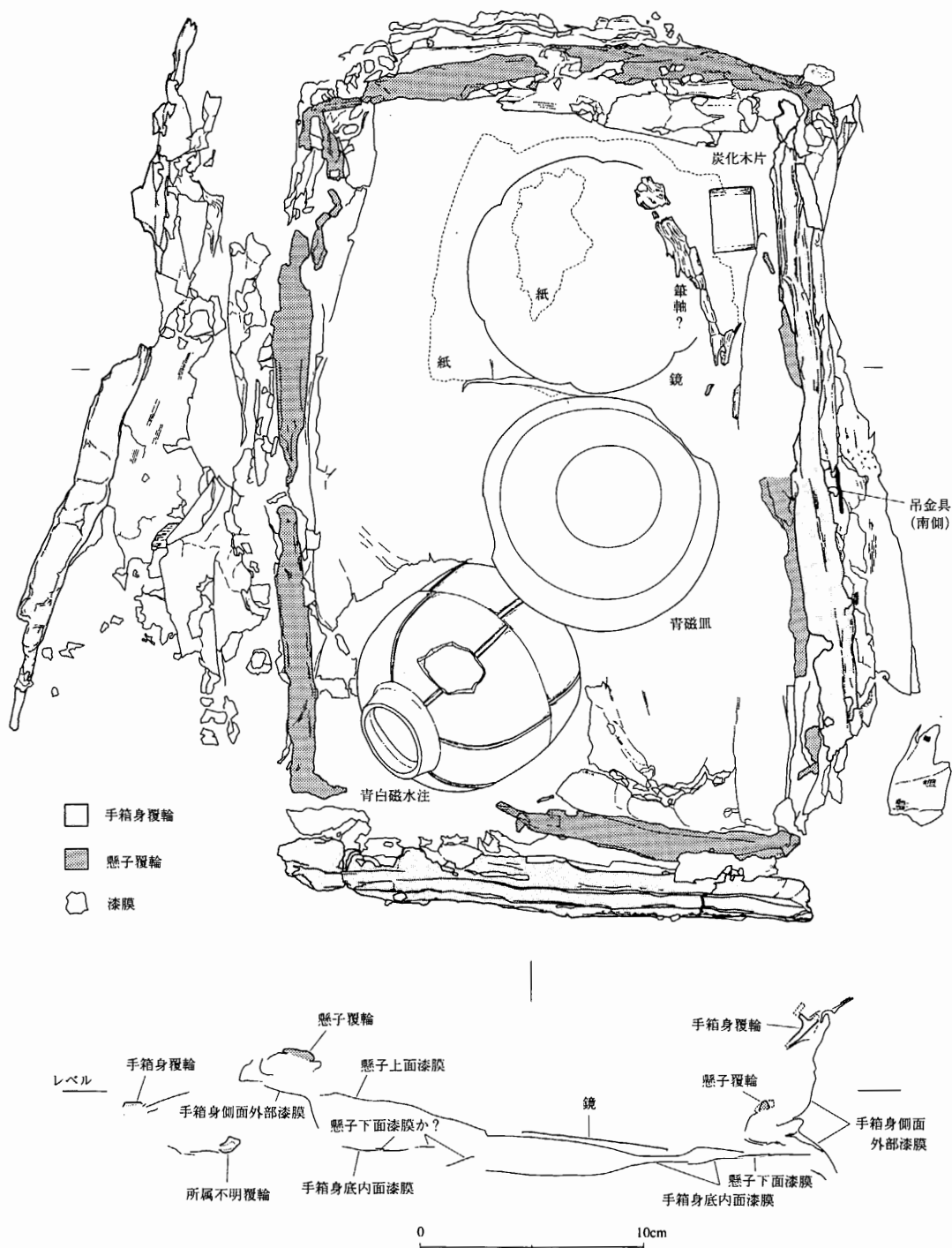


Fig.85 50ST320出土漆手箱 (1/3・手箱蓋漆膜除去段階)

のはみ出し分) + 懸子の深さ = $8.8 + 1.0 + 3.0 = 12.8\text{cm}$ 以上となる点が理解できる。懸子の平面寸法については、Fig.85残存部から長辺30cm、短辺22cm前後と推定される。従って身・蓋の平面寸法は懸子よりも一回り大きくなる。手箱の本体厚みは、木地の腐植のため全体を明らかに

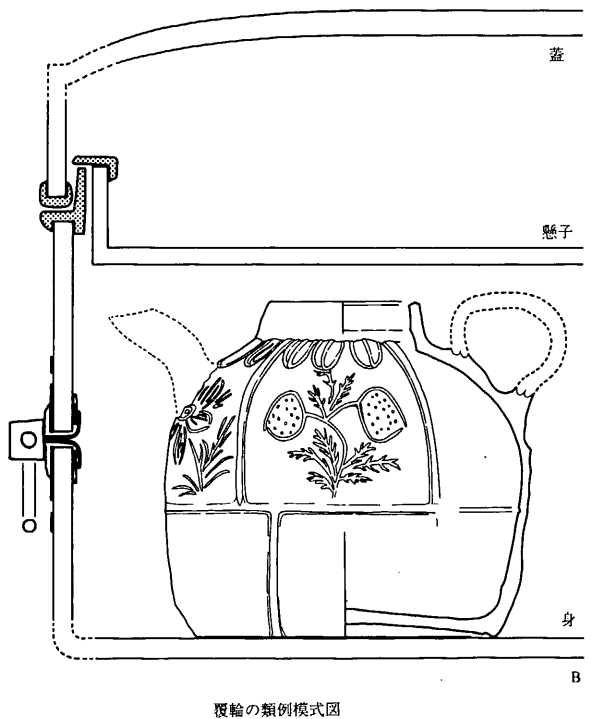
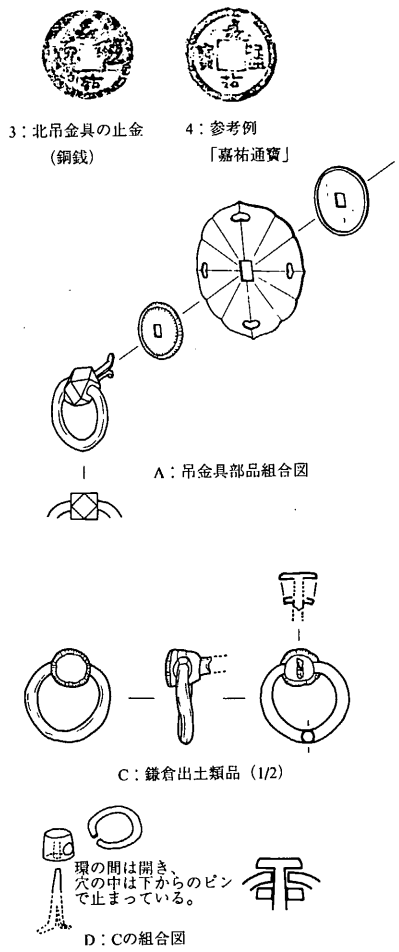
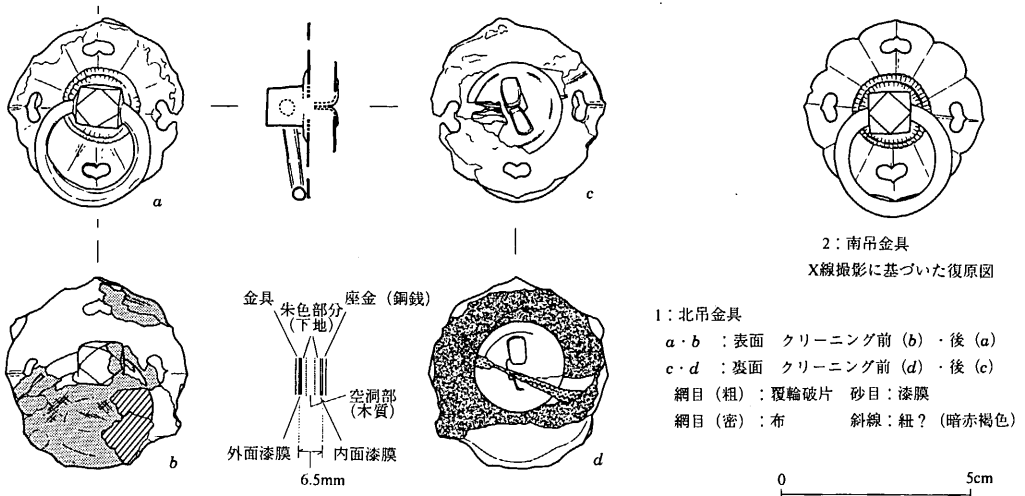


Fig.86 50ST320出土漆手箱付属品実測図 (1/2) 及び漆手箱復原図

しえないが、身の長辺側面中心部のみは吊金具の内外止め金具間隔 (Fig.86-1) により、その厚さが判明する。出土位置北側金具では身厚さ0.65cm、南側でもほぼ同値である。なお、漆膜については蒔絵はなく、黒漆塗りのものである。

布着せ・下地の痕跡 手箱は木地に直接塗りを行ったのではなく、いったん下地塗りを施している。下地は厚く残っている部分もあり、橙色の部分が多く、黄褐色ないし黄灰色の部分もみられた。古代製作技術の追求にあたって、その材料と使用法の分析は今後必要であろう。下地取り上げ時の観察では、下地の間に挟まれた木地の腐植痕跡が確認された部分もある。部分的確認に止まるが、手箱内外面に下地が施された傍証となる。

次に漆膜の裏面には多数の研磨擦り傷とみられる痕跡が残り、さらに布ぎせの痕跡が膜の裏面や下地に残る部分がみられた。ただし布ぎせは手箱のごく一部に限られ、全面に行われたものではない。まだ全体を把握するには到っていないが、吊金具取り付け部分、箱のコーナー部分など強度を要する部分に行われている。

覆輪の形状・寸法 レントゲン写真撮影により覆輪は3重になる部分も想定されていたので、蓋・身の中に懸子の存在も予期されていたところである。クリーニング中であり、部分的に判明した断面をFig.86-Eに示す。材質は錫製だが腐食によりきわめて脆い。

吊金具 (紐金具) 手箱身の長辺側の両面中央部には吊金具 (Fig.86-1・2) が付く。吊金具は出土位置北側の一方のみクリーニングを行った。箱身外面に見える金具部分は大きな座 (径4.8cm、稜花4弁、猪目を有する) と軸 (切子形の頭) を通し、軸基部はさらに細かい2重菊花形の円形小形座を持つ。頭の孔には鑲をまわす。

軸から出た割ピンを身内面に突き抜き、内面に銅銭を当て金 (ワッシャ) として噛ませ、ピンの両端を開きボディに固定する。この割ピンと軸頭は別々の金具を接合したらしく、複数部品を組合わせて一体とした (Fig.86-A)。軸と割ピンの接合状態はこの例ではまだ明らかでないが、鎌倉出土例 (Fig.86-C) ^(註3) を基にFig.86-D→Aのような組み合わせが想定できる。身外の金具表面は肉眼観察および分光分析の結果、全面塗金されているが、座・軸と鑲の質感に差がある。環の方は純銅に近いためか赤味が強い。内面の銅銭は北宋・嘉祐通宝 (北宋仁宗、嘉祐元年初鑄、西暦1056年、Fig.86-3、参考図Fig.86-4) と判明した。

鑲には錆び付いた布と紐の痕跡が確認された。まず布が表面に被り、これを除くと鑲に巻きつく赤茶色化した塊状の付着物が見え、紐の痕跡と考えられる (Fig.86-1b)。このことから埋納時には手箱本体は布でくるまれていたことになる。未クリーニングの南側吊金具についても全く同形であり、やはり布痕が表面につき、内側にも銅銭を用いている。

手箱内容品

湖州鏡1、青白磁水注1、同安窯系青磁皿1、筆軸?1、炭化木片1である。

(懸子内出土品) 湖州鏡、筆軸?、炭化木片、同安窯系青磁皿。青磁皿は中央に、他は南東側隅に位置していた。

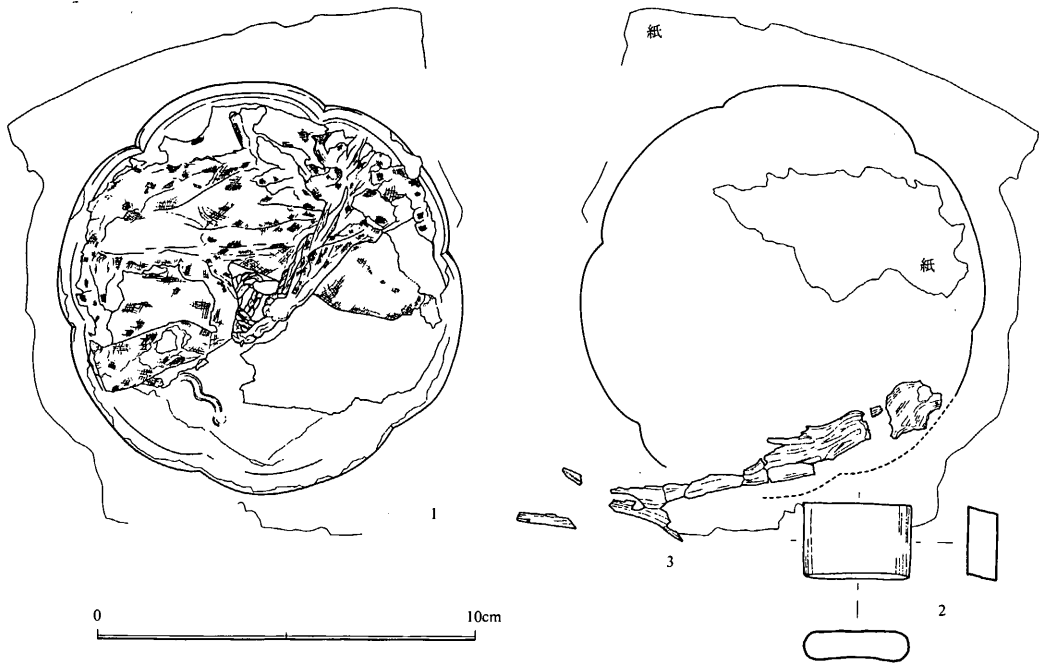


Fig.87 漆手箱懸子内出土湖州鏡・筆軸？・炭化木片見取図（1/2）

（身内出土品）青白磁水注。

C：金属製品（Fig.87、CD-1847～1877）

湖州六花鏡（1） 漆手箱の懸子内で鏡面を上にして出土した。鏡面上には布痕および付着物が付く。背面は素文で長方形枠に銘文が鋳出されているが、文字は読めない。背面には錆化した撚紐、布、紙が確かめられた。撚紐は紐孔に2重に通しており、すぐ下の位置で結び目が見られ、数本の撚紐を垂らしたものである。

雲母びきの紙の痕跡 懸子底部内面の漆膜には鏡を中心にして11×13cmの方形範囲に黒褐色の付着物が確認された。この付着物内はきらきらと輝く物質が多く、精査の結果、これらは雲母の小片で、雲母びきの紙（高級の上質和紙）が風化したものと判断された^(註4)。鏡背面の錆化物の上下重なり状況と合わせると、鏡はまず布に包まれ、さらに方形に折った雲母びきの紙に収納された事が判る。なお、このすぐ下の身底部内面において、ほぼ同様な範囲に黒褐色の付着物が確認されている。

D：木製品（Fig.87、CD-1845・1846）

筆軸？（3） 炭化している。懸子内面漆膜上から鏡面上に沿って出土したが、手箱の崩壊時に多少原位置を移動した可能性がある。腐植による変形があり押しつぶされている。軸は図の左端が細くなり先端に丸味を有していた。長さ約10cm。なおつぶれたためか幅が多少広く、出入りがあり、あるいは2本を平行に置いている可能性もある。

炭化木片（2） 断面が蒲鉾状をなし、小形角材木片の両端には丸く面取りを行う。筆軸が

炭化している点から埋没環境で炭化したとも考えられるが、筆軸のように変形していない点を見ると、もともと炭化加工材を入れた可能性もある。墨などの代用品なのか用途は明らかではない。縦1.8×横2.8×厚さ0.7cm。

註 (1) 阿久井長則氏から写真の提供とともにご教示を受けた。

(2) 前川威洋ほか『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告2』1975 福岡県教育委員会

(3) 手塚直樹氏（鎌倉考古学研究所）のご教示を受けた。

実測図は大坪聖子氏による。

(4) 今後の分析も必要であり、雲母以外に二次的变化を受けた有機物質の可能性もある。

[6] その他の遺構出土遺物

井戸状遺構

A：土器・陶磁器

50SX360上層出土土器（Fig.88、CD-1878・1879）

土師器

椀（1） 口径19.5cm。風化が著しく調整は観察しにくいが、体部外面下半は回転ヘラケズリとみられる。

甕（2） 口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ目、内面は縦方向のヘラケズリである。

50SX360出土土器（Fig.88、CD-1880～1892）

須恵器

小蓋a3（3） 口径10.0cm、器高1.2cm。天井部はヘラ切りされた後簡易にナデたようで、凹凸はあまりない。内面中央部はナデである。

蓋c3（4） 口径15.8cm、器高3.8cm、天井部径9.0cmを測る。摘みは逆円錐台形の大きなもので、回転ヘラケズリされた天井部に丁寧に接合される。

坏c（5・6） 口径13.9・12.7cm、器高4.9・5.2cm、高台径9.0・8.4cmを測る。底部と体部の境目は丸味を持たせ、高台はわずかに外方に踏ん張ったような形状を呈している。5の底部はわずかに押し出されたように湾曲している。両者とも焼き歪みがある。

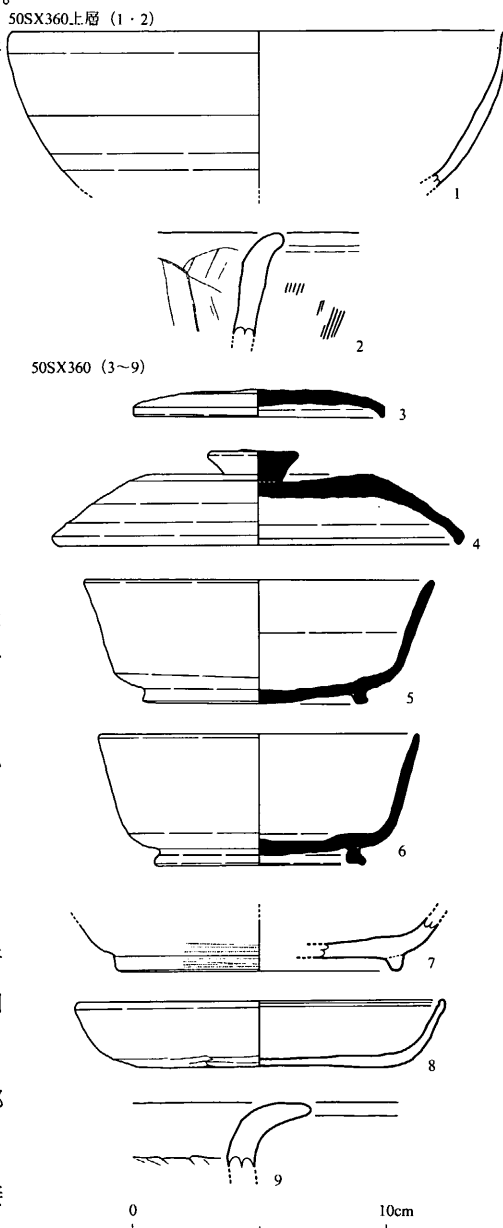


Fig.88 50SX360出土土器実測図（1/3）

土師器

椀c (7) 高台径11.2cm。内面はやや不明瞭だが、外面は体部から底部中央近くまですべてミガキaが施される。軟質で、明茶白色を呈する。

皿 (8) 口径14.6cm、器高2.6cm、底径10.4cmを測る。口縁部内面に1条の沈線が巡っており、都城系に似るが、体部や底部に暗文は施されない。体部はヨコナデ、内面の底部はナデ、外面の底部はヘラケズリだが、体部との境目近くは横方向、平坦をなす中央部分はほぼ一定の方向に削られる。色調は暗赤茶色を呈している。完形のため断面観察は不能だが、胎土には砂粒を若干含むものと思われる。

甕 (9) 口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリを行う。

柱掘り方状遺構

A：土器・陶磁器

50SX445出土土器 (Fig.89、CD-1893・1894)

須恵器

蓋3 (1) 口径12.8cm。体部はヨコナデである。

坏c (2・3) 高台径7.2・9.2cm。内面底部はナデで、他はヨコナデである。

祭祀遺構

A：土器・陶磁器

50SX315出土土器 (Fig.90、CD-1895・1896)

同安窯系青磁

皿 (1) 釉は淡緑茶色で透明度の高く、光沢がある。I類。

B：金属製品 (Fig.91、CD-1897)

銭 (1~7) いずれもピット内から検出されたもので、報告する番号は出土番号と同じである。1は「至和元寶」、2は「開元通寶」、3は「元祐通寶」、4は「景祐元寶」、5は「嘉祐元寶」、6は「至和元寶」、7は「治平元寶」である。1・2、3・4は各々癒着して出土した。

整地状遺構

A：土器・陶磁器

50SX260出土土器 (Fig.92、CD-1898~1901)

土師器

坏a (1) 口径13.0cm、器高2.5cm、底径9.2cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。
白磁

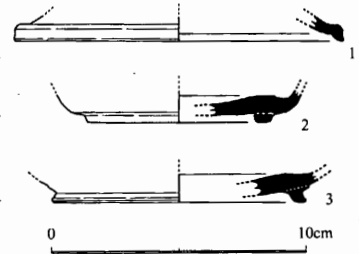


Fig.89 50SX445出土土器
実測図 (1/3)

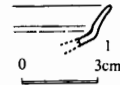


Fig.90 50SX315出土
土器実測図 (1/3)

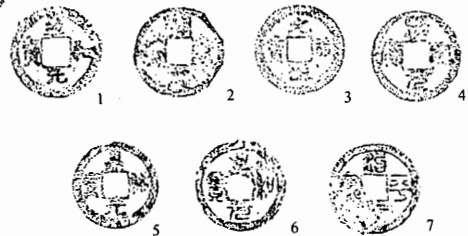


Fig.91 50SX315出土土器実測図 (1/2)

皿 (2) 口径10.0cm。見込みの釉は掻き取られ、その部分に目跡が残る。III-1類。

同安窯系青磁

皿 (3) 底径4.4cmで、底部の釉は掻き取られる。見込みにヘラと櫛による施文がある。I-2-b類。

須恵器

硯 (4) 側縁部分の破片と考えている。上下面及び外面は横方向の細かな擦痕の残るケズリで仕上げられている。内側は斜めに板状のものが存在していたことを窺わせる断面が残り、図の上方向が海部分と判断している。側縁の下端及び接地部分に沈線がある。表面は暗褐色、内面及び断面は明茶褐色を呈し、白色砂粒がごく微量含まれている。きわめて硬質に焼成され、石と見間違ふほどである。

50SX430出土土器 (Fig.93・94、CD-1902~1933)

土師器

小皿a (1~8) 口径8.4~9.8cm、器高0.9~1.5cm、底径6.2~8.5cmを測る。4・5・8の底部はヘラ切りされ、他は糸切りである。

丸底坏a (9~12) 口径15.4~15.6cm、器高3.0~3.4cmを測る。底部はヘラ切りされ、内面はミガキbを施す。

坏a (13・14) 13は口径16.4cm、器高3.0cm、底径6.8cmを測る。色調は明白茶色を呈し、底部は糸切りである。14は底径8.0cm。底部は糸切りである。両者とも豊前系。

土師質土器

鉢 (15) 底部と体部の境目に脚を取り付ける。底部径15.4cm。

鍋 (19) 外面には煤が付着する。

瓦器

椀 (16・17) 16は高台径6.4cm、17は口径17.0cmを測る。両者とも内面はミガキbの後、ミガキcを施す。

鉢 (18) 内外面ともにミガキcを施す。

白磁

椀 (20~27) 20は口径15.8cm、器高5.7cm、高台径5.2cm。II-1-a類。21・22は口径16.7・17.0cm、器高6.3・6.8cm、底径7.4・7.6cm。見込みに沈線状の小さな段がある。IV-1-a類。23は口径16.0cmで、IV類。24は高台径7.0cmで見込みに沈線状の小さな段がある。IV-1-a類。25は口径17.0cm。体部は開き気味でVIII-2類とみられるが、V-1類の可能性も残される。26は口径

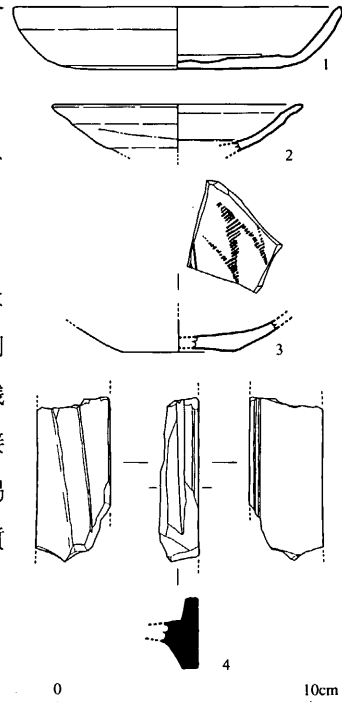


Fig.92 50SX260出土土器
実測図 (1/3)

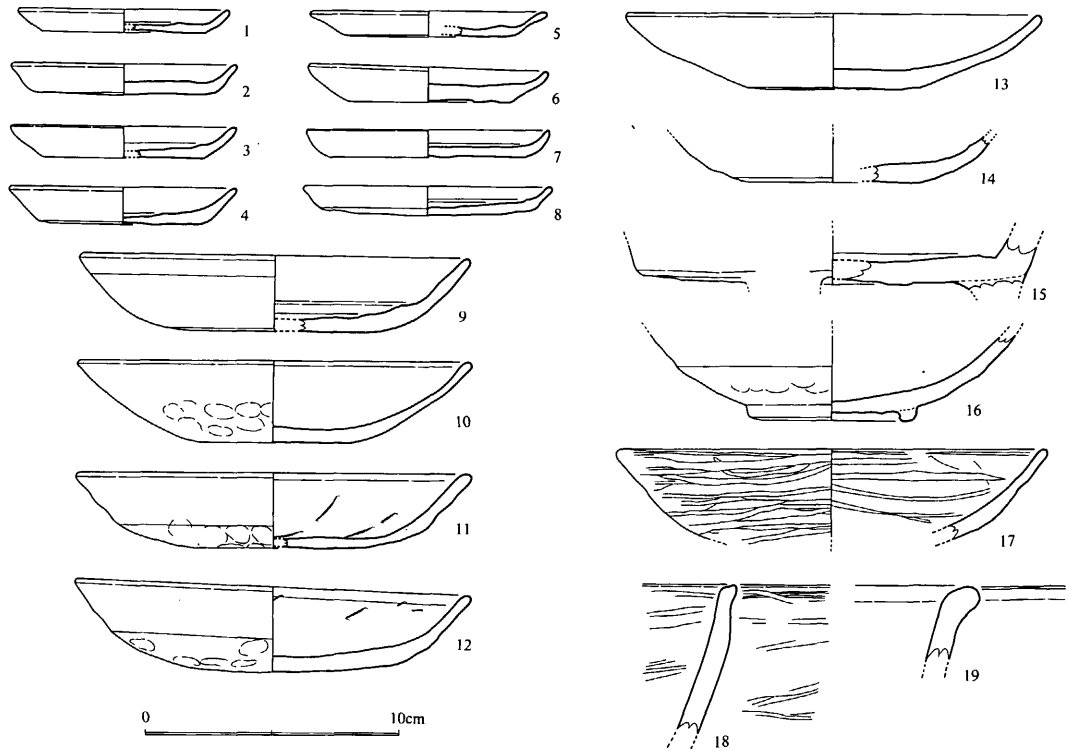


Fig.93 50SX430出土土器実測図1 (1/3)

15.6cm。VII類もしくはV-2類。27は口縁端部を外方へつまみ出すもので、外面には細いヘラによる施文、内面は櫛による施文がある。V-4-c類。

皿 (28・29) 28は口径11.6cm、器高3.2cm、高台径5.2cmを測る。見込みと体部の境目に小さな段がある。II-1-a類。29は口径10.2cm、器高2.5cm、底径3.0cmで、体部外面下半以下には施釉されない。外面底部に「一」と思われる墨書がある。VI-1-a類。

青白磁

合子蓋 (30) 口径10.4cm。黄色味を帯びた透明度の低い釉で、口縁端部及びその内側には施釉されない。体部外面に型によるとみられる施文があるが、釉により不明瞭である。

青磁

椀 (31) 体部外面に櫛による施文、内面にはヘラと櫛による施文がある。釉は淡緑色に発色するもので、光沢がある。胎土は明灰白色で、黒色の微粒子を若干混入している。龍泉窯系青磁もしくは同安窯系青磁0類。

陶器

壺 (32) 肩部の資料で、外面の釉は暗黄茶色に発色し、透明度は低く鈍い光沢がある。内面にも同様の釉がかかるが疎らで、露胎部分も多い。胎土は淡灰茶色で白色、黒色及び茶色の粒子を多量に含んでいる。

甕 (33) 釉は暗黄茶色に発色するが、内面の大部分で白濁化している。内外面とも下半部

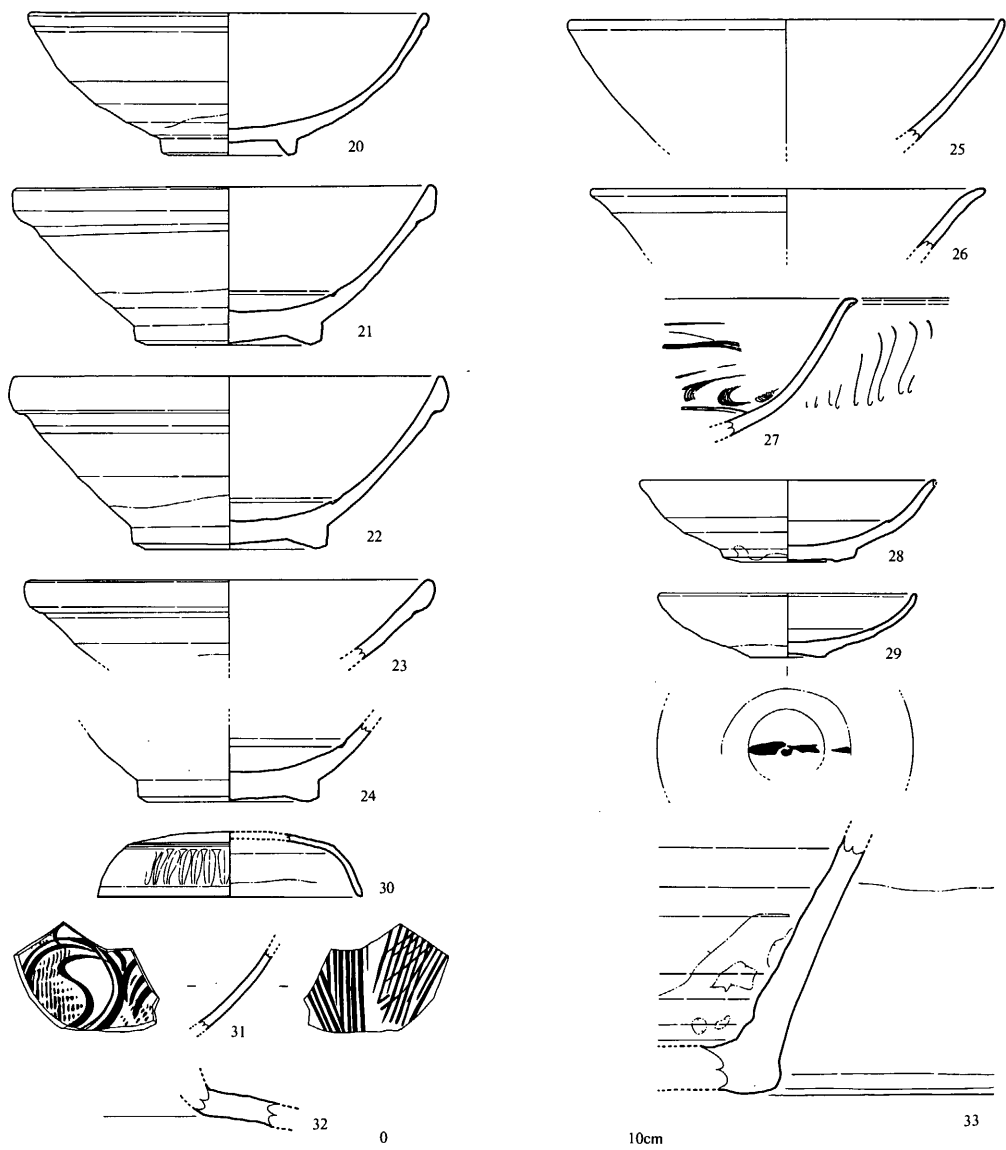


Fig.94 50SX430出土土器実測図2 (1/3)

にはかからない。胎土中には暗白色の砂粒が多量に含まれ、黒灰色粒子も若干混じる。

50SX430下層出土土器 (Fig.95、CD-1934~1952)

土師器

小皿a (1~3) 口径8.4~9.2cm、器高1.5~1.7cm、底径6.3~7.0cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底杯a (4~6) 口径14.9~15.7cm、器高3.2~3.8cmを測る。底部はヘラ切りの後押し出され、内面にはミガキbが施される。

甕 (7) 口縁部周辺はヨコナデである。

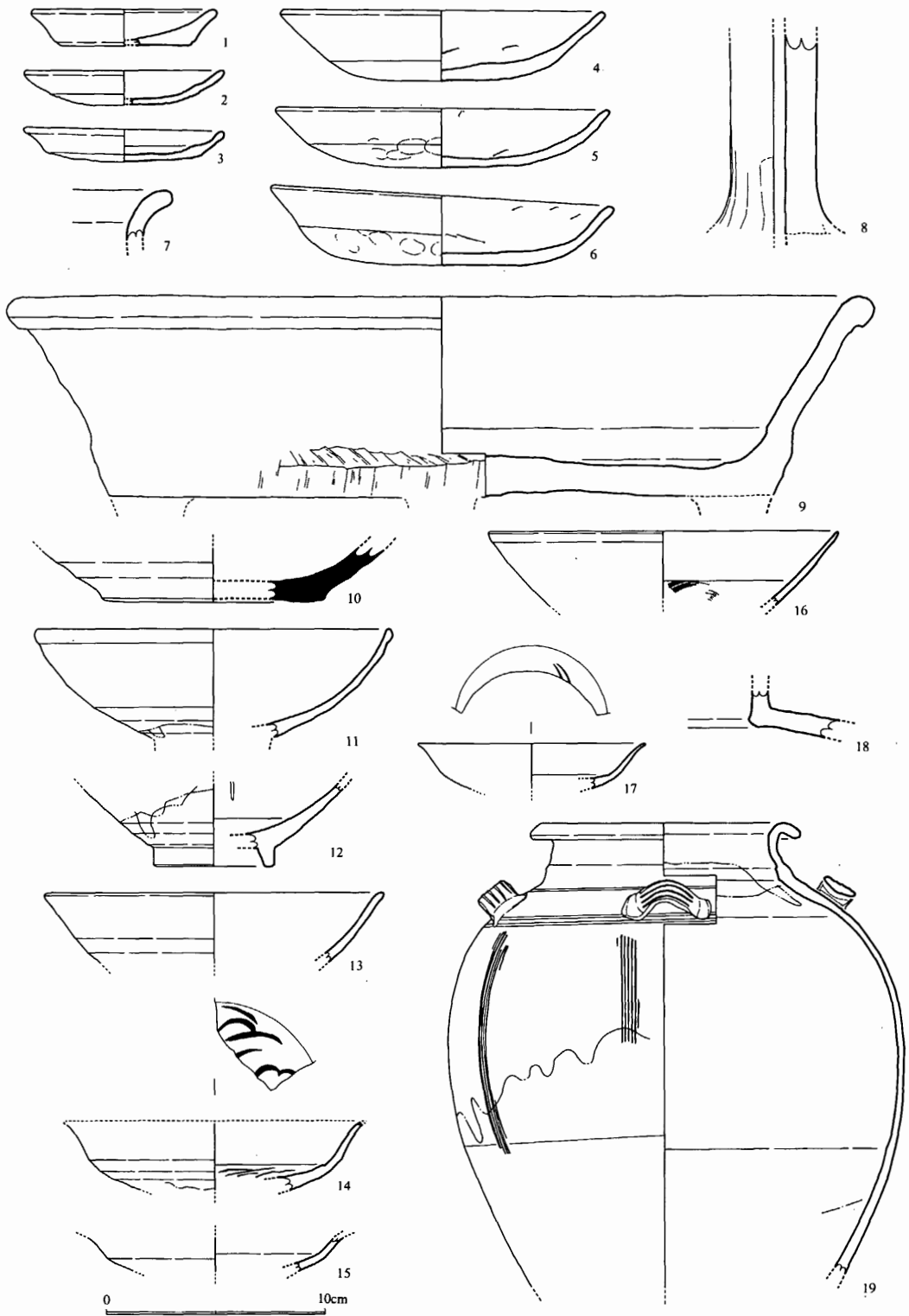


Fig.95 50SX430下層出土土器実測図 (1/3)

器台 (8) 脚部径3.9cmで、中央に径1.0cmの穿孔がある。手捏ねによる成形の後、表面は簡易なナデで仕上げる。

土師質土器

鉢 (9) 口径39.6cm、器高9.2cm (鉢底部まで)、底径30.4cmを測る。底部には脚が剥離した跡があり、当初は4方向に存在したと思われる。内面はヨコナデ、外面は体部上位がナデ、下半はケズリ及び工具を用いたような強いナデで仕上げる。

須恵質土器

鉢 (10) 底径10.2cm。底部は強めのナデで中央が少し窪んでおり、外周は使用による磨耗が認められる。内面も使用によって磨耗するが、劣化がひどくクレター状を呈している。東播系。

白磁

椀 (11~14) 11は口径15.9cm。口縁端部を小さな玉縁状に作るもので、II-1類。12は高台径5.6cm。内面には縦方向で白色の堆線がある。体部外面下半には施釉されないが、化粧土も近似する範囲にのみ施していることがわかる。II-b類。13は口径15.6cmで、V-1類。14は口径13.6cm前後に考えられるもので、見込みにヘラによる施文があるが不明瞭である。釉は黄色味を帯びた透明度の低いもので、鈍い光沢がある。外面下半には施釉されず、化粧土もほぼ同じ範囲に施される。XIII-1-b類。

四耳壺 (19) 口径11.2cm、胴部最大径20.7cmを測る。肩部に横方向の耳が取り付く。耳は粘土紐を薄くして貼り付けたもので、表面に3~4条の突線がある。胴部には縦方向の櫛目があり、各耳間に2条づつ計8箇所施され、ほぼ均等に割り付けられる。釉は黄色味もしくは青色味を帯びた透明度の低いもので、外面全体と内面では口縁部かけられる。また体部内面は底部近くまで施釉されていたようであるが、他は垂下した釉が一部にみられる程度である。胎土は淡灰色で精良なものだが、白色、黒色の微粒子を多く含んでいる。II類。

青白磁

椀 (16) 釉は黄色気味で透明度のやや低いもので、細かな貫入がある。内面の体部下半に細い沈線が巡り、それ以下に櫛による施文がある。

皿 (17) 口径10.4cm。釉は淡青色に発色し、透明度はやや低いが光沢はある。見込みに細いヘラ状工具による施文がある。

緑釉陶器

皿 (15) 体部中程に屈曲を有するもので、胎土は明茶灰色でやや軟質に焼成される。釉は淡黄緑色に発色し透明度が低く、鈍い光沢のあるものが内外面ともに薄くかけられる。体部の調整はヨコナデで終わる。京都産か。

陶器

壺 (18) 肩部の資料で、釉は暗緑色で透明度の低いものである。胎土は灰茶色で、白色粒

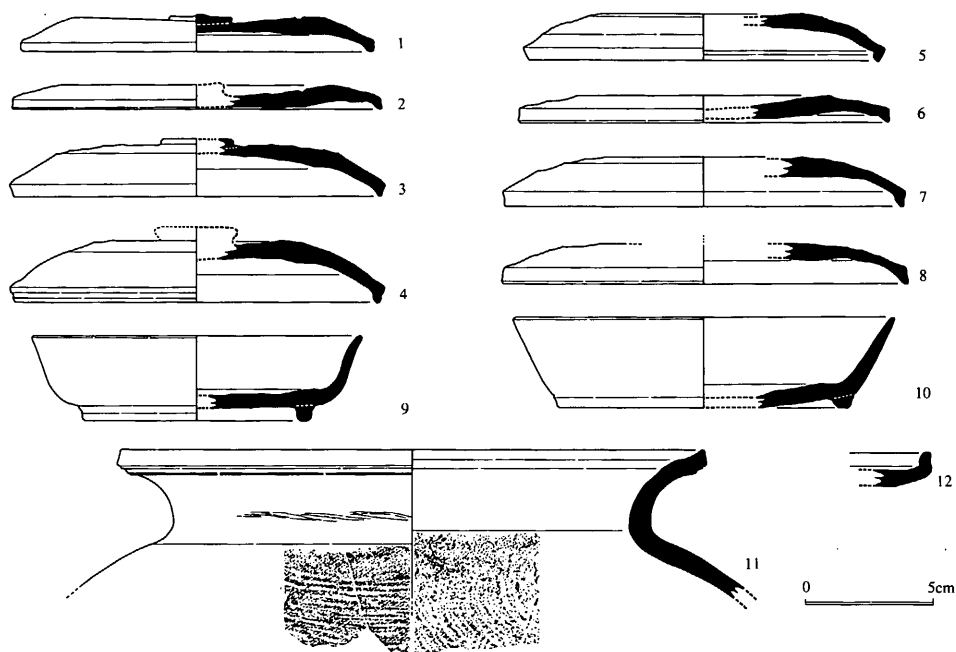


Fig.96 50SX500最上層出土土器実測図1 (1/3)

子を多量に含み、黒色の砂粒を若干含んでいる。

50SX500最上層出土土器 (Fig.96・97、CD-1953~1970)

須恵器

蓋c3 (1~4) 口径14.0~14.8cmを測る。1・2の天井部はヘラ切りの後ナデで終わるが、3・4では回転ヘラケズリを加える。ただし3はごく簡易なもので、ヘラ切りの痕跡を完全に消滅させるまでには至っていない。

蓋3 (5~8) 口径14.2~16.0cm。天井部はすべて回転ヘラケズリを加えるようだが、5・6では不明瞭である。

坏c (9・10) 口径13.0・15.0cm、器高3.4・3.6cm、高台径9.8・11.7cmを測る。10の底部は回転ヘラケズリされるが、9ではヘラ切りのままである。

高坏 (12) 残存部分はすべてヨコナデである。

甕 (11) 口径23.2cm。体部外面は平行叩き目、内面は同心円文の当て具痕を残す。口縁部はヨコナデである。

土師器

蓋3 (13) 口径22.0cm。体部はヨコナデであるが、表面の多くが風化しており調整は観察しづらい。

坏d (15) 口径13.8cm、器高2.9cm、底径9.1cm。体部外面下半は回転ヘラケズリ、内面にはミガキaがみられるが、他は風化が進行して観察しづらい。

碗c (16・17) 高台径13.2・12.7cm。体部はミガキaが施される。16の外面底部は回転ヘラ

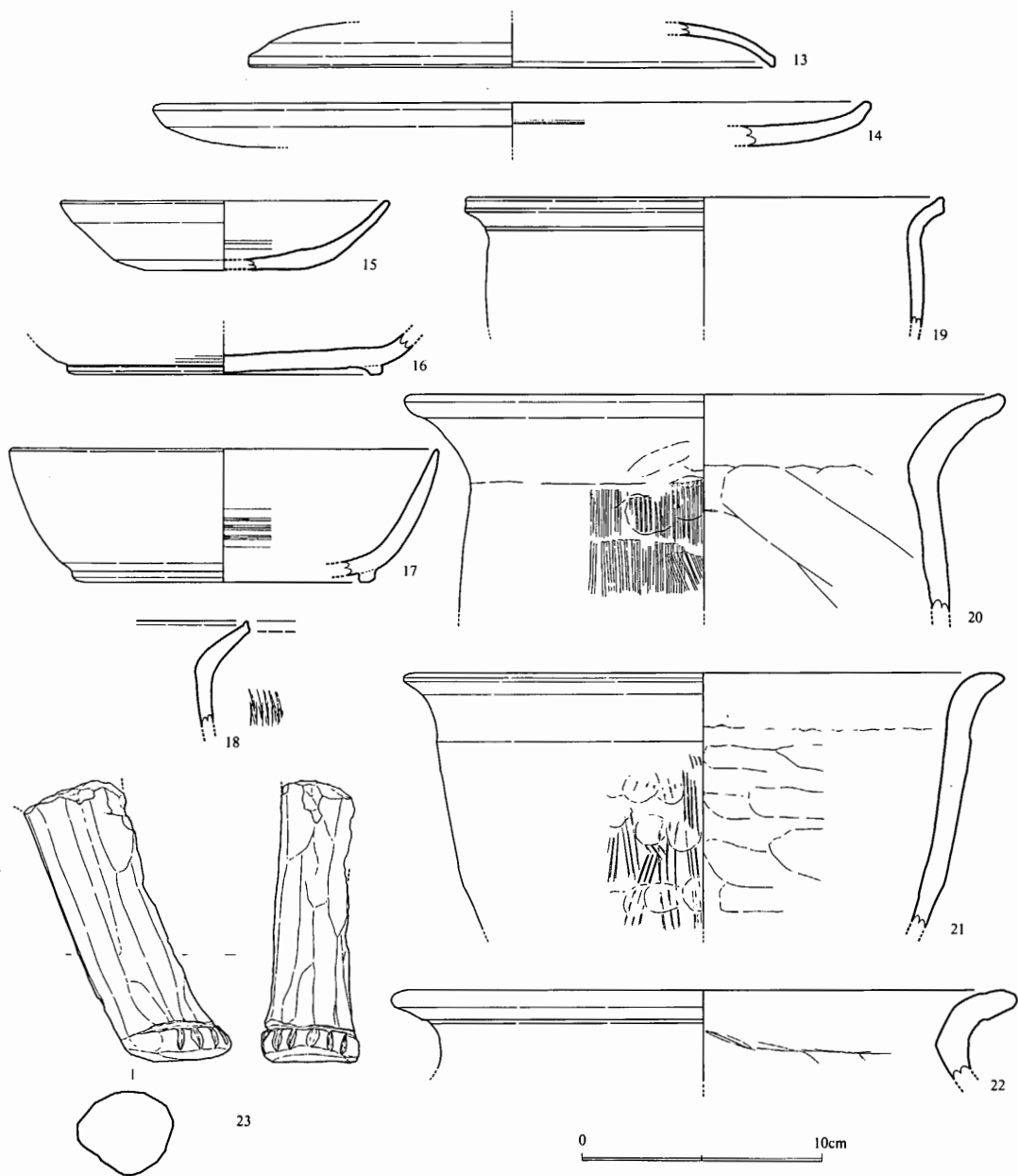


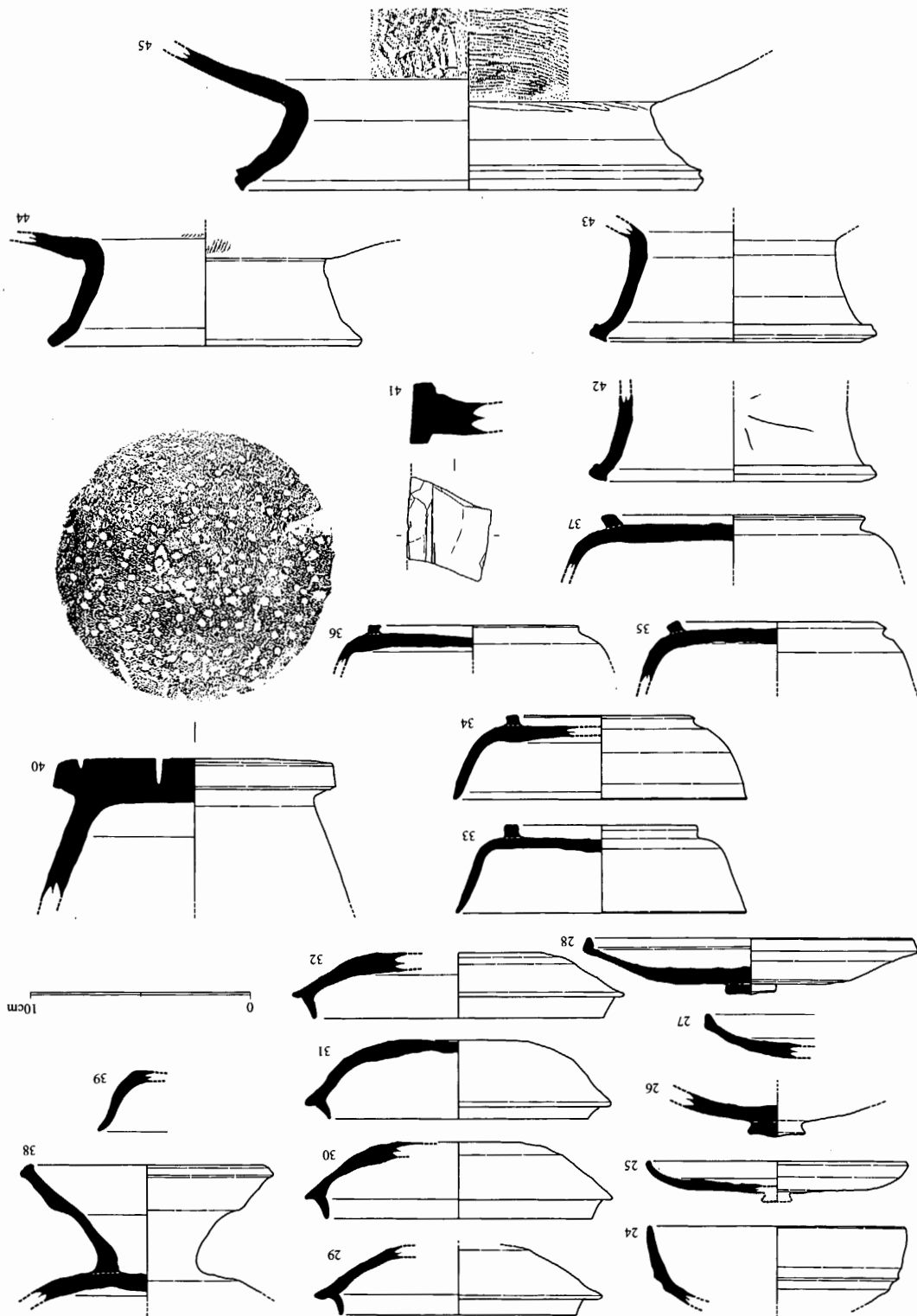
Fig.97 50SX500最上層出土土器実測図2 (1/3)

ケズリの後ミガキaである。

高坏 (14) 口径29.9cm。体部内面はミガキaを施し、外面は回転ヘラケズリの後ミガキaと思われるが、風化が進行し観察しづらい。

甕 (18~22) 18は口縁端部をわずかにつまみ上げるもので、体部外面は縦方向のハケ目である。19は口径20.0cmを測り、体部外面は強い条痕を残すヨコナデとみられる。明灰茶色を呈している。筑後産か。20は口径25.0cm。体部外面はハケ目、内面はヘラケズリである。21は口縁部を小さく外方に折り曲げる程度の資料で、体部外面は指圧の後縦方向の粗いハケ目、内面

Fig. 98 50SX500上層出土器美術圖1 (1/3)



は横方向のナデとみられる。22は頸部が短い筒状をなすもので、口径26.0cmを測る。体部内面はヘラケズリである。

獣脚 (23) 長さ約12.5cm。基部は接合部から外れており脚のほぼ全容であることが知られる。表面は縦方向のヘラケズリで面取りするように仕上げられ、足先にはヘラによって6箇所の刻み目を入れ指の表現とするが、数が多すぎる。

50SX500上層出土土器 (Fig.98・99、CD-1971~1997)

須恵器

蓋 (24) 口径11.6cm。底部と体部の境目には低い稜がある。

蓋c3 (25・28) 25は口径12.0cm。天井部はかなり広い範囲を回転ヘラケズリし、中央部は摘み貼付に伴うヨコナデが観察される。28は口径15.4cm、器高2.6cm。口縁端部は明瞭な三角形に作り、天井部は回転ヘラケズリを行う。摘みは低い宝珠形である。

蓋c (26) 低めの宝珠形を呈する摘みを有し、天井部は回転ヘラケズリされる。

蓋3 (27) 口縁端部を明瞭な三角形に作る。天井部は回転ヘラケズリされる。

坏 (29~32) すべて受け部を有するもので、口径10.9~13.2cm、器高3.0~3.6cmを測る。底部は回転ヘラケズリされる。

坏c (33~37) 33・34は口径13.2・13.4cm、器高4.1・3.9cm、高台径8.6cmを測る。底部はヘラ切りのままである。35~37は高台径9.6~12.0cmで、底部はヘラ切りの後粗いナデを施す。

高坏 (38) 脚端部径11.6cm。脚部表面はヨコナデである。

皿 (39) 底部はヘラケズリされるが、磨耗により不明瞭。

鉢 (40) 台部の径は12.8cm、厚さ2.0cmで、底部には径0.3~0.4cmで円形の貫通しない穴が多数穿たれている。鉢底部付近は使用によって平滑になっている。また穿孔のある面もきわめて平滑であり、何かを擦ることによって磨耗したとみられ、これも使用面と認識でき、おろし台にでも使用したものであろうか。

硯 (41) 使用面はかなり使い込まれたようできわめて平滑である。

甕 (42~45) 42・43は同一個体の可能性がある。いずれも口径11.6cmで、口縁の上端部を内側に小さくつまみ出す。42の外面には細いヘラによる施文があるが全容は明らかでない。

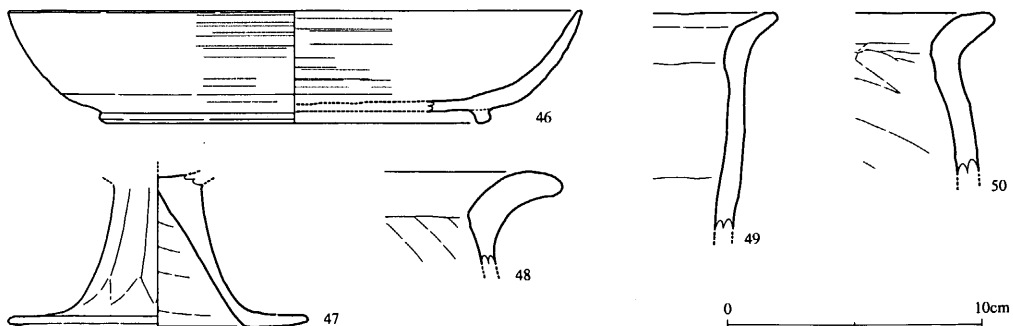


Fig.99 50SX500上層出土土器実測図2 (1/3)

44・45は口径12.2・20.6cmを測る。体部外面は平行叩き目
内面は同心円の当て具の痕跡が残る。44の口縁部外面に
は櫛状の工具による条痕が残る。

土師器

大椀c (46) 口径22.5cm、器高4.5cm、高台径15.3cm
を測る。体部は内外面ともにミガキaを施すが、風化が進
行し不明瞭。

高坏 (47) 脚端部径11.8cm。外面は縦方向、内面は
横方向のヘラケズリを施す。

甕 (48～50) 48は口縁部外面が条痕を残すヨコナデ、
体部内面はヘラケズリである。49は体部外面が縦方向の
強いナデ、内面が横方向のナデで仕上げられる。50は外
面が縦方向のナデで凹凸を成した部分は一部ヘラケズリ
を補足する。内面は下から上に上がるヘラケズリである。

50SX500下層出土土器 (Fig.100、CD-1998～2004)

須恵器

蓋 (51・52) 口径13.0・13.2cm。52の天井部は回転ヘ
ラケズリされるが、51では自然釉が覆っており調整は不明である。51の外面にヘラ記号とみら
れる短い縦線がある。

蓋c1 (53) 口径11.8cm。天井部は回転ヘラケズリされる。

坏 (54・55) 受け部を有するタイプで、口径11.4・10.5cm。54の底部は回転ヘラケズリさ
れる。

高坏 (56) 口径12.0cm。底部は回転ヘラケズリされ、中央付近に脚が外れた形跡がある。
体部外面に「×」とみられるヘラ記号がある。

50SX500最下層出土土器 (Fig.101、CD-2005～2023)

須恵器

蓋 (57) 口径13.6cm、器高4.0cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされ、ヘラ記号がある。

蓋c (58) 頭部が高い宝珠形の摘みを有するものである。

蓋1 (59) 口径13.8cm。体部はヨコナデである。

坏 (60～63) すべて受け部を有するものである。口径11.4～12.0cm。底部は回転ヘラケズ
リされている。60と63の外面にヘラ記号がある。

坏c (65・66) 65は外方に開く高台で、径9.3cmを測る。66は口径14.0cm。底部から体部の
境目付近までは回転ヘラケズリされる。高台は剥離した跡が明瞭である。

椀c (64) 口径19.0cm、器高6.5cm、底径12.6cmを測る。底部外面は回転ヘラケズリされ、

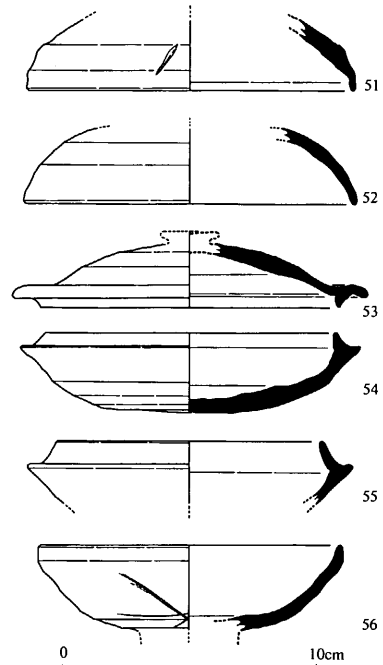


Fig.100 50SX500下層
出土土器実測図 (1/3)

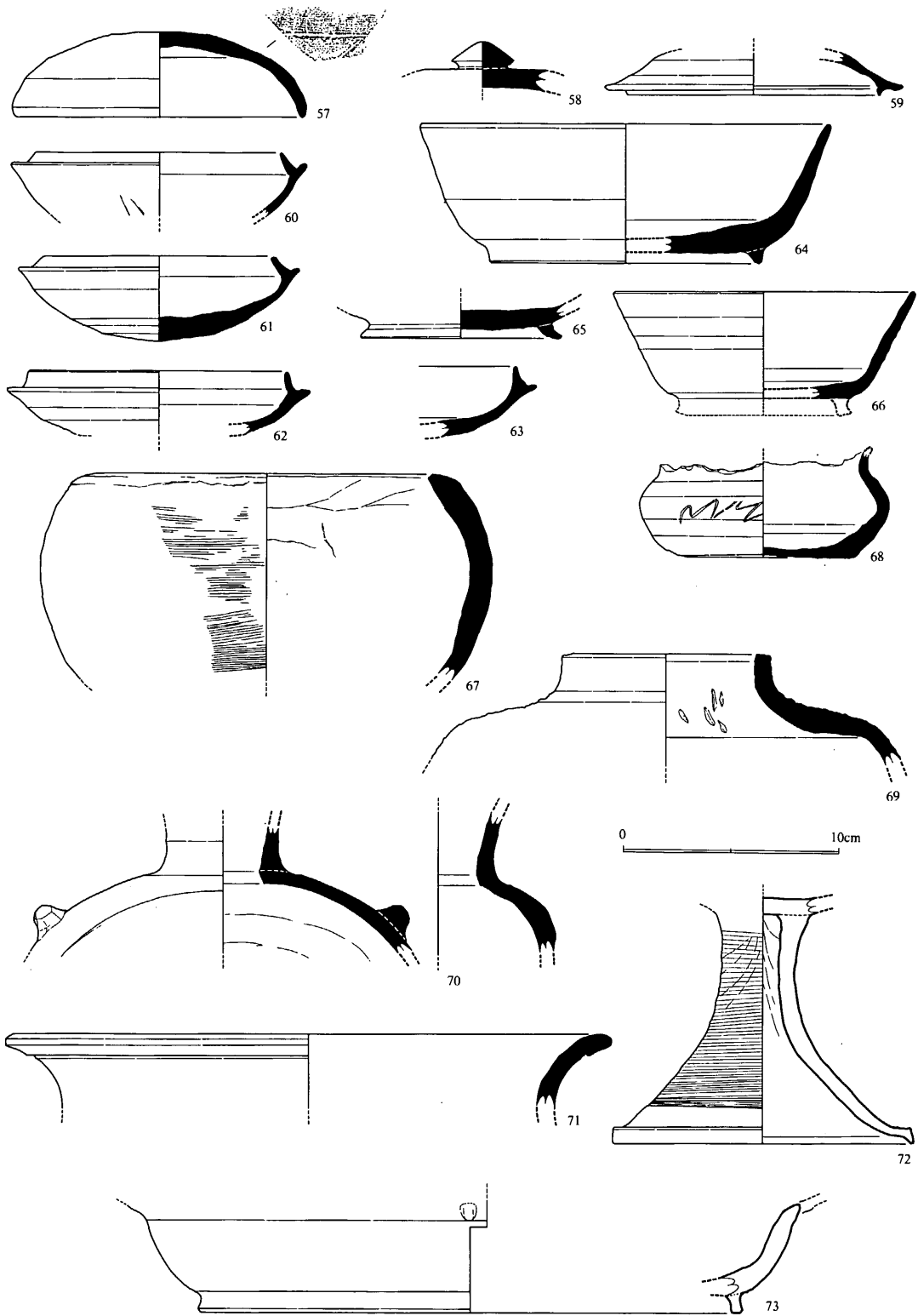


Fig.101 50SX500最下層出土土器実測図 (1/3)

体部と底部の境目を丸く仕上げている。

鉢 (67) 内傾する体部を有するもので、無頸の壺と考えることもできる。口径15.4cmで端部外面は平坦に作るが、底部を思わせるような粗雑な面をなし、それをケズリによって面調整している。口縁部内面も粗雑なケズリである。体部外面は横方向のハケ目、内面は粘土接合部をナデあげるように調整した後ヨコナデを施す。

罎 (68) 底径7.5cm。底部はヘラ切りされ、体部はヨコナデである。体部の最大径付近に粗雑な波状文があるが一周しない。口縁部は故意に打ち割られたようである。

壺 (69) 口径9.9cmの短頸壺である。外面は自然釉が多量に付着し、濁った黄白色を呈するため調整は不明である。頸部内面に縦方向のヘラによる傷状のものが並ぶ。

提瓶 (70) 肩部の把手は瘤状で実用性はない。体部はカキ目で細かな条痕が見える。

甕 (71) 口径28.0cm。表面は条痕の残る強いヨコナデである。

土師器

高坏 (72) 脚端部径14.0cmで、表面はカキ目、内面はヨコナデである。明茶黄色を呈するがきわめて硬質に焼成され、須恵器の還元不良品の可能性もある。

大皿 (73) 高台径25.1cm。外反する口縁部と体部の境目に径0.7cmほどの貫通する穿孔がある。表面はかなり風化するがミガキが確認される。

B：金属製品 (Fig.102、CD-2024～2027)

鎖状金具 (1) 釘を3本折り曲げて、鎖風に連結したものである。うち1本は幅がやや広がる傾向があり、頭部に近い部分が残存しているものと思われる。他は頭部を欠失している。鉄製で、50SX430出土。

刀子 (2) 刃先に近い部分の破片と思われ、現存長6.5cm、最大幅1.6cm、最大厚0.5cmを測る。鉄製で、50SX430出土。

不明金具 (3) 錆化が著しく、本来の形状は明らかでない。今の形状が当初のものに近いのであれば、鉤の可能性もある。50SX500最上層出土。

椀型滓 (a・b) aは長さ10.0cm、幅6.0cm、厚さ1.8cm前後を測る。bは長さ11.5cm、幅7.7cm、厚さ1.8cm前後を測る。いずれも明茶褐色及び暗茶褐色を呈し、湾曲する側は若干凹凸があるものの面を形成しているが、その対面は溶解物による凹凸がはげしい。aの湾曲面には木質が付着しており、破断部分は平滑な面を形成する部分がある。両者とも50SX500上層出土。

C：土製品 (Fig.103・104、CD-2028～2032)

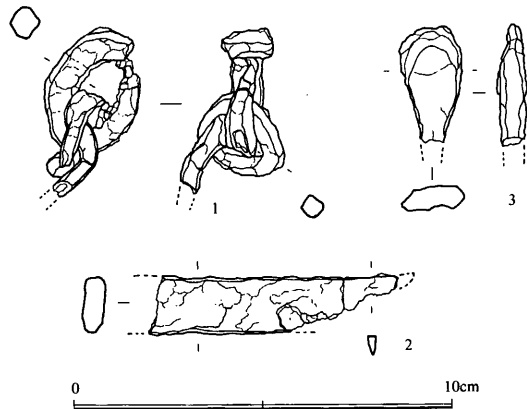


Fig.102 整地状遺構出土鉄製品実測図 (1/2)

鞆羽口 (1~3) 1は口径7.6cm、残存長17.8cmを測る。先端部を失うが表面の色調が淡灰褐色に変化していることから、きわめて端部に近い部分であることが知られる。調整は外面が縦方向の強いナデで、面取りを施したように稜が目立つ。内面は口縁部付近に横方向のナデ様の痕跡を残すが、他は円棒（先端で径2.7cm）を引き抜いたような状況のままである。胎土は2mm内外の砂粒を多量に

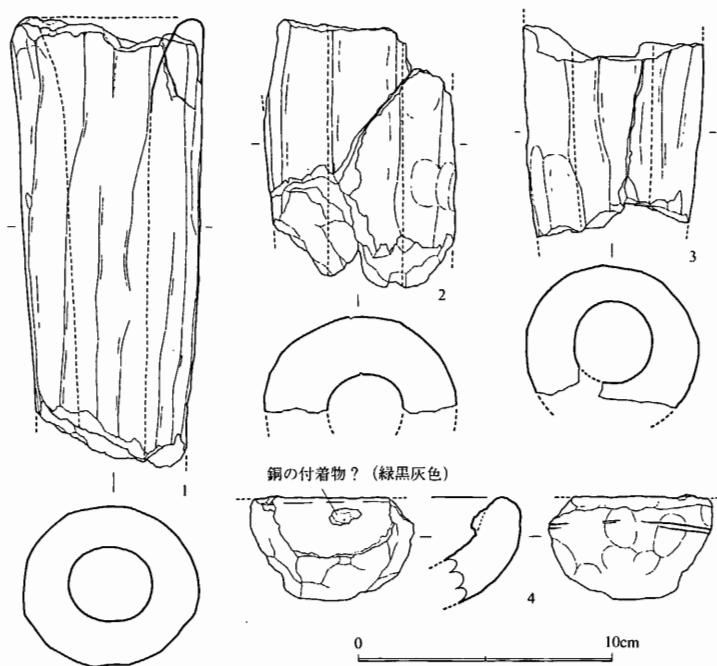


Fig.103 50SX500出土生産関連遺物実測図 (1/3)

含む粗いもので、先述のとおり先端部付近は淡灰褐色を呈し、一部濁白黄色の付着物が見られる。他は明茶色、淡灰茶色を呈している。50SX500上層出土。2は胴部復原径7.6cm、残存長10.6cmを測り、中央孔の径は2.9cmである。両端を欠損するが、図の下方になる部分が暗灰色に変色しており、こちらが先端になると思われる。胎土中には砂粒を多量に含んでいる。3は胴部最大径7.1cm、残存長8.4cmを測り、中央孔の径は3.2cmを測る。2と同様な状況から図の下方が先端部と考えられる。2・3とも外面は縦方向のナデで仕上げられる。いずれも50SX500最上層出土。

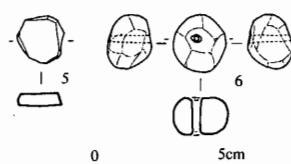


Fig.104 整地状遺構出土土製品実測図 (1/3)

トリベ (4) 小型のトリベと思われ、外面の調整は軽い指圧で終わるが、口縁部付近に横方向の擦痕（もしくはすさ状の圧痕）がある。内面には黄茶色の付着物が薄く被り、部分的に器表面が火膨れをおこしている。胎土は大粒の砂粒を多量に含むものできわめて粗い。50SX500最上層出土。

土器片加工品 (5) 白磁の体部片を利用し、破断面を打ち欠いて略円形に仕上げたものである。50SX430出土。

土玉 (6) 径2.1cm、厚さ1.5cmを測り、ほぼ中央に径2~3mmの貫通する穿孔がある。表面は風化が進行し、調整は明らかでない。土師質でやや軟質に焼成され、胎土は白色砂粒を多めに含むやや粗いものである。50SX500最下層出土。

D：瓦類 (Fig.105・106、CD-2033~2040)

軒丸瓦 (1) 老司I式の小片で、須恵質に焼成される。瓦当は肉厚で3.8cm前後を測る。

50SX500最上層
出土。

軒平瓦 (2)
内区には右から
左に緩やかに流
れる均整唐草
文、上外区には
珠文帯、下外区
及び脇区には突
鋸歯文帯を配し
た老司II式であ
る。珠文のほと
んどすべてに縦
方向の傷(断面
V字形)があり、
内区や下外区に
も部分的に見ら
れる。また鋸歯
文には横方向の
木目状沈線が走
る部分があり、
木範の存在を窺
わせる。顎は明
瞭な段状を呈し、横方向の
強いナデが平

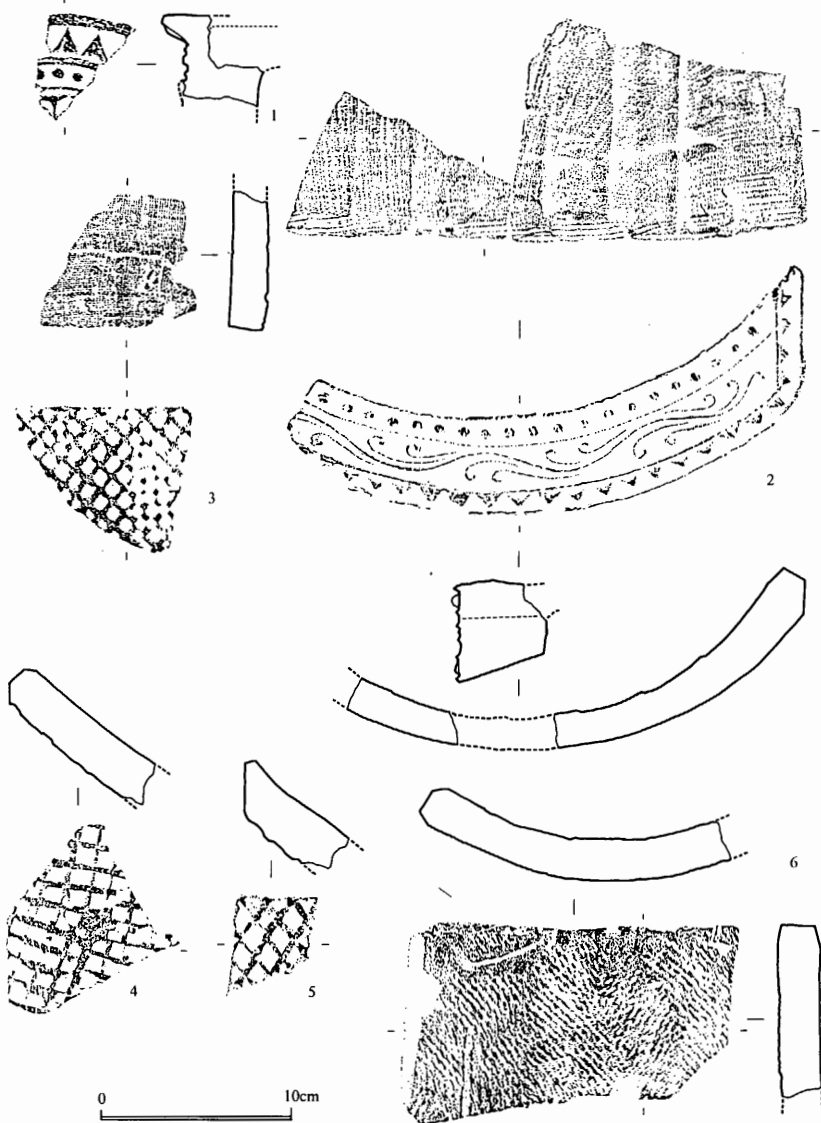


Fig.105 50SX500出土瓦実測図 (1/4)

瓦との取り付け部分にまで及んでいる。平瓦部分の残存率は悪く、突面の叩きは縦方向のケズリによって明らかではない。凹面は模骨痕が明瞭で、一部横方向のケズリで消されるものの布目とともに瓦当端部まで観察できる。側縁は丁寧にヘラケズリされる。須恵質に近い瓦質に焼成され、胎土には白色粒や暗褐色粒を含んでいるが、瓦としては精良である。なお、瓦当表面に(桶の中心から見て)放射状の小さな亀裂が多数観察される。50SX500最上層出土。

平瓦 (3~6) 3は凸面に太めで正格子の叩き目を有するもので、

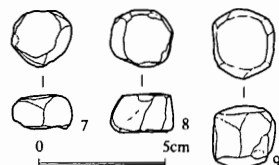


Fig.106 整地状遺構出土
瓦玉実測図 (1/3)

凹面にはわずかに凹凸があって模骨痕の可能性が高い。布目も明瞭に残る。4はややいびつな正格子の叩き目で、凹面はナデによって布目を擦り消している。側縁は丁寧なケズリによる面取りが施されている。須恵質に焼成され、胎土も精良で、明灰白色を呈している。5は凸面に太めの斜格子目叩きを有するもので、凹面には布目が観察される。側縁は丁寧なケズリである。6は凸面に縄叩き目を有するもので、概ね平行で丁寧に叩かれている。凹面は風化が著しくほとんど観察できないが、布を外す際に用いる紐と思われる痕跡と粘土板の重ね目と見られる小さな段が残り、その部分のみ布目が遺存している。側縁及び端部はケズリである。4点ともに50SX500最上層出土。

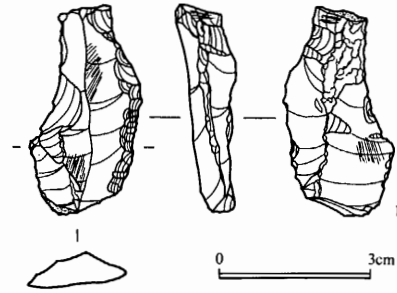


Fig.107 50SX500最上層出土
石器実測図 (2/3)

瓦玉 (7~9) 平瓦の破損したものの側面を研磨あるいは打ち欠きによって平面形状を略円形にしたもので、径2.3~2.8cm、厚さ1.3~2.4cmを測る。7は50SX430、8は50SX430下層、9は50SX500最上層出土。

E：石器 (Fig.107、CD-2041・2042)

剥片石器 (1) 黒曜石の縦長剥片で、側面の片側に二次的に細かな調整を加えたものである。刃器として利用したものと思われる。50SX500最上層出土。

その他の遺構

A：土器・陶磁器

50SX005出土土器 (Fig.109.、CD-2073・12074)

土師器

坏a (1) 口径12.6cm、器高2.6cm、底径8.5cmを測る。底部は糸切りされる。

50SX009出土土器 (Fig.109、CD-2077・2078)

土師質土器

鍋 (3) 口径34.0cm。内面は横方向のハケ目である。

50SX020出土土器 (Fig.108、CD-2043~2072)

土師器

小皿a (1~19) 口径7.7~9.2cm、器高0.9~1.5cm、底径6.3~7.7cmを測る。底部はすべて糸切りである。8の底部には土器の切り離し用とみられる糸の原体痕が残っている。

坏a (20~23) 口径12.6~14.0cm、器高2.4~2.8cm、底径8.3~9.5cmを測る。底部はすべて糸切りである。

椀 (24) 高台径12.3cm。調整はヨコナデである。椀としたが器種は特定できない。

瓦質土器

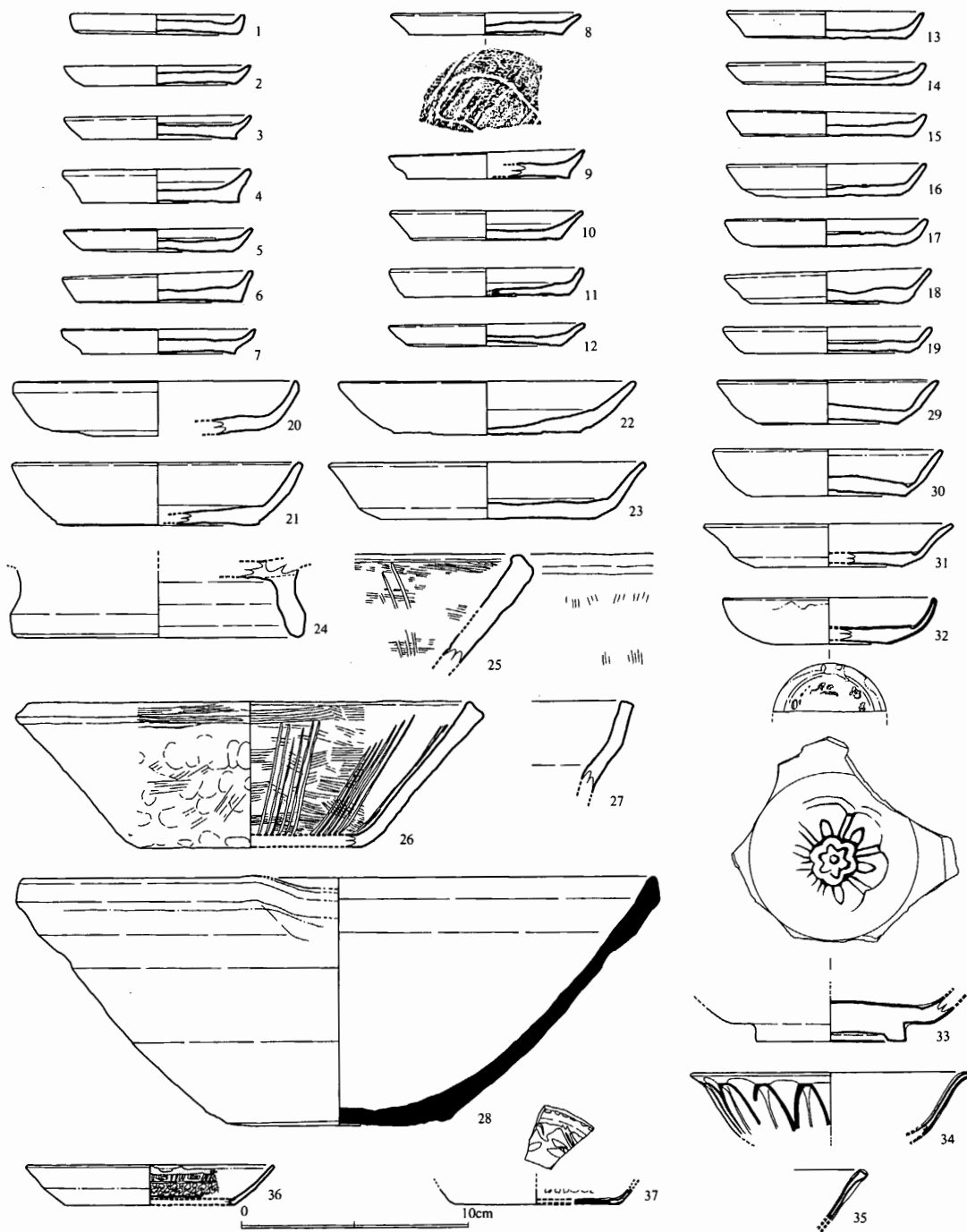


Fig.108 50SX020出土土器実測図 (1/3)

摺り鉢 (25・26) 25は外面に縦方向のハケ目、内面が横方向のハケ目で調整され、内面には3本以上を単位とする櫛で摺り目を施す。26は口径20.6cm、器高6.4cm、底径9.8cmを測る。外面は指圧痕が明瞭で、わずかにハケ目が覗いている。内面は横方向のハケ目のあとに6本を単位とする櫛で摺り目を施す。口縁部は横方向のハケ目で調整される。

鍋 (27) 口縁部と体部の境目をわずかに屈曲させる。外面には煤が付着している。

須恵質土器

片口鉢 (28) 口径27.8cm、器高11.1cm、底径9.9cmを測る。体部はヨコナデで仕上げられ、外面底部は粗雑なナデ程度でほとんど調整は行われていない。見込み部分は劣化が進みクレーター状を呈している。東播系。

白磁

皿 (29～32) 29・30は口径9.8・10.2cm、器高1.9・2.1cm、底径6.2・6.9cmを測る。釉は全面に施されるが、口縁部は掻き取られる。IX-1-b類。31は口径11.0cm、器高1.9cm、底径6.4cmで、口縁部は外反し、底部の釉は垂下したものが付着する程度である。IX-1-d類。32は口径9.4cm、器高2.1cm、底径5.0cmを測る。釉は乳白色に発色し、光沢はあるが不透明なものである。底部外面にはかからない。その露胎部分には淡灰色の砂粒塊が付着するほか胎土が部分的に剥落している。VIII-1'類。

龍泉窯系青磁

椀 (33・34) 33は高台径6.6cm。見込みに単弁六葉の蓮華文のスタンプを押捺する。蓮華文の中房は二重の六花形をなすものである。I-1～4類。34は口径12.4cm。外面に鎬蓮弁文を配している。釉は厚くかけられ、暗緑色に発色し光沢がある。III-2類。

坏 (35) 口縁端部を外方へ三角形状につまみ出すもので、厚くかかる釉は淡青緑色に発色し、光沢はあるが透明度は低い。III-1類。

青白磁

皿 (36・37) 36は口径11.0cmに復原される。釉は黄色味を帯びたやや透明度の低いもので、口縁部と外面底部は拭き取られている。内面に型による施文が浮き出す。口縁部内面の露胎部分から施釉が始まる一部分にかけて暗黒褐色の付着物があり、漆による覆輪が残存したものである。37は青味の強い釉で透明度は高い。見込みに型による施文が浮き出る。

50SX025出土土器 (Fig.109、CD-2079～2084)

土師器

坏a (4～8) 口径12.6～13.6cm、器高2.4～3.2cm、底径8.2～9.4cmを測る。底部は糸切りされる。

青白磁

小皿 (9) 口径6.8cm。暗青色味を帯びたやや透明度の低い釉で、外面底部は掻き取られる。見込みにスタンプによると思われる花卉状の文様があるが、不明瞭である。

50SX042出土土器 (Fig.109、CD-2075・2076)

龍泉窯系青磁

小盤 (2) 口径22.4cm。淡緑茶色に発色する釉は厚めに施され、全体に貫入が目立つ。III類。

50SX058出土土器 (Fig.109、CD-2085～2090)

土師器

小皿a (10～12) 口径8.6～9.2cm、器高1.0～1.5cm、底径6.9～7.8cmを測る。底部は糸切りされる。

坏a (13・14) 口径12.5・13.5cm、器高2.4・2.1cm、底径7.6・9.1cmを測る。底部は糸切りされる。

龍泉窯系青磁

坏 (15) 口径11.1cm、器高3.8cm、高台径4.3cmを測る。釉は明青緑色に発色し、光沢はあるが透明度は低く、細かな貫入が目立つ。全体に厚めにかけられるが、高台端部は拭き取られる。見込みは円盤状にわずかに窪んでいる。III-3-a類。

50SX063出土土器 (Fig.109、CD-2091・2092)

土師器

小皿a (16・17) 口径7.1・8.2cm、器高1.2・1.3cm、底径6.2・6.5cmを測る。底部は糸切りされる。

50SX114出土土器 (Fig.109、CD-2093・2094)

土師器

小皿a (18) 口径10.0cm、器高1.3cm、底径7.4cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (19) 口径15.8cm、器高3.2cm、底径10.0cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

50SX128出土土器 (Fig.109、CD-2095・2096)

陶器

鉢 (20) 口径25.4cm。釉は暗茶褐色に発色する不透明なもので、鈍い光沢があり全面に施釉されるが、内面では斑のある部分もある。口縁部の内傾する部分に、暗白色の砂粒が附着する部分があり目跡とみられる。また外面の胴部下位にも同じような目跡があり、両者の法量が近似することから重ね焼きを行っていたことが窺われる。III-1類。

50SX129出土土器 (Fig.109、CD-2097・2098)

土師器

小皿a (21) 口径8.0cm、器高1.0cm、底径6.8cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

龍泉窯系青磁

椀 (22) 口径13.0cm。釉は暗緑色に発色し光沢がある。I類。

50SX134出土土器 (Fig.109、CD-2099～2102)

土師器

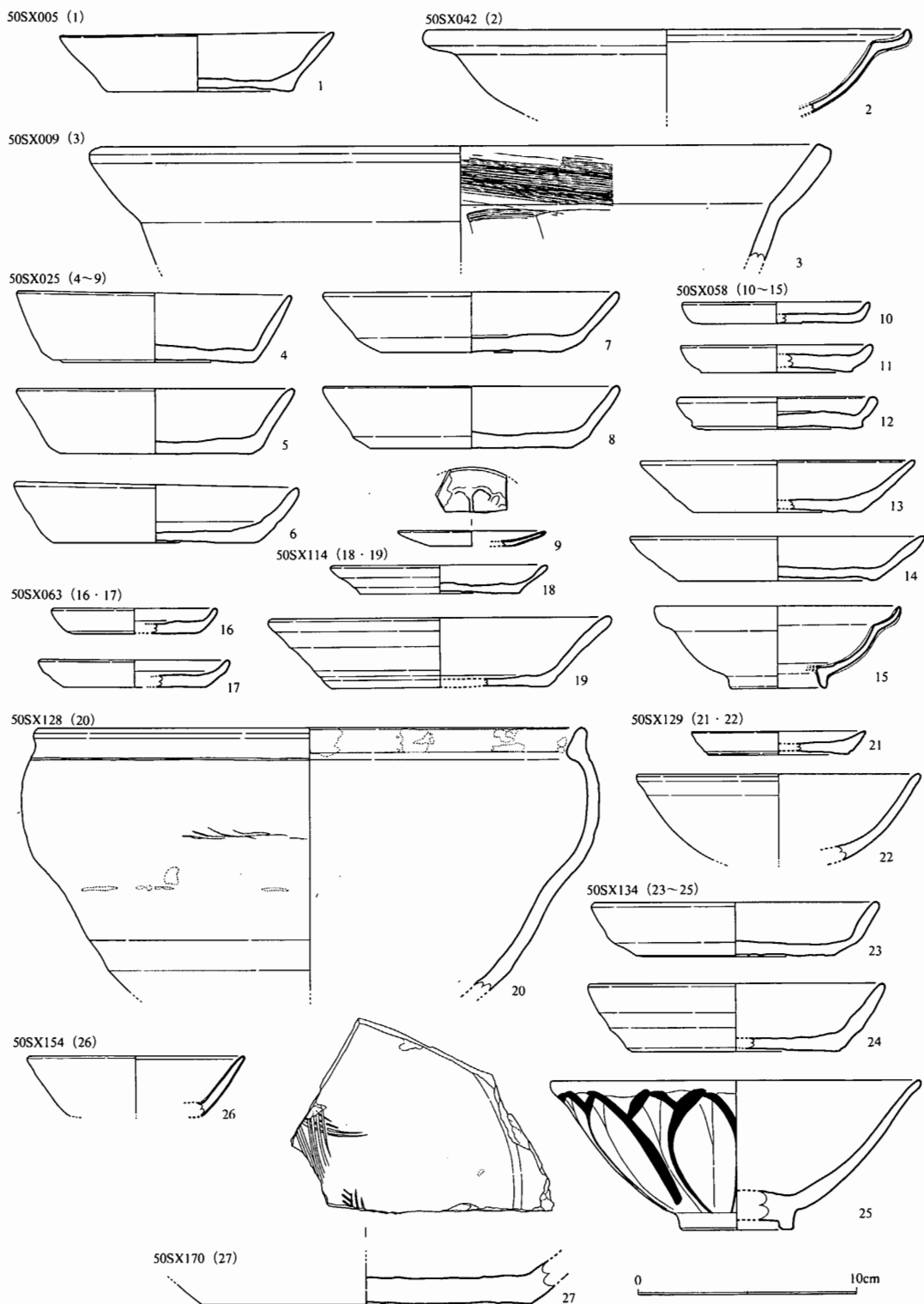


Fig.109 50SX005 · 009 · 025 · 042 · 058 · 063 · 114 · 128 · 129 · 134 · 154 · 170
出土土器実測図 (1/3)

坏a (23・24) 口径13.2・13.6cm、器高2.5・3.1cm、底径9.0・9.5cmを測る。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

龍泉窯系青磁

椀 (25) 口径17.0cm、器高6.9cm、底径5.2cmを測る。外面に鎬蓮弁文を配する。I-5-b類。

50SX154出土土器 (Fig.109、CD-2103・2104)

白磁

皿 (26) 口径10.0cm。口縁部の釉を掻き取っている。IX-1-b類。

50SX170出土土器 (Fig.109、CD-2105・2106)

陶器

皿 (27) 底径15.0cmで、瀬戸の深皿と考えられる。釉は明黄緑色気味の透明なもので、内面と外面の体部にかかる。外面底部には垂下したものが付着する程度である。見込み中央には櫛による施文がある。外面底部はヘラケズリで調整される。

50SX187出土土器 (Fig.110、CD-2107・2108)

土師器

大椀c (1) 高台径9.3cm。体部内面はミガキa、外面は回転ヘラケズリの後ミガキaを施すが、高台以下には及ばない。明赤茶色を呈している。

50SX195出土土器 (Fig.110、CD-2109・2110)

龍泉窯系青磁

小椀 (2) 円盤状の高台を有するもので、高台径4.4cm。釉は暗緑色に発色し、光沢がある。見込みに白色で点状の目跡があり、高台外面には淡茶白色の砂粒が付着した目跡がある。

50SX202出土土器 (Fig.110、CD-2111・2112)

須恵器

蓋c3 (3) 口径12.5cm、器高1.5cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされ、扁平な釦状の摘みが付く。

蓋3 (4・5) 口径14.0・19.4cm。4の天井部はヘラ切りのままであるが、5は回転ヘラケズリされる。

坏c (6) 口径14.6cm、器高4.2cm、高台径11.0cmを測る。

50SX204出土土器 (Fig.110、CD-2113・2114)

土師器

甕 (7) 口径14.8cm、器高14.2cm。体部外面は縦方向のハケ目で底部まで及んでいる。内面は下から上に上がるヘラケズリで、底部は未調整である。

50SX214出土土器 (Fig.110、CD-2115・2116)

須恵器

蓋3 (8・9) 口径15.6・18.4cm。8の天井部はヘラ切りのまま、9の天井部は回転ヘラケズリ

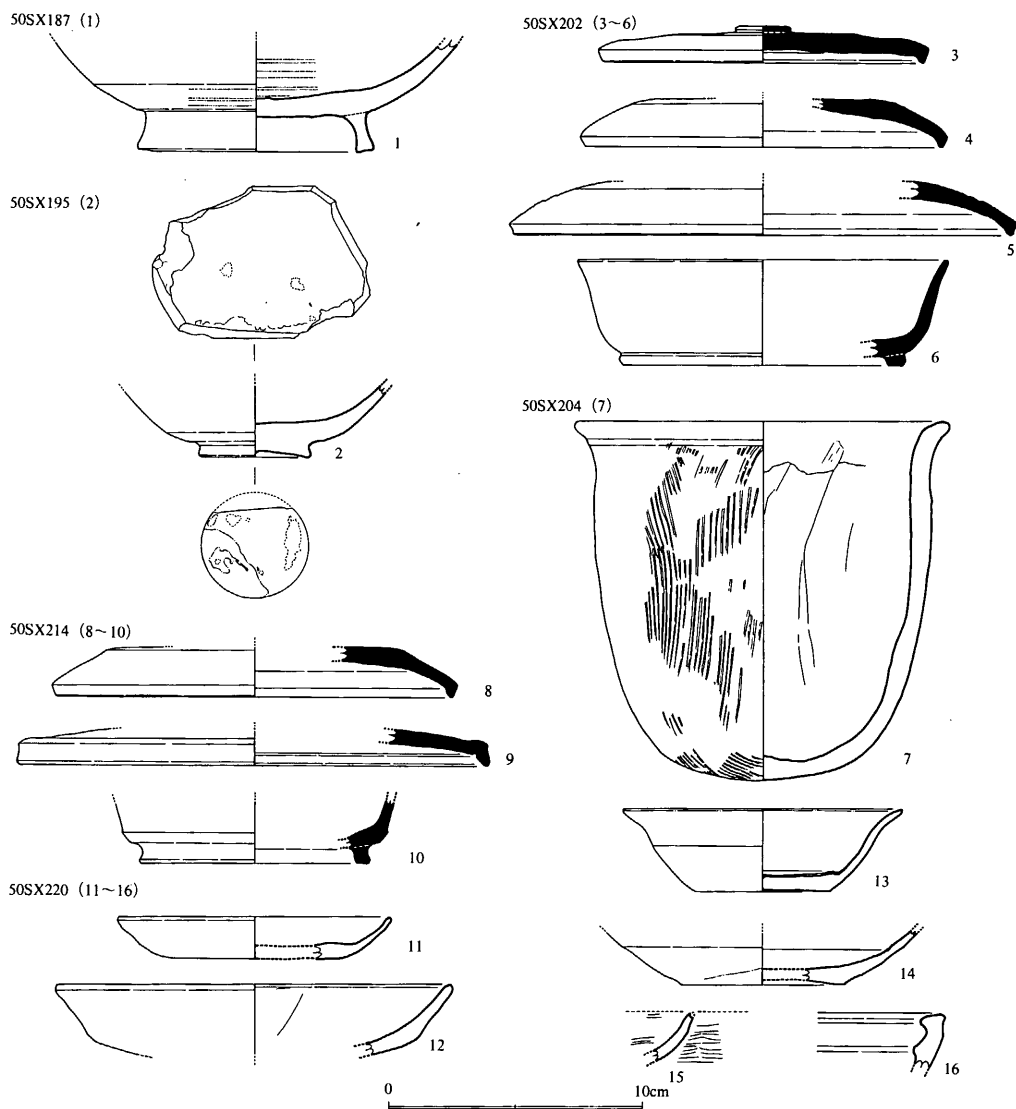


Fig.110 50SX187・195・202・204・214・220出土土器実測図 (1/3)

を施す。

坏c (10) 高台径8.9cm。

50SX220出土土器 (Fig.110、CD-2117~2122)

土師器

小皿a (11) 口径10.8cm、器高1.6cm、底径6.4cmを測る。底部の切り離しは不明。

丸底坏a (12) 口径15.6cm。内面はミガキbが施される。

白磁

皿 (13・14) 13は口径11.0cm、器高3.3cm、底径5.3cm。口縁部の釉は掻き取られる。IX-1-d類。14は底径6.4cm。青色気味の釉は光沢があるが、透明度は低く、体部外面下半から底部に

はかからない。胎土は白色でやや肌理が粗い。見込みに沈線状の段がある。XI-4類。

緑釉陶器

椀 (15) 濃緑色に発色する釉は斑があり、口縁部外面付近では薄くかかりやや黄色味を帯びる。施釉の前にミガキcを行う。

陶器

鉢 (16) 無釉で赤茶色を呈する。胎土中には砂粒を多量に含んでいる。I-1-b類。

50SX230出土土器 (Fig.111、CD-2123~2133)

土師器

小皿a (1~4) 口径8.6~9.6cm、器高1.0~1.1cm、底径6.5~8.4cm。底部は糸切りされる。

小皿c (5) 口径11.2cm、器高2.45cm、高台径6.8cmを測る。底部はヘラ切りとみられ、古い資料の混入品であろう。

須恵器

6は見込み部分に「日」の文字をヘラで記載するもので、底部には高台が取り付く。器種は明らかでない。

須恵質土器

鉢 (7) 端部を丸くおさめるもので、硬質に焼成され、胎土中にはやや大きめの砂粒を含んでいる。

白磁

椀 (9) 見込みに大きな段を有するものである。IV-b類。

皿 (10) 口径13.4cm、器高2.4cm、底径6.0cm。やや青味を帯びる釉で、透明度は低いが光沢がある。外面底部の釉は搔き取られる。見込みにスタンプの押捺によるとみられる施文がある。VIII-2-b類。

龍泉窯系青磁

坏 (11) 口径14.0cm。釉は淡緑色に発色するものが厚くかかり、外面に蓮弁文を配するがほとんどわからない。III-5-b類。

陶器

水注 (8) 口径8.6cm。暗褐色で不透明な釉は鈍い光沢がある。胎土は暗茶灰色で白茶色粒子を若干含んでいる。口縁部内側に目跡があるが、灰黒色を呈している。VII類。

四耳壺 (12) 底径7.5cm。淡灰緑色で鈍い光沢を放つ釉が施され、外面底部近くに目跡が並んでいる。胎土は明茶色でやや大粒の褐色粒を多く含んでいる。VI-2類。

50SX243出土土器 (CD-2134・2135)

龍泉窯系青磁

壺 (a) 外面に縦方向の櫛目による文様を配するが、その構成は不明である。釉は外面のみかけられ、明緑色に発色し光沢のあるもので、厚めにかけられる。内面はヨコナデで仕上

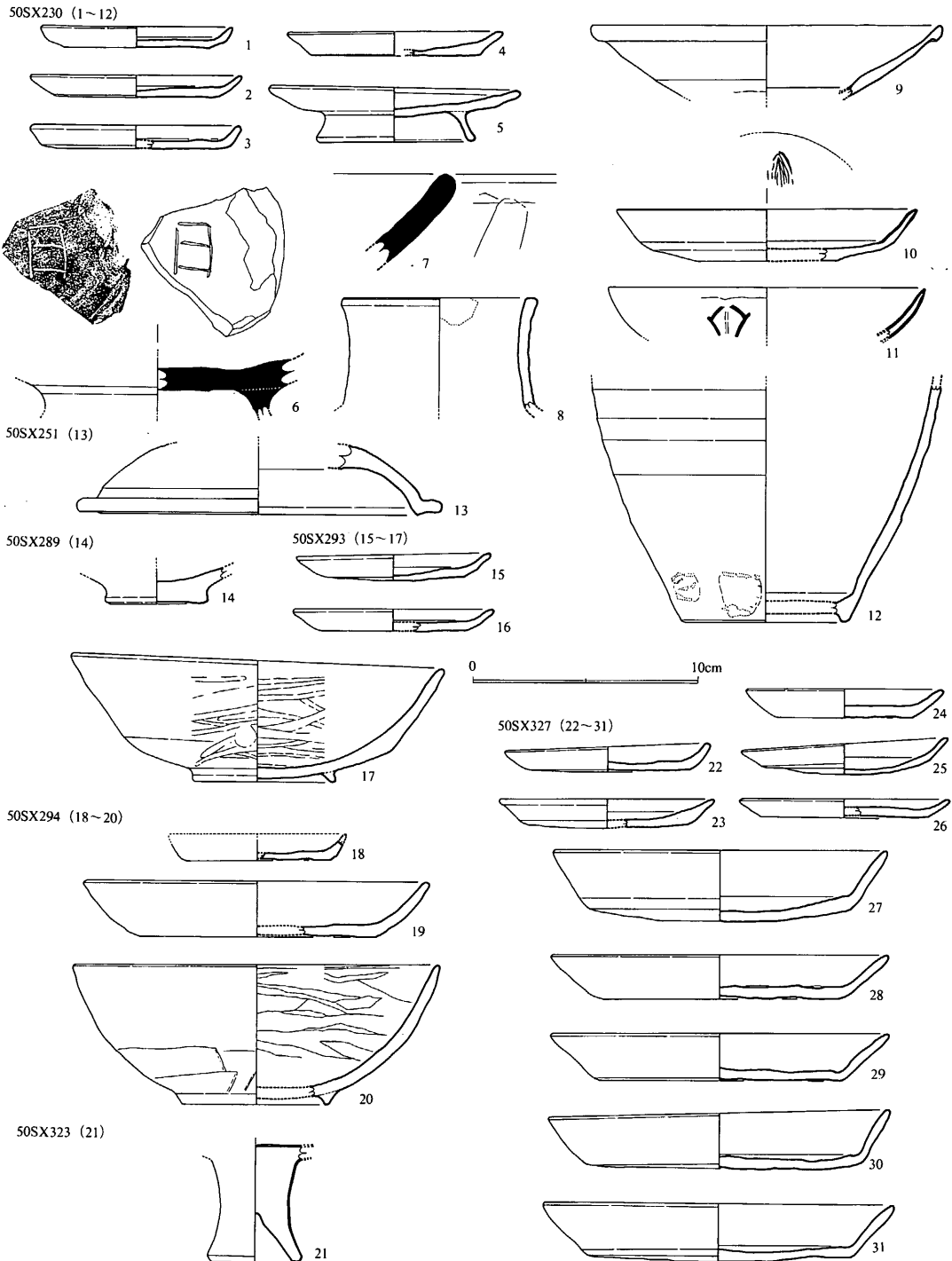


Fig.111 50SX230・251・289・293・294・323・327出土土器実測図 (1/3)

げられ、露胎で明灰色を呈している。胎土は粘性の強いものとみられ、黒色の微粒子を若干含んでいるが精良なものである。

50SX251出土土器 (Fig.111、CD-2136・2137)

陶器

蓋 (13) 淡緑色に発色する釉で、透明度は低く鈍い光沢がある。胎土は明灰色で暗茶色粒、白色粒子を若干含むものである。

50SX289出土土器 (Fig.111、CD-2138・2139)

土師器

皿 (14) 円盤状を呈する高台は径4.6cmで、糸切りされる。東九州系か。

50SX293出土土器 (Fig.111、CD-2140～2144)

土師器

小皿a (15・16) 口径8.6・8.9cm、器高1.2・1.0cm、底径6.0・6.2cmを測る。底部は糸切りされる。

瓦器

碗c (17) 口径16.6cm、器高5.5cm、高台径6.4cmを測り、完形品である。底部は糸切りされた後押し出され、その後に高台を貼り付ける。内外面ともかなり丁寧なミガキcを行っている。外面では4単位に分割して磨くが、内面は口縁付近を除いて一定方向に磨き上げる。なお、内面における先行調整としてよく見られるミガキbは確認できない。内面の底部付近に乾燥後につけられたと思われる「×」のヘラ記号のようなものがある。

50SX294出土土器 (Fig.111、CD-2145・2146)

土師器

小皿a (18) 底径6.4cm。底部は糸切りされ、板状圧痕が残る。

坏a (19) 口径15.4cm、器高2.5cm、底径10.5cmを測る。底部は糸切りされる。

瓦器

碗c (20) 口径16.3cm、器高6.3cm、高台径6.6cmを測る。底部は糸切りされた後押し出され、高台が貼り付けられる。内外面ともにミガキcを施す。

50SX316出土土器 (Fig.112、CD-2155～2169)

土師器

小皿a (1・2) 口径8.8・9.4cm、器高1.1・1.2cm、底径6.9・6.4cm。底部は糸切りされる。

小皿b (3) 口径8.0cm、器高1.9cm、底径5.7cm。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。

坏a (4～9) 口径12.0～13.2cm、器高2.3～3.0cm、底径6.8～10.0cm。底部は糸切りされる。9を除いて底径が小さめで、体部は外方に開くものである。

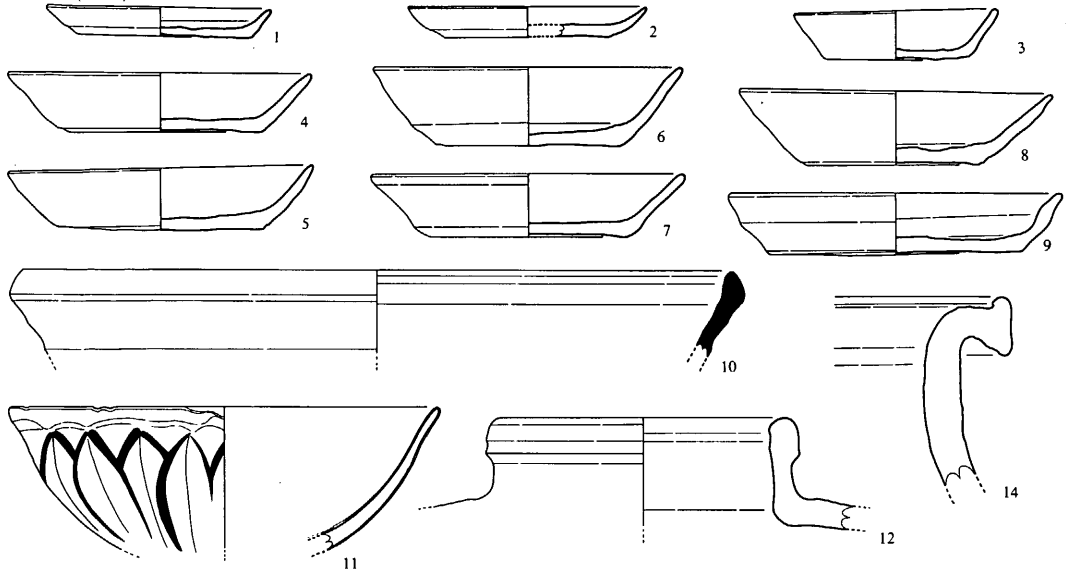
須恵質土器

鉢 (10) 口径28.8cmに復原される。硬質に焼成され、口縁部外側のみ茶黒色を呈し、鈍い光沢を放っている。東播系。

龍泉窯系青磁

碗 (11) 口径17.0cmで、外面に鎬蓮弁文を配する。I-5-b類。

50SX316 (1~14)



50SX335 (15~30)

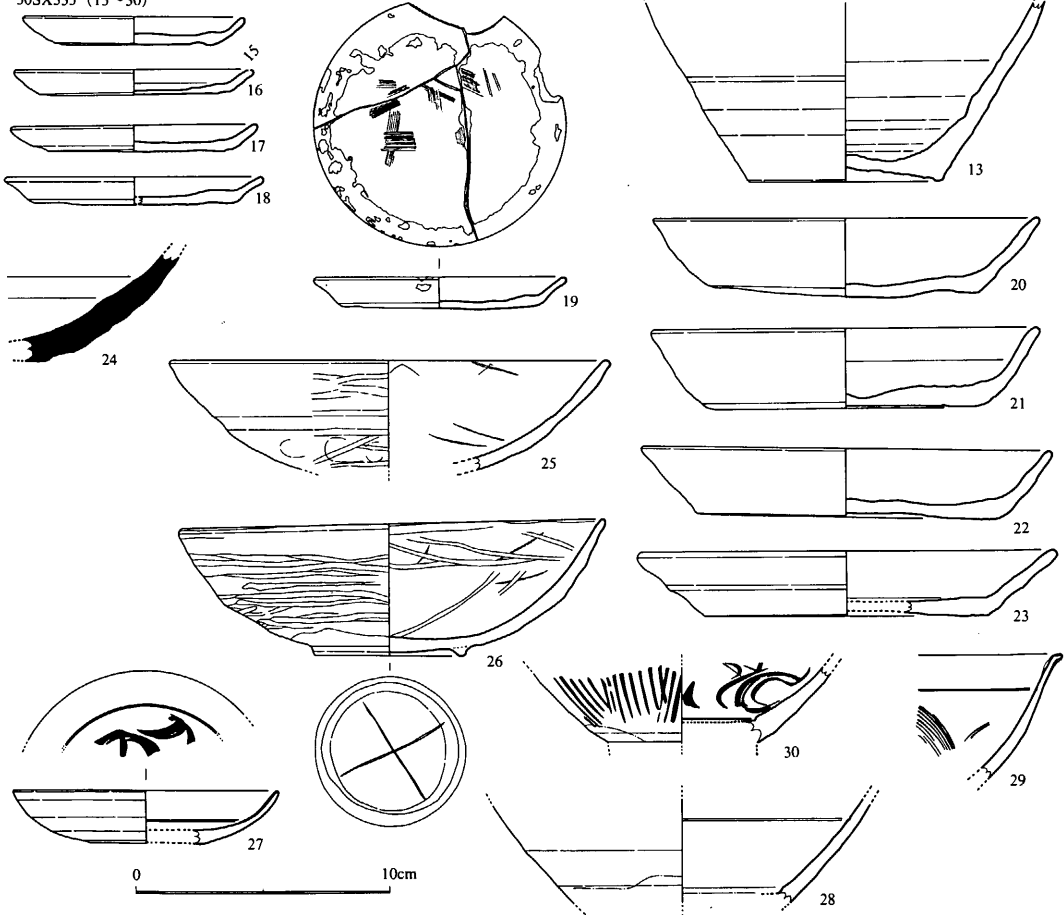


Fig.112 50SX316・335出土土器実測図 (1/3)

陶器

壺 (12) 口径12.3cm。暗茶色で不透明な釉で、ほとんど光沢はない。胎土中に白色粒子を含み、若干量の黒灰色粒を含んでいる。XII-1類。

四耳壺 (13) 残存する範囲内で釉はなく露胎である。外面は淡灰色、明茶褐色を呈し、内面は淡灰色である。胎土中に黒色粒及び赤褐色粒を多く含むものである。XI類。

甕 (14) 撞木状の口縁部を有するもので、暗茶色を呈している。胎土中には大粒の白色砂粒、茶黄色砂粒を含んでいる。常滑産。

50SX323出土土器 (Fig.111、CD-2147・2148)

龍泉窯系青磁

馬上杯 (21) 脚端部径4.2cm、脚部長4.6cmを測る。杯部は失われている。外面には暗緑茶色に発色する釉が厚めにかかり、内面ではやや灰色味を帯びて薄めにかかる。胎土は淡灰色で、白色粒子を若干含み、小さな気泡が目立つものである。IV類か。

50SX327出土土器 (Fig.111、CD-2149～2154)

土師器

小皿a (22～26) 22・23は底部がヘラ切りされるもので、口径9.2・9.6cm、器高1.1・1.3cm、底径7.2・7.8cmを測る。24～26は底部を糸切りにするもので、口径8.8～9.4cm、器高0.8～1.4cm、底径6.0～7.5cmを測る。

杯a (27～31) 口径14.8～15.5cm、器高2.0～3.2cm、底径10.4～12.0cmを測る。すべて糸切りされ、板状圧痕の残るものもある。

50SX335出土土器 (Fig.112、CD-2170～2184)

土師器

小皿a (15～19) 口径8.7～10.2cm、器高1.0～1.3cm、底径6.2～8.2cmを測る。底部はすべて糸切りされ、板状圧痕が残る。19の内面全体に薄い皮膜状になった漆が付着しており、子細に見ると薄い刷毛様のものでナデていることがわかる。

杯a (20～23) 口径15.2～16.6cm、器高2.6～3.1cm、底径10.7～12.0cmを測る。底部はすべて糸切りされ、板状圧痕の残るものもある。

須恵質土器

鉢 (24) 底部付近の資料で、内面は使用により平滑化している。

瓦器

椀c (25・26) 25は口径17.4で、明白茶色を呈しており燻し不良品とみられる。調整は内面がミガキbの後ミガキc、外面がミガキcとみられるが、表面は劣化しクレーター状を呈している。26は口径16.8cm、器高5.2cm、高台径6.0cm。底部は糸切りの後押し出され、高台を貼り付ける。内面はミガキbの後やや雑なミガキc、外面はヨコナデの後ミガキcである。高台内側に乾燥後に付けられたとみられる「×」のヘラ記号がある。

白磁

椀 (28・29) 28は体部内面上位に細い沈線が巡り、見込みの釉を掻き取るもので、VIII-2～3類とみられる。29は口縁端部を小さく外方へつまみ出すもので、内面に櫛による施文がある。V-4-b類。

皿 (27) 口径10.4cm、器高2.1cm、底径4.4cm。青味を帯びた透明感のある釉で、光沢がある。外面底部の釉は掻き取られる。見込みにヘラによる施文がある。VIII-1-c類。

同安窯系青磁

椀 (30) 外面は粗い目の櫛目文、内面はヘラによる施文がある。明緑黄色に発色する釉の透明度は高く、光沢もある。体部外面下半にはかからない。I類。

50SX347出土土器 (Fig.113、CD-2185・2186)

黒色土器

椀 (1) 円盤状の高台を有するもので、高台底面はヘラケズリとみられる。内面はミガキcを施す。A類。

50SX384出土土器 (Fig.113、CD-2187・2188)

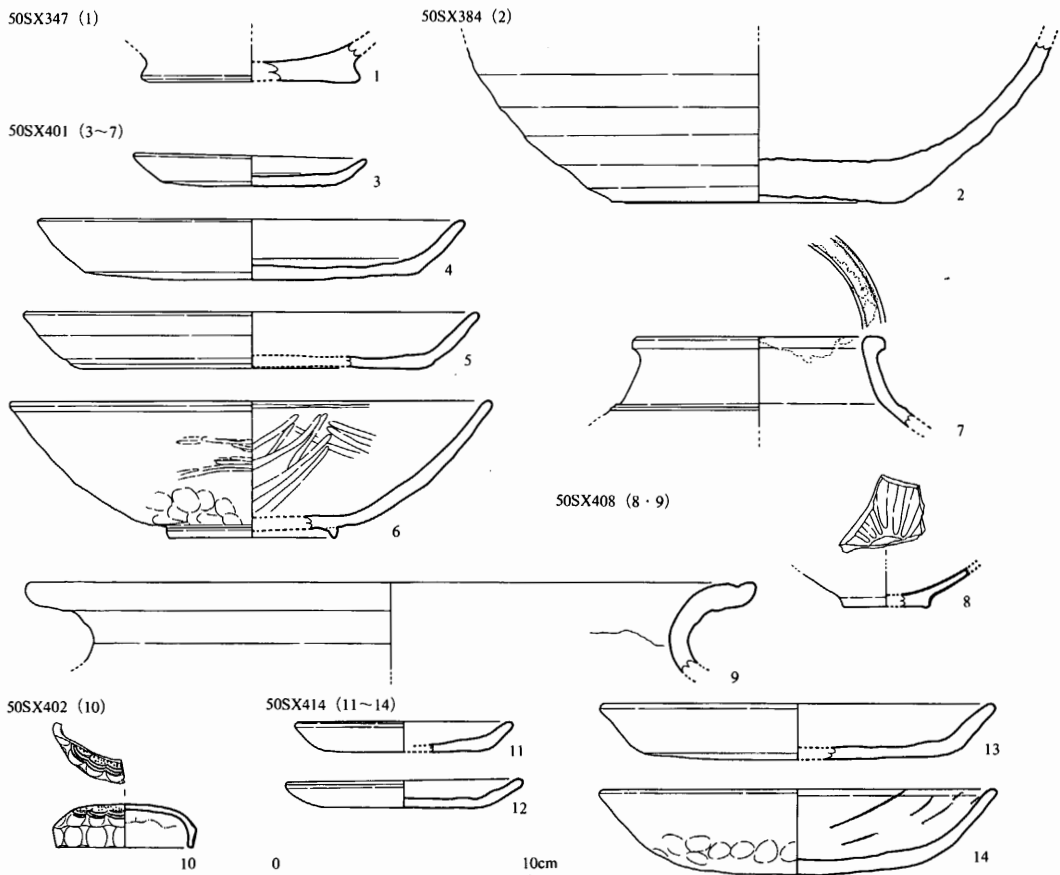


Fig.113 50SX347・384・401・402・408・414出土土器実測図 (1/3)

陶器

鉢(2) 底径11.5cm。内面は使用により平滑化されるが、クレーター状を呈している。底部の周囲も使用による磨耗がみられる。胎土中には白色及び茶黄色の砂粒が多量に含まれている。I類。

50SX401出土土器 (Fig.113、CD-2189~2194)

土師器

小皿a(3) 口径9.2cm、器高1.2cm、底径7.2cmを測る。底部は糸切りされる。

大坏a(4・5) 口径16.8・18.0cm、器高2.4・2.2cm、底径13.2・14.3cmを測る。底部は糸切りされる。

瓦器

椀c(6) 口径19.0cm、器高5.4cm、底径6.6cm。底部は糸切りの後押し出され、小さな高台が貼り付く。内面はミガキbの後ミガキc、外面はヨコナデの後ミガキcを施す。

陶器

四耳壺(7) 口径10.0cm。釉は黄色味を帯びた淡緑茶色に発色し、鈍い光沢がある。胎土は明灰色で小さな気泡が若干入る。口縁部内側から頂部にかけて目跡が付着している。V類。

50SX402出土土器 (Fig.113、CD-2197・2198)

青白磁

合子蓋(10) 口径5.4cm。型による成形と施文を行い、平面形は多花形で、天井部にそれに対応するような文様を浮き出させるが全容は不明。釉は青味を帯びた透明感のあるもので、内面にはかからない。

50SX408出土土器 (Fig.113、CD-2195・2196)

青白磁

小椀(8) 円盤状を呈する高台の径は3.4cmで、施文のある内型による成形とみられる。見込み中央部を少し窪ませ、放射状に広がる文様を配する。釉は青味を帯びた透明度の高いもので、外面底部は掻き取られる。高台端部は故意に打ち割られたものとみられる。

陶器

甕(9) 口径18.7cm。無釉で外面は明灰茶色、内面上位は明茶色を呈している。口縁端部内側を溝状に作る。常滑産。

50SX414出土土器 (Fig.113、CD-2199~2202)

土師器

小皿a(11・12) 口径8.6・9.4cm、器高1.2・1.1cm、底径6.3・6.2cmを測る。底部はヘラ切りされる。

坏a(13) 口径15.6cm、器高2.2cm、底径12.0cmを測る。底部は糸切りされる。

丸底坏a(14) 口径15.7cm、器高3.4cmを測る。底部はヘラ切り後押し出され、内面はミガ

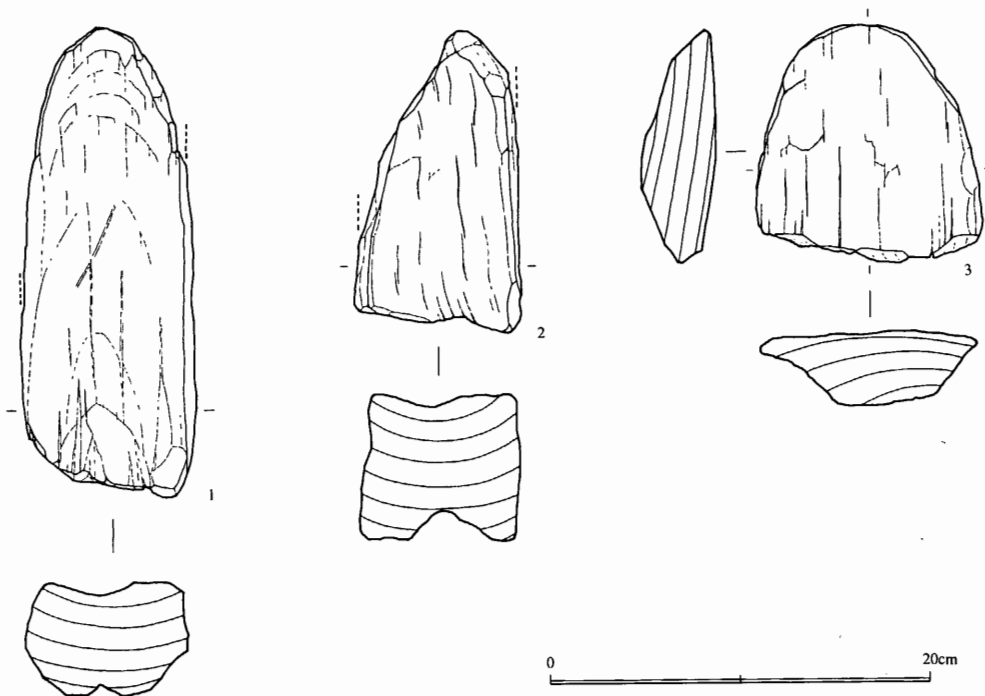


Fig.114 50SX043・065・096出土柱根実測図(1/4)

キbを施す。

B：木製品 (Fig.114、CD-2203～2208)

柱根(1～3) 1は現存長24.8cm、最大幅9.4cm、厚さ6.0cmを測る。表面は著しく風化しており調整痕跡は残らないが、断面形状はやや横長の方形を呈していたものと思われる。基部は切断したままの状態であったようだが、これも風化しており明確な痕跡は残らない。50SX063出土。2は現存長16.0cm、最大幅8.8cm、厚さ7.6cmを測る。断面形状は方形を呈し、基部はほぼ当初の状況を窺わせるが、調整は明らかでない。腐食が進行し、基部側から中央部が窪んでいる。50SX096出土。3は断面形状が台形を呈し、立面の形状も山形でほとんど当初の形状を留めていないものと思われる。ただ基部については切断痕が残っており、外方から切り込んでいることが窺える。現存長12.6cm、最大幅12.0cm、厚さ4.0cmを測る。50SX043出土。

C：金属製品 (Fig.115・116、CD-2209～2219)

釘(1～4) すべて鉄釘である。1は先端を失う資料で、頭部も扁平に叩き伸ばすことはほとんど行わないまま折り曲げている。現存長5.6cmで、50SX020出土。2はほぼ完存する資料で、長さ6.0cmを測る。頭部は扁平に叩き伸ばした後に折り曲げている。50SX241出土。3はやや湾曲していて、先端部も失っている。頭部は扁平に叩き伸ばされた後に折り曲げている。現存長5.5cmを測る。50SX230出土。4はほぼ完存する資料で、長さ5.0cm。頭部は通常の釘と同様の構造をしていると思われるが、錆によって明らかではない。50SX382出土。

T字状製品(5) 先端を失う。頭部をT字形にし、他は断面方形である。大型の釘の可能性

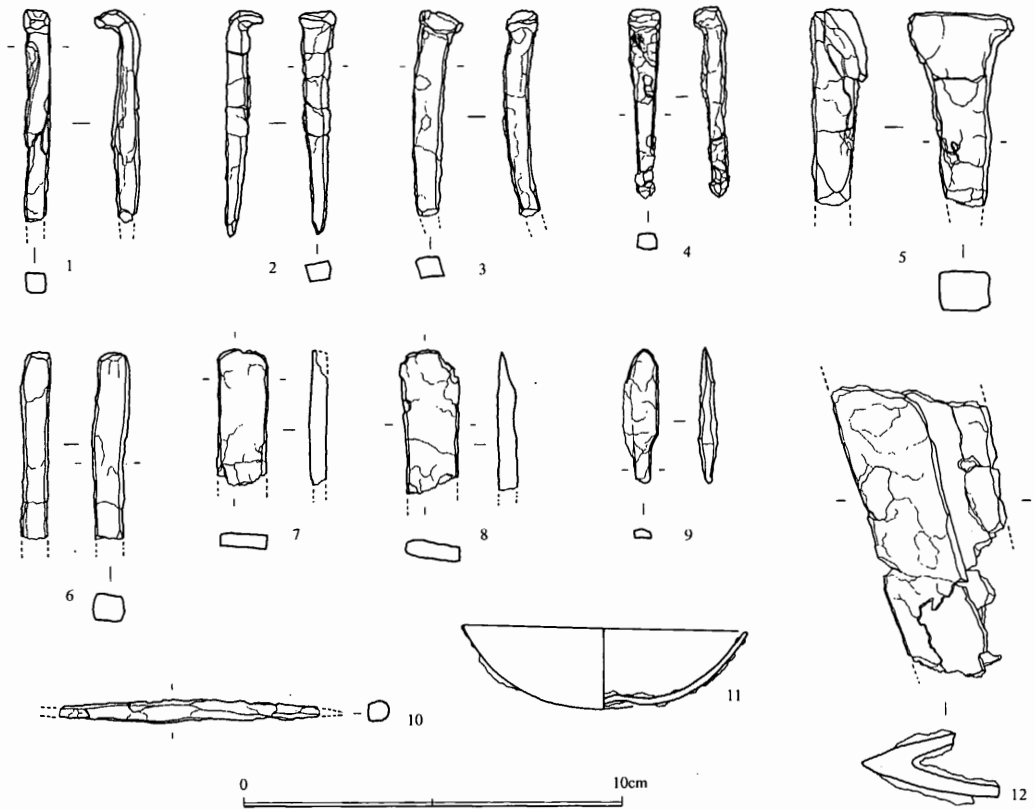


Fig.115 その他の遺構出土鉄製品実測図 (1/2)

もある。鉄製で、50SX142出土。

角棒状製品 (6) 一辺0.8×0.7cm、現存長5.0cmを測る。

鉄製で、50SX427出土。

板状製品 (7・8) 7・8は形状がきわめて近似する資料である。厚さ0.3~0.4cmの板状を呈し、端部はわずかに丸味を帯びるが、斜めにカットされており、刃部状をなしている。いずれも鉄製で、50SX005出土。

鉞 (9) 鉞の可能性を考えている資料で、軸部は断面が長方形を呈する。先端は薄くなり鋭利になっていたものと思われる。鉄製で、50SX190出土。

針状製品 (10) 両先端を失い、中程が太くなる資料である。現存長6.8cm、最大径0.5cmを測る。鉄製で、50SX414出土。

小椀 (11) 鉄製で、口径7.6~7.9cm、器高2.1~2.2cmを測る丸底の椀である。底の一部が窪んでいるが後のものとみられる。器壁は薄く0.15cmである。50SX065出土。

鋤先 (12) 鉄製の鋤先の一部とみられる。現存長7.7cm、最大幅3.9cmを測る。50SX196出土。

銭 (13~15) すべて銅銭である。13は「皇宋通寶」で、50SX005出土。14は「聖宋元寶」



Fig.116 その他の遺構出土銅銭拓影 (1/2)

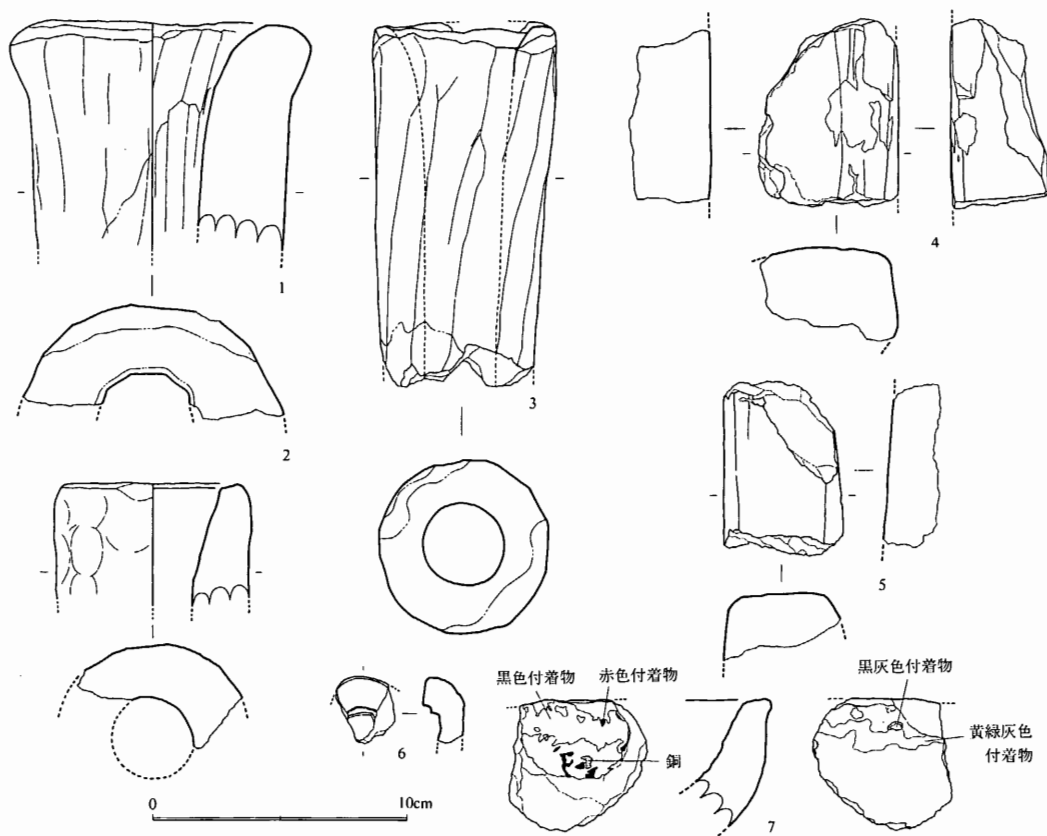


Fig.117 その他の遺構出土生産関連遺物実測図 (1/3)

で、50SX132出土。15は「嘉祐通寶」で、50SX207出土。

椀型滓 (a・b) aは長さ8.4cm、幅4.7cm、厚さ2.0cm前後を測る。湾曲側、その対面ともに溶解物による凹凸が著しい。暗茶褐色及び明茶色を呈する。破面は平滑になる部分がある。50SX209出土。bは長さ、幅とも7.0cm、厚さ2.5cm前後を測る。砂粒を多量に巻き込んでいるが、溶解物の露出する部分は暗灰褐色を呈している。50SX343出土。

D：土製品 (Fig.117・118、CD-2220～2229)

鞆羽口 (1～3) 1はやや外反する口縁部を有するもので、口径11.9cmに復原される。口縁端部は特に調整されないが、外面及び口縁部内側は縦方向のナデ、胴部内面は各棒状のものを引き抜いたような跡が残る。胎土は2mm以下の砂粒を多量に含むもので、土師質ながら硬質に仕上がる。内面のみ黒灰色に変色するが他は淡茶白色を呈している。50SX408出土。2は口径6.5cm程度に復原されるもので、口縁部付近はやや薄めに作る。外面には指圧痕が顕著に残り、内面は横方向のナデである。50SX156出土。3は口径7.2cm、残存長14.2cmを測るもので、先端部を失う。調整は外面が縦方向の強いナデで、面取りを施したように稜が目立つ。内面は円棒(先端で径2.7cm)を引き抜いたような状況のままである。胎土は2mm内外の砂粒を多量に含む粗いもので、概ね明茶白色を呈している。50SX214出土。

鑄型 (6) 鑄型面は2段を呈し、格段には稜がある。下段（製品化されると逆か）は一辺1cm余りの方形、上段は六角もしくは八角形になっていたようである。釘隠しのような小型の製品を考えたい。胎土は砂粒を若干含むものの外側には粗いすさ混じりの土の付着がみられ、外真土の存在を窺わせる。明灰白色を呈し、軟質に焼成される。50SX261出土。

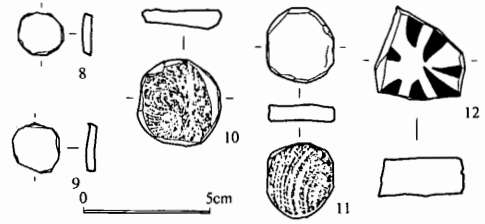


Fig.118 その他の遺構出土
土製品実測図 (1/3)

トリベ (7) ちょうど片口部分の断片で、口縁部内面上位には暗茶褐色、暗赤褐色の付着物が見られ、片口部分の外面上にもわずかに観察される。内面の底部付近に至っても同様の付着物があるが厚さは薄い。外面は暗灰色を呈し、調整痕は不明瞭。胎土は1~2mmの砂粒を多量に含む粗いものである。50SX230出土。

方柱状土製品 (4・5) 4は2面しか残存せず当初の規模は明らかでない。表面には縦方向の擦痕があり、簡易なナデを施したことがわかる。胎土は明茶白色を呈し、大粒の砂粒を若干含むほかごく小さな白色粒を多く含んでいるが精良な土である。表面は暗茶白色を呈し、土師質ながら硬質に焼成される。50SX054出土。5は図の上に向かってわずかに幅を狭くする断面形が方形を呈する土製品とみられる。残存する最大幅4.7cmを測り、土師質ながら硬質に焼成される。胎土中には大粒の砂粒が多量に含まれる。50SX419出土。

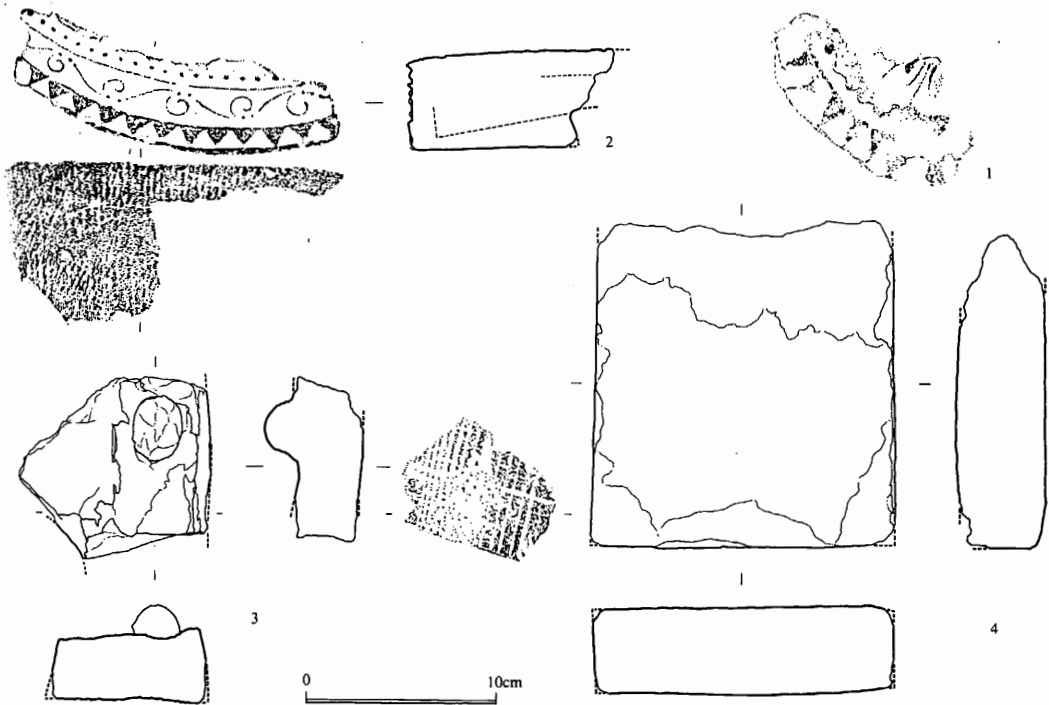


Fig.119 その他の遺構出土瓦実測図及び拓影 (1/4)

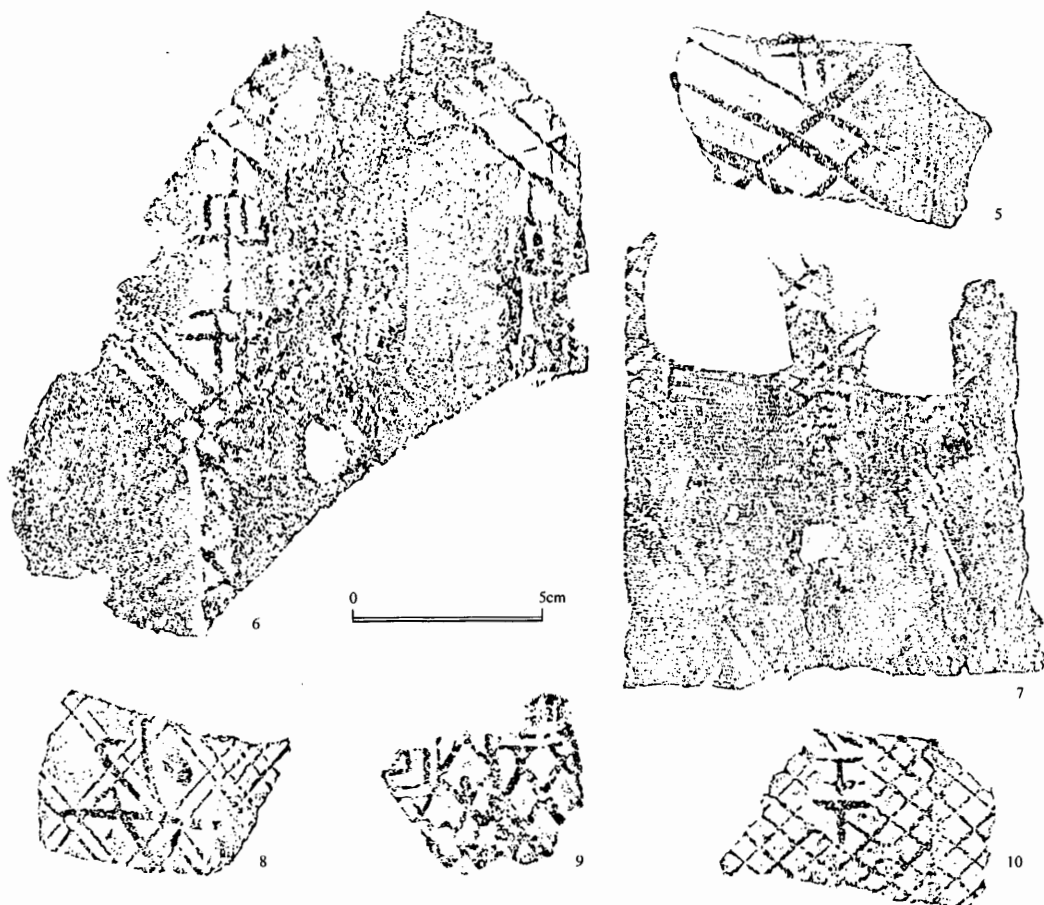


Fig.120 その他の遺構出土文字瓦拓影 (1/2)

土器片加工品 (8~12) 8は土師器供膳具の破片の一部を利用し、破断面を加工したもので、略円形を呈する。茶褐色を呈しており、原体は奈良時代から平安時代初頭のものと思われる。59SX222出土。9は白磁碗II-1もしくはII-2類の体部小片(口縁部に近い部分)を利用し、破断面を打ち欠いて略円形に加工する。50SX106出土。10は土師器小皿もしくは坏の底部片を加工したもので、糸切り痕と板状圧痕が見られる。側面は平滑に研磨されたような形状を呈している。50SX316出土。11も10と同様に土師器小皿もしくは坏の底部片を加工したもので、糸切り痕が見られる。側面は平滑に研磨されたような形状を呈している。50SX024出土。12は龍泉窯系青磁碗I類の底部片を利用したもので、破断面を大きく打ち割る程度に留まる。見込み部分にはヘラ彫り文様が残る。50SX220出土。

E: 瓦類 (Fig.119~121, CD-2230~2240)

軒丸瓦 (1) 幅広の周縁は平縁でそこが外区になっている。外区外縁は大きめの凸鋸歯文帯、内縁はやや小振りの珠文帯で構成される。内区は周縁から深く入り込み、類例から複弁八葉蓮華文であることがわかる。胎土中に多量の砂粒を含んでいる。50SX237出土。

軒平瓦 (2) 内区の文様は右から左に流れる偏行唐草文で、凸線で画された上外区には小さな珠文帯が並び、下外区は凸鋸歯文帯である。顎部は幅広く、縄叩き目が観察され、凹面は丁寧な横方向のケズリを施す。側縁もケズリ調整である。瓦当形成にあたって平瓦の両面にかなり厚めの粘土を補足して瓦当面と接合する。瓦質に焼成され、暗灰色を呈する部分が多い。50SX335出土。

鬼瓦 (3) 棟の丸瓦を跨ぐ瓦座部分の断片で、周縁に配される珠文のひとつが残存するにすぎない。珠文及びその周囲はナデや指圧で調整されている。側縁部分はケズリである。これらに対して裏面は縦方向の粗い櫛目状の痕跡があり、これに交差して疎らに横方向のものも見受けられる。須恵質に近い瓦質に焼成されるがやや軟質で、胎土は白色の小粒子を多く含んでいるが精良である。50SX175出土。

無文磚 (4) 長さ17.6cm以上、幅16.0cm、厚さ4.6cmを測る。欠損部分は打ち割ったような状況で、礎板に転用する際のものかもしれない。二次的な加熱を受けている。50SX357出土。

文字瓦 (5~10) 5は「平井」で、I-8-a類とみられる。50SX220出土。6も「平井」で4に比べて小さめの格子である。I-8-b類。50SX141出土。7は丸瓦に押されるもので、「賀茂」と辛うじて判読できる。III-4類。50SX337出土。8は二重斜格子に「安」の左字を記すもので、IV-4類。50SX334出土。9は縦長の格子目に三重の長方形枠を置き、その中に文字を記載するものである。類例から「観世音寺」の左字を記したものと判断されるが、本資料では文字部分は残存しない。V-2類。50SX247出土。10は「八年」と記載されるもので、XVII類。50SX221出土。

瓦玉 (11~26) 平瓦の破損したものの側面を研磨あるいは打ち欠きによって平面形状を略円形にしたもので、径2.0~4.0cm、厚さ1.4~2.6cmを測るが、平瓦が原体のためその厚さを越えることはなく、2.0cm前後のものが主体である。11は50SX012、12・13は50SX020、14は50SX025、15・16は50SX122、17は50SX142、18は50SX143、19は50SX220、20・21は50SX243、22は50SX306、23は50SX254、24は50SX379、25は50SX387、26は50SX413出土。

F：石製品 (Fig.122、CD-2241~2250)

鍋 (1~3) すべて滑石製の鍋である。1は小さめの鏝を有するもので、口径32.5cmに復原できる。外面全体に煤が多量に付着しており、平坦な口縁端部の中程まで黒色に変色している。調整は外面が縦方向の細かな段をなす横方向のケズリで、内面は横方向を基調とするやや斜め

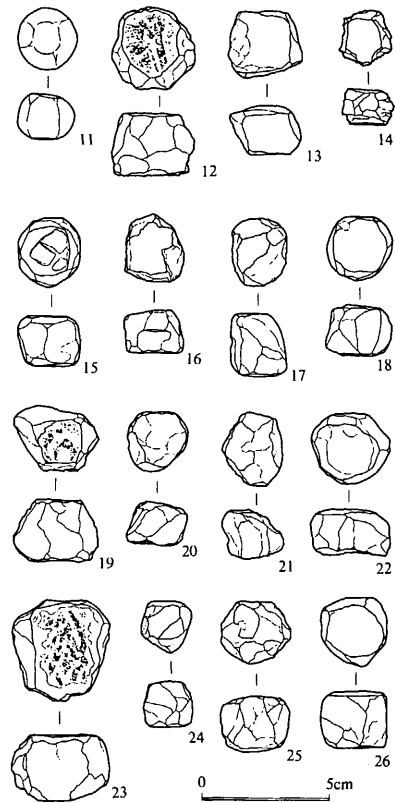


Fig.121 その他の遺構出土
瓦玉実測図 (1/3)

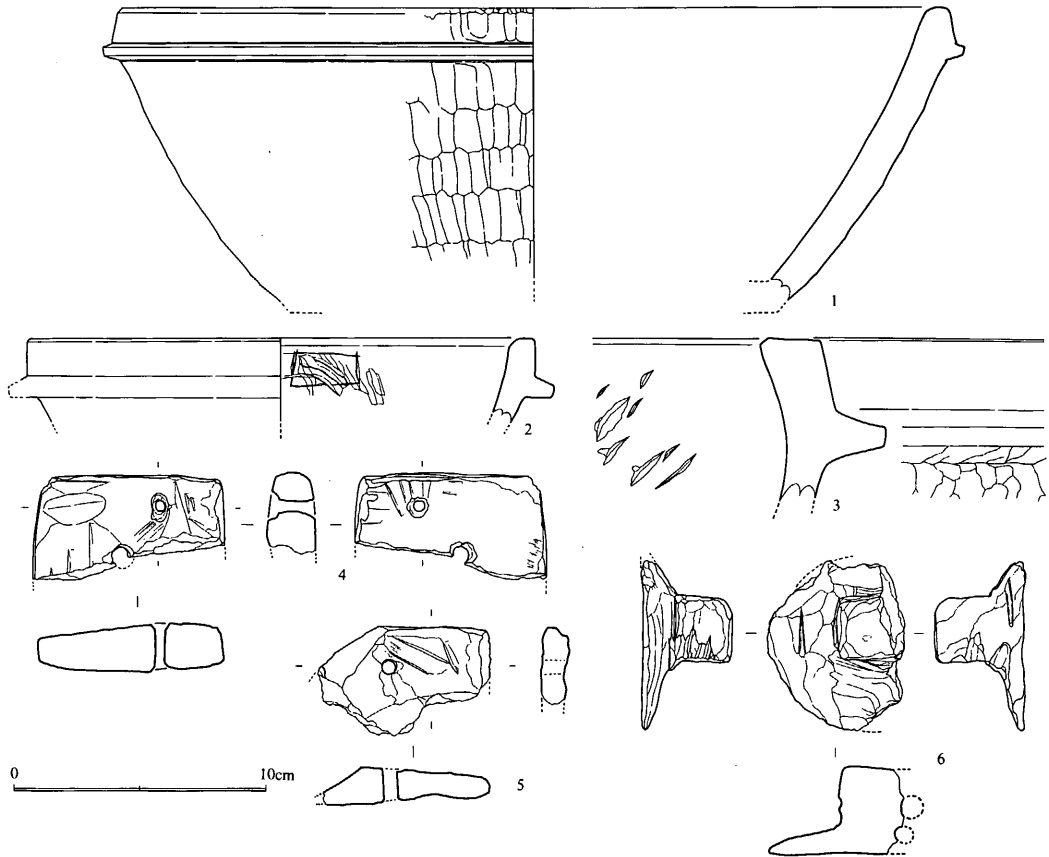


Fig.122 その他の遺構出土石製品実測図 (1/3)

上がりのケズリで平滑にしている。50SX316出土。2は口径20.0cmに復原できるもので、外面には横方向の細かな擦痕が目立つ。内面には調整による細かな傷の他に、細線によって方形の枠を作り、その内側を工具で彫り窪めようとした痕跡が残る。破断面を加工した形跡を残さないが、破片を再利用しようとした痕跡と思われる。50SX314出土。3は口縁の一部を残すのみであるが、器壁が著しく厚いもので、きわめて大きな製品であったことを窺わせる。残存資料から得られる口径は49.2~53.6cmである。調整は口縁部から鋳端部までは横方向の擦痕が顕著に残るケズリ、鋳下面から体部にかけては縦方向の細かな段を有する横方向のケズリ、内面は斜めに競り上がるケズリで平滑にしている。他の資料に比べると滑石分が少なく、ややざらついた感じがする。50SX294出土。

権状製品 (4・5) 4は滑石製の鍋を方形に加工したものと思われ、部分的に黒灰色を呈する。各面はケズリによって調整されるが、図の上面は鍋の口縁端部形状をわずかに残している。体部の2箇所には穿孔があり、いずれも貫通している。穿孔は表裏両方向から行った後、均一に加工しているとみられる。現存長4.1cm、幅7.5cm、厚さ1.9cmを測る。5も滑石製鍋の加工品で、表面の一部に煤が付着して残っている。図の上部は平坦になっているが、この部分にも煤の付着が認められることから、口縁端部をそのまま利用したことが窺える。破断面と思われる他の

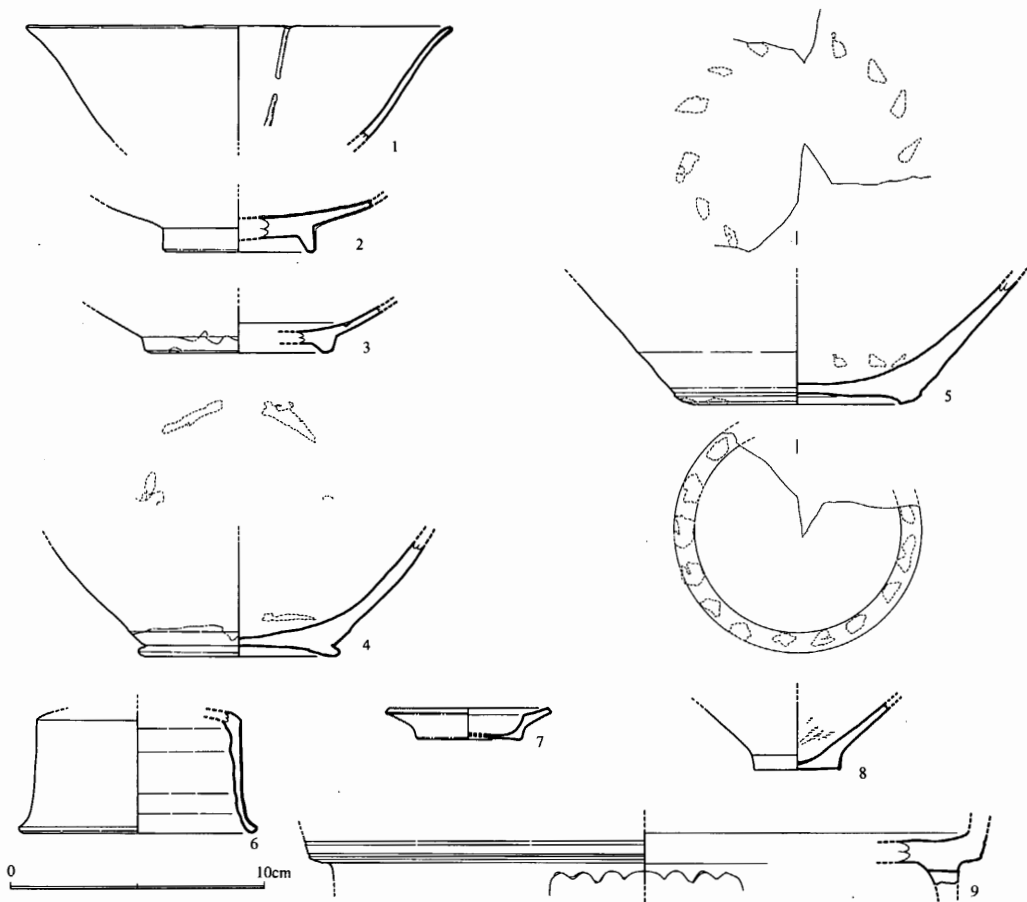


Fig.123 黒褐色土層出土土器実測図 (1/3)

部位も部分的にケズリによる加工がなされている。体部の1箇所には穿孔があり、貫通する。両者とも50SX335出土。

蓋状製品 (6) ほぼ半分が残存している。摘みの部分は側面から2箇所の穿孔があったようで、わずかにその痕跡が確認できる。側面は切断による粗加工の後、ケズリによって調整されている。円盤状の部分は縁部分が薄く仕上げられ、表裏面ともケズリで調整される。裏面の中央はわずかに窪んでいる。50SX407出土。

[7] 黒褐色土層出土遺物

A：土器・陶磁器 (Fig.123、CD-2251～2268)

黒褐色土層中からは多量の土器・陶磁器が検出されているが、ここでは陶磁器の内類例の稀少なものに限って報告することとする。なお、出土土器の詳細は「出土遺物一覧表」(CD内に格納)を参照いただきたい。

白磁

椀 (1) 口径16.8cm。口縁端部に輪花があり、そこから内側には白色の隆線が縦方向に存在する。隆線は体部中程で途切れている。釉は残存部の全面に施され、やや緑色味を帯びた透

明なもので光沢がある。貫入はない。口縁端部付近に釉が溜まり肥厚化するとともに、発色も緑色味が強くなる。VIII-4類。

杯 (2) 高台径6.0cm。高台畳付け以下には施釉されず、端部付近の釉は拭き取られる。釉はやや厚めにかけて、淡灰白色に発色する透明度の低いもので光沢がある。貫入はない。見込みにスタンプによる陽刻の文様が施されるが、彫りが浅い上に利が厚いため文様構成は不明である。枢府系で、森田分類のB類。

皿 (3) 高台径7.4cm。見込みに沈線状の小さな段がある。釉はわずかに緑色味を帯びた透明なもので、残存部の範囲には貫入はない。光沢あり。高台部以下には施釉されない。XI類。

越州窯系青磁

碗 (4・5) 4は高台径8.0cm。釉は淡緑色で透明度の高いもので、光沢はあるが内外両面とも細かな貫入が目立つ。体部外面下半には施釉されない。内外面ともに釉に斑があり凹凸が目立つ。胎土はやや茶色味を帯びる淡灰色を呈し、黒褐色の粒子が混在する。底部は糸切りされたのち、周囲を回転ヘラケズリして高台内面に小さな稜を持たせる。見込みに横長の目跡が付着しているが、外面では部分的にそれとみられる砂粒の付着がある程度で明確ではない。II-2-a類。5は底径9.8cm。底部は回転ヘラケズリによって小さな高台状に作る。釉は淡緑色に発色する透明度の高いもので光沢があり、内外面ともに貫入が目立つ。内面と体部外面の高台付近までは施釉される。見込みに不整三角形を呈した目跡が連続して残り、これと対応するように畳付けにも目跡がある。外面のものは周囲が赤褐色に変色している。I-2-ウ'類。

龍泉窯系青磁

瓶 (a) 胴部の断片で全様は明らかではない。外面に花文のスタンプ文を貼り付け、その上から施釉している。釉は淡灰緑色に発色する透明度の高いもので、残存部分には貫入はみられず、光沢がある。内面にも同様の釉をかけるがやや明らめに発色する。胎土は淡灰白色で、黒色の微粒子が目立ち、随所に小さな気泡も見える。IV類。

青磁

bは外面に文様があり、鉄斑文が施されるものであるが、きわめて小さな破片のため器種を特定できないばかりか、資料の上下左右も判断が困難である。釉は暗緑黄色に発色するもので鈍い光沢があり、鉄斑文は暗茶色を呈している。内面は銀化する部分もあるが、一部に鉄斑文と思われるものも見える。胎土は暗灰色を呈し、白色砂粒を多めに含んでいる。なお資料の法量は2.5×2.3cm、厚さ3mm程度である。

青白磁

蓋 (6) 梅瓶の蓋とみられるもので、口径9.4cm。口縁端部から外面全般に施釉され、内面にはない。口縁端部の釉は拭き取られている。釉は暗灰白色に発色する透明度の高いもので、やや粗めの貫入がある。光沢あり。内面はヨコナデ、外面は条痕を強く残すヨコナデとみられる。胎土は明灰色で黒色砂粒を微量含むものである。

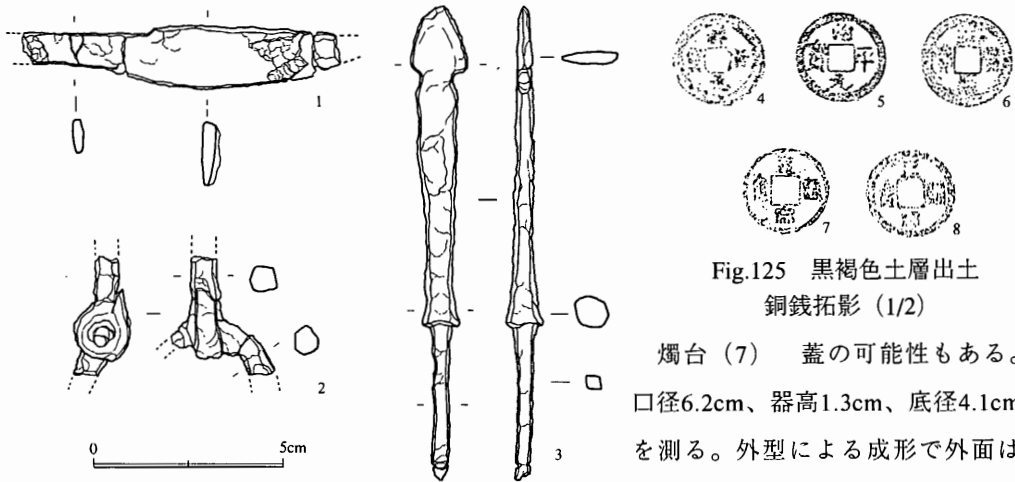


Fig.124 黒褐色土層出土鉄製品実測図 (1/2)

Fig.125 黒褐色土層出土
銅銭拓影 (1/2)

燭台 (7) 蓋の可能性もある。
口径6.2cm、器高1.3cm、底径4.1cm
を測る。外型による成形で外面は
未調整、内面は施釉されるが二次
的に火を受けたようで小さな気泡

が目立ち、透明度が失われている。釉は暗青灰色に発色するが、口縁部外面の傾斜部から内面に施され、外面にはない。露胎部分は淡灰色を呈している。

椀 (8) 高台径3.4cm。釉は高台内側を除いて施され、明青白色に発色し光沢がある。見込み部分は釉が溜まるため、より青味が強い。体部内面には櫛による施文がある。底部の露胎部分は明茶色と黒茶色の斑になっている。高台端部に白色の砂粒が付着する部分がある。

陶器

9は緑釉陶器で輸入品と考えられる。小片のため器種は特定できないが、円盤状の脚がある香炉をイメージして作図した。脚部には透かしがあり、雲形風の形状を呈していたようである。鉢部分の底径は26.4cmを測る。釉は全面に施され、明緑白色に発色するもので、部分的に鈍い光沢がある。内面は二次的に火を受けたようで、表面には小さな気泡が目立ち、釉も濁った感じを受ける。胎土は明白色で、茶色粒子を若干含むものであり、軟質に焼成される。

B：金属製品 (Fig.124・125、CD-2269・2270)

刀子 (1) 両端を失っており、現状の長さ8.4cm、最大幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。鉄製。

鑷 (3) やや先広がり of 体部の先端部は三角形にし、先端部付近は平たく作るが、基部は円形を呈している。ほぼ完存する資料で、長さ12.5cm、鞘への装着部の長さ4.2cm、体部の厚さ0.3cmを測る。鉄製。

吊金具 (2) 環状の吊金具の一部と考えられる。残存部は掛金具と輪金具の装着部分で、釣り針状の金具に輪金具を掛けた後、締め付けて固定したものらしい。掛金具部分は断面方形、輪金具部分は多面形もしくは略円形の可能性がある。輪金具の推定径は約3.5cm。

銭 (4~8) 4は「祥符元寶」、5は「治平元寶」、6は「元豊通寶」、7・8はともに「皇宋通寶」である。

C：土製品 (Fig.126・127、CD-22671~2280)

轆羽口 (1・2)

1は復原される
胴部の径は約
7cm。表面の色
調から図の下方
が先端部と推定
される。外面は
縦方向の強いナ
デで稜がつく。
内面は芯棒を引
き抜いたことを
想定させる縦方
向の擦痕がみら
れる。胎土は砂

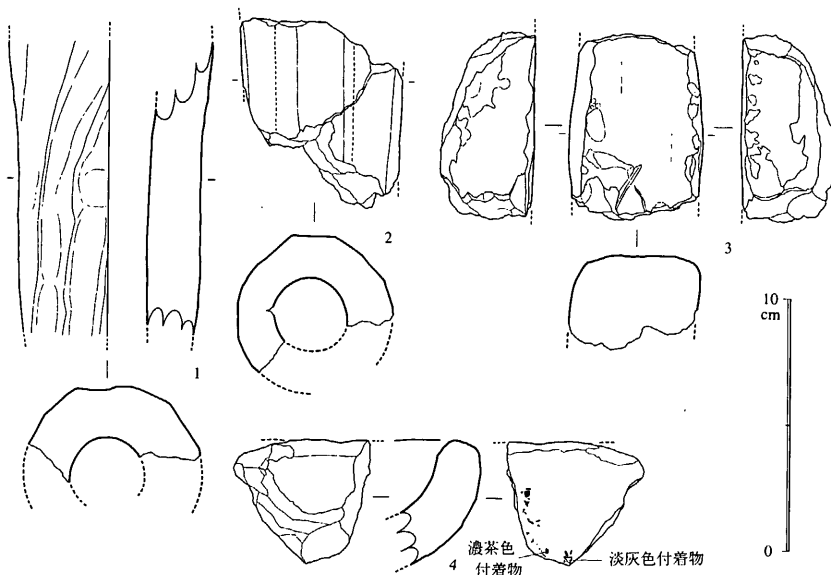


Fig.126 黒褐色土層出土生産関連遺物実測図 (1/3)

粒を多く含んでおり、きわめて粗い。2は胴部径6.2cm。調整等は1とほぼ同様である。本資料も図の下方が先端と思われる。

トリベ (3) 残存する範囲内で目立った附着物はない。内面の口縁部付近は暗灰色、外面は茶褐色及び明茶白色を呈する。胎土は小さな砂粒を多量に含む粗めのものである。

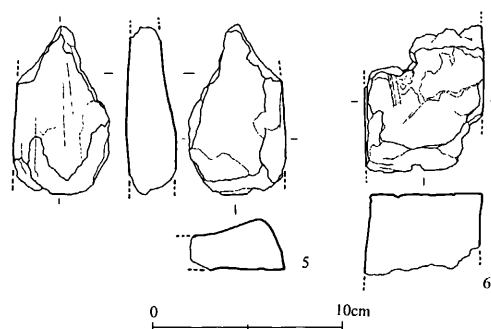


Fig.127 黒褐色土層出土土壁実測図 (1/3)

方柱状土製品 (4) 断面の形状がややいびつな方形を呈するもので、図の上方がわずかに細くなる。最大幅5.1cm。表面は二次的な火熱を受けたようで淡灰褐色を呈しやや劣化しているため、指圧痕様のものが観察される程度である。胎土は明茶黄色で、1~2mm程度の砂粒を多量に含む粗いものである。

土壁 (5・6) 5は4方に面が残るもので、胎土が他の土壁にくらべて精良であることや、残存する面の表面に細かなナデ様の痕跡があることから、ここで報告したものの壁の一部ではない可能性もある。6は3方に面が残り、木舞と思われる竹の痕跡がわずかに残る。胎土は他地点で出土する土壁と酷似し、砂粒やスサが混在する。幅は6.0cmで、表面の調整は明らかではない。

D: 瓦類 (Fig.128~130、CD-2281~2290)

軒丸瓦 (1~4) 1は単弁八葉蓮華文ながら子葉を2つに作るもので、間弁や弁央は強い稜で表現される。周縁は幅広の突帯状に突き出しており、内縁は蓮華文、外縁は突鋸歯文で構成される。裏面は周縁下半部が突帯状を呈している。観世音寺SE3680に良好な類例がある。2~4は

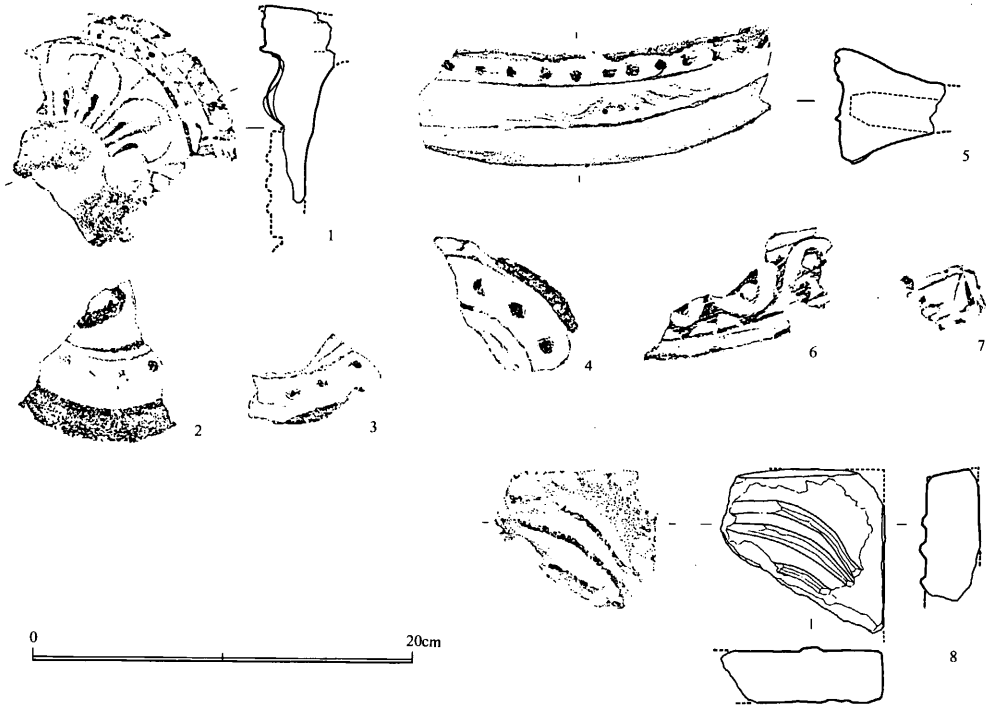


Fig.128 黒褐色土層出土瓦実測図及び拓影 (1/4)

巴文を配するもので、2は周縁が著しく高く、周縁と珠文帯との間には細い圏線が巡る。内外区を分けるものではなく、長く伸びた巴の尾がその役割を果たしているが、尾の先は繋がらない。3・4は内外区の境に圏線が巡り、4の珠文は大きく低いものが並ぶ。

軒平瓦 (5~7) 5は上外区に珠文帯を配するのは明瞭だが、内区の偏行唐草文はきわめて不明瞭で、さらに下外区には突鋸歯文帯があったと思われるが、ほとんど観察できないうえに横方向のナデで擦り消されている。明瞭な顎部はないが、細くした粘土には亀裂が目立つ。焼成はきわめて良好で須恵質である。6は大振りの唐草文を配するもので、筑前国分寺跡出土例

に類似したもの（同範ではない）があり、それを参考にする均整唐草文であった可能性が高い。瓦当面には範の木目が観察できる。7は小型のもので内区の文様は特定できない。顎はごく低い段顎で、凹面は瓦当端部まで布目が残る。瓦質に

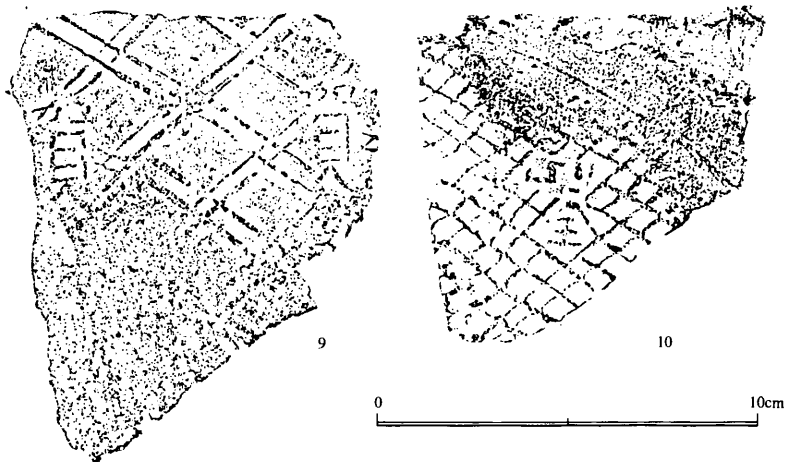


Fig.129 黒褐色土層出土文字瓦拓影 (1/2)

焼成される。

文様 塼 (8) 残存長8.5cm、残存幅8.5cm、厚さ2.5cmを測るもので、表面に3条の突波状線で構成される文様がある。破片は隅部であるが、どの部位にあたるかは特定できない。表面及び側面は型から離したままの状態であるが、裏面は指圧痕がわずかに観察される。胎土は2mm以下の砂粒を多量に含む粗めのもので土師質に焼成され、淡茶色を呈している。50SK390出土の3点に類似し、本来一具のものとして使われていたと考えられるが、これらの

文様とは全く異なるものである。ただ近接地である大宰府条坊跡第149次調査地から同質ではほぼ同規模の鳳凰と見られる文様を配した塼が出土しており（『大宰府条坊跡XII』）、本資料もそうした文様の一部分と考えるのが妥当であろう。

文字瓦 (9・10) いずれも平瓦凸面に押されたもので、9は二重斜格子に「賀茂」と書かれたものであるが、「茂」字が本資料では擦り消されていてわからない。III-4類。10は小さな不

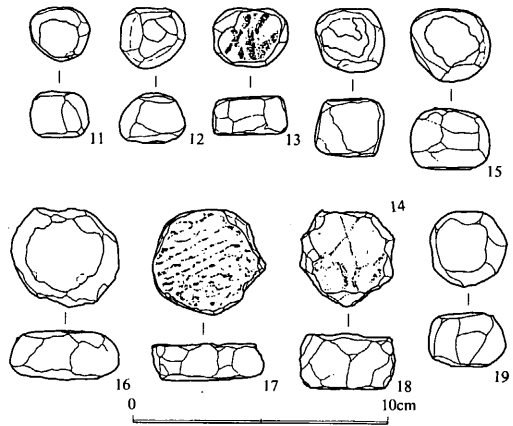


Fig.130 黒褐色土層出土瓦玉実測図 (1/3)

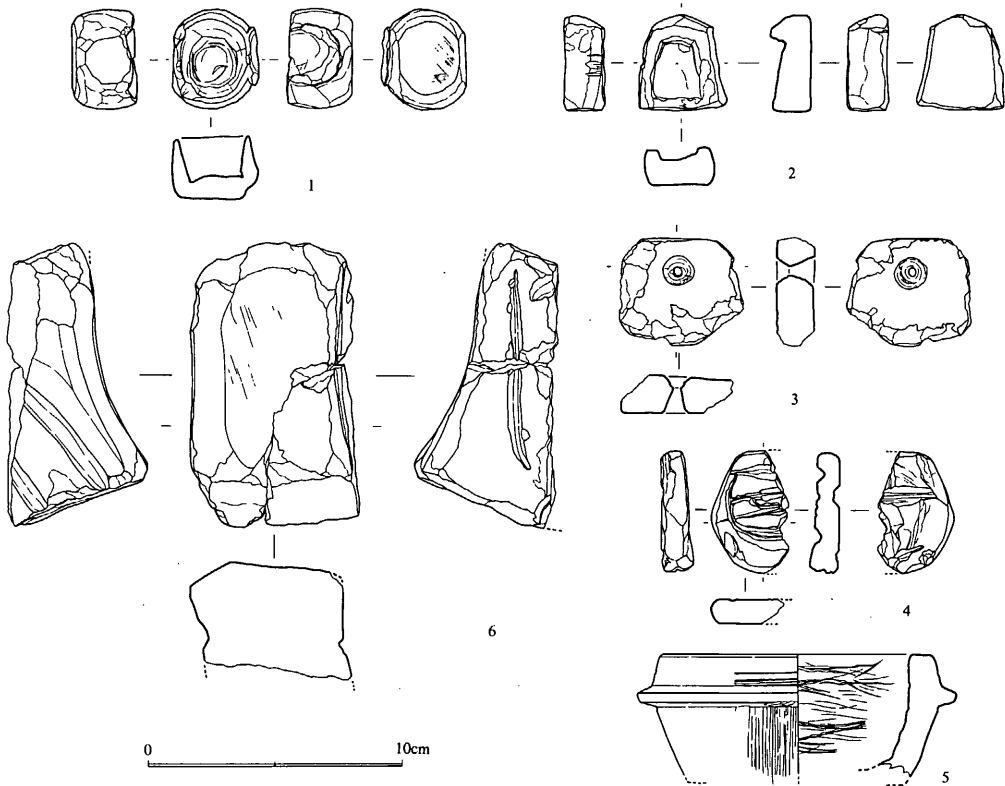


Fig.131 黒褐色土層出土石製品実測図 (1/3)

整格子に「四王」と記すもので、XVIII類。

瓦玉 (11~19) 平瓦の破損したものの側面を研磨あるいは打ち欠きによって平面形状を略円形にしたもので、径2.1~4.2cm、厚さ1.4~2.4cmを測る。一部に格子叩き目を残すものもある。

E：石製品 (Fig.131、CD-2291~2301)

容器 (1) 滑石製で楕円形の容器状を呈し、当初はふたつ以上の容器が並列していたものを、再加工してひとつの容器にしたものである。内外面ともにケズリによって調整されるが、底部外面は丁寧に平滑にされている。長さ3.9cm、幅3.4cm、高さ2.6cm、容器内の深さは1.5cm前後を測る。

硯 (2) 滑石製で小型の模造品とみられる。長さ3.8cm、下端部幅3.4cm、高さ1.6cmを測り、平面形状は将棋の駒を思わせる不整五角形を呈している。内側は海部を深く、山部を浅く彫り込むことで表現するが、明確な境は設けない。各面ともケズリによって仕上げられるが、底部はきわめて平滑に仕上げられる。底部がわずかに湾曲していることから、石鍋の再利用品の可能性も残される。

鍋加工品 (3・4) 3は滑石製の石鍋片に円形の穿孔を穿つもので、破断面はごく簡易に面調整されるに留まる。外面には煤の付着痕が残る。穿孔は径1.1~1.2cmで両側から穿たれるが、貫通したあとに孔の大きさを揃えるような行為は行っていない。4は石鍋の加工品と思われるが、判然としない。資料の側面は丁寧に面取りされ、表裏両面ともに溝状の彫り込みが複数ある。当初の形状は明らかでなく、用途の想定も難しい。

鍋 (5) 口径10.6cm、鏝部径12.5cmを測る小型のもので、鏝下面以下には煤が付着しており実際に使用されていたことを窺わせる。鏝部から口縁部は横方向のケズリ、内面も横方向のケズリながらきわめて粗雑なもの、外面は縦方向のケズリとみられる。

砥石 (6) 砂岩製の砥石で、上端部と裏面を失う。下端部は略平坦面であるが、自然面も随所に残るため、製品として一旦平滑にした程度で、使用によるものではなさそうである。他の3面はいずれも使用面である。正面にあたる面は中央が大きく窪み縦方向の擦痕が観察される。端部近くは面取りされたようになっているが、これも使用面である。右側面は平坦な使用面の中程に長さ7.7cm、幅0.5cm、深さ約0.3cmの溝状の使用痕がある。断面形状は薬研状を呈している。左側面は平坦な使用面に斜め方向の溝状の使用痕があり、長さは明らかでないが、幅0.7cm、深さ0.3cm内外を測る。溝の断面形状は半円形で、これも使用面とみられる。玉状の製品を研いだものであろうか。

IV、総括

(1) 遺構の変遷

今次の調査では古墳時代から中世にかかる遺構や遺物を検出した。総括のはじめとして各遺構の年代を検討し、近接する大宰府条坊跡第19次調査（以下条19次とする）や大宰府史跡第39-3次、第109・111次調査（以下大39-3次、大109・111次のように略す）の状況と比較しながら、時期別に遺構群の変遷を追いかけてみたい（Fig.132）。なお個別の遺構の年代はTab.2を参照いただくこととし、本文中では一部の主要なもののみ掲げることとした。

奈良時代

50SX500とした南北方向の流路状遺構が該当する。堆積土の観察では実際に水が流れていた形跡は確認できず、大きな窪み（小さな谷状地形と理解するべきか）を整地したと考えるのが妥当であろう。遺物は須恵器と土師器が主体を占めるが、須恵器では古墳時代にまで遡るものが多く含まれており、最も新期のもので8世紀前半のものである。遺構からの出土状況はどの位置においても散在するように含まれる程度で、まとまった投棄行為を示すような部分はなく、また最下層とした部分からも古墳時代の資料に混じって奈良時代に属する遺物が出土することから、各層は順次堆積したのではなく、ある段階で一気に埋められた可能性が強い。その際に当初存在していた古墳時代の遺構を削平したために当該期の遺物が多数混入する結果となったものであろうか。ただし、周辺に古墳時代の遺構が検出された例を聞かないことから、遠隔地からの客土の可能性も考えておく必要がある。

さて、最終埋没が8世紀前半とするとすでに大宰府は成立していたことになり、広義の大宰府建設に伴う整地造成事業が7世紀後半から末にかけてのことであると考え、それらとは一線を画して考える必要がある。その点で観世音寺東側の調査で得られた所見では8世紀中頃を前後する時期に整地の行われている箇所があり、観世音寺周辺部の整備がこの時期まで下ることを示唆するものと思われる。当該調査地は寺域の外にあるが、周辺部をふくめた一連の整地行為の中に含まれるものとみられよう。

また奈良時代のなかで考えられる遺構には掘立柱建物群がある。少量ながら出土した遺物を見ると大宰府IV～V期のものが主体を占め、概ね8世紀中頃から後半に建設されたことが窺える。建物の方位はほぼ南北方向の制約を受けたものであり、位置的な問題も含めて政庁全面の官衙地区建物群との比較が必要になってこよう。しかし今次の調査ではその一部を検出したに留まるため、詳細な検討は後日を期したい。

さらに当該期では50SX360井戸状遺構が注目される。出土した土器は大宰府周辺では見かけないもので、特に土師器皿は口縁部内側に沈線状の段を作るもので、一般に都城系とされる土器群に目立つ特徴である。暗文はなく器形自体もやや異なることから都からの搬入品ではなさそうであるが、現状では産地を特定できない。須恵器もきわめて丁寧な作りで、胎土も精良で

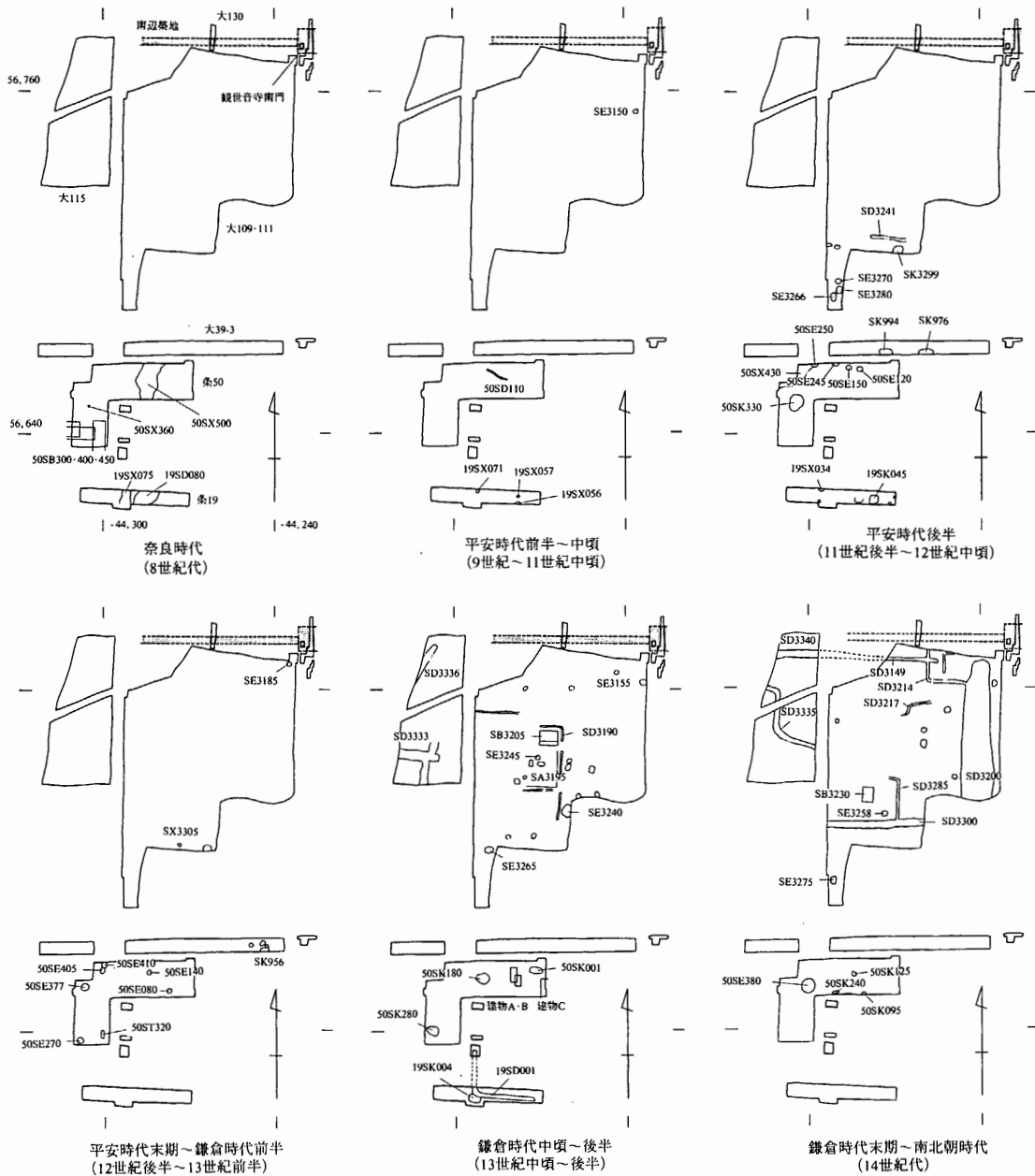


Fig.132 第50次調査周辺の主要遺構変遷図 (1/2500)

あり、これらも大宰府周辺の生産ではなさそうである。他地域からの搬入品の範疇で捉えたいが、その産地は特定できない。なお時期は大宰府III期とみられ、8世紀前半から中頃のものであろう。

なお50SK345・50SX202・214は50SX500埋土上面から切り込んでおり、当該期の土器しか出さないと位置付けられる可能性が高い。

平安時代

大宰府VI期からXI期までの遺構は皆無に等しい。越州窯系青磁や一部の土師器でその時期に

Tab.2 第50次調査主要遺構変遷表

A.D.	土器型式	建物	井戸	土坑	墓・整地	その他
700	I	300・450		345	500	360 445・214
	II					
	III					
	IV					
	V					
800	VI	400				202
	VII					
900	VIII					
	IX					
	X					
1000	XI					
	XII					
1100	A		245		430	
	B					
1150	XIII		250	(235) 330 395	430	414
	XIV					
	XV					
1200			080 405 410	375・390・415 364 050・055	320	327・335・401
1250	XVI	建物C 建物A 建物B 柱列E	377	060・365・370 317 372 001・015・030・075 045 180・236・280・290 210 088・105 115・130 325		(315)
	XVII					
	XVIII					
	XIX					
	XX					
1300				295		316
1350				095・125・240		
			380	160		

該当するものもなくはないが、遺構として認識できるものはない。ただ遺物の時期と遺構の切り合い関係から50SD110がこの時期に穿たれた可能性が残る程度で、遺構の空白期間はきわめて長く、平安時代前半から中頃のこの地域における土地利用の実態は不明とせざるを得ない。ただ観世音寺前面で行われた大109・111次の所見でもこの時期はほとんど空白であり、当該時期の観世音寺南側は空閑地として確保されていたことも考えておく必要がある。また条19次の南隣接地で行われた条149次でもほぼ同様の所見を得ており（『大宰府条坊跡XII』）、観世音寺南側の空閑地はさらに南にまで広がるものと思われる。

さて、大宰府XIIB期～XIII期に至ると遺構が見えはじめてくる。遺構としては50SE120・150・245・250といった井戸が目につくが、他の性格の遺構はよくわからない。ただ調査区北西部で検出した整地層50SX430が注意される。出土遺物は下層がXIIB期、上層がXIII期とみられるものである。建物の具体的配置は不明であるが、井戸の存在と整地の時期が近接する点を重視すると、この時期に至ってこの地域が再開されるようになったことが窺える。

北側隣接地の109・111次の所見でも概ねこの時期に至って遺構が見えはじめ、しかも調査区の南側に集中して検出されている。こうした遺構群の北を限るように東西方向の溝群が検出されており（当該期のものはSD3241）、この付近にひとつの北限が存在するようである。この遺構群は現在の道路下にも延びているようであり、大109・111次南端部の遺構群と今回報告した遺構群とは、きわめて密接な関連があると認識できよう。従来までの観世音寺前面の空間はここに至って消滅しはじめ、新たな歴史が展開し始めるのである。

つづくXIV期からXV期に至ると井戸も調査区の全体にわたり、土坑も随所に認められ、建物の復元や宅地割りの推測は困難なものの、宅地の一部であろうことは十分推測できるところである。そのような中に木棺墓50ST320（XV期）が出現する。このような墳墓は学校院跡や大宰府条坊跡の随所で見受けられるところであり、成立時期や供献形態、立地など共通する要素も多い。これを仮に屋敷墓とすると、XV期に至ってこの付近に墳墓を形成し得る階層が屋敷を構えたことが窺えると言える。井戸や土坑の出現がこの時期周辺に集中していることは注意する必要がある。また学校院跡検出のものも同様であり、官の管理下に置かれていた土地に墳墓の形成があり、いずれも近接した時期であることは、この付近の土地の用途が大きく変化した時期として捉えることも可能となろう。

また後述するように、土器生産に関わると推定されている棒状土製品や漆が付着した土器や甕の出現などが目につく。さらに北側の大109・111次でも調査区の南側に集中して、12世紀中頃から13世紀前半に位置づけられる鑄造関係遺物（主として鑄型）が多数出土しており（SX3299から特に多く出土）、手工業者がこの付近に集住しはじめる時期として捉えることができ、変化した性格の一端を窺う資料として重要であろう。

こうした胎動は先述したXIIB期にあり、XV期に至って完全にこの地域は過去の風景とは一変したものとなったようである。

このことは大宰府政庁の変革期と比較しても類似点が目につく。政庁域では土器の減少がみられるのがXII期以降であることから、政庁の元位置での機能がこのころには衰退しつつあることは明らかである（ただ大宰府が発給する文書はその後しばらく継続されることから、その中心は別の空間に移動した可能性が強く、現在の学校院跡近くにそれを求めたいと考えている）。条坊跡の朱雀大路周辺でもXIII～XIV期に含まれる遺構はきわめて少なく、条坊区画の埋没もXII期以降に集中している。こうした時期に観世音寺前面でも変化が始まっていることは注目する必要がある、大宰府の律令的な機能の多くが失われ始めた時期を、このXII期以降に

求める妥当性が窺えるところである。

鎌倉時代

XVI~XX期までの間に遺構は集中して確認され、推定できた小形の建物もこの時期に該当する。遺構の性格を推定できるような遺物には恵まれないが、北側の大宰府史跡の調査ではこの時期に至って観世音寺前面部分の大半に遺構が見出され、さらには新たな区画の出現が見られる。今回報告の調査区では明確な区画は見出せなかったが、南側隣接地で調査した条19次では13世紀中頃から後半とみられるL字の区画溝（19SD001）があり、何らかの関連が窺えるところである。またこれよりも先行する遺構である19SK004（13世紀中頃前後）には大量の陶磁器が廃棄されており、こうした物の需要層の居住空間であったことが窺え、当該調査地もそれらと関連する階層の生活空間の一部ではないかと思われる。

また検出した遺構群は50SE380が最も新しく、それ以後の構築とみられる遺構は近世に属する溝を除けば皆無に等しい。この段階での土地利用の実態を確認することはできなかったが、水田や畑といった農地としての利用を考慮しておく必要があるが、今回の調査では検証できなかった。今後の課題としたい。

(参考文献)

大39-3次・・・石松好雄ほか【大宰府史跡-昭和51年度発掘調査概報-】1977年 九州歴史資料館

大109・111次・・・石松好雄ほか【大宰府史跡-昭和63年度発掘調査概報-】1989年 九州歴史資料館

大115次・・・石松好雄ほか【大宰府史跡-平成元年度発掘調査概報-】1990年 九州歴史資料館

条19次・・・山本信夫【大宰府条坊跡III】(太宰府市の文化財第8集)1984年 太宰府市教育委員会

山本信夫「大宰府における13世紀中国陶磁の一群」『貿易陶磁研究 No.10』1990年 日本貿易陶磁研究会

条149次・・・中島恒次郎【大宰府条坊跡XII】(太宰府市の文化財第43集)1999年 太宰府市教育委員会

(2) 各種土製品について

今回の調査で出土した遺物には生産用具をはじめとする土製品がかなりの数を占める。それらを列記すると、鞆羽口、トリベ、鋳型、棒状土製品、土壁等である。これらは調査区の各地点から出土しており、各々の関連の有無について出土傾向を観察することで検討してみたい。

鞆羽口

大小の破片の総数は80点で、Tab.3に示す遺構や層位から出土した。多くは中世の遺構であるが、子細に観察すると半数以上は調査区の東側やや中央寄りに多く見受けられ、そこには50SX500が存在していることに気付く。50SX500自体からも20点が出土しており、本来この遺構中に包含されていたものが上層遺構の掘削に伴って各遺構に包含されるに至ったと理解できる。したがって羽口の多くは8世紀前半までの大宰府もしくは観世音寺建設に関連した生産事業に伴うものが主体であると考えたい。

これ以外の地点ではほとんどが散見される状態であるが、奈良時代の遺構50SB300やそれを

Tab.3 輪羽口出土状況一覧表

出土地点	遺構番号	点数	点数/総数 (%)
75	50SK075	1	1.25
100直上	50SX500最上層	10	12.50
120	50SE120	4	5.00
130a	50SK130上層	1	1.25
143		1	1.25
145	50SE140裏込土	1	1.25
156	50SX156	1	1.25
158	建物A-f	1	1.25
192		2	2.50
201		1	1.25
202	50SX202	1	1.25
203		1	1.25
206		1	1.25
211		14	17.50
214	50SX214	2	2.50
219		1	1.25
230	50SX230	1	1.25
273	50SE380裏込土	2	2.50
273ツツノミ	50SE380裏込土	1	1.25
295	50SK295	1	1.25
300f	50SB300	1	1.25
310	50SK330上面	1	1.25
330	50SK330上面	2	2.50
345	50SK345	3	3.75
346		2	2.50
408	50SX408	1	1.25
411		2	2.50
黄茶土	50SX500上層	10	12.50
U4	黒褐色土層	1	1.25
V7	黒褐色土層	4	5.00
W6	黒褐色土層	1	1.25
X5	黒褐色土層	4	5.00
合計		80	100.00

Tab.4 炉壁出土状況一覧表

出土地点	遺構番号	点数	点数/総数 (%)
125	50SK125	1	20.00
219		4	80.00
合計		5	100.00

Tab.5 トリベ出土状況一覧表

出土地点	遺構番号	点数	点数/総数 (%)
100直上	50SX500最上層	1	14.29
120	50SE120	1	14.29
130a	50SK130上層	1	14.29
230	50SX230	2	28.57
329	50SX329	1	14.29
黒褐色土・W9	黒褐色土層	1	14.29
合計		7	100.00

Tab.6 鋳型出土状況一覧表

出土地点	遺構番号	点数	点数/総数 (%)
75	50SK075	1	25.00
163		1	25.00
255	50SD255	1	25.00
261	50SX261	1	25.00
合計		4	100.00

Tab.7 棒状土製品出土状況一覧表

出土地点	遺構番号	点数	点数/総数 (%)
20	50SX020	1	4.17
54	50SX054	1	4.17
60	50SK060	3	12.50
80上層	50SE080上層	2	8.33
140	50SE140埋土	1	4.17
320上面	50ST320上面	2	8.33
320埋土中	50ST320管内埋土	3	12.50
347	50SX347	1	4.17
385	50SE410上層	1	4.17
390	50SK390	1	4.17
405枠内	50SE405枠内	1	4.17
410	50SE410埋土	1	4.17
410枠内	50SE410埋土	4	16.67
419	50SX419	1	4.17
W7	黒褐色土層	1	4.17
合計		24	100.00

切る土坑、さらに50SX360に近接した地点が揚げられ、整地と考えられる50SX430に絡む地点にも見受けられる。これらのことから羽口の大半は奈良時代に帰属するものと思われる。ただ前項でも記したように大109・111次南半部では12世紀中頃から13世紀前半とみられる鋳型をはじめとする生産関連遺物が多く出土しており、この中にその時期のものも若干ながら含まれている可能性は残される。

トリベ、鋳型、炉壁 (Tab.4~6)

トリベはわずかに7点

(破片数)、鋳型に至っては4点のうち2点は鋳型としての確実性に乏しいものである。このうちトリベは先の羽口の傾向と類似しており、同様な解釈でいいであろう。鋳型も少ないながら羽口と同様に考えておきたい。

また炉壁とした資料は、羽口の先端部分が高温によって溶解した部分とも考えられる。出土の傾向は羽口と重複する。

棒状土製品 (Tab.7)

方柱状あるいは円垂状のもの、さらには太い円柱状のものなど様々であるが、いずれも強い二次加熱を受けており、資料自体はかなり脆くなっている。これらの資料については、徳永貞紹、佐藤浩司らによって土器作りに関連するものではないかとされるものである。今回の調査ではただ資料が出土したというにとどまり、土器生産を窺わせるような状況で出土したとは言えず、資料の年代も50SK060・50SE410等から12世紀後半頃に位置づけられ、従前の資料よりはやや新しく位置付けられる。ただ先にも検討したようにこの付近には漆に関係する技術者や北側に位置する大109・111次の成果から鋳造に関連する技術者の存在が考えられ、土器作りを

Tab.8 銅滓出土状況一覧表

出土地点 (S-番号)	遺構番号	点数	重量 (g)	点数/総数 (%)	重量/総重量 (%)
1	50SK001	12	113.4	9.60	3.54
1直上	50SK001直上	1	3.2	0.80	0.10
10d		1	9.6	0.80	0.30
24	50SX024	1	11.4	0.80	0.36
36		1	14.0	0.80	0.44
63	50SX063	1	34.2	0.80	1.07
100直上	50SX500最上層	1	57.1	0.80	1.78
104		1	14.1	0.80	0.44
131		1	6.4	0.80	0.20
154	50SX154	2	7.4	1.60	0.23
156	50SX156	1	12.3	0.80	0.38
160	50SK160	2	59.7	1.60	1.86
180	50SK180	3	126.9	2.40	3.96
182		1	3.6	0.80	0.11
186		1	14.0	0.80	0.44
196	50SX196	1	13.6	0.80	0.42
211		1	3.2	0.80	0.10
214	50SX214	11	80.5	8.80	2.51
223		1	7.6	0.80	0.24
228		1	4.3	0.80	0.13
247	50SX247	1	25.6	0.80	0.80
250	50SE250	7	81.0	5.60	2.53
257		1	24.4	0.80	0.76
260上層	50SK260	1	19.4	0.80	0.61
263		1	16.3	0.80	0.51
269		1	161.3	0.80	5.04
273	50SE380裏込土	3	90.7	2.40	2.83
280上層	50SK280	3	100.4	2.40	3.14
281		6	24.8	4.80	0.77
317	50SK317	2	18.0	1.60	0.56
330	50SK330上面	1	91.9	0.80	2.87
345	50SK345	5	44.9	4.00	1.40
355	50SX500最下層	1	43.7	0.80	1.36
368外	50SE377最上層	2	6.9	1.60	0.22
374	50SE377上層	1	5.9	0.80	0.18
377	50SE377埋土	1	75.2	0.80	2.35
380内	50SE380石組内埋土	2	91.5	1.60	2.86
380埋土中	50SE380石組内埋土	4	52.9	3.20	1.65
388		7	31.8	5.60	0.99
397		1	29.3	0.80	0.92
404		3	16.6	2.40	0.52
407	50SX407	1	15.9	0.80	0.50
425	50SE250裏込土	1	41.7	0.80	1.30
425上層	50SE250裏込土上層	1	1.2	0.80	0.04
435	50SX430	1	64.2	0.80	2.01
444		1	14.0	0.80	0.44
新凹み		2	90.4	1.60	2.82
黄茶土	50SX500上層	1	19.2	0.80	0.60
黄茶土中層	50SX500上層	3	96.0	2.40	3.00
黒灰土		4	284.5	3.20	8.89
PQ13・14	黒褐色土層	1	13.7	0.80	0.43
U12・13	黒褐色土層	1	42.7	0.80	1.33
V7	黒褐色土層	4	557.6	3.20	17.42
W7	黒褐色土層	3	268.1	2.40	8.37
東側	黒褐色土層	2	43.3	1.60	1.35
合計		125	3201.5	100.00	100.00

Tab.9 楕形(銅)滓出土状況一覧表

出土地点 (S-番号)	遺構番号	点数	重量 (g)	点数/総数 (%)	重量/総重量 (%)
209		1	163.9	16.67	15.22
343		1	231.5	16.67	21.50
380	50SE380石組内埋土	1	103.4	16.67	9.60
380埋土中	50SE380石組内埋土	1	165.8	16.67	15.40
黄茶土	50SX500上層	1	186.5	16.67	17.32
黄茶土中層	50SX500上層	1	225.7	16.67	20.96
合計		6	1076.8	100.00	100.00

Tab.10 鉄滓出土状況一覧表

出土地点 (S-番号)	遺構番号	点数	重量 (g)	点数/総数 (%)	重量/総重量 (%)
1	50SK001	1	20.7	1.96	1.27
15	50SK015	1	31.1	1.96	1.90
30	50SK030	3	473.2	5.88	28.94
85a	建物A-a	1	14.8	1.96	0.91
97		1	25.9	1.96	1.58
105	50SK105	1	48.2	1.96	2.95
110	50SD110	1	4.4	1.96	0.27
160	50SK160	1	3.9	1.96	0.24
190	50SX190	1	2.6	1.96	0.16
206		1	16.7	1.96	1.02
210	50SK210	1	25.0	1.96	1.53
211		4	42.0	7.84	2.57
213		1	69.5	1.96	4.25
214	50SX214	1	20.2	1.96	1.24
221	50SX221	1	5.4	1.96	0.33
223		1	23.0	1.96	1.41
228		1	7.7	1.96	0.47
236	50SK236	2	18.0	3.92	1.10
244	50SK244	1	14.2	1.96	0.87
250	50SE250	1	15.6	1.96	0.95
273	50SE380裏込土	1	65.9	1.96	4.03
295	50SK295	1	4.1	1.96	0.25
301	50SK301	2	30.5	3.92	1.87
320裏込土	50ST320裏込土	2	5.8	3.92	0.35
341		1	8.2	1.96	0.50
350上面	50SX500最下層	1	36.2	1.96	2.21
370	50SK370	1	12.6	1.96	0.77
377	50SE377埋土	1	24.0	1.96	1.47
389		1	207.1	1.96	12.67
390	50SK390	2	29.9	3.92	1.83
396		1	5.8	1.96	0.35
400b	50SB400b	2	4.7	3.92	0.29
407	50SX407	1	8.7	1.96	0.53
410	50SE410埋土	1	51.9	1.96	3.17
425上層	50SE250裏込土上層	1	3.8	1.96	0.23
430	50SX430	1	129.0	1.96	7.89
445	50SX445	2	16.4	3.92	1.00
UV12	黒褐色土層	1	102.8	1.96	6.29
V11	黒褐色土層	2	5.4	3.92	0.33
合計		51	1634.9	100.00	100.00

Tab.11 鉄塊出土状況一覧表

出土地点 (S-番号)	遺構番号	点数	重量 (g)	点数/総数 (%)	重量/総重量 (%)
20	50SX020	9	97.7	37.50	4.52
55a	50SK055	1	18.5	4.17	0.86
60	50SK060	1	53.4	4.17	2.47
60直上	50SK060直上	1	113.1	4.17	5.23
100直上	50SX500最上層	1	232.8	4.17	10.76
160	50SK160	1	79.9	4.17	3.69
255	50SD255	1	123.4	4.17	5.70
263		1	108.2	4.17	5.00
372	50SK372	1	737.9	4.17	34.11
413		1	261.4	4.17	12.08
425上層	50SE250裏込土上層	1	71.6	4.17	3.31
435	50SX430	1	66.2	4.17	3.06
V8	黒褐色土層	2	56.0	8.33	2.59
X7	黒褐色土層	1	23.9	4.17	1.10
東側	黒褐色土層	1	119.3	4.17	5.51
合計		24	2163.3	100.00	100.00

各表における銅・鉄は肉眼観察による分類である。

行うような手工業集団が居住していても不思議ではない地域と言える。周辺の調査の子細な分析が必要である。

また複数の点数を出土した遺構に50ST320がある。いずれも上面もしくは埋土中からの検出であるが、墳墓造営年代も12世紀後半で先の遺構とほぼ同時期に捉えることが可能であり、墓の埋土に偶然混入したことも十分考えられるが、この墓の周辺では一切確認されていないことや、釘に混じって鋳滓片が出土していることも併せて考えると、墳墓の埋め戻しの際に故意に混入させられたことも考えておく必要がある。このことは、被葬者が土器作り、あるいは生産事業関係者であったことを窺わせる資料となるかも知れない。

なお、金属生産に関わるものとして鋳滓があり、今次の調査でも多く出土している。これについてはTab.8～11に出土地点と数量を提示した。未だ科学的分析を行っておらず、今後の課題として残したい。

土壁

破片の総数は1,999点、101,247.1gで、Tab.12に示す遺構や層位から出土した。破片には大小様々な大きさがあり、Tab.12には各遺構単位（黒褐色土層のみ地区別）にその個体数と総重量を記載した。なお一部に焼土塊ではあるものの確実に壁と認定するには不安な要素を持つものも含んでいる。

まず資料の調査区内における分布傾向をみると、ほぼ満遍なく調査区全体に散らばっているように見受けられる。遺構の年代は一部に古いものが含まれているが、大半が中世のものである。そのなかで土壁が集中して出土している地点をみると、50SK060と50SE377が揚げられる。50SK060ではその直上から出土したものを合わせると491点、32,827.6gがあり、点数では全体の24.56%、重量では34.40%を占める。また、50SE377では269点、23,693.7gがあり、点数では全体の13.46%、重量では23.40%となる。50SE377の場合その98.5%以上が井戸埋土の最上層からの出土で、その部分は埋土の陥没に伴う窪み部分に相当すると考えている部分である。各遺構の時期は50SE377・50SK060ともにXVI期とみられ、この2地点の近くに土壁を用いた建物が存在したことは明らかである。ただ鞆羽口、トリベ、鋳型等の生産関係遺物との関係は資料の時間的位置づけから積極的に関連を認め得るものではなく、土壁の残存と金属生産とはここでは無関係とするほかない。

さて、ここでいう土壁は偶然にも火災等によって焼かれ、土が固化されたことによって残存したものと思われ、そこには芯となる木舞の痕跡が残されている。残存する木舞の痕跡から次のようなことが判明する。

- 1) 木舞には竹を半裁したものと原体のまま使用したものとがあるが、大半が半裁したものである。
- 2) 半裁した竹の節は取り除いていない。
- 3) いずれも格子状に編まれ、面を形成し、その上から壁土を塗り込めている。竹の間隔は5

Tab.12-1 土壁出土状況一覧表 (1)

出土地点 (S-番号)	遺構番号	点数	重量 (g)	点数/総数 (%)	重量/総重量 (%)	出土地点 (S-番号)	遺構番号	点数	重量 (g)	点数/総数 (%)	重量/総重量 (%)
3		3	19.1	0.15	0.02	143		21	389.7	1.05	0.38
15	50SK015	7	83.8	0.35	0.08	144		18	588.0	0.90	0.58
19		9	127.6	0.45	0.13	145	50SE140裏込土	3	231.8	0.15	0.23
20	50SX020	22	879.3	1.10	0.87	146		9	98.7	0.45	0.10
30	50SK030	4	162.2	0.20	0.16	147		8	147.8	0.40	0.15
33		2	9.6	0.10	0.01	149		8	85.0	0.40	0.08
34		1	45.4	0.05	0.04	150	50SE150埋土	3	43.0	0.15	0.04
35		3	27.5	0.15	0.03	150枠内	50SE150枠内	3	20.4	0.15	0.02
36		6	119.6	0.30	0.12	151		1	37.0	0.05	0.04
39		2	83.2	0.10	0.08	154	50SX154	8	99.1	0.40	0.10
40		1	23.4	0.05	0.02	156	50SX156	6	58.3	0.30	0.06
43	50SX043	1	2.7	0.05	0.00	160	50SK160	63	4163.7	3.15	4.11
45	50SK045	1	43.8	0.05	0.04	161		17	166.4	0.85	0.16
47		3	37.0	0.15	0.04	163		2	29.8	0.10	0.03
49		6	54.0	0.30	0.05	165		2	21.0	0.10	0.02
51		21	672.3	1.05	0.66	166		1	10.3	0.05	0.01
55a	50SK055上層	3	116.2	0.15	0.11	168		7	456.5	0.35	0.45
57		1	17.9	0.05	0.02	170	50SX170	1	23.3	0.05	0.02
58	50SX058	1	8.3	0.05	0.01	180	50SK180	20	946.6	1.00	0.93
60	50SK060	151	11186.7	7.55	11.05	182		4	15.1	0.20	0.01
60直上	50SK060直上	340	23640.9	17.01	23.35	183		21	268.2	1.05	0.26
61		1	26.8	0.05	0.03	192		3	57.3	0.15	0.06
63	50SX063	2	9.6	0.10	0.01	194		3	30.9	0.15	0.03
64		1	6.7	0.05	0.01	196	50SX196	21	840.6	1.05	0.83
70		4	23.1	0.20	0.02	197		1	131.0	0.05	0.13
72		1	10.5	0.05	0.01	206		8	288.4	0.40	0.28
73		4	271.3	0.20	0.27	208		1	11.2	0.05	0.01
75	50SK075	21	717.5	1.05	0.71	216		11	176.6	0.55	0.17
79	建物C-b	1	5.3	0.05	0.01	221	50SX221	5	113.2	0.25	0.11
80上層	50SE080上層	14	600.2	0.70	0.59	224		3	46.1	0.15	0.05
83		1	21.0	0.05	0.02	225		3	58.5	0.15	0.06
85a	建物A-a	1	18.4	0.05	0.02	228		2	10.4	0.10	0.01
86	建物A-c	3	74.8	0.15	0.07	229		6	120.5	0.30	0.12
90a	建物B-d	1	37.8	0.05	0.04	230	50SX230	82	2650.1	4.10	2.62
90b		4	56.7	0.20	0.06	231		12	130.9	0.60	0.13
90c		2	184.7	0.10	0.18	235	50SK235	5	257.7	0.25	0.25
90d	建物B-a	4	57.3	0.20	0.06	236	50SK236	1	13.3	0.05	0.01
90e	建物B-e	8	149.4	0.40	0.15	244	50SK244	3	43.6	0.15	0.04
95	50SK095	2	15.3	0.10	0.02	245	50SE245	1	46.1	0.05	0.05
97		3	30.5	0.15	0.03	247	50SX247	6	104.1	0.30	0.10
99		1	4.0	0.05	0.00	251	50SX251	3	20.2	0.15	0.02
100直上	50SX500最上層	9	431.0	0.45	0.43	253		1	15.2	0.05	0.02
104		3	25.2	0.15	0.02	254		3	52.3	0.15	0.05
105	50SK105	3	15.8	0.15	0.02	255	50SD255	4	133.1	0.20	0.13
107		67	2959.8	3.35	2.92	258		3	38.0	0.15	0.04
108		3	143.5	0.15	0.14	259		20	646.8	1.00	0.64
109	建物C-c	1	8.2	0.05	0.01	260上層	50SX260	3	56.7	0.15	0.06
110	50SD110	11	368.4	0.55	0.36	265		1	87.0	0.05	0.09
114	50SX114	2	61.7	0.10	0.06	270上層	50SE270埋土	1	13.0	0.05	0.01
115	50SK115	5	132.7	0.25	0.13	273	50SE380裏込土	2	19.1	0.10	0.02
117		1	18.2	0.05	0.02	274	50SK274	2	50.7	0.10	0.05
119		1	36.3	0.05	0.04	280上層	50SK280	3	58.0	0.15	0.06
120上層	50SE120上層	6	341.9	0.30	0.34	281		8	167.5	0.40	0.17
120		2	111.6	0.10	0.11	282		7	121.8	0.35	0.12
122		25	420.4	1.25	0.42	283		1	5.6	0.05	0.01
123	50SK123	4	44.2	0.20	0.04	284		2	11.1	0.10	0.01
124		7	61.6	0.35	0.06	287		9	95.4	0.45	0.09
125	50SK125	24	834.6	1.20	0.82	290	50SK290	1	20.2	0.05	0.02
127		2	55.8	0.10	0.06	293	50SX293	1	7.9	0.05	0.01
128	50SX128	8	68.7	0.40	0.07	296		1	14.4	0.05	0.01
129	50SX129	1	8.6	0.05	0.01	309		1	293.2	0.05	0.29
130a	50SK130上層	57	4309.9	2.85	4.26	312		1	6.5	0.05	0.01
130b	50SK130下層	19	627.4	0.95	0.62	315埋土	50SX315	1	7.5	0.05	0.01
131		2	5.7	0.10	0.01	320埋土	50ST320枠内埋土	1	6.4	0.05	0.01
132	50SX132	4	81.1	0.20	0.08	324		1	4.0	0.05	0.00
133		1	18.2	0.05	0.02	327	50SX327	1	4.3	0.05	0.00
134	50SX134	5	70.2	0.25	0.07	330	50SK330上面	1	4.1	0.05	0.00
138		3	60.1	0.15	0.06	330d	50SK330淡黄色土	1	22.2	0.05	0.02
142	50SX142	2	18.7	0.10	0.02	335	50SX335	2	40.8	0.10	0.04

Tab.12-2 土壁出土状況一覧表 (2)

出土地点 (S-番号)	遺構番号	点数	重量 (g)	点数/総数 (%)	重量/総重量 (%)	出土地点 (S-番号)	遺構番号	点数	重量 (g)	点数/総数 (%)	重量/総重量 (%)
336		1	46.0	0.05	0.05	428		7	165.6	0.35	0.16
338		2	31.9	0.10	0.03	435	S0SX430	17	592.9	0.85	0.59
339		23	244.8	1.15	0.24	435下層	S0SX430下層	3	204.5	0.15	0.20
347	S0SX347	7	779.4	0.35	0.77	445	S0SX445	1	7.5	0.05	0.01
348		1	8.2	0.05	0.01	Z		5	181.7	0.25	0.18
350灰褐色土	S0SX500最下層	1	11.0	0.05	0.01	黄茶土	S0SX500上層	1	18.6	0.05	0.02
359		5	70.8	0.25	0.07	黄茶土下層	S0SX500下層	3	65.3	0.15	0.06
364	S0SK364	3	53.1	0.15	0.05	T14	黒褐色土層	1	7.7	0.05	0.01
366		5	28.7	0.25	0.03	U4	黒褐色土層	2	66.5	0.10	0.07
368		2	271.3	0.10	0.27	U7	黒褐色土層	1	29.4	0.05	0.03
368内	S0SE377最上層	224	22522.7	11.21	22.25	U10	黒褐色土層	6	72.3	0.30	0.07
368外	S0SE377最上層	41	905.7	2.05	0.89	U11	黒褐色土層	5	301.6	0.25	0.30
370	S0SK370	3	128.5	0.15	0.13	U12-15	黒褐色土層	1	37.7	0.05	0.04
373		1	57.8	0.05	0.06	V4	黒褐色土層	1	14.8	0.05	0.01
375a	S0SK375	1	39.5	0.05	0.04	V6	黒褐色土層	7	206.0	0.35	0.20
377	S0SE377細土	1	45.3	0.05	0.04	V8	黒褐色土層	1	20.2	0.05	0.02
377枠内	S0SE377枠内	3	220.0	0.15	0.22	V11	黒褐色土層	1	140.5	0.05	0.14
381		3	42.7	0.15	0.04	V13	黒褐色土層	4	196.0	0.20	0.19
382	S0SX382	1	8.1	0.05	0.01	V・W7	黒褐色土層	2	61.7	0.10	0.06
385	S0SE410上層	3	217.8	0.15	0.22	V・W9	黒褐色土層	5	158.7	0.25	0.16
385枠内	S0SE410枠内	1	21.9	0.05	0.02	W7	黒褐色土層	17	538.9	0.85	0.53
387		1	10.8	0.05	0.01	W5	黒褐色土層	1	671.7	0.05	0.66
389		4	139.5	0.20	0.14	W9	黒褐色土層	4	179.6	0.20	0.18
390	S0SK390	6	91.0	0.30	0.09	X2	黒褐色土層	1	18.7	0.05	0.02
395黄褐色土	S0SK395黄褐色土	4	232.4	0.20	0.23	X5	黒褐色土層	7	137.5	0.35	0.14
395淡茶砂	S0SK395淡茶色砂	15	855.0	0.75	0.84	X6	黒褐色土層	20	1185.3	1.00	1.17
397		1	59.3	0.05	0.06	X7	黒褐色土層	5	187.3	0.25	0.18
399		3	177.4	0.15	0.18	X9	黒褐色土層	8	227.2	0.40	0.22
401	S0SX401	2	63.2	0.10	0.06	X11	黒褐色土層	2	101.4	0.10	0.10
410	S0SE410細土	4	78.2	0.20	0.08	X13	黒褐色土層	1	13.5	0.05	0.01
410枠内	S0SE410細土	1	16.9	0.05	0.02	Y7	黒褐色土層	20	1182.8	1.00	1.17
411		1	6.5	0.05	0.01	東側	黒褐色土層	7	256.0	0.35	0.25
424		5	60.9	0.25	0.06	地区不明	黒褐色土層	18	291.2	0.90	0.29
427	S0SX427	1	86.4	0.05	0.09	合計		1999	101247.1	100.00	100.00

~6cmのものが多く、それに直交するものは10cm程度の間隔をおくものもある。

4) 半裁した竹を隙間なく、連続して並べるものもある。

5) 木舞は紐で固定されていたようで、紐の巻かれた痕跡を残すものがあり、太さ4~5mm程度の縄状のものを用いていたことが分かる。ただしすべての交点にあるのではなく、軸となる竹に巻いているだけである。

6) 柱材と接するものは、柱のいずれかの一面に重なるように組み立ており、その上から土を塗っているため、少なくとも内外どちらかは柱が隠れていたようである。

1) ~6) の所見から Fig.133-Aに示すような構造がイメージされ、これらは通常の土壁と思われるが、4) については Fig.134に示すように軒下などの特殊な部分に用い

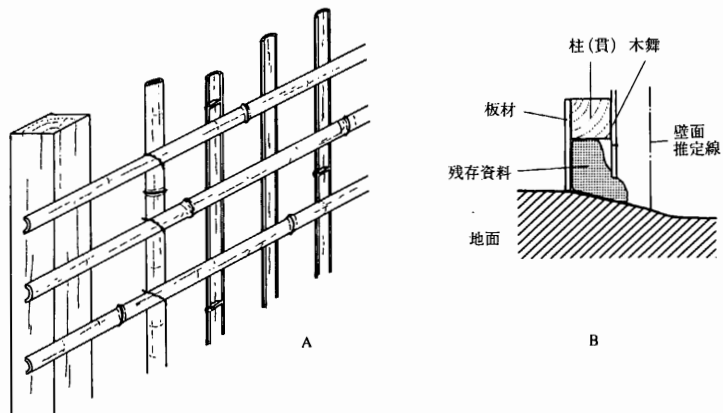


Fig.133 木舞模式図

られた可能性もある。また壁表面の残存部分からは、表面の仕上げは簡易なナデ様の行為で終わっていたとみられる。

なお、壁の両面が残存する資料はなかったが、木舞の位置を壁の中心と仮定すると厚さは約8cm程度に復元できると思われる。

さらに今回採集した資料には柱の痕跡と思われる面が残存しているものもあったが、一部に柱面というには表面が荒れているものがある。その資料 (Fig.78-16) については表面の状況から地面に密着していた部分の可能性が考えられる (Fig.133-B)。Fig.135・136に示したのは『粉河寺縁起』の一コマであるが床下に土壁が施されている例のあることから、こうした部分の壁材が残存したものと理解したい。

これらの点を総合すると、現在の土壁の工法とほとんど変わらないことがわかるが、現在は土壁で作る家はきわめて少なくなった。高度経済成長期まではほとんどの家屋が土壁であったように記憶しているが、時代と共に壁もまた変化するのである。このことを絵画資料で検討した黒田日出男によると、都市部における土壁は14世紀末に描かれた『融通念仏縁起』に板壁や網代壁に混じって出現するのが初めのように、戦国から近世初期の作品である『洛中洛外図屏風』に至って町屋の壁は基本的には土壁へと変化しているという。また都市部における壁の変遷は平安時代末期には網代壁が主流であったが、鎌倉・室町時代では板壁へと変化し、さらに戦国時代には土壁主流へと変遷することを明らかにした。またこうした都市部に対して農山漁村ではこれよりも早くから土壁の導入が認められるとする。今回の資料は壁の一部分のみの出



Fig.134 連続して並べられた木舞の例 (1998年 太宰府市内・山村信榮撮影)



Fig.135 『粉河寺縁起』にみえる長者の蔵

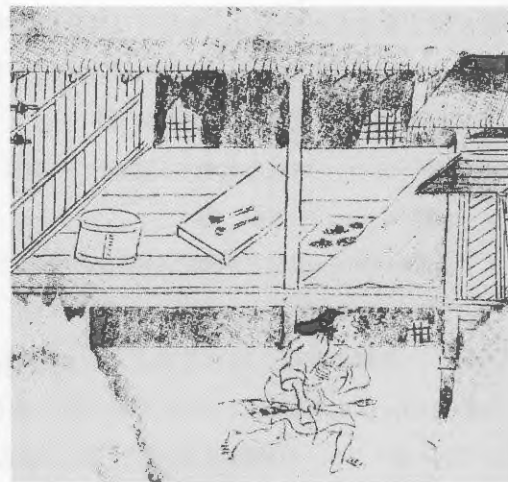


Fig.136 『粉河寺縁起』にみえる猟師の家

土であり、どのような性格の建物に用いられていたかは明らかではないが、大宰府の中世にすでに土壁を用いた町屋的な建物が存在していたことだけは確実にあろう。

なお、白木守によって検討された壁の厚さについては今回の資料では異なりを見出せず、すべて厚手のものであった。

(参考文献)

- 徳永貞紹「佐賀平野の瓦器碗にみる中世土器生産の様相」【中近世土器の基礎研究XI】1996年 日本中世土器研究会
佐藤浩司「九州北部」【古代の土師器生産と焼成遺構】1997年 窯跡研究会
黒田日出男「網代壁・板壁・土壁 町屋のイメージの変遷」【絵巻物の建築を読む】1996年 東京大学出版会
白木守「SK44出土の土壁について」【安武地区遺跡群VIII】(久留米市文化財調査報告書第87集)1994年 久留米市教育委員会

(3) 50ST320墳墓出土木棺の復原

本文と重複するが、検出段階で認識された事実を列記することから始めたい。

・50ST320は鉄釘使用の木棺墓で、長さ1.94m、幅0.60～0.62mの棺の痕跡も確認され、ごくわずかながら人骨も遺存していた。

・遺物は上位から土器・陶磁器類が出土したが、棺の崩落に伴って落下している。また棺内からは漆手箱が出土した。

・出土した遺物は次の順序で上下のレベル差がある。

棺台石→棺底板→人骨→漆手箱→供献土器群

・北小口部分で検出された釘のレベルは、漆手箱と供献土器の間に多く出土している。

これらの所見をベースとして、釘の出土状況を中心に棺の復原を行ってみることとする。

A：釘の出土状況

当該遺構からは総数106本分の鉄釘が検出されたが、平面図を検討すると大きく5つの群に分けて捉えることができる。それらは棺を横断するような形で、概ね東西方向に集中して並んで出土した。ここでは便宜上、次の5群に分けて捉えてみることにする (Fig.137)。

A群……………北側小口部分の一群

B群……………中央と北側小口部分の間に位置する一群

C群……………中央の一群

D群……………中央と南側小口部分の間に位置する一群

E群……………南側小口部分の一群

以下、各群の状況を眺めてみることに始めたい。なお釘個別の情報はTab.13、Fig.139・140・142～145、CD-1861～1877に示した。また木目の残存する資料は、木材の交差の仕方によってA・B・(B)の3種類に分けた (Fig.138)。Aは釘の頭部付近の木目が横方向であるのに対して、釘の中程から縦方向に変化するものを指し、縦方向の木目のみが発見されるものは (A)

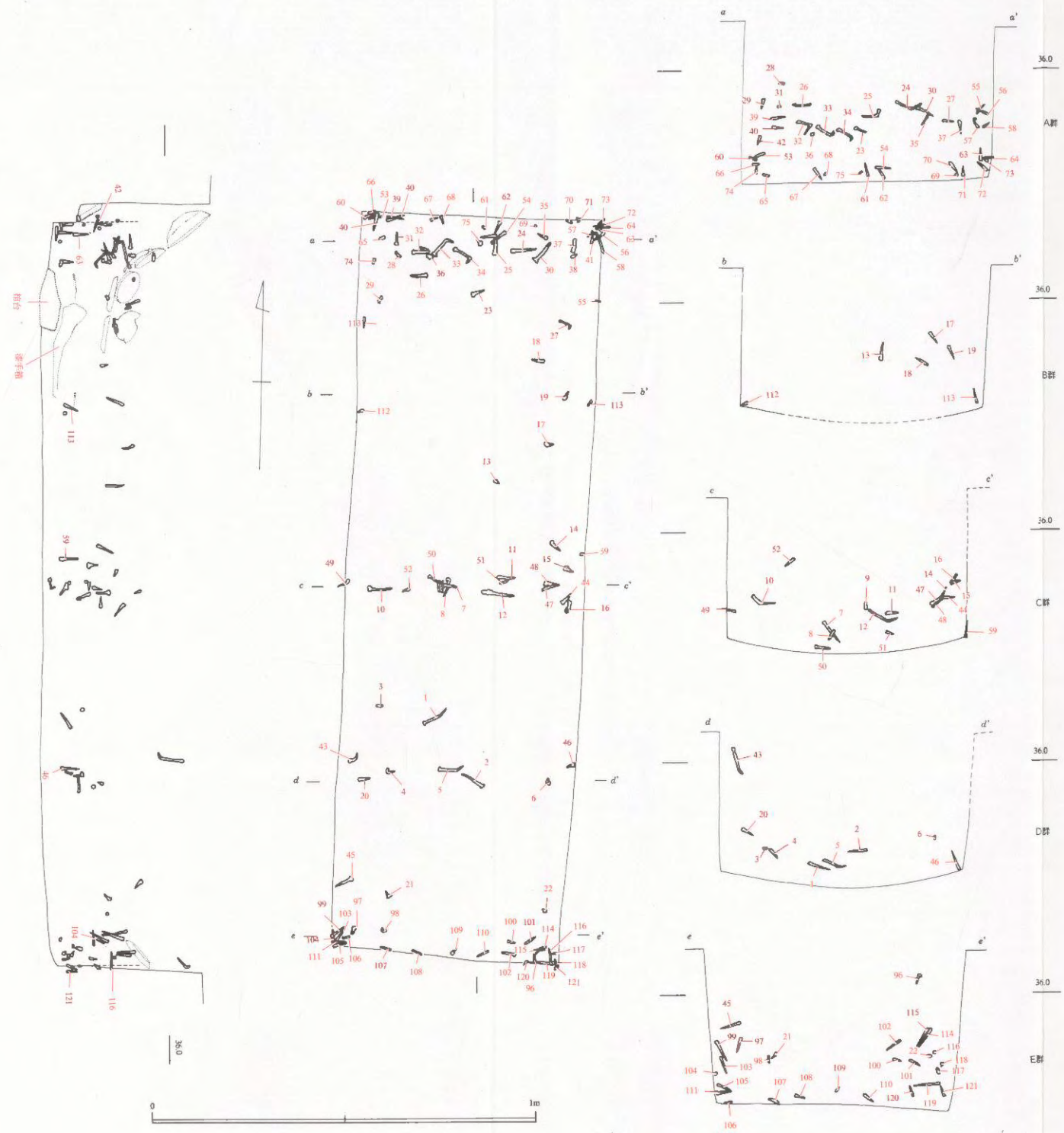


Fig.137 50ST320鉄釘出土状況図 (1/15) 番号は遺物番号に同じ。長軸見透図は見にくくなるため番号は一部のものとどめた。

として区別したが基本的には同じものである。
 Bは横方向の木目どうしが直交するものと言う。そのうちB※は途中で折れ曲がる釘に残るものを示す。このタイプの釘は、完存する場合木目の確認は容易であるが、頭部付近を欠損する資料の場合はAと判断される場合がある。したがってB※タイプの近くで出土したAタイプの釘は注意する必要がある。最後

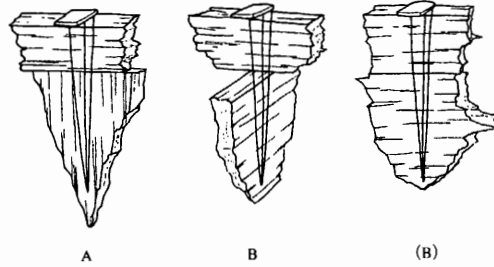


Fig.138 鉄釘と木質の関係模式図

に (B) としたものは、横方向の木目は認識できるが変化する部分が確認できないものを指す。どこかで板材の交わる部分があると思われるが現状では判断しにくいものと、残存部位が小さく判断できないものとの両方が含まれる。

なお文中ではこれらを木目交差A・木目交差Bのように記述する。

(A群)

調査段階では47地点から資料を取り上げたが、接合及び接合の可能性が強いものがあり総数は42本にのぼるとみられる。5群中最大の本数を出土する群である。このA群の釘は出土した立面的検討からさらに4つのグループに分けられる。まず、61・62・65・71・72の5本のグループは小口に沿い、且つ最も底部に位置したもので、61・62・71は先端を上に向けて出土し、72もやや傾くもののほぼ先端を上にしていた。これらの状況より棺底板から北側小口板を留めていたものと考えられる。なお74については先端を上にしてはいるが、小口よりわずかに内側（南側）に入り込んでおり、側板に用いられた可能性が強い。したがって北西隅に該当する釘は検出されなかったことになる。なお、木目交差位置は釘頭部から計測して2.1～2.8cmの範囲であり、これが底板の厚さを示すものと考えたい。

次に主として棺の西側から出土した39・40a・40b・53・60・66のグループがある。これらのうち39・40aは明らかに水平方向に出土し、且つ先端を棺内に向けていることから、西側板から北小口板を固定したものであることは明らかである。ただこの2本はかなり上位にあり、これより下位で出土し、水平方向に近い傾きで出土した40b・53・60・66を加えるに至った。しかし、上の2本（39・40a）が木目交差Aであるのに対して、下の4本のうち3本が木目交差（B）である。同じ材に打ちつけた場合、こうした木目の異なった交差は考えられないものと思われる。したがってここでは北小口板が上下2枚で構成されていた可能性も視野に含めておきたい。なお、木目交差位置は釘頭部から計測していずれも1.4cmであり、一応これが西側板の厚さを示すものと考えたい。

これに対して棺の東側から出土したグループがある。56・58・64・73・63である。このうち63は小片であったため、残る4本を検討材料とする。まず64は3本、73は2本に分かれているがおそらく同一個体と考えられる。4本とも安定した出土状況とは言えないものの、出土レベル

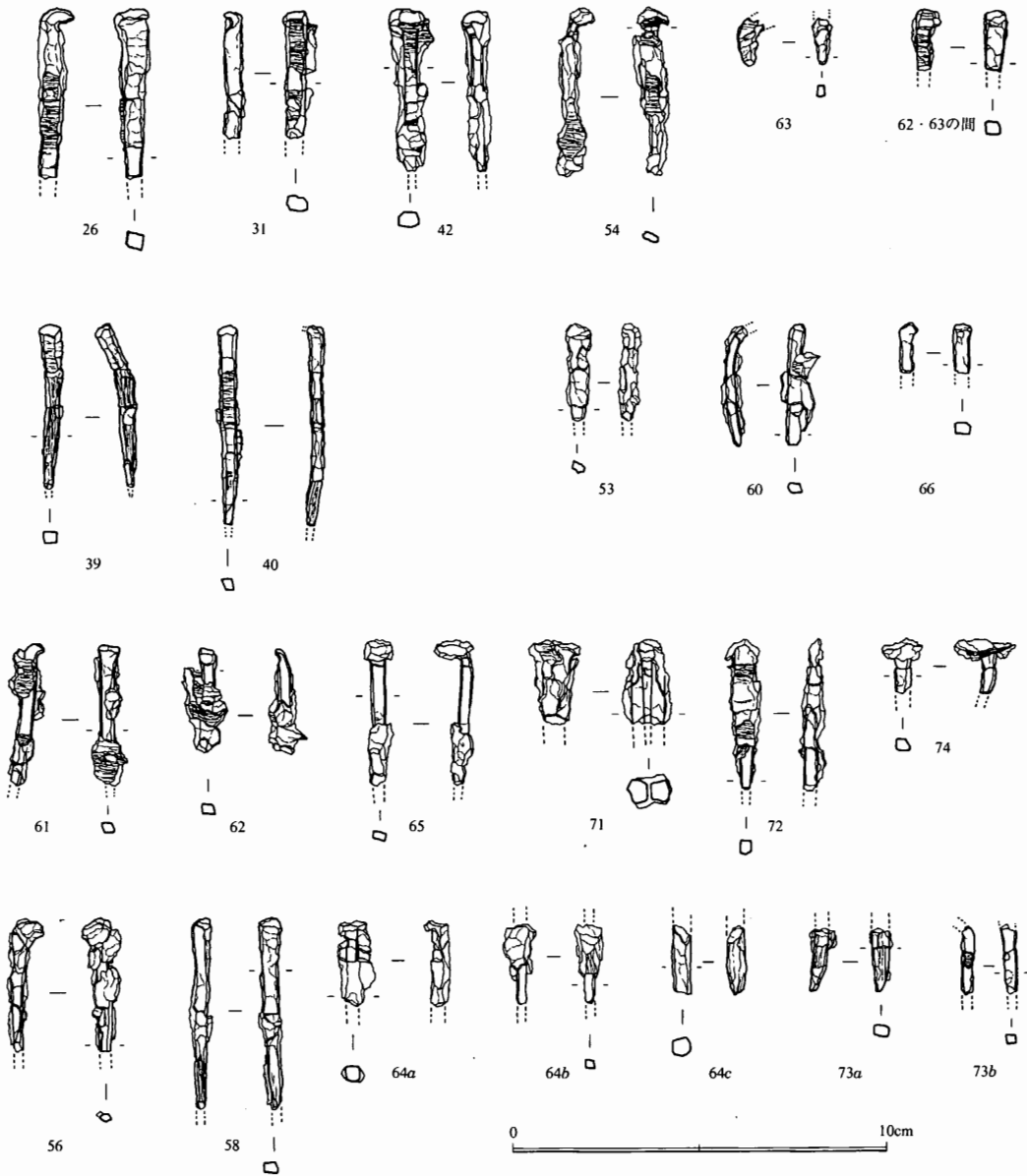


Fig.139 50ST320出土鉄釘実測図1 (1/2)

から64・73が下半部、56・58が上半部に位置していたものとみられる。これらの木目交差タイプはすべてAもしくは(A)に分類される。ここで問題となるのは、西側板から打ち込まれたものとの対比である。先に北小口板は上下2枚である可能性を想定したが、東側の状況ではそれは語れず、疑問として残るところである。ここではFig.141のような状況を仮に想定しておきたいが、下半の板材は丸太を輪切りにしないと得られない材であり、こうした板材が身近に存在していたものかどうか検討の余地は残る。なお、木目の変化位置は釘頭部から計測して2.3・2.9cmであり、これが東側板の厚さを示すものと考えたい。

残る釘の多くは、北小口付近の埋土中位レベルに散在するように出土したグループである。

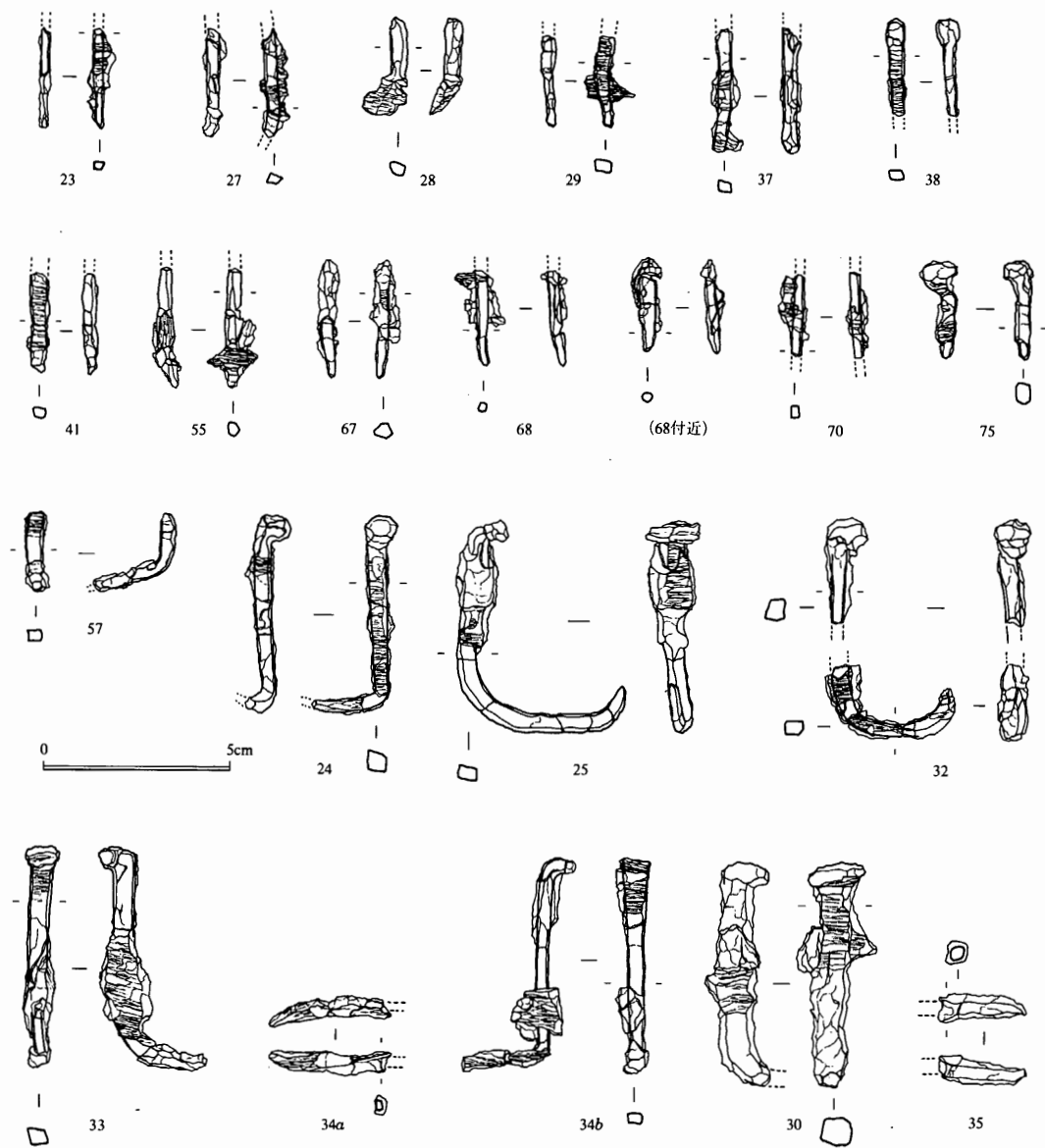


Fig.140 50ST320出土鉄釘実測図2 (1/2)

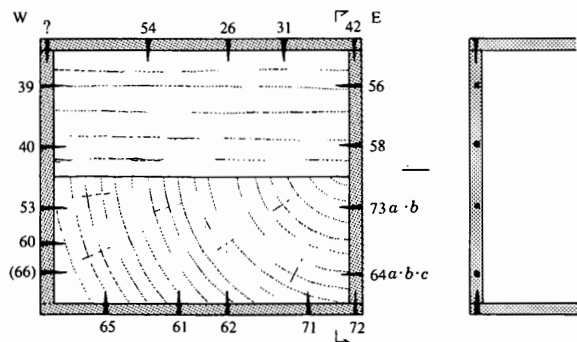


Fig.141 北小口部の構造模式図

これらはかなりの本数にのぼるが、釘の大きさや形状から大きく3種類に分けられる。一つはこれらの中で一際大きく（原形時の全長は9~10cmを測る）しかも釘中程で折り曲げられているもの（ア類）と、他の棺を固定する釘とほぼ同じような長さ4.5cm前後のもの（イ類）、それらよりさらに小さくて細

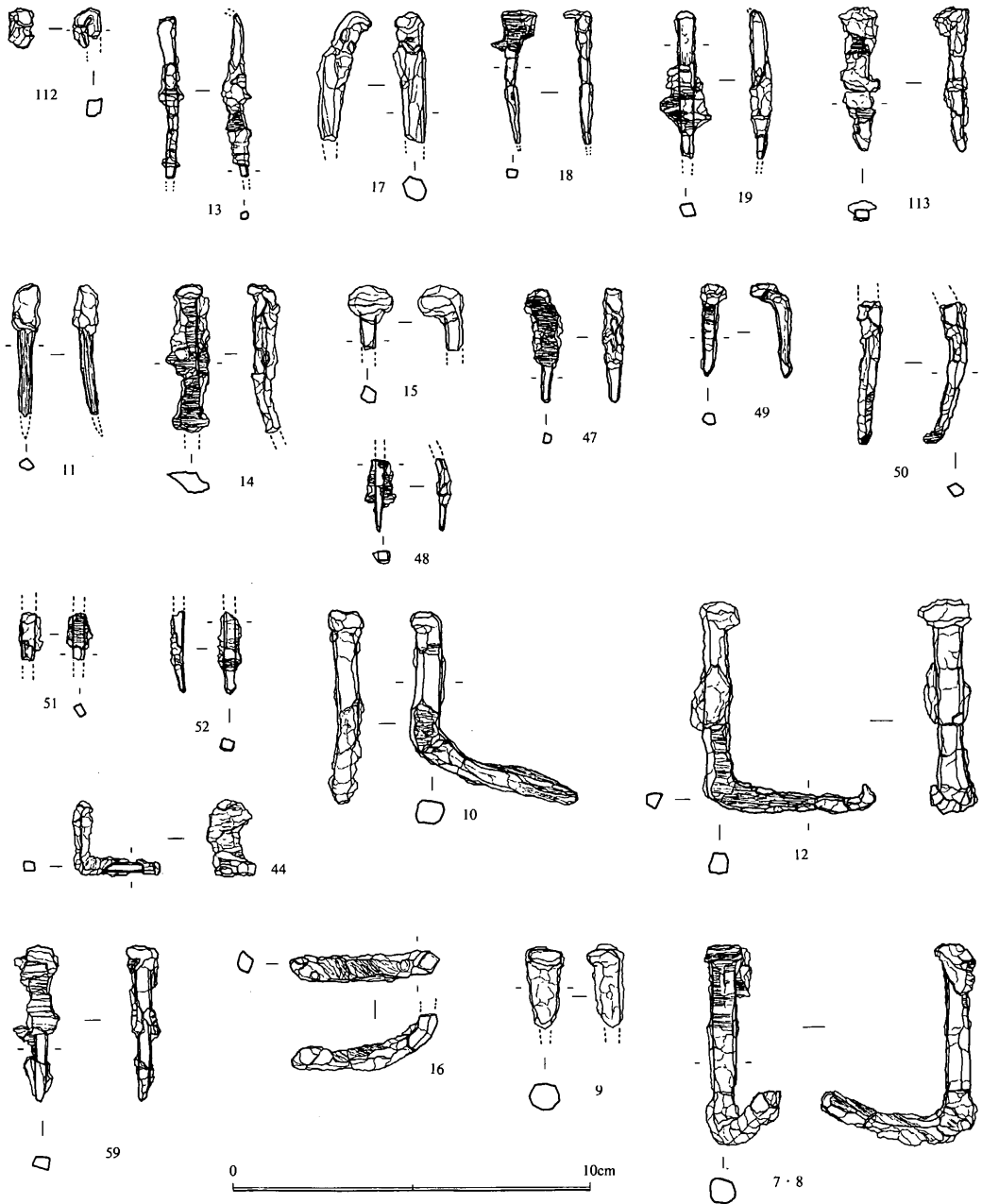


Fig.142 50ST320出土鉄釘実測図3 (1/2)

いもの（ウ類）で、ア類については一際小さなもの（57）が含まれる。ア・ウ類については後述するとして、ここではイ類について述べておく。現状でそれと思われるのは26・31・42・54の4本が該当するが、出土地点は棺の軸線より西側で出土レベルもまちまちである。先に述べたように釘の大きさは西側板から打ち込まれる39が4.4cm、東側板から打ち込まれる58が5.1cmを測ることから、このイ類も棺の固定に用いられた釘の一部と推定したい。原位置を大きく移動しているものばかりとみられることから、すべて蓋を固定する釘で、棺崩落とともに転落し

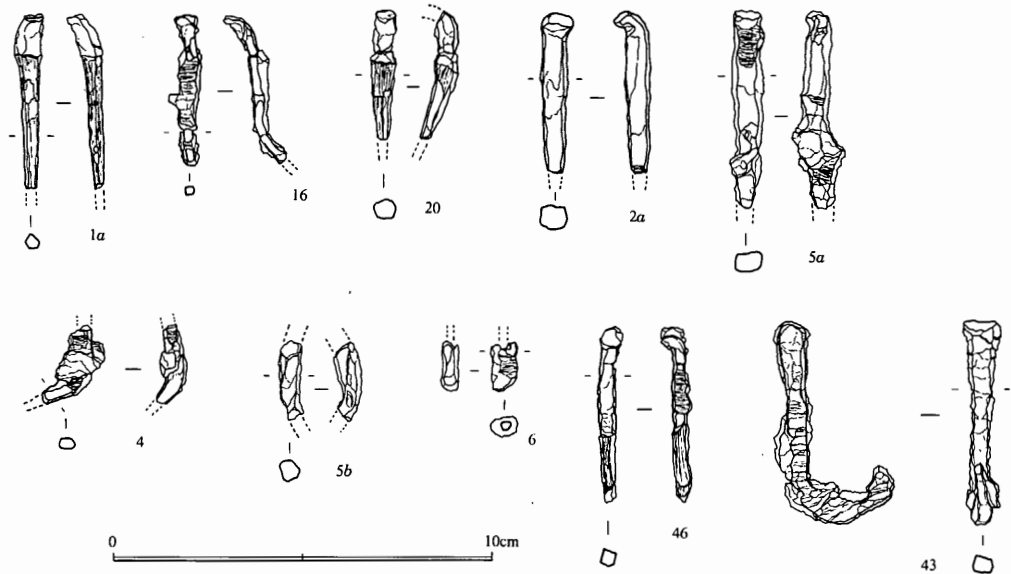


Fig.143 50ST320出土鉄釘実測図4 (1/2)

たものと思われる。また、ア・ウ類の両者についても棺の上位から転落したものと考えられるが、類似する釘の出土がC群にあり後にあらためて検討したい。

(B群)

わずか6本の出土で、しかも平面、立面ともに散在した状況である。このうち113は東側壁に沿う位置の棺底部近くにあり、しかも先端を上にして出土していることから、東側板と底板を固定した釘と思われる。他の釘については後章で検討したい。

(C群)

17地点から釘を検出したが、検討の結果総数は15本で構成されると判断した。すべて棺を横断する位置から出土しており、レベルを検討するとほぼU字状に散乱して出土していることから、その大半は棺の上位に位置していたことは確実である。さらにここでもA群で示したア・ウ類と同様に一際太く長い、しかも中程で折れ曲がるものと小さめで細いものが存在する。また中程で折れるア類には大小2種があるが、小さいものは2点のみ(44・49)の出土である。

このなかで59としたものは東側壁に沿う位置の棺底部近くにあり、しかも先端を上にして出土していることから、東側板と底板を固定した釘と思われる。

(D群)

11地点から釘を採集したが、接合したものが総数は10本である。すべて棺を横断する位置で出土していることや、U字形に落ち込んでいることを考えると、基本的には棺の上位から転落したものであることがわかる。このうちア類(43)が1点含まれているが、他のものよりかなり高い位置で出土していることから、他地点から飛び散ったものである可能性も考える必要がある。

また46としたものは東側壁に沿う位置の棺底部近くにあり、しかも先端を上にして出土して

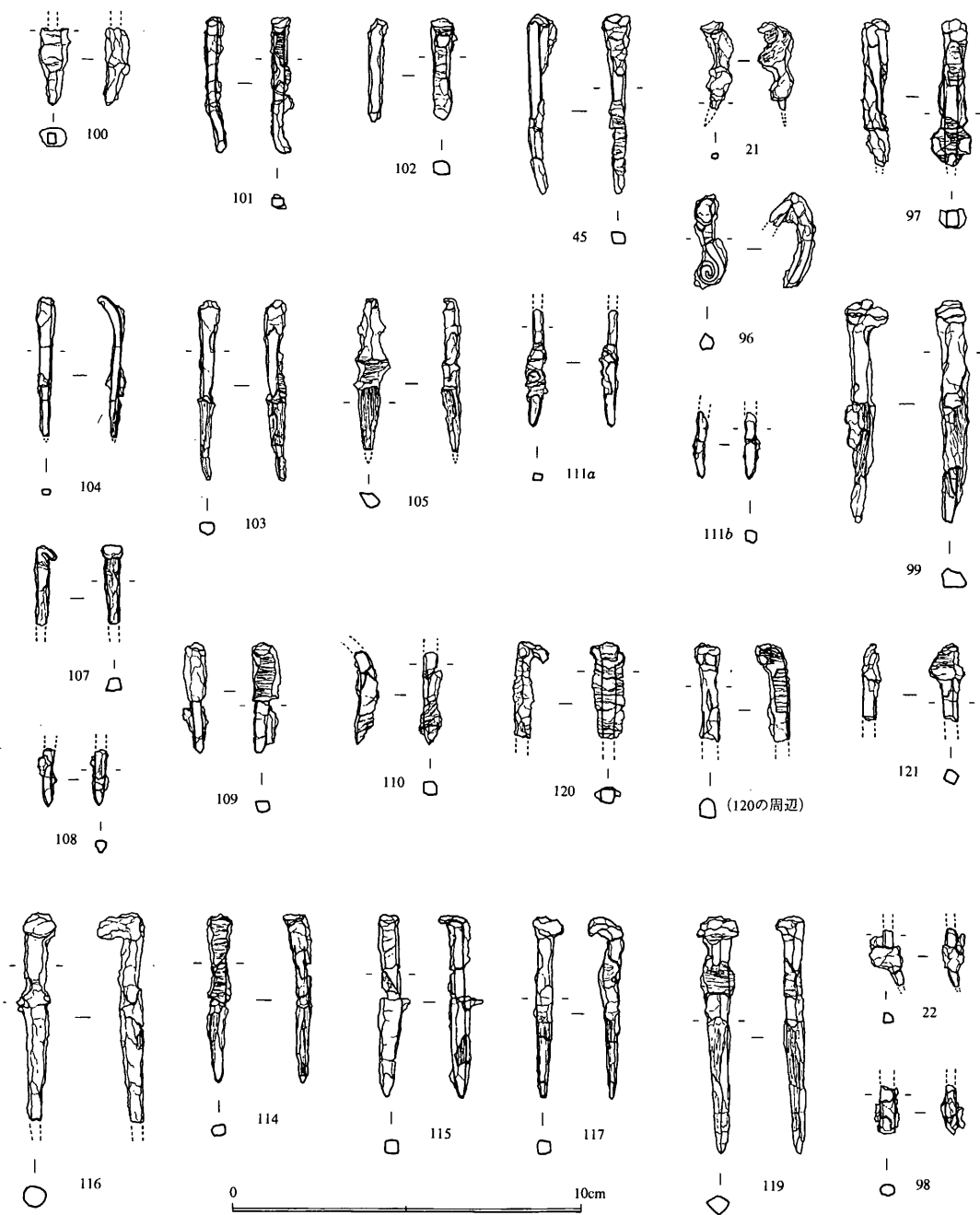


Fig.144 50ST320出土鉄釘実測図5 (1/2)

いることから、東側板と底板を固定した釘と考えられたが、他の同目的のものをみると木目交差(B)であるのに対して、46は木目交差Aとなり異なっている。長い側板の途中で大きく木目に変化することは考えにくく、偶然それを思わせる位置に転落したものと考えざるを得ず、ここでは別の用途に用いられた釘と判断しておきたい。

このことからD群で棺上位に当初から存在していた釘は9本と考えるのが妥当である。

(E群)

南小口付近に集中する一群で計28地点から検出し接合や分離の結果、総数は27本で構成されるとみられる。これらは立面的な出土状況から4つのグループに分けられる。

まず、107~110・120・120周辺・121の7本のグループは小口に沿い、且つ最も底部に位置したもので、120・121は先端をほぼ上に向けて出土した。他のものはその場で倒れたような状態を呈しており、これらの状況から棺底板から南側小口板を留めていたものと考えられる。なお120周辺としたものは121と同一個体の可能性が高い。また、109のみ木目交差が観察され、釘頭部から計測して1.7cmであり、北小口部で得たデータよりやや薄いのがこれが底板の厚さを示すものと考えたい。

次に主として棺の西側から出土した99・103~105・111a・111bのグループがある。これらのうち105・111aは明らかに水平方向に出土し、且つ先端を棺内に向けていることから、西側板から北小口板を固定したものであることは明らかである。ただこの2本は下位にあり、これより上位で出土し、水平方向に近い傾きで出土した99・103も同じ用途と考えられる。これらはいずれも木目交差Aであることも矛盾しない。これに対して104の釘は上記した4本の釘の中央に位置するだけでなく、先端を西側板側（北側）に向け、他の釘と直交する形で出土した。木目交差タイプもAであり、釘の方向を検討するとこの部分のみ小口板から西側板に向けて釘が打たれていたと考えられ、小口板の形状がこの部分だけ凸形に飛び出し、西側板は逆に凹形に彫り込まれていて、そこに噛み合うような構造を呈していたと考えたい。なお、木目交差位置は釘頭部から計測して2.5~2.9mであり、一応これが西側板の厚さを示すものと考えたい。また104のデータから小口板の厚さは3.0cmであったものと見なしたい。

これに対して棺の東側からは114~119の6地点から出土したが、接合したものもあり合計5本で構成される。このうち114・115は揃って同じ方向に向いて出土し、西側の状況と比較すると東側板から小口板に向けて打ち込まれた釘であることがわかる。また119はほぼ原位置を保つ可能性が

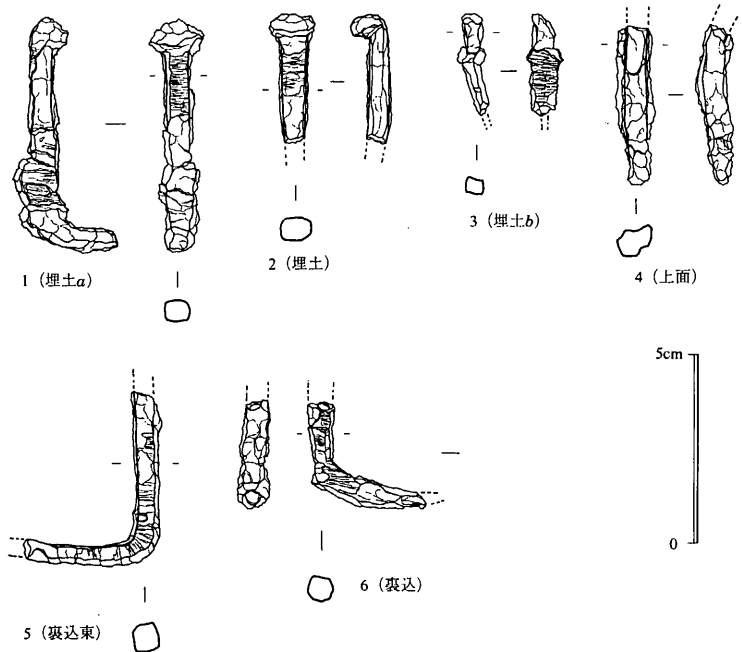


Fig.145 50ST320出土鉄釘実測図6 (1/2)

ある。117・118は折損して出土したものであり、位置的には119のすぐ上位を固定していた釘であろうと思われる。さらに116はこれらに直交する方向で出土し、しかもその高さは5本の釘の中央に位置する。いずれも木目交差Aである。これは西側で見た状況とまったく同じものであり、小口板は東西同じ構造に作られていたと言える。

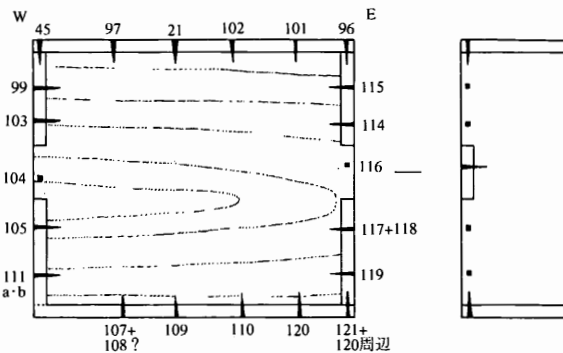


Fig.146 南小口部の構造模式図

なお、木目交差位置は釘頭部から計測して2.4～3.0cmの範囲にあり、これが東側板の厚さを示すものと考えたい。また116の示すデータから小口板の厚さは2.6cm程度であったことが知られる。

残る釘の多くは埋土上位から中位レベルにあってU字形に散在する形で出土したグループである。7本がそれに該当すると思われる、21・45・96・97・100～102である。木目交差タイプはいずれも（B）で共通するが、長さや木目の変化位置に異なりがあり同一の用途を考えるにはやや不安感も残る。しかしここでは、これらを蓋と棺を固定した釘として認識したいと考える。これらを総合すると南小口部分はFig.146のような構造がイメージされる。

B：棺の構造と附属施設

以上、各群毎に見てみたが、ここで簡単にまとめておきたい。まず床面付近で先端を上にして出土したものは、棺底板と側板を固定する目的で用いられたものと判断され、それらは検出時の木棺痕跡の内側に接するように位置し、東側に並ぶものは概ね40～50cmの間隔で打ちつけられたことが理解できる（ただしD群では特定できていない）。このことから少なくとも東側の側板は、棺の底板の上に乗せる構造であったことがわかる。ただし西側の側板には同様の痕跡はなく当初から釘が用いられなかったか、木釘を使用したものと思われるが、ほとんどが鉄釘を用いているのに対してこの部位のみが木釘を使用したとは考えにくく、仮に木釘であったとした場合にはそれを利用してL字形を呈する部材の転用を考えたほうがいいだろう。また、L字型を呈する一木材を加工した（もしくは再利用した）可能性も残しておくが、釘に残存する木目の状況からは考えにくいことを付記しておきたい。

次に両小口部分では側板側から打ちつけられたと思われる釘が確認されることや、底板から打ち込まれた釘が残存していることから、小口板は底板上に乗り、且つ側板に挟まれる形で組み立てられていたことが窺える。ただし先述したように北側では上下2段になる可能性があり、南側では小口板の中央部分を突出させ東西両側板に噛み合わせる構造を呈していたと思われる。

さらに蓋を最終的に固定したと考えられる釘は小口付近で観察されたに留まり、それ以外の

Tab.13-1 50ST320出土鉄釘観察表(1)

出土地点 (群)	釘番号	形状	木目交差 タイプ	全長 (cm)	木目交点 頭～(cm)	残存状況	推定 使用部位	備考	R-番号
A	26	通常	(B)	4.6	1.7	先欠	蓋留		035
A	31	通常	(B)	3.4	2.0	先欠	蓋留		039
A	42	通常	(B)	4.4		先欠	蓋留		049
A	54	通常	B	4.4	2.9	ほぼ完存	蓋留		056
A	39	通常	A	4.4	1.4	略完	西側板留		047
A	40a	通常	A	2.6	1.4	頭部欠	西側板留	a・bは別物と判断	050
A	40b	通常	(B)	2.7		先欠	西側板留	a・bは別物と判断	
A	53	通常	(B)	2.6		先欠	西側板留?		063
A	60	通常	(B)	3.2		両端欠	西側板留?		069
A	66	通常	-	1.4		先欠	西側板留?		078
A	61	通常	B	3.8	2.4	先欠	底板留		070
A	62	通常	B	2.8	2.1	先欠	底板留		071
A	65	通常	(B)	3.9		先欠	底板留		076
A	71	通常	-	2.3		先欠	底板留	2本が癒着	084
A	72	通常	B	4.1	2.8	先欠	底板留		085
A	74	通常	(B)	1.5		先欠	底板留		116
A	56	通常	A	3.6	2.3	先欠	東側板留		065
A	58	通常	A	5.1	2.9	略完	東側板留		067
A	64a	通常	A	2.2		先欠	東側板留	64a・b・cは同一個体	074
A	64b	通常	(A)	2.1		両端欠	東側板留	64a・b・cは同一個体	075
A	64c	通常	(A)	1.9		両端欠	東側板留	64a・b・cは同一個体	077
A	73a	通常	A	2.7		頭部欠	東側板留	同一個体か	086
A	73b	通常	-	1.9		両端欠	東側板留	同一個体か	087
A	23	通常	(B)	2.7		頭部欠	内棚		029
A	27	通常	(B)	2.9		頭部欠	内棚		037
A	28	通常	(B)	2.6		頭部欠?	内棚		043
A	29	通常	(B)	2.5		頭部欠	内棚		038
A	37	通常	(B)	3.3		頭部欠	内棚		053
A	38	通常	-	2.6		先欠	内棚		052
A	41	通常	(B)	2.7		頭部欠	内棚		048
A	55	通常	A	3.2	2.2+	頭部欠	内棚		064
A	67	通常	B	3.2	2.7+	両端欠	内棚		079
A	68	通常	(B)	2.6		頭部欠	内棚		080
A	68付近	通常	-	2.6		頭部欠	内棚		081
A	70	通常	(B)	2.3		頭部欠	内棚		083
A	75	通常	(B)	2.6		完存?	内棚		088
A	57	小L字	(B)	2.1		完?	内棚		066
A	24	L字	B※	5.2	1.6	先欠	木棚吊具		034
A	25	L字	B※	5.2	2.3	完存	木棚吊具		040
A	30	L字	B※	6.1	2.9	先欠	木棚吊具		036
A	32	L字	B※	6.3		略完	木棚吊具	接合面隙間あり	041
A	33	L字	B※	6.0	2.2	完存	木棚吊具		042
A	34a	—	(A)	3.3		頭部欠	木棚吊具?	34bの先端部	044
A	34b	L字	B※	5.8		先欠	木棚吊具		045
A	35	—	(A)	2.4		頭部欠	木棚吊具?	30の先端か	046
A	62~63	通常	-	1.6		先欠	—		072
A	63	通常	(B)	1.3		頭部欠	—		073
B	112	通常	-	1.1		先欠	供物台脚		105
B	13	通常	(B)	4.5	2.6	両端欠	供物台脚	木材ねじれ	022
B	17	通常	A	3.7		先欠	供物台脚		026
B	18	通常	(B)	3.8		先欠	供物台脚		033
B	19	通常	(B)	4.2		両端欠	供物台脚	頭部先端のみ欠	027
B	113	通常	(B)	4.0	2.3	完存	底板留		106
C	11	通常	A	3.8	1.4+	先欠	内棚		016
C	14	通常	(B)	4.2		先欠	内棚		023
C	15	通常	-	1.8		先欠	内棚		024

Tab.13-2 50ST320出土鉄釘観察表 (2)

出土地点 (群)	釘番号	形状	木目交差 タイプ	全長 (cm)	木目交点 頭～ (cm)	残存状況	推定 使用部位	備考	R-番号
C	47	通常	(B)	3.2		頭部欠	内棚		057
C	48	通常	(B)	2.1		頭部欠	内棚		058
C	50	通常	(B)	4.0		頭部欠	内棚		060
C	51	通常	(B)	1.3		両端欠	内棚		061
C	52	通常	(B)	2.3		頭部欠	内棚		062
C	44	小L字	(B)	2.1		先欠	内棚		055
C	49	小L字	(B)	2.6		完存	内棚		059
C	10	L字	B?※	5.5		完存	内棚吊具		019
C	12	L字	B※	6.0		完存	内棚吊具		032
C	7・8	L字	B※	5.6	2.6	完存	内棚吊具		015
C	16	L字	B※	4.2		頭部欠	内棚吊具		025
C	9	通常	-	2.3		先欠	内棚吊具?	16の頭部か	017
C	59	通常	(B)	4.4		完存	底板留		068
D	1a	通常	A	4.6	1.1	先欠	供物台脚		020
D	1b・2b	通常	(B)	4.0		先欠	供物台脚	先折れ	010
D	20	通常	A	3.4	1.2	両端欠	供物台脚		031
D	2a	通常	B	4.2	4.0	先欠	供物台脚		009
D	4	通常	-	2.1		両端欠	供物台脚		012
D	5a	通常	B	5.2	2.2	先欠	供物台脚		021
D	5b	通常	-	2.1		両端欠	供物台脚	ねじれ	013
D	6	通常	(B)	1.3		頭部欠	供物台脚		014
D	46	通常	A	4.7	2.6	完存	供物台脚		115
D	43	L字	B※	5.4	1.8	完存	内棚吊具		051
E	100	通常	(B)	2.2		頭部欠	蓋留		092
E	101	通常	(B)?	3.9	1.4	完存	蓋留		093
E	102	通常	-	3.0		完存?	蓋留		094
E	21	通常	(B)	2.5		先欠	蓋留	少々ねじれ	028
E	45	通常	(B)	5.2		完存	蓋留		054
E	96	通常	(B)	2.7		頭部欠	蓋留?		089
E	97	通常	(B)	4.2	3.1	先欠	蓋留		090
E	104	通常	A	4.0	3.0	先欠	西小口留		098
E	103	通常	A	5.2	2.9	完存	西側板留		095
E	105	通常	A	4.4	2.5	先欠	西側板留		097
E	111a	通常	A?	3.4	2.5+	頭部欠	西側板留?	a・bは別物と判断	103
E	111b	通常	-	1.9		頭部欠	西側板留?	a・bは別物と判断	104
E	99	通常	A	6.4	3.1	完存	西側板留		096
E	107	通常	-	2.2		先欠	底板留		099
E	108	通常	-	1.7		頭部欠	底板留		100
E	109	通常	(B)	3.1	1.7	完存?	底板留		101
E	110	通常	(B)	2.6		頭部欠	底板留		102
E	120	通常	(B)	2.7		先欠	底板留		112
E	120周辺	通常	(B)	2.8		先欠	底板留?	121と接合か	114
E	121	通常	(B)	2.2		先欠	底板留		118
E	116	通常	A	6.0	2.6	先欠	東小口留		109
E	114	通常	A	4.8	2.6	完存	東側板留		107
E	115	通常	A	5.2	2.4	完存	東側板留		110
E	117・118	通常	A	5.2	3.0	完存	東側板留		108
E	119	通常	A	6.8	3.0	完存	東側板留		113
E	22	通常	(B)	1.7		両端欠	-		030
E	98	通常	-	1.3		頭部欠	-		091
-	埋土中a	L字	B※	6.0	2.7	完存	内棚吊具		117
-	埋土中b	通常	B?	2.2	0.9	先欠	-		119
-	埋土	通常	(B)	3.4		先欠	-		002
-	上面	通常	-	4.2		頭部欠	-	やや湾曲	001
-	ウラゴメ東	L字	B※	7.4		両端欠	内棚吊具		002
-	ウラゴメ	L字	B※				内棚吊具		001

位置では確実なものは認識できなかった。埋葬行為の最終段階で、小口部分のみ儀礼的、形式的に打ちつけたのであろうか。

以上の釘はすべて箱としての棺を組み立てる上で必要な釘である。これらから得た情報と棺検出段階で得た情報を合わせると、棺の平面規模は長さ1.94m、幅0.59～0.61mに復元できる。

さて、棺に利用した釘については明らかとなったが、本遺構からはこれ以外の釘が多数出土している。それらはB・C・D群の大半とA群の一部で、すべて棺の腐食・崩壊に伴って上位から転落した状態で出土したものである。こうした釘はE群である南小口部分にはほとんどなく、より頭位に近い部分に集中していることに注意しておきたい。

そこでこれらがお互いに何らかの関係を有するのかどうかを、各群の対比によって求めてみたい。まず釘の出土数をみると、A群が42本、B群が6本、C群が15本、D群が10本、E群が27本となる。この対比によってまず明確なことは、両小口部分（A群とE群）を比較するとその釘の量に差がありすぎるということである。E群では使用箇所の明らかでない2本（22・98）を除く25本すべてが棺の構造を支える釘として捉えられる。これに対してA群では42本のうち20本が棺の構造を支えるものと認識される。この数値を比較すると、本棺の場合小口部分に用いられた釘は南北とも近似する数であることが分かり、A群では使用箇所不明の2本（62・63・63）を除いて残る40本から棺使用の20本を差し引いた数値、つまり20本が棺以外に用いられた釘と認識できる。さらにこの20本は先にも記したとおり2つのタイプに分けられる。ひとつは大型で中程から折れ曲がるA類と小さくて細目のものが目立つウ類である。各々の数はA類が6本、ウ類が14本である。

ここで注意されるのがC群である。ここにもやはりA類があり4本が出土している。残る釘のうち棺に用いられた1本を除くと上位から転落したものは10本と捉えられる。さらに、南側のD群に存在するA類（43）をここから飛び散ったものと理解すると、C群中に5本のA類があったことになる。これをA群と比較するときわめて近似した数値を示すと言え、A群上位で出土したものとC群とは密接な関係があると判断して問題なからう。

次にB群とD群を見ておくことにする。A・C群と同様の視点で検討すると、その本数はB群が6本、D群が10本となる。B群は棺に打ち込まれた1本を除外した5本、D群はA類1本を除く9本が上位から転落したものとと言える。さらに注意しなければならないのは、両者にわずかながら木目交差Aを含んでいることである。木目交差Aは基本的には小口板を固定する際に生じるような組み方が成されなければならない。これらを仮に棺蓋を固定したものとすると、棺底と側板を固定した釘と同様な木目交差タイプになるべきであろうが、それらは木目交差（B）であり該当しない。したがって木目交差Aを含むことを重視して、やや本数は異なるが両者は対になって捉えられる可能性が高く、やはり棺に直接用いられなかったものとみられる。

ではどのような使用方法が考えられるであろうか。上記したようにA-C、B-Dの関係は動かず、またこの両群間に共通性はない。したがって別々の構築物に用いられたという前提で検討

を進めることとする。まず、当該期の木棺の事例をみると蓋の裏側に棧を持つ例が博多遺跡群にある。この場合、棧は中央と両小口際にあつて3枚からなる蓋板の固定と棺に被せた時のずれ防止の両方の役割を果たしている。しかし釘は各2箇所づつしかなく、今回の例に比べるときわめて少ない。本例の場合、例えばB-Dのセットを棧とすると釘が多すぎるだけでなく、東西のずれ防止には効果があるが南北ではまったく効果は認められない。したがって棧である可能性はない。また棺内に何らかの仕切が存在した可能性も予想されるが、人骨の出土状況からそれはあり得ず、B-Dの場合、釘の出土状況から推定する限り棺の上に何らかの構築物が存在したと考えるほかないようである。

そこで想定されるのが、台状の製品の脚を固定するためのものである。これが南北の2箇所存在し脚として対になるならば問題なからう。ただし、何のための台かが問題である。

そこで思い浮かぶのが供献土器群の位置である。先にも想定したとおり、少なくとも漆手箱よりは上位に存在し、しかもその間に土が入り込む余地を想定すると、これらの土器群を乗せていた台の存在が想定できる。このような台を葬送儀礼に用いた例は知らないが、『一遍上人絵伝』では聖徳太子墓の石室入り口で読経を行い、そこには拝板という横長で低い机状のものが使われている例がある (Fig.147)。このように儀礼において礼拝する際、もしくは供物を献上する際には何らかの台の存在が浮かび上がるのであり、この墳墓の埋葬行為に際してこうした台が用いられ、それがそのまま棺といっしょに埋納されたものと推定したい。ただし『一遍上人絵伝』にみられるような脚の簡易な台の場合、今次の例のような釘の本数を必要としないばかりか、木目交差Aになるような部分は考えられない。そのイメージとしてFig.148に示すような机の脚のような構造を考えておくのが妥当であろうと思われる。このイメージにしたがって推定される台の構造はFig.149に示したような構造が推定できるのではなからうか。

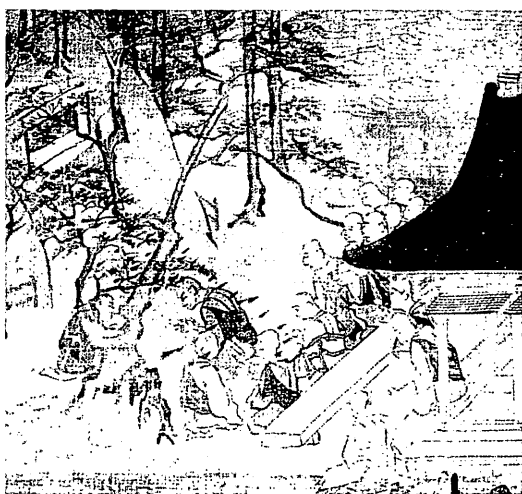


Fig.147 『一遍上人絵伝』にみえる拝板
聖徳太子廟前での念仏
(横穴式石室の入口が見える)

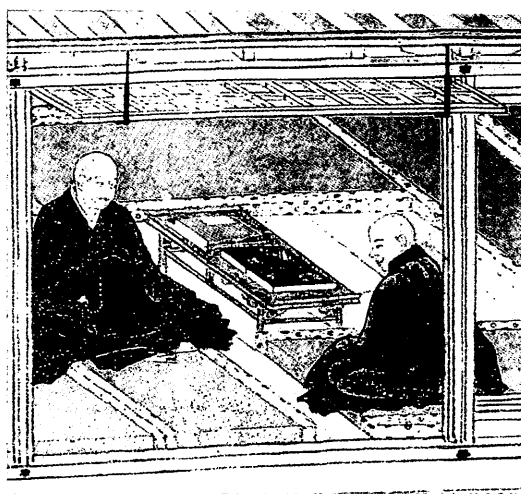


Fig.148 『法然上人絵伝』にみえる当時の机

さて残るA-Cのセットが問題となるが、検出された釘には特徴がありL字に故意に折り曲げられたものを含んでいるばかりか、小さめの釘も多数目立つところである。ここで再度遺物の出土状況を確認してみよう。

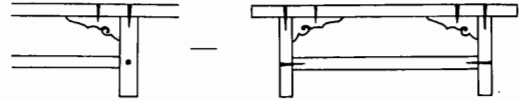


Fig.149 供物台想像図

墳墓に伴う遺物は漆手箱と供献土器群である。この両者及び他の施設との上下関係を再度整理しておく、手箱底部の発掘調査における所見では墓壙床面に近い位置から、台石→棺底板→人骨→手箱の順であることは動かない。ここで問題となるのは手箱と供献土器群の高低差である。いずれも遺体より上位であることは疑いないところであるが、例えば棺蓋上の同一レベルで土器群の南に接して手箱があったと想定すると、手箱と土器群の間には5～8cmの土砂が侵入しておりきわめて不自然な出土状況と言える。さらに手箱の崩壊状況は土器群の崩壊・転落に影響を受けたかのように南に大きく窪んでいる。このことは手箱が当初の位置から転落した後、さらに南側に大きな力が加わったものと見て取れる。この点で手箱と土器群の高低差は当初から存在していたものと考えられる。さらに供献土器は供物台と想定した台の上にある。

棺蓋上面と供物台下面との間にどれほどの空間があったかは分からないが、そこに漆手箱を納めるとすると、少なくとも15～20cm程度は必要であったと思われる。かなり高さのある台を想定しないと手箱は納められないし、あまりに高い台を想定すると台自体の安定性が失われるだけでなく、当初の墓壙の深さは著しく深いものを想定する必要が生じよう。

さてこの問題の解決にA-C群の釘は何を物語るのであろうか。棺蓋上に何らかの構築物を想定した場合、A-CをセットとするとB群にあたる上位の供物台北側の脚が邪魔になる。台上にはこれ以上の構築物は考えられないし、それを想定すると出土状況と矛盾する結果になる。残された可能性は棺蓋の裏側に何らかの構築物が存在したことである。

まず折れ曲がった釘（A類）と小さな釘（ウ類）の観察を行う必要がある。A類はすべて木目交差B※である。これはもし直線のままであった場合Bタイプと認識し得るものである。木目の変化点は釘の頭部から測ってA群では1.6～2.9cm、C群のものは2.6cm、折れ曲がるポイントはそれより3～4cmほど先である。ここから分かることは、頭部近くにある材の厚さが南北両小口で確認した棺蓋材の厚さに近似することであり、このことからA類の頭部近くに残る材は棺蓋材と認識できるのである。これに対して先端部近くに残存するものは、材自体の厚さが4cm程度あり、しかも折れ曲がった部分から先端部までの木目交差タイプはAと認識されることから、角材をイメージするのが妥当であると考えられる。これに釘の出土位置を考慮すると棺を横断するように、しかも直列するような形で折れ曲がった釘が打たれていたことが理解できる。したがって、Fig.150に示すような方法で角材を打ちつけたことが分かる。

なお、これを示唆するものとして、手箱の南側約0.1mの位置で棺底板の上に横方向に走る木

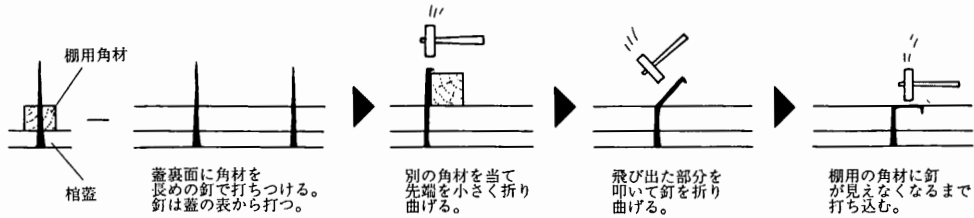


Fig.150 棚取付工程想像図

目を有する材の断片を検出している。

さて、ここでその目的が問われるところである。A類の釘がE群にも存在するなら再び棧の可能性が浮かび上がるが、先述のとおりその可能性は薄い。しかもウ類の釘の存在を考慮する必要があるとすると、この角材に別の板材が打ちつけられていたと考えるのが普通であろう。

小さめの釘（ウ類）はA群で14本、C群で10本とあまり変化はないので一応対応になるものと見ておく。そこで考えなければならないのが、先述した遺物の出土状態である。未だ解決していないのは漆手箱の埋納位置である。手箱は土器よりもかなり下位にあり、遺体よりも上である。また想定した供物台がさほど高脚のものをイメージできないとすると、手箱は棺蓋上に乗せられていなかった可能性が高い。このように考えると手箱は、蓋よりも下位、遺体より上位の位置にあったことになる。

こうした状況を総合し、ここでは蓋裏面にFig.151のような棚が存在したものと理解すると、先の出土状況からこの棚上に漆手箱が乗せられていたものと解釈でき、この部分に他より太く長い釘を、しかも折り曲げて使用していたことの理由が明確になる。また、供献土器と手箱の間にある程度の空間があったことも説明することが可能となる。さらに、これをもって手箱は棺内副葬品としての位置を確保することができ、土器類は棺外供献品として理解することができる。

また、小型の釘はこの板材を箱形に組み立てる際に用いられたものと理解でき、A類の釘で打ちつけられた角材にも固定されていたものと考えられる。

なおこれに用いられた釘の大半は頭部を失っている。当初から頭部を除去しておく目的がはっきりしないため、木箱崩落時に切断されたものと考えておきたい。

ところで、蓋に棧はないものとの前提で論を進めてきたが、A群とE群の差をみると棺使用材に7本程度の差が生じる（E群が多い）。このことについて触れないできたが、この余分について推定すると、北小口及び中央付近は

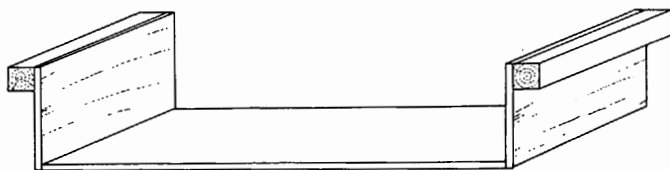


Fig.151 棚想像図

先述した棚及びその固定用の材が棧の役目も果たすと考えられ、南小口に棧を取り付ければ、博多遺跡群の例にあるような棧の役割は十分に果たし得るものと考えられる。したがっ

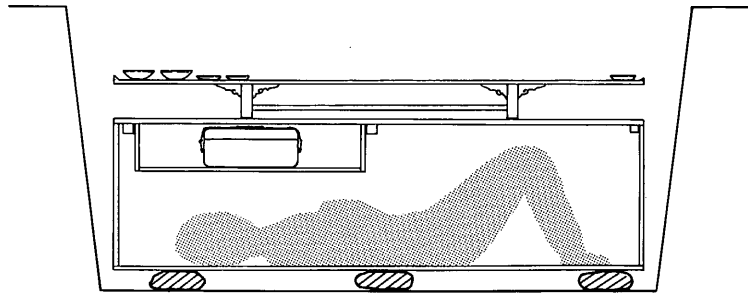


Fig.152 埋葬状態想像模式図

てE群の余剰となるくぎは、南小口部分に取り付けられた棧に伴うものと推定しておきたい。

以上を総合して復原される棺及び埋葬段階の状態は、Fig.152に示すような状況であったと想定されるが、棺内には遺体があり、さらに木箱がその上位にあるとすると棺の高さはかなり高いものを想定しなければならない。いま仮に頭部が西面した状態を想定しても遺体の高さは25～30cmは必要である。さらにその上に漆手箱の入った棚を装着すると、内棚の高さを20cmとしても、棺自体の高さは50cm以上必要であったことになる。しかし遺体自体は仰臥屈葬であることから、膝を立てていた場合に高さ40cm程度は必要となり頭部から腹部までには当初から空間が存在していたわけである。その空間を利用して棚を取り付けることに不思議はなく、逆に棚自体が頭部側に寄せて作られていることは、遺体が膝を立てて納棺されることを前提とした当然の位置であったものと思われる。したがって棺自体の高さは50cm以上あったものと理解したい。

そして、その上に供献品を並べた供物台（仮に高さ15cmくらいとする）を乗せた場合、埋葬当時の生活面は現在の遺構面より少なくとも30cmは上位に存在しなければならない。このことを物語るように近接する古い掘立柱建物の柱掘り方は一様に浅く、周辺が大きく削平されていることは確実であり、中世段階にはそれに近い高さまで生活面を求めても差し支えなさそうであり、当初の墓壇の深さは1m近くあったものと想定したい。

(参考文献)

大庭康時「中世葬送の一例－博多遺跡群第26次調査出土の木棺墓－」『法合達』第1号 1992年 博多遺跡研究会

(4) 50ST320の年代と漆手箱の歴史的意義

出土品としてとくに稀少な漆手箱の年代を考証するために、墓の時代位置付けは重要となる。ことに土器分析をこの点で慎重にすべきと考えた。

まず埋葬時に帰属する棺上供献及び手箱内の土器のうち、土師器小皿aは切り離し手法がすべて糸切りであること、その法量平均から見て大宰府XV～XVI期（12世紀後半～13世紀初頭前後）の範囲に該当する^(註1)。

龍泉窯系青磁2点と同安窯系青磁1点は大宰府XIV期（12世紀中頃）から出土を開始し、XV期（12世紀後半）に増加する磁器編年D期の標識陶磁であり、上の土師器小皿aとの共伴関係は合致する。青白磁水注の例は少なく確定し難い点もあるが、同種の類に属する無耳の小形壺類はXIV期からXV期にかけて増加する傾向がある。

次に墓の埋土中に上記の遺物に対して新期様相を示すものはない。土師器小皿aの1点（Fig.84-16）はわずかに口径は大きい、棺上の1～9と同型式である。坏a（Fig.84-17）は底部のみで型式を決し難い点もあるが、底径の法量からみてXVI期以後のものではない^(註1)。この坏aは1点ながら全体の土器型式を1つに絞り込むための有用な資料である。XV・XVI期を分ける場合、小皿aでは2型式とも同一平均値であり区別は困難であるが、坏aは明らかに一段小形化し、通常ではこの期の区別は坏aをみるのが適切である。つまりここでは具体的にXVI期（13世紀初頭前後）以降ではないという点を押さえられる重要資料である。

高麗無釉陶器については11世紀後半～12世紀前半に北部九州で増加し（特に博多・大宰府に多い）、少なくとも12世紀後半で出土停止する。これは初期高麗青磁の出土年代に全く呼応した傾向である^(註2)。

ところで、D期の標識陶磁は消費地の使用状態により13世紀前半にも一定継続する傾向はあり、その下限年代にはやや柔軟性を含めなければならない。しかし本例では次のXVI期（13世紀初頭前後）から出土開始するE期標識陶磁は全くなく、これ以前のD期の時期に限定できる。

生産後速やかに使用過程を終える土師器は年代を絞る一等資料であり、特に埋土中破片資料でありながら、17の坏によりXV期に限定が可能となった。さらに陶磁器編年においてXV期に合致する点は上述したとおりである。これら全体の土器・陶磁器年代観の総合観点において、墓の年代はXV期（12世紀後半）とする点に到達し得る。

他の年代推定資料として、吊金具の銅銭は北宋銭であり、古いが問題はない。

美術工芸の観点から見た意見として、吊金具の座の形状・意匠は藤原期に属する例がある。たとえば広島県厳島神社所蔵・伝平重盛鎧の後部に付く揚巻の鑲、大山祇神社所蔵・沢瀉威鎧に付く鑲などの例で、後者は10世紀という意見もあるが、11～12世紀とするのが妥当とされる^(註3)。大宰府の手箱の鑲は一見古式に属すようであるが猪目型式はやや新しく、上がっても12世紀中頃とする中野政樹氏の直接的評価もある。また中里壽克氏は、箱の形状は直線的で角形に近い点もあり、平泉中尊寺所蔵の経箱例（平安後半）にも通じるという意見である。以上の点は発掘成果から得られた年代観を肯定する。出土品による12世紀後半の漆手箱の例はおそらく本邦で初の例であろう。

手箱内容品は伝世品の例では13世紀のセットが知られ、内容品として通常は毛抜き、櫛などが加わる。今回の手箱の中にはこれらは認められていないが、櫛など木質のものは腐朽した可能性も残る。ただ伝世品例の多くは日常品ではなく奉納品という特別な性格を持ち、内容品の荘重が一定している事を考慮すると、これらが仮に散逸したとしても同種の品が補填される確

立は高い。これに対して今回は一個人の墓に埋められた実用品であるという点で、化粧用具の一定内容を逸脱しないまでも、奉納品のように完全な内容品構成を求める事は難しいかもしれない。この事はたとえば化粧用具に加えられる毛抜き、刀子なども欠如しており、箱内の青磁皿は専用の小形化粧容器ではなく、やや大きめの食膳具の代用品である事などからも指摘できるであろう。

今回の手箱例は美術工芸史においても次の点で有意義な資料である。すなわち (1) 12世紀後半には確かに手箱と呼べる調度具が存在した点で、手箱の源流に遡る問題。(2) 奉納品のように蒔絵などを施した高級手箱とは別に、加飾のない黒漆塗りの実用手箱が存在した点において、調度具発展史と社会・文化の問題。(3) 12世紀における漆工芸の技術的解明。とくに下地の材料、手法の追求と漆塗り技法の解明。(4) 金属工芸史におけるデザインの時代考証、渡金技術、部品の製作技術および材料分析。細かな点を一例にあげると、伝世する手箱の覆輪の多くは後補であるらしく、これらの原形追求に有用である事。などである。

金具は従来の手箱伝世品例と比べると、手箱法量に対して径の大き目の感があり、伝世品のパターンを固定観念で評価すると、本例は不均衡で違和感を与える。しかしながら外見は蒔絵もなくシンプルなだけに、漆の黒と吊金具の金色とが絶妙・強烈なコントラストを印象づけたであろう。

なお残した作業も多く、発掘担当者として美術工芸に暗い点もあるので、問題点解明には遺漏も多いかと思うが、この点については今後の課題としたい。

(註)

- (1) 山本信夫「統計上の土器―歴史時代土器編年研究に寄せて―」【乙益重隆先生古稀記念論文集】1991
- (2) 山本信夫「日本における初期高麗青磁について―大宰府出土例を中心として―」【貿易陶磁研究No5】1985
- (3) 中野政樹(東京芸術大学教授)、原田一敏(東京国立博物館)、久保智康(京都国立博物館)、中里蒔克、加藤寛(東京国立文化財研究所)の各氏からは有益なご教示を得た。

山本信夫「手箱を持った死の旅路―観世音寺戒壇院南側の平安時代墳墓の調査から」【都府楼 創刊号】1986に発掘状況を報告した。

(5) おわりに

今回報告した第50次調査の成果と課題を列記し終わりたい。

まず奈良時代では、観世音寺前面と御笠川の間には南北方向の規制を受けた建物群が検出され、大宰府政庁前面域の官衙群と併せて今後その性格を検討して行く必要があることと、50SX500の存在を含めて、御笠川以北における土地利用の状況を再検討する必要があるだろう。特に50SX500からは金属生産に関わる遺物の出土がみられ、大宰府及び観世音寺造営期の様相を窺う上で貴重な資料を提供したものと考えられる。

つづく平安時代の前半から中頃にかけての空白期間も重要で、観世音寺南門前面のかなり広

い範囲で空閑地が存在した事実を認める必要があろう。

平安時代後半から鎌倉時代いっぱい、かなり活発な生活の痕跡を認識することができた。小規模な建物や土坑、ピットの類はほとんどがこの時期に該当する。特に土壁を用いた建物の存在や、棒状土製品の出土、さらには漆に関係する資料の出土に注目する必要がある。なかでも棒状土製品の年代は絞られており、この時期に何らかの生産活動があったことを窺わせるものである。また大109・111次の成果をみると、観世音寺の南側から東側にかけては鑄造関係遺物の出土が目立つようになり、観世音寺の周辺で鎌倉時代を中心とした時期に手工業者の活動が活発になっていたことを窺わせるものと言えよう。

さらに漆手箱を副葬した木棺墓の存在はきわめて重要である。手箱自体の価値観は言うまでもなく、その手箱内の具体的様相を知り得たことは伝世品では解明できない多くの情報を我々の前に提供してくれたと言え、考古学だけの研究におさまらず、今後は美術・工芸の分野を含めてさらなる検討が加えられることに期待したい。また墳墓の被葬者像の解明にも大きく寄与する可能性は高く、大宰府の周辺で多数確認される類似の墳墓形態の性格をも示唆するものとなろう。ただ手箱の保存処理とその具体的な報告までにはいましばらくの時間が必要であり、その折りに再検討を加えなければならない課題も数多い。

こうした活動も15世紀に入る頃には50SE380の築造をもって終息しており、顕著な遺構は皆無に近い状態となる。以後現代に至るまでこの地には生活の痕跡を残すような活動はなくなるのである。

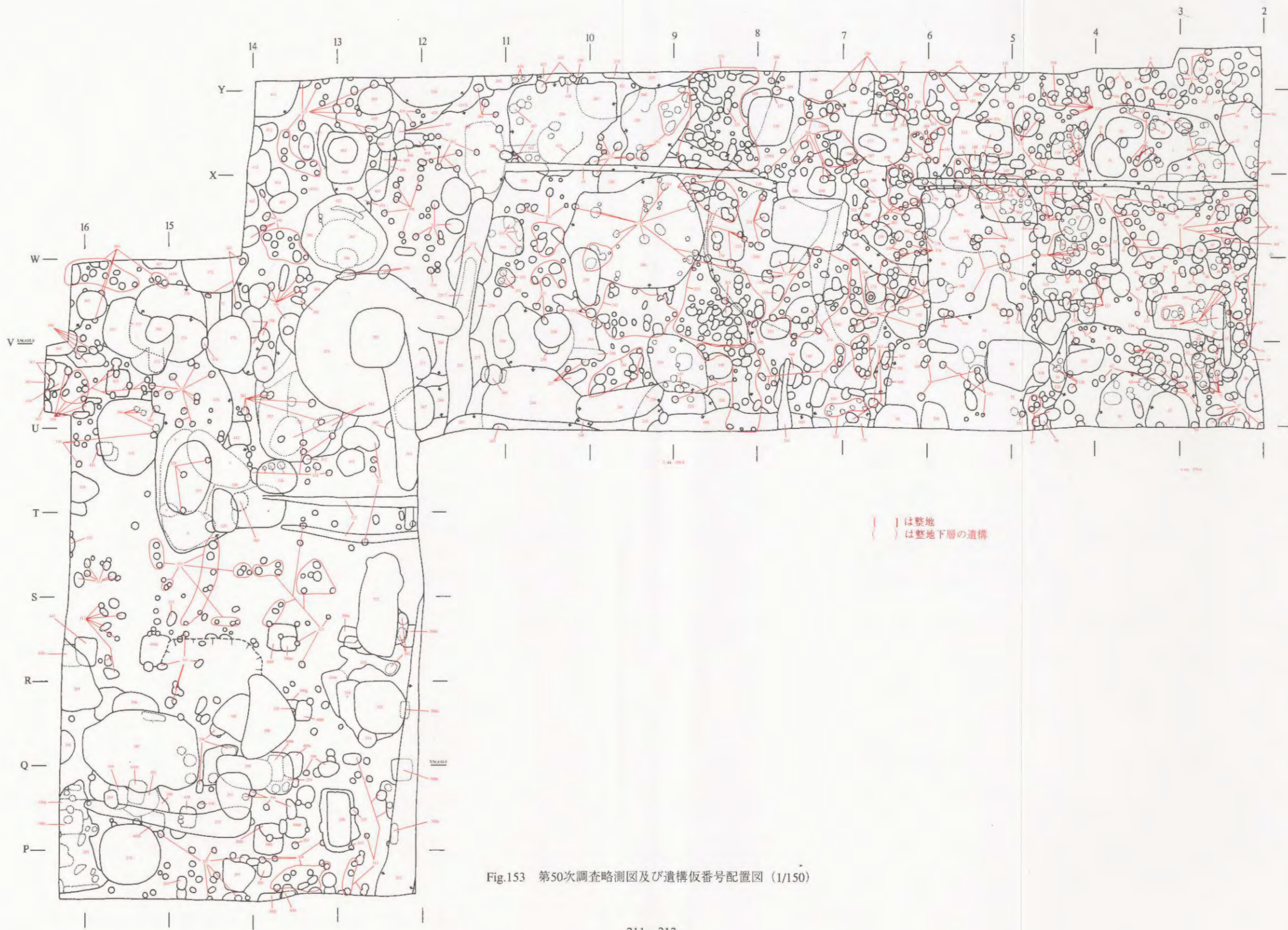


Fig.153 第50次調査略測図及び遺構仮番号配置図 (1/150)

Tab.14-1 第50次調査検出遺構一覧表 (1)

S-番号	遺構番号	種 別			地区
1	50SK001	浅い土坑	黒色土埋土、獣骨片	XVII	X3
2		ビット群			Y3
3		ビット			Y3
4		ビット			Y3
5	50SX005	ビット			X3
6		ビット			X3
7		ビット			X3
8		ビット群			X3
9	50SX009	ビット	1→9		X3
10	柱列D-b・c	柱列	礎板あり 10a→D-b、b→D-c、c→D-d		X2.3
11		ビット群			Y2
12	50SX012	ビット	12→11		Y2
13		ビット			Y2
14		ビット群			Y2
15	50SK015	土坑		XVIII以降	X2
16		ビット群	16←15		X2
17		ビット	17→13・15		X2
18		土坑	1→18		W3.X2
19	50SD019	溝	18→19		W2.3
20	50SX020	窪み	黒灰色土埋土	XVII	U3
21		窪み	淡黒灰色土埋土 1→21		X3
22		窪み	淡黒灰色土埋土 1→22		X3
23		窪み	淡黒灰色土埋土 1→23→21		X3
24	50SX024	ビット群	淡黒灰色土埋土 1→24		X3
25	50SX025	小溝		XVII	W3
26		ビット	淡黒灰色土埋土 18→26		X2
27		ビット	礎板状のものあり 1→27→18、27→15		X2
28		ビット	15←28		X2
29		ビット			X4
30	50SK030	土坑	黒色土埋土	XVII	V2
31	柱列E-e	ビット群		XVIII～XIX	W3
32		溝?		平安?	W2.3
33		ビット群	両者とも礎板状の石あり		W3
34		ビット			W3
35		窪み			U2
36		ビット群			W2
37		ビット			W2
38		ビット群			W2
39	建物C-d	ビット	三者とも礎板状の石材を有する	XVI～XVII	W2
40		土坑			U2
41		ビット			W2
42	50SX042	ビット			V3
43	50SX043	ビット	柱根あり		V3
44		ビット	石あり		V3
45	50SK045	土坑	20←59←50→45	E期	U3
46		ビット群			V3
47		ビット群			V2
48		ビット			V2
49		ビット			V2
50	50SK050	土坑	20←59←50→45	D期	U3
51		土坑?			V2
52		溝		新	V2
53		ビット群			V2
54	50SX054	ビット	54→53		U2

Tab.14-2 第50次調査検出遺構一覧表(2)

S-番号	遺構番号	種 別			地区	
55	50SK055	土坑	黒色土埋土	1←(55a←55b)上・下層の関係	D期	W2.3
56		窪み		35→56→40		U2
57		ピット群				U2
58	50SX058	土坑状			XVII	U2
59		ピット				U3
60	50SK060	土坑?	茶褐色土埋土	土壁を廃棄。60←127	XVI	W5他
61		ピット群		20←61		U3
62		ピット群	石あり			U3
63	50SX063	ピット	柱根あり			U3
64		ピット				U3
65	50SX065	ピット				X3
66		ピット		15←66		X2
67		ピット群		20→50←67→20		U3
68		ピット		50←67←68		U3
69	建物C-a	ピット	石あり	20←69	XVI～XVII	U3
70		ピット		124←70→75		U4
71		ピット		55b←71		W2
72		ピット群				U2
73		ピット				U2
74		ピット				U2
75	50SK075	土坑	黒灰色土埋土	75←60	XVII	U5他
76		ピット		30←76		U2
77		ピット		30←77		U2
78		ピット		77→78		U2
79	建物C-b	ピット		82←79	XVI～XVII	U2
80	50SE080	井戸			XIV～XV	U4.5
81		ピット				U2
82		土坑		82←81		U2
83		ピット群				V4
84		ピット	石あり			V4
85	建物A-a・b	建物	85cは遺物なし。85dは86に同じ		XVII前後	5ライン
86	建物A-c・d	ピット群	内2つに石あり		XVII前後	V5・W4.5
87	50SK087	土坑				W4
88	50SK088	土坑		88→87	F期	W4
89		ピット		うち1つは89→88		W4
90	建物B	建物	1×2間	a～e	XVII～XVIII	5ライン
91		ピット				V4
92		ピット群				W4
93		ピット群	石あり			X2.3
94		ピット群				X2.3
95	50SK095	土坑		95←75	XIX～XXか	U6
96	50SX096	ピット	柱根あり			X2
97		ピット群				U4
98		ピット	石あり			U4
99		ピット群				W4
100	50SX500最上層	整地状遺構	100直上=最上層、黄茶色土層は上層。		～8c前	X6他
101		ピット				W4
102	柱列E-d	ピット	石あり		XVIII～XIX	W4
103		ピット				W4
104		ピット群		87←88←104		W4
105	50SK105	土坑		105→75	F期	U5
106	50SX106	ピット	柱?あり			W4
107		ピット群		77←107		U2
108		ピット群		30←108		V2

Tab.14-3 第50次調査検出遺構一覧表 (3)

S-番号	遺構番号	種 別			地区
109	建物C-c	ビット	礎板に石、瓦、土器を使用	XVI~XVII	V2
110	50SD110	溝	110→162	A期?	V6他
111		ビット	30←111→43		V3
112		ビット	111←112		V3
113		ビット群			V3
114	50SX114	土坑状			V4
115	50SK115	土坑		F期	X5
116		ビット	20←116		V3
117		ビット群	117→118→20		V4
118		浅い土坑			V4
119		ビット	118→119		V4
120	50SE120	井戸	方形縦板枠 120→177・178	XIII	X6
121	柱列E-b	ビット	石あり	XVIII~XIX	V4
122	50SX122	ビット群			V4
123	50SK123	土坑	20←123		U4
124		窪み	20←124		U4
125	50SK125	土坑		XIX~	W7
126		ビット群	20←126		U4
127	(50SK060)	土坑	60←127となるが埋土の違い		W5
128	50SX128	ビット	128→19・60		W5
129	50SX129	窪み			X4
130	50SK130	土坑	bは一段下った部分 土壁の多量廃棄	F期	X6.7・Y6.7
131		ビット群			X4
132	50SX132	ビット群	相当数のビット群		X4
133		ビット			X4
134	50SX134	ビット		D期	W4
135		ビット			V7
136		ビット			X4
137		浅い窪み			X5
138		ビット群			X5
139		ビット			X5
140	50SE140	井戸	145→140→206・207	XV	X6
141	50SX141	ビット	139←141		Y5
142	50SX142	ビット群			Y5
143	50SX143	ビット群			W5
144		ビット	土壁		W4
145	50SE140	井戸裏込め	(S-140井戸) 120←145←(110)		X7
146		ビット群			W4.5
147		ビット	土壁 90c←147		V5
148		ビット			V5
149		ビット	149→90 b		V5
150	50SE150	井戸	方形枠で底に曲物あり。内部から獣骨片	XII-B	X7
151		ビット			V4
152	50SX152	ビット	石あり		U4
153		ビット群			U5
154	50SX154	ビット群			W6
155		ビット			U7
156	50SX156	ビット群			W6
157		ビット	石あり		X6
158	建物A-f	ビット群	石あり		W6
159		ビット			W6
160	50SK160	土坑	土壁多し	XX期?	U7
161		ビット			W6
162	建物A-e	ビット群			V6

Tab.14-4 第50次調査検出遺構一覧表 (4)

S-番号	遺構番号	種 別			地区
163		ビット群			U6
164		ビット群			U5.6
165		土坑		160→165→212	
166		ビット	石あり		U6
167		ビット			U6
168		ビット			U6
169		ビット		169→164	U6
170	50SX170	ビット		215→170	W8
171		ビット群			V6
172		窪み		172→162・171	V6
173		窪み		173→162の一部	V6
174		ビット		174→162・173	V6
175	50SX175	ビット	鬼瓦	175→165→163	U6
176		ビット		60←156→176	V6
177		窪み			X6
178		ビット			X6
179		ビット		154←179	W6
180	50SK180	土坑			XVII期 W8
181		ビット群			X5.6
182		ビット群			X6
183		ビット			X6
184		ビット	石あり		X6
185		ビット		185→150	X7
186	50SX186	井戸状遺構	木質残存	186→132	奈良? X4
187	50SX187	ビット		187→137	平安? X5
188		ビット		189→115・137	X5
189		ビット		188→137	X5
190	50SX190	ビット	柱穴?		8C? U8
191		ビット群			X6
192		ビット		192→193	X6
193		ビット		193→120・194	X6
194		ビット			X6
195	50SX195	ビット			V8
196	50SX196	ビット群		197→196	X・Y6
197		ビット			Y6
198		ビット	石あり		W6
199		ビット			古い? V6
200	50SX500	整地状遺構	黄茶色土埋土。100=200=黄茶色土層		8c
201		ビット		201→167	U6
202	50SX202	ビット		100→202→156	8c? W6
203		ビット		203→156・159	8c? W6
204	50SX204	ビット		173→204→162	8c? V6
205		ビット	根石		V8
206		ビット群		140→206	X7
207	50SX207	ビット			X7
208		ビット			Y7
209		ビット			Y7
210	50SK210	土坑		210→227	XVII~XVIII U8
211		ビット群			V7
212		ビット群			V7
213		ビット		213→211	V7
214	50SX214	ビット		214→211	8c? V7
215		浅い窪み			W8
216		溝		160→216	U7

Tab.14-5 第50次調査検出遺構一覧表 (5)

S-番号	遺構番号	種 別			地区
217		ピット群		217→165	U7
218		ピット群			X7
219		ピット群			W8
220	50SX220	窪み		220→231	F期
221	50SX221	ピット群			X・Y8
222	50SX222	ピット			X8
223		ピット群			V8
224		ピット群			U8
225		浅いピット		226→225→160	U8
226		ピット		226→225	U8
227		ピット		210→227	U8
228		ピット群	黒色土埋土	228→180	W8.9
229	50SK229	土坑		180→229	V10
230	50SX230	窪み			F期
231		ピット群		220→231	X9
232		土坑		232→235	Y9
233		ピット群			Y9
234	(50SK236)	土坑	S-236上層	234→160・240	U9
235	50SK235	土坑	炉壁あり	220→235	C期
236	50SK236	土坑		236→225→234→240	XVII
237	50SX237	ピット群			V10
238	50SX238	土坑	黒褐色土埋土	238←239	V10
239		窪み	淡茶色粘質土埋土		U10
240	50SK240	土坑			XIX～
241	50SX241	ピット群			V9
242		ピット群			U9
243	50SX243	窪み	一部深い	243→246	V10
244	50SX244	窪み		244←240	XVII～
245	50SE245	井戸		230←245→220・235	XII
246		窪み		246←243	V11
247	50SX247	窪み	(新か)	247←244	T10
248		ピット		248→? 240	U10
249		土坑			W10
250	50SE250	井戸			XIII
251	50SX251	ピット			V10
252		ピット群		251←252	V10
253		ピット群		253→249	W10
254	50SX254	ピット群			W10
255	50SD255	溝	埋土はブロック混粘質土、19SD010の北延長部か	近世	11ライン
256		溝?	埋土中に地山の粘土ブロック混在		U10
257		ピット群		244←257	U10
258		ピット			Y10
259		土坑		230←259	W10
260	50SX260	整地状遺構?		260→250	D期
261	50SX261	ピット群			X9
262		窪み		245→262→220・230	X・Y9
263		ピット		247→263	T11
264		ピット		244←264	U11
265		土坑			Y11
266		窪み		266←267	U11
267		窪み			U11
268		窪み		220←262←268→245	X9
269		窪み		271←269→255	U・V11
270	50SE270	井戸	土器の取り上げは便宜上、上中下に分けた	XV	O・P15

Tab.14-6 第50次調査検出遺構一覧表 (6)

S-番号	遺構番号	種 別		地区
271		窪み	269→271	V11
272		土坑	272→273←271 272←272下→273	V11
273	(50SE380)	井戸	S-380の裏込土	U11
274	50SK274	土坑	276←274→255	C期か V11
275		溝状	285→275	P14.15
276		土坑	274→276→255	V11
277		土坑	255←277	U11
278		土坑		W11
279		ビット		V11
280	50SK280	土坑	450b→280	XVII Q15他
281		ビット群		V・W11
282		ビット		V9
283		ビット群		X11
284		ビット群		X11
285		窪み	285→270	
286		ビット	石あり	X11
287		ビット群		X10
288		小土坑?	260→288→255・278	P・W11
289	50SX289	ビット	289←275	P15
290	50SK290	土坑		XVII Q13
291		ビット		Q16
292		ビット	石あり	O14
293	50SX293	窪み	275→293←294・295	XVI~XVII P14
294	50SX294	窪み	294を薄く除くと295の全体が知れた、294→295	P13
295	50SK295	土坑		F期 P14
296		窪み	296→280上・下	Q15
297		窪み		O14
298		窪み	298→295→293	P14
299		窪み	301→299→275・280	P15
300	50SB300	掘立柱建物	a~1、建て替えあり 300k←300i、300 l←300j	8c代
301	50SK301	土坑	280・299←301	XVIか P15
302		窪み	290←302	Q14
303		ビット		P13
304		ビット群		O13
305	50SX305	柱掘り方状遺構		O13
306	50SX306	ビット		P13
307		ビット群		O14
308		ビット群		P14
309		窪み		Q15.16
310	50SX330上面	大窪み	S-330上面に被る 310←330	T14他
311		ビット群		S15
312		ビット群		R15
313		ビット群		P・Q12
314	50SX314	ビット		Q12
315	50SX315	ビット	地鎮用? 古銭7枚、木片(木箱か?)	D期 T13
316	50SX316	窪み	316b=319	XIX Q12.13
317	50SX317	土坑		XVI~XVII R12
318		ビット	290←318←柱掘形	Q13
319		窪み		R12
320	50ST320	木棺墓		P12.13
321		ビット群		R・S13
322		溝(新)		S・T12.13
323	50SX323	ビット群		T・U12
324		ビット群		

Tab.14-7 第50次調査検出遺構一覧表 (7)

S-番号	遺構番号	種 別			地区
325	50SK325	土坑	325←314・316a・b	XVIII～	Q12
326		窪み			T13
327	50SX327	窪み		XV	T14
328		ビット群	327←328 (埋土が近似し確実さを欠く)		T14
329		窪み			S・T14
330	50SK330	窪み	a・b…は堆積層に付した便宜上の記号	XII～XIII	T14他
331		ビット群			R・S14
332		ビット			R14
333		ビット			S16
334	50SX334	窪み			T16
335	50SX335	窪み	335←330	XV期	T15
336		ビット群			T15.16
337	50SX337	ビット	337←320		P12
338		土坑	70=338←80		U4
339		ビット	鉄滓?出土。焼土の類		V4
340	50SX500下層	窪み	黄茶色土下層に等しい	8c	W6他
341		ビット群			Q・R14
342		ビット群			R12
343		窪み			T12
344		窪み	黄茶色土→344・345		W6
345	50SK345	土坑	黄茶色土→345→120	8c?	W6
346		窪み			W6
347	50SX347	窪み	60←347→143	中世?	W5他
348	50SX348	ビット	柱穴? 348←500	平安?	U7
349		ビット	瓦を礎板に転用	中世	X6
350	50SX500最下層	窪み	黄茶色土←350←355		W7
351		ビット	瓦を礎板に転用 351←186	中世	X4
352		ビット			W6
353		ビット		中世?	W6
354		ビット群	219←354	中世?	V8
355	50SX500最下層	窪み	355と340は切り合わない		V7
356		窪み	黄茶色土←356		X7
357	50SX357	ビット	黒色土埋土 礎板にせん		X7
358		ビット群	310←358		U1c
359		ビット群			U15.16
360	50SX360	井戸状遺構		8c前	T14
361		土坑?			U16
362		ビット(新)			U16
363		ビット群			U16
364	50SK364	土坑		XV	U16
365	50SK365	土坑		XIV～XVI	V15
366		ビット群			V15
367		土坑?			V15
368	50SE377	井戸			V15
369		ビット群			U15
370	50SK370	土坑		XVI	W14
371		溝?			V14
372	50SK372	土坑		XVI～XVII	V14
373		小窪み			U15
374	(50SK375)	窪み	井戸上位の溜まり 375a←374		U・V14
375	50SK375	土坑	東側輪郭不明瞭 a=上層、b=下層	XIV～XV	V15
376	(50SK375)	窪み	井戸上位の溜まり 375←374←376←377		V14.15
377	50SE377	土坑	井戸裏込め	XVI	V14.15
378		ビット	378←370・374		V14

Tab.14-8 第50次調査検出遺構一覧表(8)

S-番号	遺構番号	種 別			地区
379	50SX3779	ビット群			U12
380	50SE380	石組井戸	S-273は裏込めと考えられる	XX以降	U・V12
381		ビット群			U13
382	50SX382	ビット			U13
383		ビット	383→342		T12
384	50SX384	ビット			U15
385	(50SE410)	井戸	桶組 410枠内に等しい		X12
386		ビット			U15
387	50SX387	ビット群			V14
388		ビット群			V14他
389		ビット群			V13
390	50SK390	土坑	薬灰のようなものが堆積	D期～	W12.13
391		ビット			V13
392	(50SK395)	窪み	273←392		U13
393		ビット群	381←392←393		T13
394		小土坑?	394←273		V13
395	50SK395	土坑	381←392←393←395	XII-B	T13他
396		ビット	390←396←397		W12
397		土坑			W12
398		ビット群			W12
399		ビット群	400←300		W13
400	50SB400	掘立柱建物	a～f、cは欠 2×3+α間東西棟	8c後半	
401	50SX401	ビット	S-435を切る	XV期前後	W13
402	50SX402	ビット	S-435を切る	新か	W14
403		浅いビット	S-405上層の窪み		X12
404		ビット			W12
405	50SE405	井戸	方形枠	XIV～XV	X12
406		ビット			X12
407	50SX407	ビット	406←407←408←409		X12
408		ビット			X12
409		ビット			X12
410	50SE410	井戸裏込め	S-385の裏込め	D期	X12
411		ビット群	黒色土埋土 周辺の他の遺構より新しい		X13
412		ビット			X13
413	50SX413	ビット			X13
414	50SX414	ビット	413←414→401	XIII	W13
415	50SK415	土坑		XIV～XV	X13
416		ビット			X13
417		ビット			X13
418		ビット	407←418		X12
419	50SX419	ビット群			X12
420	欠番				
421	50SK421	窪み	260←421		X11
422		窪み	230←422		X10
423		窪み	230←423		X10
424		ビット群	424→265		Y10
425	(50SE250)	井戸裏込め	S-250裏込め		X11.12
426	(50SE405)	井戸裏込め	S-405裏込め 白灰褐色土埋土		W・X12
427	50SX427	窪み	233←230←427		Y10
428		ビット	427←428		Y10
429		ビット	429←425→409		X12
430	50SX430	整地層		XIIB(下層)	V15他
431		窪み	431→420→390		W12
432		窪み	390←397←432		W13

Tab.14-9 第50次調査検出遺構一覧表 (9)

S-番号	遺構番号	種 別			地区
433	50SX430	整地層		435に同じ	X11他
434				320→434	P12
435	50SX430	整地層			V.W.X.Y13
436		ピット	埋土は茶褐色砂質土		P14
437	50SX437	柱掘り方状			U15
438		ピット			P14
439	50SX439	柱掘り方状			
440		欠 番			
441		柱掘り方状	重複する新しい方	8c?	T15
442		柱掘り方状			T14
443		柱掘り方状			T12
444		柱掘り方状		450b→444	P15
445	50SX445	柱掘り方状		450e→445	8c後半 R15.16
446		ピット			V5
447		欠 番			
448		欠 番			
449		欠 番			
450	50SB450	掘立柱建物	a~e (c欠)	450→400	8c中~後半 R15・16

大宰府条坊跡XI

大宰府市の文化財 第42集
平成11（1999）年3月

編集 大宰府市教育委員会
発行 （教育部 文化財課）

〒818-0101
福岡県大宰府市観世音寺一丁目1番1号

印刷 株式会社 秀巧社
福岡営業所

〒810-0004
福岡市中央区渡辺通り一丁目12-9 フジビル7F